

# 話し言葉における副詞「やはり」の多角的研究

「一橋大学審査博士学位論文」

2023年10月

一橋大学大学院言語社会研究科

博士後期課程

LD192004

鈴木 英子

# 目次

<b>第1章 問題意識と研究課題</b> .....	<b>1</b>
1. 研究背景と問題意識 .....	1
2. 研究目的と研究課題 .....	2
3. 本論文の構成 .....	4
<b>第2章 本論文の前提となる先行研究</b> .....	<b>7</b>
1. 第2章の目的 .....	7
2. 副詞「やはり」の品詞分類上における位置 .....	7
2.1 山田（1936）一語の副詞・陳述の副詞 .....	8
2.2 渡辺（1971・1974）一注釈の誘導副詞 .....	9
2.3 中右（1980）一命題外副詞・文副詞 .....	11
2.4 工藤（1980・2000, 1982）一叙法副詞の下位区分 .....	13
2.5 宮島（1983）一消極的な呼応 .....	16
2.6 川端（1983）一予期や反予期 .....	18
2.7 西原（1991）一恒常的な認知体系が前提 .....	19
2.8 森本（1994）一SSA 副詞 .....	20
2.9 石黒（2023）一検討副詞 - 認定の副詞 .....	21
2.10 副詞の体系化を目指した先行研究 .....	22
3. 副詞「やはり」の意味・機能に関する研究 .....	23
3.1 森田（1989）一基本的意味 .....	23
3.2 西原（1988）一語用論的前提の一つの類型 .....	25
3.3 森本（1994）一熟慮した結果であることを示すシグナル .....	26
3.4 深尾（1995）一話し手が妥当だと考える判断 .....	27
3.5 蓮沼（1998）一基本機能と談話機能 .....	29
3.6 加藤（1999）一副詞「やはり」の研究史 .....	31
3.7 曹（2001）一順接と逆接の理論 .....	32
3.8 金谷（2017）一一致説の否定 .....	33

3.9 多様な意味・機能と問題の所在 .....	34
<b>4. 談話における副詞の働きに関する研究 .....</b>	<b>35</b>
4.1 森山（1988・1989）－応答に関する研究 .....	35
4.2 中田（1991）－間つなぎ .....	37
<b>5. 副詞「やはり」論で残された課題 .....</b>	<b>37</b>
<b>6. 本研究における用語の定義 .....</b>	<b>38</b>
6.1 意味・機能 .....	39
6.2 中心的意味とスキーマ的意味 .....	39
6.3 前提 .....	40
6.4 呼応と共起 .....	41
6.5 談話管理 .....	42
<b>7. 第2章のまとめ .....</b>	<b>43</b>
<b>第3章 副詞「やはり」の多義性考 .....</b>	<b>45</b>
<b>1. 第3章の目的 .....</b>	<b>45</b>
<b>2. 問題の所在 .....</b>	<b>45</b>
<b>3. 本章に関わる先行研究 .....</b>	<b>46</b>
3.1 中心的意味を検討した研究 .....	46
3.2 多様な意味・機能の存在を検討した研究 .....	48
<b>4. 「やはり」の多義的別義とスキーマ的意味の認定 .....</b>	<b>51</b>
4.1 「やはり」の多義的別義の認定 .....	51
4.2 スキーマ的意味の抽出と認定 .....	52
<b>5. 多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか .....</b>	<b>54</b>
5.1 金水（1992）の考察の検討 .....	54
5.2 金水（1992）と蓮沼（1998）の指摘を検討する .....	55
5.3 多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか .....	56
5.4 「やはり」の意味・機能を包括的に提示する枠組み .....	60
<b>6. 結論 .....</b>	<b>61</b>
<b>7. 第3章のまとめ .....</b>	<b>62</b>

<b>第4章 副詞「やはり」の異形態についての一考察</b> .....	<b>63</b>
1. 第4章の目的 .....	63
2. 問題の所在 .....	63
3. 本章に関わる先行研究 .....	64
3.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究 .....	64
3.2 副詞「やはり」の異形態に関わる研究 .....	65
3.3 本章の目的 .....	66
4. 調査の概要 .....	66
4.1 調査の方法 .....	66
4.2 使用データ .....	67
5. 副詞「やはり」の4形態を使用する人数からみた母語話者の使用傾向 .....	68
5.1 CEJCにおける4形態の使用人数と割合 .....	68
5.2 個人が使用した形態の種類 .....	70
5.3 属性の違いによる異形態の使用数と使用人数 .....	72
5.4 CEJCにおける副詞「やはり」の使用傾向考 .....	76
6. 母語話者は「やっぱり」と「やっぱ」を使い分けているか .....	77
6.1 「やっぱり」「やっぱ」の出現位置と意味・機能 .....	77
6.2 「やっぱり」「やっぱ」のアクセント型 .....	80
6.3 「やっぱ」はやはり「やっぱり」とは違うのか .....	81
7. 結論 .....	82
8. 本研究の位置付け .....	83
9. 第4章のまとめ .....	84
<b>第5章 研究方法と対象とするコーパス</b> .....	<b>85</b>
1. 第5章の目的 .....	85
2. 研究方法 .....	85
2.1 コーパスを用いた研究 .....	85
2.2 3種類の学習者コーパスを調査対象にすること .....	87

2.3	意義と限界を踏まえた解釈	89
<b>3.</b>	<b>対象とするデータ概観</b>	<b>89</b>
3.1	I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language)	89
3.1.1	I-JAS の理念と基礎情報	89
3.1.2	I-JAS のコンテンツ	93
3.1.3	I-JAS 対話データの語彙的特徴	95
3.1.4	解釈する際に留意すべき点	98
3.2	B-JAS (Beijing corpus of Japanese as a Second language)	100
3.2.1	B-JAS の理念と基礎情報	100
3.2.2	B-JAS のコンテンツ	105
3.2.3	B-JAS 対話データの語彙的特徴	106
3.2.4	解釈する際に留意すべき点	109
3.3	BTSJ (Basic Transcription System for Japanese)	109
3.3.1	BTSJ の理念と基礎情報	109
3.3.2	BTSJ のコンテンツ	110
3.3.3	BTSJ 対話データの語彙的特徴	112
3.3.4	解釈する際に留意すべき点	115
<b>4.</b>	<b>第5章のまとめ</b>	<b>116</b>
<b>第6章</b>	<b>学習者横断コーパスから見た副詞「やはり」</b>	<b>117</b>
1.	第6章の目的	117
2.	問題の所在	117
3.	本章に関わる先行研究	119
3.1	副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究	119
3.2	副詞「やはり」の異形態に関わる研究	119
3.3	学習者の習得に関わる研究	119
3.4	本稿の目的	120
4.	調査の概要	121
4.1	調査の方法	121

4.2	使用データ	121
<b>5.</b>	<b>副詞「やはり」の出現数, 形態から見た使用傾向</b>	<b>122</b>
5.1	母語別の使用数から見た使用傾向	122
5.2	出現形態から見た使用傾向	125
<b>6.</b>	<b>副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向</b>	<b>127</b>
6.1	副詞「やはり」の発話における出現位置	127
6.2	I-JAS データに出現する副詞「やはり」の意味・機能	129
6.3	副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向	132
6.3.1	学習者の発話開始部における産出	132
6.3.2	母語話者の発話中間部における産出	133
6.3.3	学習者と母語話者の「V形式・内容を選択途中」での産出	135
<b>7.</b>	<b>結論</b>	<b>137</b>
<b>8.</b>	<b>第6章のまとめ</b>	<b>138</b>
<b>第7章</b>	<b>学習者縦断コーパスから見た副詞「やはり」</b>	<b>140</b>
<b>1.</b>	<b>第7章の目的</b>	<b>140</b>
<b>2.</b>	<b>本章に関わる先行研究</b>	<b>141</b>
2.1	副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究	141
2.2	副詞「やはり」の形態に関わる研究	141
2.3	副詞「やはり」の習得に関わる研究	141
<b>3.</b>	<b>調査の概要</b>	<b>141</b>
3.1	使用データ	141
3.2	調査方法	142
<b>4.</b>	<b>副詞「やはり」の出現数, 形態の変化</b>	<b>143</b>
4.1	副詞「やはり」の出現数の変化	143
4.2	B-JAS 学習者が使用した形態の変化	144
<b>5.</b>	<b>B-JAS「やはり」の用例の質的分析</b>	<b>146</b>
5.1	意味・機能の使用の変化の概要	146
5.2	B-JAS の副詞「やはり」の用例の質的分析の手順	147

5.3	学習者 CCB10 の副詞「やはり」の使用の変化	152
5.4	学習者 CCB07 の副詞「やはり」の使用の変化	156
5.5	学習者 CCB05 の副詞「やはり」の使用の変化	160
5.6	その他の学習者の用例	164
6.	結論	167
7.	第7章のまとめ	168
<b>第8章</b>	<b>自然会話コーパスから見た副詞「やはり」</b>	<b>170</b>
1.	第8章の目的	170
2.	第8章に関連する先行研究	171
2.1	接触場面に関連する先行研究	171
2.2	副詞「やはり」に関する先行研究	172
3.	調査の概要	173
3.1	調査方法	173
3.2	対象とするデータ概要	173
4.	副詞「やはり」の出現率	175
4.1	会話の属性, 関係の親疎別の出現率	175
4.2	発話中での出現位置ごとの出現数	176
5.	副詞「やはり」の出現環境	178
5.1	フィラーに後接して出現する副詞「やはり」	179
5.2	発話開始部で応答詞・フィラーを伴って出現する副詞「やはり」	181
5.3	発話中間部で逆接・順接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」	183
5.4	発話終了部に出現する副詞「やはり」	187
6.	結論	193
7.	第8章のまとめ	195
<b>第9章</b>	<b>日本語教育への提言</b>	<b>197</b>
1.	第9章の目的	197
2.	学習者の副詞「やはり」の使用傾向	197

2.1	I-JAS インタビューデータにおける学習者の使用傾向	197
2.2	B-JAS インタビューデータにおける学習者の使用傾向	198
2.3	BTSJ 雑談における学習者の使用傾向	199
2.4	学習者の副詞「やはり」の使用傾向	200
<b>3.</b>	<b>学習者の使用教材</b>	<b>204</b>
3.1	日本語教材の中の副詞「やはり」	204
3.2	I-JAS の JFL 環境の学習者と B-JAS の学習者が使用した教材	205
<b>4.</b>	<b>日本語教育への提言</b>	<b>208</b>
4.1	副詞「やはり」の指導の方向性	208
4.2	副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じる理由	210
4.3	母語話者が談話で副詞「やはり」を多用する理由	212
4.4	母語話者は副詞「やはり」の異形態をどう使っているか	213
4.5	副詞「やはり」の方略的使用と様々な表現効果	214
4.6	意図せず対話の相手を不快にしてしまう副詞「やはり」の使用	217
<b>5.</b>	<b>第9章のまとめ</b>	<b>218</b>
<b>第10章</b>	<b>本研究の結論と今後の課題</b>	<b>219</b>
1.	第10章の目的	219
2.	本研究の概要	219
3.	本研究の結論	221
3.1	研究課題1)の結果—第3章	222
3.2	研究課題2)の結果—第4章	224
3.3	研究課題3)-1の結果—第6章	225
3.4	研究課題3)-2の結果—第7章	226
3.5	研究課題3)-3の結果—第8章	226
3.6	学習者の副詞「やはり」の使用傾向	227
3.7	研究課題の結果を踏まえた日本語教育への提言	229
4.	本研究の意義と今後の課題	230
4.1	本研究の意義	230

4.2 今後の課題 .....	230
<b>5. 第10章のまとめ</b> .....	<b>231</b>
<b>【参考文献】</b> .....	<b>233</b>
<b>【資料編】</b> .....	<b>240</b>
<b>【第4章】</b> .....	240
<b>【第7章】</b> .....	244
<b>【第9章】</b> .....	247
<b>【本稿の各章と既発表論文・口頭発表との関係】</b> .....	<b>252</b>
<b>【謝辞】</b> .....	<b>254</b>

## 本論文における表記等について

- (1) 用例・図・表は各章ごとに通し番号を振る。
- (2) 図・表がページをまたがないよう、改行する場合がある。
- (3) 引用した用例には末尾に出典を記す。出典のない用例は稿者の作例である。

凡例：先行研究：(研究者 年：ページ)

小説・シナリオ・新聞・ブログなど：(媒体 閲覧日) (小説名)

コーパス：I-JAS (コーパス名：話者 ID) / B-JAS (コーパス名：調査  
回-話者 ID) / BTSJ (コーパス名：会話の属性 親疎 会話  
番号) / CEJC (コーパス名：話者 ID) / 名大会話コーパ  
ス (コーパス名：会話 ID)

- (4) 用例の前に記した「\*」は非文であることを，「？」は違和感のある文であることを表す。
- (5) 「やはり」全般を表す際は，副詞「やはり」を，個別の形態を表すときはそれぞれ「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」を用いる。  
ただし，先行研究からの引用の場合は出典の表記に従う。また，第3章2節から6節は「副詞「やはり」の多義性考」(鈴木 2023a)の表記に従った。

## 第1章 問題意識と研究課題

### 1. 研究背景と問題意識

本研究は、話し言葉における副詞「やはり」の多義性と、日本語学習者（以下、学習者）と日本語母語話者（以下、母語話者）の使用実態を論じ、得られた話し言葉における副詞「やはり」の知見を日本語教育へ応用することを目的としたものである。

副詞「やはり」は、「確かに」「もちろん」「なるほど」などとならんで、副詞分類上「陳述副詞」（山田 1936）、「誘導副詞」（渡辺 1971）であり、呼応がなく（工藤 1982）、「発話時に話し手の主観を表す」（森本 1994）副詞の一群に属している。これらの副詞はある程度近接したカテゴリーに属していると考えられるが、使用条件の関わりや、相互の関係の考察は十分になされていない。また、これらの副詞は、いずれも発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つことから、発話の意図を推測する手がかりとなり得る。これらの副詞の話し言葉における使用実態を解明することは、円滑なコミュニケーションの仕組みの説明の一助に繋がると考える。本研究では、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の中から会話において極めて使用頻度の高い副詞「やはり」を対象とする。

副詞「やはり」の特徴は、母語話者の会話で多く用いられることに加え、談話の中で複数の層で働く副詞（西原 1988, 森本 1994, 蓮沼 1998）であること、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の4種類の異形態が一つの形態に統合されることなく並行して用いられていることが挙げられる。また、談話における副詞「やはり」は、話し手が聞き手に自分の心情を推測させる手掛かりを布石として提示できる一方、聞き手が話し手の意向を推測する手掛かりとして活用できる言葉である。さらに、副詞「やはり」は辞書的な意味の理解が産出に直接結び付く語と異なり、多義的であり、用いる場面や状況により異なった表現効果を生む、発話時に発話者の認識の在り方を反映する副詞の一つである。日本語学の歴史の中にはその複雑さを解明しようとする多くの研究の蓄積がある。

従来の副詞「やはり」の研究の多くの考察は、母語話者研究者の内省・新聞・雑誌・小説・シナリオの用例によるものであり、書き言葉に近い用例からの調査・検討であった。本研究は、副詞「やはり」の意味・機能の複雑さの解明を学習者の産出から探るアプローチを取る。

その理由は次の3点による。まず、副詞「やはり」は話し言葉で多く用いられる言葉であることから、話し言葉における使用実態の調査が必須であること、次に学習者にとって副詞「やはり」の理解と産出には固有の難しさ（副詞「やはり」の習得は辞書的意味の理解だけでは十分ではなく、また意識して用いていない母語話者との接触経験だけに頼って学ぶのは難しい）が内在してしており、その難しさの内実を探ることから副詞「やはり」の一側面に迫れると考えること、そして、日本社会の中で自然習得し使用している母語話者が意識していない副詞「やはり」の一側面を、学習者の産出という視点から見ることにより炙り出すことができるのではないかと考えることによる。

副詞「やはり」の研究は形態別の出現数を数えるといった量的研究を除き、実証的なコーパス等の言葉を用いた研究は不足している。近年、大規模な母語話者の話し言葉コーパス、学習者の話し言葉コーパスが相次いで公開されたことにより、母語話者・学習者が話し言葉で用いる副詞「やはり」の調査が容易な環境が整いつつある。「さまざまな要因の違いが日本語習得にいかに関与するかを日本語学、言語学、社会言語学、心理言語学、語彙論、談話研究などの領域から分析することを目指して」（迫田他 2016）構築されたコーパスや、「日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象」とし「会話行動を総体的に解明するための研究環境を提供することを目指して」（小磯他 2022）構築されたコーパスなど、高度な計画性をもって設計されたコーパスに収録されたデータを用いることにより、研究者の恣意性をある程度排除でき、客観性のある使用実態が把握できると考える。そこで、本研究では、複数の学習者コーパスを定量的に調査することによって副詞「やはり」の学習者の使用実態を分析し、この調査結果を踏まえて、日本語教育への応用を検討したい。

## 2. 研究目的と研究課題

本研究は、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の1つである副詞「やはり」を対象とし、談話教育に提供できる知見を得ること、日本語学習者の理解と産出のために、日本語教育に資する知見を得ることを目的に調査を行う。以下に仮説を述べる。

仮説1) 副詞「やはり」は多様な意味・機能を備えているが、それらを包括的に記述でき

る枠組み（スキーマ）が指定できる。

▶副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組み（スキーマ）を提案することは談話の実態の一側面の解明に利するとともに、学習者の副詞「やはり」の理解と産出に効果がある。

仮説2) 副詞「やはり」の4つの形態、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」は、いずれかの形態に統合されることなく並行して用いられている。

▶副詞「やはり」の異形態を母語話者がどのように用いているか、使用実態を知ることが本研究にとって必要な基礎情報である。

仮説3) 学習者と母語話者では、副詞「やはり」の使用実態に違いがある。

▶使用実態の違いを定量的・定性的に調査し考察することにより、日本語教育への知見を得ることができる。

1. 副詞「やはり」は複数の形態、多様な意味・機能を持っているため、学習者は使用に困難がある。

▶学習者の使用実態を調査し考察することにより、副詞「やはり」の「産出しにくさ」を探ることができる。

2. 副詞「やはり」の複数の形態、複数ある意味・機能の理解と産出は、学習が進む過程で変化していく。

▶学習者の使用の変化を調査し考察することにより、副詞「やはり」の「習得の過程」を探ることができる。

3. 会話の属性（接触場面か母語場面か）、対話相手との関係（親疎）によって副詞「やはり」の使用に違いがある。

▶母語話者の副詞「やはり」の使用が学習者のゴールではないが、学習者と母語話者の使用実態を比較することにより、学習者が産出しにくい副詞「やはり」の側面を探ることができる。

それぞれの仮説を検証するための本研究における研究課題を以下に記す。

研究課題 1) 副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので、かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか。

研究課題 2) 副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているか。

研究課題 3) 学習者と母語話者の、副詞「やはり」の使用実態はどのようになっているか。

1. インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は、使用数、形態、と出現位置、意味・機能の面からどのようになっているか。
2. インタビューデータにおける学習者の使用の変化は、出現数、形態、意味・機能の面からどのようになっているか。
3. 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は、会話の属性別（接触場面か母語場面か）、対話相手との関係別（親疎）でどのような異なりがあるか。

本研究では発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の一つとして副詞「やはり」を取り上げる。本研究から得られた知見は、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ一群の副詞の研究に繋がるものであるという認識のもとに調査・検討を行う。

### 3. 本論文の構成

本論文は以下の 10 章から成る。

第 1 章 問題意識と研究課題

第 2 章 本論文の前提となる先行研究

第 3 章 副詞「やはり」の多義性考

第 4 章 副詞「やはり」の異形態についての一考察

第 5 章 研究方法と対象とするコーパス

第 6 章 学習者横断コーパス (I-JAS) から見た副詞「やはり」

第 7 章 学習者縦断コーパス (B-JAS) から見た副詞「やはり」

第 8 章 自然会話コーパス (BTSJ) から見た副詞「やはり」

第 9 章 日本語教育への提言

第 10 章 本研究の結論と今後の課題

第 1 章では、研究背景と問題意識、研究目的と研究課題を述べたうえで、本論文の構成を

述べた。第2章では、蓄積された副詞「やはり」の先行研究を概観し、成果と残された課題を明らかにする。

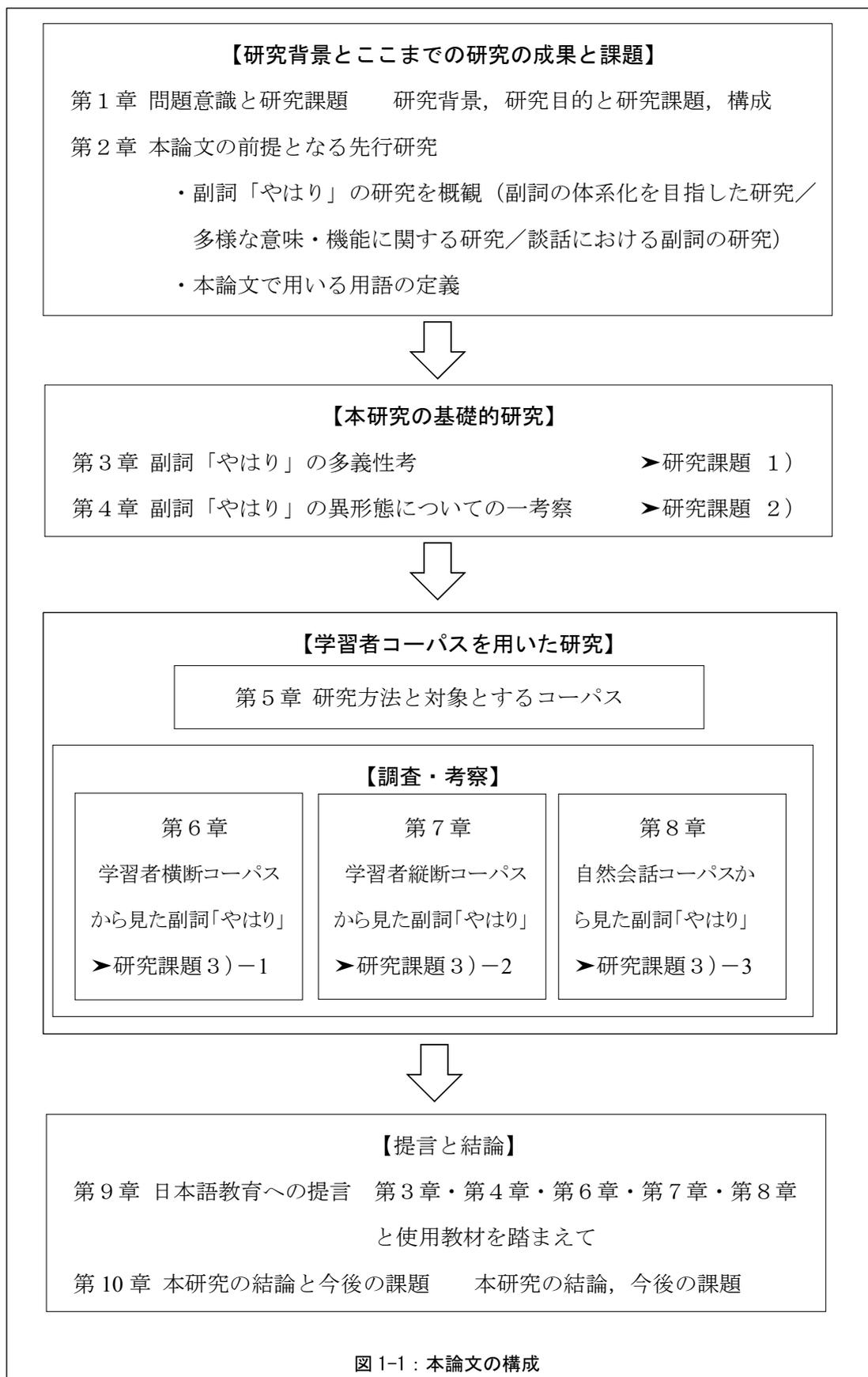
第3章と第4章は、本研究の基礎研究として副詞「やはり」の多義性と母語話者の4つの異形態の使用実態を論じる。第3章では、副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的記述できる枠組みを検討し、多様な意味・機能がどのように派生するかを記述する。この章は研究課題1)に対応している。次に第4章では、『日本語日常会話コーパス：CEJC』を用いて母語話者の「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の使用実態を調査する。この章は研究課題2)に対応している。さらに第3章、第4章をまとめ本研究の位置付けを明らかにする。

第5章から第8章は、学習者コーパスの調査・検討を行う。第5章では、調査に先立って本研究の方法、コーパスを用いた研究の意義と限界について言及し、調査対象とする3種類の学習者コーパスを概観する。第6章では、学習者と母語話者の使用実態の比較ができる『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』のインタビューデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形態、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査する。第7章では、『北京日本語学習者縦断コーパス：B-JAS』のインタビューデータを用い、副詞「やはり」の学習者の使用の変化を調査する。第8章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2020年版）：BTSJ』の雑談データを用いて、副詞「やはり」の学習者と母語話者の使用実態を会話の属性と関係の親疎から調査する。第6章から第8章は研究課題3)に対応しており、第6章は研究課題3) -1に、第7章は研究課題3) -2に、第8章は研究課題3) -3にそれぞれ対応している。

第9章では、第3章と第4章の考察、第6章から第8章の学習者コーパスの調査、学習者の使用教材の調査を踏まえ、副詞「やはり」の指導に関して日本語教育へ提言を行う。

最後に、第10章では、本研究の結論と残された課題を述べる。

本論文の構成と全体像を次頁の図1-1に示す。



## 第2章 本論文の前提となる先行研究

### 1. 第2章の目的

第1章では、本研究の目的が、話し言葉で多用される副詞「やはり」について複数のコーパスを用いて調査し、談話教育に提供できる知見を得ること、学習者の理解と産出のために、日本語教育に資する知見を得ることであると述べた。論を始めるにあたり、従来の副詞研究の中での副詞「やはり」を概観し、先行研究の成果と問題点を検討すること、それを踏まえて本論の立場を明らかにすることが必要である。第2章では、多くの研究の蓄積がある副詞「やはり」の研究を網羅的に検討したい。そこで、まず対象とする「注釈の誘導副詞」「消極的な共起制限を持つ陳述副詞」の研究の流れを概観し、副詞研究における副詞「やはり」の位置を確認する<sup>1</sup>。次に副詞「やはり」の先行研究から、中心的意味・スキーマ的意味<sup>2</sup>を検討した研究、多様な意味・機能を検討した研究、談話における副詞の働きを論じた研究を概観し、先行研究の成果と残された課題を明らかにする。

以下、2節では副詞「やはり」の品詞分類上における位置をまとめる。次に、3節では副詞「やはり」の意味・機能に関する研究を概観し、成果と課題を明らかにする。4節では談話における副詞の働きに言及した研究を検討し、5節で本研究で扱う残された課題をまとめる。6節では本論文における用語の定義を記述し、7節で本章をまとめる。

### 2. 副詞「やはり」の品詞分類上における位置

山田(1936)、渡辺(1971・1974)、中右(1980)、工藤(1980・2000)、宮島(1983)、川端(1983)、西原(1991)、森本(1994)、石黒(2023)の研究から副詞研究の流れを概観し、本研究の基本となる副詞の捉え方、副詞「やはり」の副詞分類上の位置を確認する。

---

<sup>1</sup> 発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の一群の副詞の中における位置でもある。

<sup>2</sup> 多義性を持つ語は、認定された意味・機能の1つが中心的意味であり、そこから意味拡張のメカニズムに従って意味・機能が拡張し、多義性を持つことが多いが、副詞「やはり」では認定したいずれかの意味・機能が中心的意味であるとは考えにくい。「やはり」の多義性の有り様は、松本(2010)で検討している格助詞「から」と「より」に近いことから、「認定した全ての意味・機能に適合する抽象的な意味」であるスキーマ的意味を認定することとした。本論文ではスキーマ的意味を用いる。

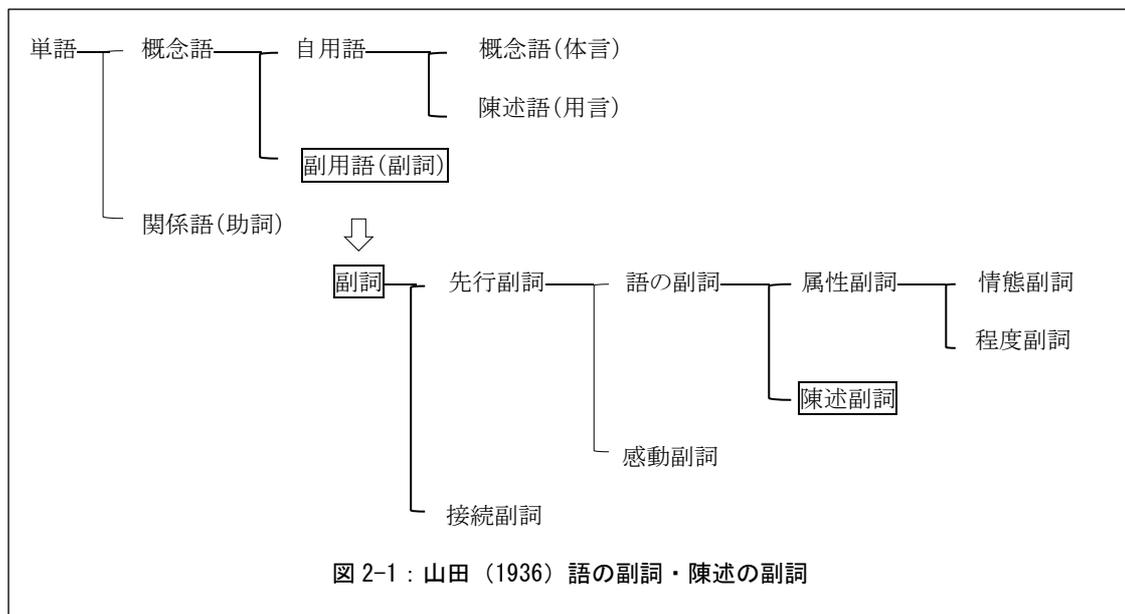
## 2.1 山田（1936）一語の副詞・陳述の副詞

近代的副詞研究の系譜は山田孝雄から始まると言われている。山田は品詞論を展開した『日本文法学概論』（1936）の中で「単語」を「それ以上分解すれば語としての本性又は作用をなくしてしまう地位にあるもの」とした上で、「概念語（概念が具象的に認められ、必要に応じて一つの語で一つの思想を發表しうる性質を持つ語）」と「関係語（概念語の性質を持たない語：助詞）」とに分けた。さらに、「概念語」を「自用語（独立して概念を表し、談話文章を構成する骨子になり陳述する直接材料となる性質を持つ語）」と「副用語（観念は表すが談話文章を構成する骨子にならない語：副詞）」に、「自用語」を「概念語（概念を表す語：体言）」と「陳述語（概念を表し陳述の力がある語：用言）」に分類した。

山田の説の副用語（副詞）は接続詞や感動詞を含んだ広い意味を持つものである。そのため、それらを「その語の意味が後に続く語句のみに関するものか、前に現れた語句の意味を後の語句に重ねて意義上二者を媒介結合するものか」「ある語に先行するもの（語の副詞）とある文句に先行するもの（応答承諾の語、感動を表す語）」で下位区分し「接続副詞」「感動副詞」として切り分けた。さらに、現代でも副詞の枠組みとして一般的に用いられている「情態」「程度」「陳述」の3分類を「語の副詞」の下位区分として定義・分類している。以上の山田の品詞論・副詞の分類は図2-1、「情態」「程度」「陳述」の定義は以下の通りである。

- (1) 「情態副詞」：「属性の装定をする」「それ自身がある属性観念を具体的に有し、自ら属性を表しかねて属性の修飾をなしうるもの」
- 「程度副詞」：「属性の装定をする」「意義として単に程度を表すもので専ら他の属性を表す副詞又は用言に属してその属性の程度を示すに用いられるもの」
- 「陳述副詞」：「陳述の装定をする」

品詞論に基礎を置き、提唱した副詞3分類の枠組みは現代においても揺るぎはない。山田が研究の中で「陳述副詞・感動副詞が近い位置にある」ことを指摘している点、また「呼応承諾の語としても、部分としても「もちろん」「やはり」が使われる」ことが指摘されている。



## 2.2 渡辺 (1971・1974) —注釈の誘導副詞

渡辺は『国語構文論』(1971)と『国語文法論』(1974)の中で、ここまでの言語研究が意義論(内面的意義を研究対象とする)と音韻論(外面的形態を研究対象とする)の二つの柱として発展してきたこと、もう一本の柱の文法論は、内面的意義から接近するか(山田 1936)、外面的形態の側から接近するか(橋本 1948)のどちらかの色彩をより濃く帯びてなされるのが常だったと概観している。さらに、二方向からの接近の仕方について「文とは何か」の問いに対する山田の答え「統覚作用によりて統合せられたる思想が、言語といふ形式によりて表現せられたものをいふ」(山田 1936)と橋本の「一つの文は、その内容(意義)から見れば、それだけで或事を言ひ表したもので、一つの纏まった完いものである。……文以上のやうな内容と外形(言葉の連続・文の前後には必ず音の切れ目あり・文の終には特殊な音調加わる)を有する一種の言語上の単位である」(橋本 1948)を例示し、渡辺の立場が山田を踏襲することを述べたうえで「言語の外面的形態には内面的意義が担われている。そして言語の内面的意義には構文的機能が託される。言語が現実に表示される時、そこには必ず外面的形態と内面的意義と構文的職能との三者の対応が認められる」とし、「構文的職能」について従来単に「職能」「機能」呼ばれてはきたが内容が必ずしも明確ではなかったこと、また明確な概念規定が下された形で取り上げられる場合も渡辺の立場と同じではなかったことを指摘し、構文的職能を「言語表現の有機的統一性を形成するために言語の内面的意義に

託される各種の役割の総称である」と規定した。その上で、構文的機能を素材表示の機能（詞：体言類・用言類・副詞類）と関係構成の機能（辞：助詞類）に分け、さらに関係構成の機能を「統叙、陳述、連体、連用、並列、接続、誘導」に分類した。

渡辺はこのうち「誘導の機能（山田の「語の副詞）」「連用の成分（修飾する対象は、素材概念の性質と関係ある装定のみ可能・副詞 3 分類では「程度の副詞」「情態の副詞）」と「誘導の副詞（修飾する対象は無制限・付加しても素材の意味の増減なし・特定の表現を予告し導き出す機能・副詞 3 分類では「陳述の副詞）」として捉えなおした。そして「誘導の副詞」は「叙述の知的内容量に対しては全く増減の影響を及ぼす事がない」「話し手の立場から発せられるもので、事柄という対象世界の描写のために発せられるものではないことは、注意をしてよい。……誘導に属するものは、話し手自身の立場の現れでしかない」と特徴を明示するとともに、誘導成分を呼応を持つ「態度」と呼応を持たない「注釈」「批評」「解説」に下位分類している。

また、従来の陳述副詞との関係について、誘導の機能は広い範囲に認められると指摘し、呼応を持たない「注釈の誘導副詞」の存在に言及している。

- (2) 一、彼がもし熱心に勉強したら……
- 二、彼がもし学生なら……
- 三、彼が非常に熱心に勉強したら……
- 四、\*彼が非常に学生なら……

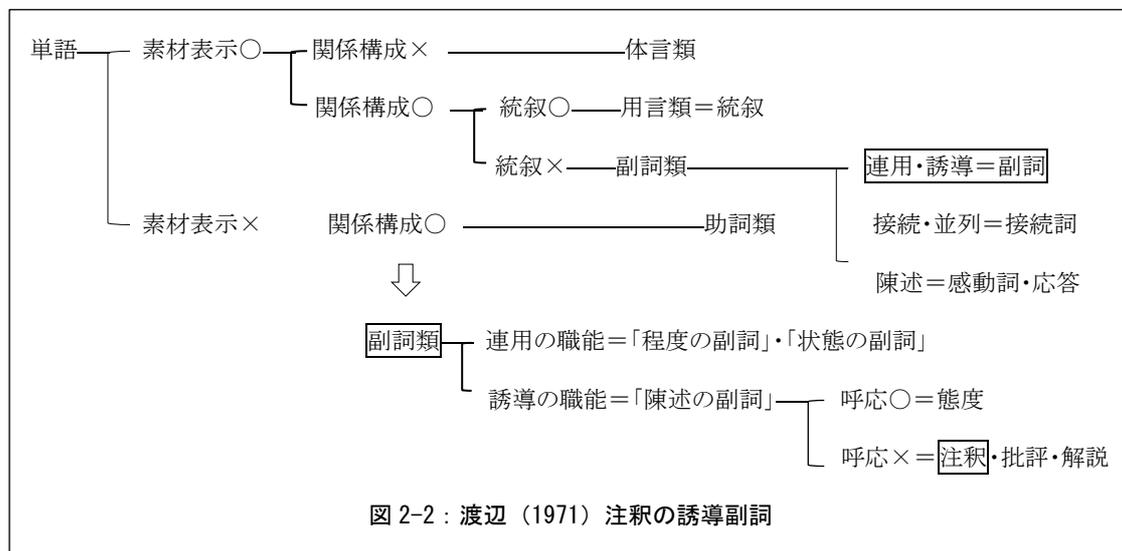
……真の仮定表現や否定表現に先行して、その真の仮定表現や否定表現を予告し導き出すのが、これら陳述副詞の文中での役割なのだと解される。このような機能を「誘導の機能」と呼ぶ。文例一も二も可能であるのは、述語の実質的な意義とは無関係であるという誘導の機能の特性に由来するものと理解されるのである。……だがこうして誘導展叙という新たな機能が存在することに気付いてみると、この機能を果たす成分は陳述副詞以外にもいろいろ多く存在することに気付くであろう。

- (3) もちろんこの絵は美しい。

……どのような構造、内容の述語にもかかっていく点で、陳述副詞と全く同じ特徴を有する。陳述副詞のように、仮定表現とか否定表現とかの特別の言い方を要求して呼応する、という現象をこそ持っていないけれども、文中での役割、つまり機能については両者は同じと認めてよいだろう。……これらは共に「誘導副詞」であり、

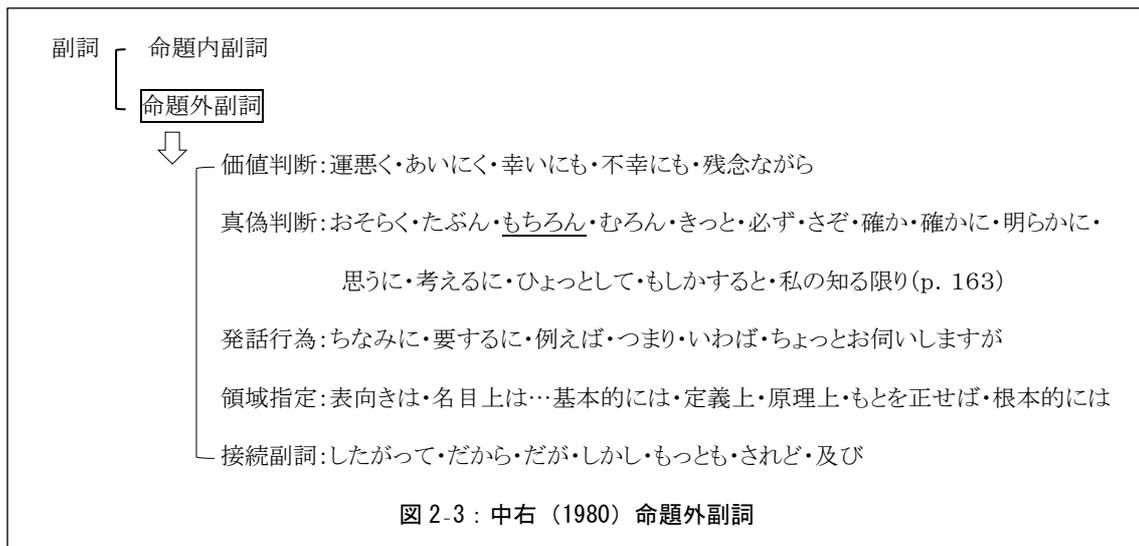
その意義の差にもとづいて、「態度の」誘導副詞、「注釈の」誘導副詞とも呼び分けておけばよいような間柄にあると、判断される。（渡辺 1974 : 134）

「誘導副詞」が連用展叙とは全く違う誘導展叙の職能を持つことを明らかにしたこと、呼応を持たない「誘導副詞」の存在を認め位置づけしたこと、「呼応」する現象について「叙述内容」を未分化の素材的要素として含む誘導成分を持つ「応答詞」との関係は副詞論からしても後続に大きな影響を与える研究である。「やはり」「もちろん」は「注釈の誘導副詞」の中に位置するとしている。渡辺（1971）での「注釈の誘導副詞」を図 2-2 に示した。



### 2.3 中右（1980）－命題外副詞・文副詞

渡辺の「誘導の副詞」は「話し手の立場から発せられるもの・話し手自身の立場の現れ」であるとあったが、言語学の分野でも「話者の心的態度・言語形式の中に現れる話者の気持ち（モダリティ）を表明することはあっても命題の一部になることはない」モダリティの副詞の研究がある。中右は「文副詞の比較」（1980）の中で副詞を「命題内副詞」と「命題外副詞」に分類し、「モダリティを表明することはあっても命題の一部にはならない「命題外副詞」の下位区分を試みた。下位区分として、価値判断の副詞，真偽判断の副詞，発話行為の副詞，領域指定の副詞，接続副詞の5つに分類した。図 2-3 に中右の具体例を引く。



また、モダリティ表現の統辞論的意味論的特徴として次の3点を挙げている。

- (4) 1 : テンス・アスペクトの枠外にある。
- 2 : 否定・疑問の作用域外にある。
- 3 : 代用形によって指示される前方指示部分に含まれない。

中右が用いた「文副詞」という術語は、「sentence-adverbs」「adverb of modality」などの日本語訳である。中右の「命題外副詞」と「文副詞」の機能は概ね一致するとされている。

寺村は『日本語のシンタクスと意味 III』（1989）で「話し手が注釈を添える」副詞を「文副詞」「注釈副詞」と呼ぶとよいと述べており、機能の面からほぼ一致としている。

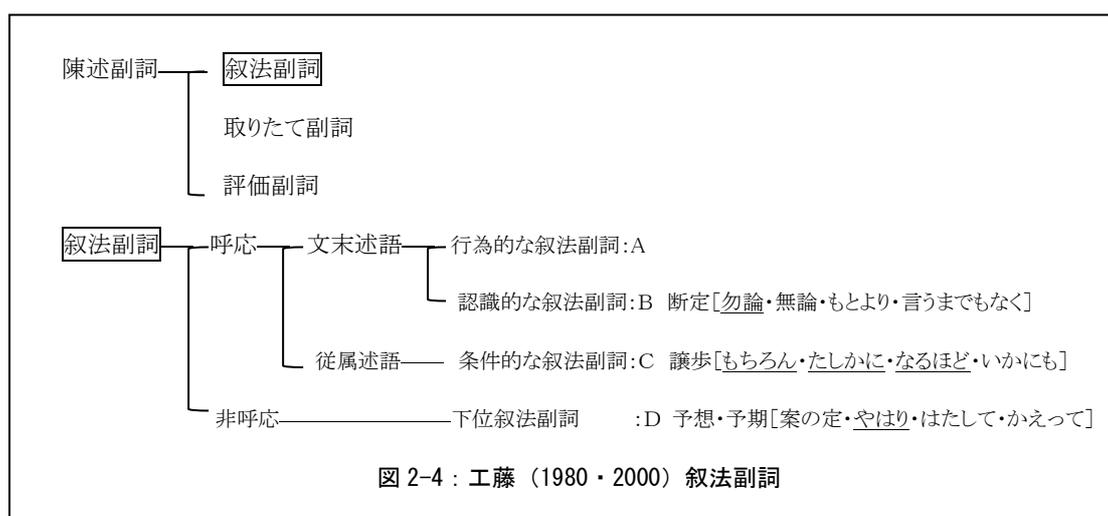
- (5) ……表現機能の面から言うと、そのなかには、先行する文と、後に続く分との関係を示すものと、一応文の形を整えた意味のまとまりについて、話し手が、何らかの注釈を添えるものがある。前者は三宅，三上，芳賀などが「承前詞」と呼ぶものであるが、ここでは一般にいきわたっている「接続詞」という名を採用しておく。後者は、一語であれば「注釈副詞」と呼ぶのがよいと思う。英文法などでは「文副詞」(fortunately, obviously など) と呼ぶことがふつうのようである。

(寺村 1989 : 282)

中右の論は、副詞の作用域（スコープ）の観点から見る立場である。「命題外副詞はモダリティを含む全体を作用域としている」としている。副詞「やはり」についての記述はないが、「もちろん」は「おそらく」「たぶん」「きっと」「必ず」などと並んで命題外副詞の下位分類「真偽判断」に属するとしている。機能による下位区分であり「呼応」については分類の要素とされていない。

## 2.4 工藤(1980・2000, 1982) — 叙法副詞の下位区分

工藤は「叙法副詞の意味と機能—その記述方法を求めて—」(1982)の中で、「表題にいう<叙法副詞>とは、筆者の理解では、山田孝雄(1908)の「陳述副詞」の一部、ただし、中核的な一部を占めるものである」と述べている。そのうえで、「陳述」という用語を広義にとらえる立場をとり、モダリティを「叙法(のべかた)」と呼び、「叙法性(モダリティ)は話し手の立場からする文の叙述内容と、現実及び聞き手との関係づけ文法的表現」と規定している。「文の陳述性」について議論されるであろう問題として、叙法性(かたりかた・modality)、評価性(ねぶみ)、感情性(きもち)、対人性(もちかけ)、待遇性(ていねいさ)、題述関係・係り結び、対照性・とりたて(focusing)」をあげている。さらに、陳述副詞の下位分類として「叙法副詞」「評価副詞」「とりたて副詞」をたて、「叙法副詞」の体系を述語のモダリティによって図2-4<sup>3</sup>のように分類している。



<sup>3</sup> 「取りたて副詞」は「注釈副詞」としたもののうち、評価的・感情的なものだけを「評価副詞」とし、その他は叙法副詞のなかの「下位叙法 sub-modality」の副詞として入れている」と記している。

以下に、工藤の「副詞と文の陳述的なタイプ」(1980・2000)に挙げる具体的な「叙法副詞」を示す。「叙法副詞」は「文の叙法性に関わりをもつ副詞」であり、「発話時のもの」「話し手のもの」という二つの特徴をもつものであるとしている。分類のAとBは主文の述語と呼応する(しうる)もの、Cは原則として複文の従属節の述語と呼応するものであり呼応現象を持つものであるのに対し、Dは積極的に一定の述語形式と呼応する現象が見られないものとして分類している。

(6) A 行為的な叙法<sup>4</sup>

a) 基本叙法

- 1) 依頼：どうぞ どうか なにとぞ なにぶん／頼むから
- 2) 勧誘・申し出：さあ まあ なんなら (なんでしたら)

b) 副次叙法<sup>5</sup>

- 3) 願望・当為：ぜひ せめて いっそ できれば なんとか なるべく できるだけ どうしても 当然 断じて

cf) 意志：あくまでも すすんで ひたすら いちずに

意図：わざと わざわざ ことさら あえて

B 認識的な叙法

a) 基本叙法

- 4) 感嘆・発見：なんと なんて なんとものはや
- 5) 質問・疑念：はたして いったい／なぜ どうして etc.
- 6) 断定：勿論 無論 もとより／明らかに 言うまでもなく
- 7) 確信：きっと かならず ぜったい (に) 断じて
- 8) 推測：多分 恐らく さぞ 定めし 大方／大概 大抵／まさか よもや／たしか もしや さては
- 9) 伝聞：なんでも 聞けば cf) 情報源：～によれば

b) 副次叙法

<sup>4</sup>「A行為的な叙法」にも、「B認識的な叙法」にも用いられるものとして、「きっと かならず 絶対(に)断じて／もちろん 無論」を挙げている

<sup>5</sup>副次叙法とは、叙法性の規定のうち、「話し手の立場」という部分が間接化されているものであるとしている。

- 10) 推定：どうも どうやら／よほど
- 11) 不確定：あるいは もしかすれば ことによると ひょっとしたら／あんがい
- 12) 習慣・確率：きまって かならず きっと／とかく えてして ややもすれば ともすると／いつも よく／大抵 大概 普段
- 13) 比況：あたかも まるで ちょうど／いかにも さも
- 14) 否定
- イ) 否定判断性：けっして／まさか よもや／断じて
- 部分否定性：必ずしも 一概に あながち まんざら
- とりたて性：別に 別段 格別 ことさら
- ロ) 程度限定性：たいして さほど さして ちつとも すこしも 一向
- (に) てんで／まるで 全然 まったく
- ハ) 動作限定性：ろくに めったに さっぱり ついぞ たえて
- (不可能) とても どうてい なかなか どうしても
- (疑問詞) なんら なんの なにも なにひとつ
- ニ) 慣用的偏性：毛頭 皆目 寸分 とんと おいそれと (は)
- cf) 否定的傾向：所詮 どうせ どだい なまじ へたに
- (相対的テンス) まだ もう いまさら
- 15) 肯定：かならず さぞ ぜひ
- cf) 一般の程度副詞 ある種のアスペクト副詞

#### C 条件的な叙法

- 16) 仮定 条件：もし 万一 かりに／いったん／あまり よほど／どうせ  
同じ
- 17) 仮定逆条件：たとえ たとい よし よしんば
- 18) 逆条件（仮定～既定）：いくら いかにも どう どんなに
- 19) 原因・理由：なにしろ なにせ 何分／さすがに あまり
- 20) 譲歩：もちろん たしかに なるほど いかにも
- 21) 譲歩～理由：せっかく

#### D 下位叙法 sub-modality

- 22) 確認・同意：なるほど 確かに いかにも 全く／道理で

- 23) うちあけ：実は 実の所 実を言えば 本当は 正直（言って）  
 思い起し：思えば 考えてみると 思い起せば
- 24) 証拠立て：現に 事実 じっさい だいいち  
 たとえ：いわば いうなれば 言ってみれば
- 25) 説き起し：およそ そもそも 一体 大体 本来 元来（概括） 一般に  
 概して 総じて  
 まとめ：結局 畢竟 要するに 要は つまり 早い話（が）  
 （はしより） どうせ どっちみち いずれにせよ 所詮 とにかく
- 26) 予想・予期：案の定 やはり はたして  
 cf) めずらしく 案外（に） 意外にも／かえって
- 27) 観点～側面：正しくは 正確には 厳密には /詳しくは 技術的には  
 時間的には 文法的には

工藤の研究は、多くの副詞を体系づけることに重点が置かれており、文末のモダリティとの共起により分類されて体系が示されている。また、Bの認識的な叙法を持つ副詞で「推量的な副詞群」に関しては、どのような形式とどのくらい共起して用いられているかを量的に調査・分析し、蓋然性（事態実現の確実さ）と話し手の確信の度合いが、「確信：きっと」「推測：おそらく」「推定：どうやら」「不確定：あるいは」の順で連続的に低くなっていると述べている。論の中で、「叙法副詞」の分類の観点として用いている「呼応」と「共起」について詳細に記述している。

## 2.5 宮島（1983）－消極的な呼応

宮島は「情態副詞と陳述」（1983）の中で「「呼応」しない「評価副詞（注釈の副詞）」における制限は、大部分の語形とは共起するが、特定少数の語形とは共起しない、という形での制限ではないか」と述べている。そして「特定少数の形式とは共起しないという、このような「消極的な呼応」をも「呼応」と呼ぶべきかは問題であろう。この表現には、一定内容の陳述を積極的によび出す、といったニュアンスがありそうだから。しかし「共起制限」という表現は現象の記述だから、ここでも使うことができる」と言及している。この論で宮

島は現象の記述に徹すれば、注釈の副詞と同様な「共起表現・消極的な呼応」が一部の情態副詞にもみられる、と述べている。

また、話し手の考えを表す陳述副詞の話し手の主体性が薄れる場合があること（「陳述副詞の客観化」）を（7）第三者の希望に関係して使う場合、（8）小説などで使う場合について言及している。

（7）御父上も是非御覧になりたいだろうと考えまして （宮島 1983 : 104）

（8）山の芋と云ふからには、勿論芋粥にする気で、持つてこさせるのに相違ない。

（芋粥 24）（宮島 1983 : 105）

続けて主体性に関して、（9）陳述副詞「意外に」と（10）情態副詞「不意に」の連続性の例をあげ、「陳述副詞はハナシテ性だけでなく、主観性がうすれ評価の主体がアイマイになることがある」と述べている。（9）の「意外」の主体は話し手・書き手なのか、世間一般人なのか決定的な根拠がないので決めにくいことがある。評価の主体が一般化されていて、特定のものに決めにくいと述べている。「意外に」の類が陳述副詞の中で最も主観性が弱いとすれば、「不意に」の類（突然、突如、いきなり、やにわに、急に）は情態副詞の中でもっとも主観性がつよい、というように連続的にとらえてもいいのではないかと述べている。

（9）日本は、意外に狩猟のさかんな国である。（高崎山 55）（宮島 1983 : 112）

（10）連行する途中、主犯の男はおとなしくしてゐましたが、女の方が、不意に逃げ出さうとしましてね。（本日休診 77）（宮島 1983 : 114）

以上のように、注釈の副詞が、消極的な呼応をすること、一部の情態副詞は「話し手の心情を表す」場合があり、注釈の副詞の主体性が薄れる場合があることから、一部の情態副詞と連続性を持つことが指摘されている。また、前提については、「自己の内部か、外に基準を置くか判断しにくいことが多い。「評価する」という行為が難しさを孕んでいるからに他ならない」と言及している。

## 2.6 川端（1983）－予期や反予期

川端は、「副詞の条件－叙法の副詞組織から－」（1983）の中で、情態性を持つ形容詞の連用形と情態副詞の違いから副詞の条件を検討し、叙法の副詞を分類している。川端（1983）の分類を表 2-1 に示す。その中で副詞「やはり」は、先行文に前提を持つ副詞（暗示される場合もある）であり、「予期や反予期」を持つ語として「案の定」「はたして」と同じグループに分類されている。

表 2-1：川端（1983）叙法の副詞（pp. 8-25）

「三」	<p>情態性形容詞(不完全形容詞としての情態副詞も含む)－連用の装定・想定構造</p> <p>A: 「連用修飾語格」－火花を散らせて戦う 枝もたわわに柿実る</p> <p>B: 「情意性形容詞による連用想定－情意の想定句における述語句＋情意性形容詞－望不望の事態の成立として確認する語」－かなしいことに うれしいことに 不思議に めずらしく／ あひにく 運悪く 折あしく さびしくも 困ったことに</p> <p>C: 「程度副詞」－比較相対的に暗示された差－もともと こよなく まだ だいぶ なほ 相対的に暗示された関係の顕在化, 組織化－とても はなはだ なかなか</p>
「四」	<p>D: 「包摂性の想定述語句－私の情意でも望不望の態度でもなく, 事実としての明白さ・確実さ, 論理としての妥当性を示す」－確かにいつか逢ったひと 明らかに まさしく まったく／ 春は<u>もちろん</u>いい気分 無論／当然</p> <p>E: 「ことがらを規定する包摂系の副詞－前提を持つ, 前提により分類 4 種類に分類」</p> <p>①予期や反予期－はたして <u>やはり</u>／<u>やっぱり</u>雨か 案の定／図らずも 意外にも</p> <p>②事実性においてことがらを規定－事実 実際 現に 本当に 実に まことに</p> <p>③関係副詞－もともと もとより そもそも どだい 本来</p> <p>④②の逆構造－所詮 つまり 結局 鉄の男もやはり人の子／「～, しかし～」一般的事であることを尊重しつつ逆らう個別を主張する形式－もとより 勿論 無論 当然 確かに</p> <p>F: 「陳述副詞－2系統あるとする」</p> <p>①従来, 情態副詞に括られていた－ひたすら わざわざ せいぜい／あやふく やっと</p> <p>②最も狭義の「陳述副詞」－断定, 否定, 推定(蓋然), 疑問, 仮定, 命令－必ず さらさら さぞ はたして もし どうか</p>

## 2.7 西原（1991）－恒常的な認知体系が前提

西原は「副詞の意味機能」（1991）の中で、コミュニケーションの過程において副詞が担う意味機能を、①情報としての意味、②態度の表明としての意味、③伝達行為における人間関係に関する意味、④命題外情報とのフィードバックに関する意味の4点から考察している。論の中であらかじめ踏まえておかなければならないこととして、「判断詞であること」、「作用域によって類別できること」、「意味の相関があること」「文脈によって多義となること」「含意された意味があること」「文脈外情報とのフィードバックがあること」の6点を挙げている。特に副詞「やはり」について、命題の内外に作用域を持つことにより多義になるとし、(11) 作用域が命題内にある用例、(12) 命題の連鎖上に話者の話者の結論を加える用例、(13) 命題の外にある社会的・文化的文脈を踏まえてその妥当性を述べる用例として提示している。

(11) 「僕は山田さんの言うようにするべきだと思います。」

「私もやはりその意見に賛成します。」 (西原 1991 : 56)

(12) いま事を起こせば、周囲の反対にあう。何もしなければ、外部から責められる。

やはり最初考えた通りにするしかない。 (西原 1991 : 56)

(13) 議論は活発に行われましたが、やはりあの法案は成立しませんでした。

(西原 1991 : 56)

さらに、「文脈外情報とのフィードバックがあること」の中で、ある種の副詞の運用に関しても同様で、背景知識の共有を前提とする必要があり、副詞の意味を理解するためには「文脈の枠外 (context) に存在するそれらの情報と談話文脈との間に行われる情報交換のフィードバックが必要であるとし、ある種の副詞の例として「さすが」「せっかく」「やはり」を挙げ、「さすが：発話以前に話者が持っていた高い評価が前提」、「せっかく：行為に対して費やされた大きなエネルギーの存在が前提」と述べ、「やはり：恒常的認知体系<sup>6</sup>を前提として持ち「話者が発話以前に持っていた「これはこうである」、「こうなるべきだ」という背景意的認知体系の存在と、そこから生じる推論の妥当性が前提」であると述べている。

<sup>6</sup>西原（1991）は、副詞の意味を理解するためには「文脈の枠外 (context) に存在するそれらの情報と談話文脈との間に行われる情報交換のフィードバックが必要としている。モダリティーとして含意される情報を「発話時、瞬時的な話者の心的態度」とし、背景知識を「恒常的認知体系」としている。

## 2.8 森本（1994）－SSA 副詞

森本は『話し手の主観を表す副詞について』（1994）で「話し手の主観的・心理的態度を表す副詞の一群」の語彙的な特質を明らかにすることを目的とし、個々の副詞的なレベルでの分析、全体的なレベルでの分析を通して体系性を追求しようとした。その対象として以下の副詞 29 語を選び、「SSA 副詞」（a speaker's subjective attitude）と名付けた。SSA 副詞が「陳述副詞」「文副詞」という概念とかかわりあうことを認めつつ、基本的な視点はプロトタイプ理論<sup>7</sup>を有効と考え、その立場で考察を進めていくとしている。副詞には一応の定義があるが、明確な基準はない。しかし、ある程度機能が同じもの、機能的に近いものの集まりを想定することは可能であると考え、分類する際、厳密なカテゴリー化を追い求めるのではなく、特徴や性質の連続性を考慮し、特徴を最も鮮明に示すプロトタイプと周辺という考え方で重層的にカテゴリー化しようとした。表 2-2 に森本の分類をまとめた。

表 2-2：森本（1994）SSA 副詞

平叙文	過去／意向文	「だろう」との共起		SSA 副詞
A (+)	A1 (-過去平叙文)	A11	(+だろう)	たぶん、きっと、おそらく、必ず、まさか、ぜったい、さぞ
		A12	(+だろう)	しょせん、どうせ
		A13	(-だろう)	どうも、どうやら
	A2 (+過去平叙文)	A21	(+だろう)	けっきょく、 <u>やはり</u> 、当然
		A22	(-だろう)	あいにく、さいわい、賢明にも
		A23	(-だろう)	たしか、明らかに、確かに、事実、 <u>もちろん</u> 、実は
		A24	(-だろう)	しょうじき
	B (-)	B1(-意向文)	—	どうか、どうぞ
	B2(+意向文)	—	ぜひ	

統辞論的かつ意味論的に分析し（さらにプラグマティックな<sup>8</sup>分析）、特徴の記述を行って

<sup>7</sup> プロトタイプ理論とは、言語学、認知心理学上の理論。1970年代にエレノア・ロッシュらによって提唱された。人間が実際にもつかたカテゴリーは、必要十分条件によって規定される古典的カテゴリーではなく、典型事例とそれとの類似性によって特徴づけられるという考え方。

<sup>8</sup> プラグマティクスとは、「言語と言語の構造の中に文法化されたあるいは言語化されたコンテキストの間の関係を研究するものとされている」としている。

いる。まず、平叙文での生起を基準にし、現れるか否かで「+グループA」「-グループB」に分類する。次に、グループAを過去の文での生起を基準にし、現れにくいかな否かで「A1」「A2」に下位区分する。さらに、「だろう」構文との共起がしやすいかな否かで下位区分する。グループBは命令文に現れるもので、命令文にのみ現れる「B1」、命令文と「意向文（う/よう）」構文に現れるものを「B2」に分けている。これら9つのサブグループごとの特徴、文タイプとの共起関係、各副詞の意味・機能を詳しく分析している。

この中で副詞「やはり」は、「けっきょく」「とうぜん」と同じ特徴を持ち、平叙文で現れる（+グループA）、過去の文で現れる（A2）、「だろう」構文との共起がやすく、幅広く自由に生起する（A21）グループに属しているとしている。

「話し手の主観的・心理的態度を表す副詞の一群」を選定し、その語彙的な特質を明らかにするために、個々の副詞・同一のグループとした副詞の分析したこと、手法や記述は参考になる。しかし、他の副詞と差別化すること、名前を付けること、特徴・性質を明らかにしてグルーピングすること、意味論的な方法はどこまで有効か。また、SSA副詞29の選定基準、体系化した結果の全体像の明示はない。

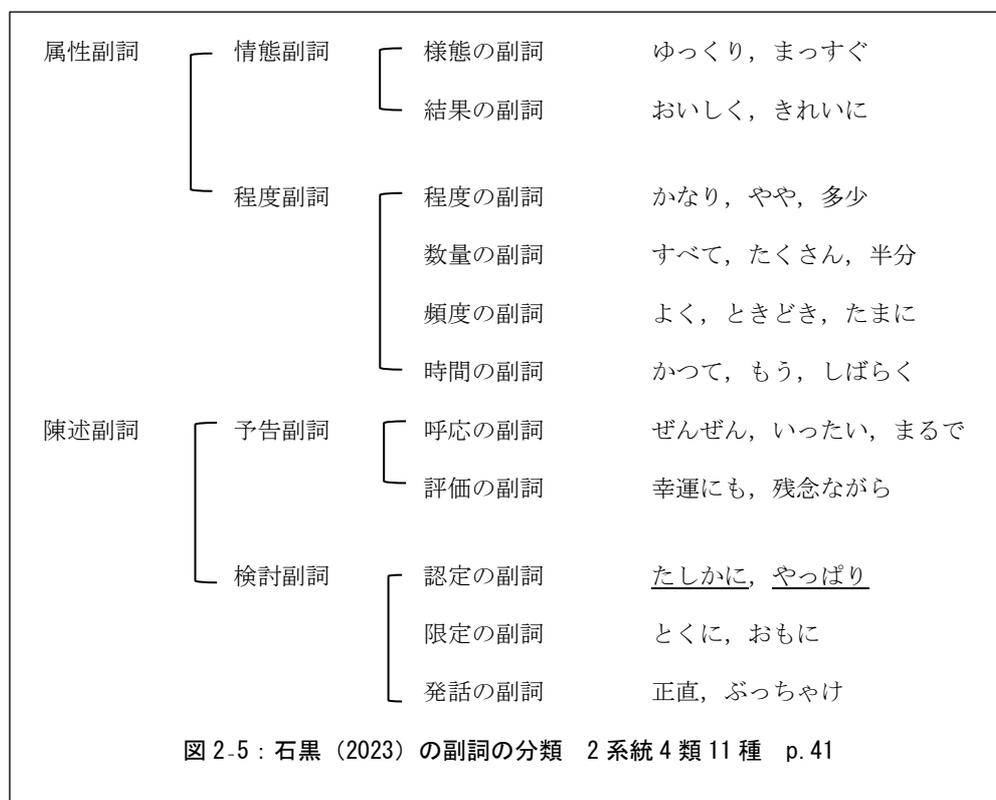
## 2.9 石黒（2023）－検討副詞 - 認定の副詞

石黒は『コミュカは「副詞」で決まる』（2023）の中で、「副詞はコミュニケーションの要である」という理念のもとに社会言語学的立場から副詞論を展開しているが、その前提として副詞を2系統4類11種に分類している。

この分類は山田（1936）の「語の副詞」の3分類に基づいていること、「属性副詞」については仁田（2002）の分類、「陳述副詞」については工藤（2016）と中右（1994）の分類を参考にしていると述べている。石黒（2023）の分類は書き言葉と話し言葉を射程において副詞を体系化している点が従来の研究とは異なっている。論の中で「陳述副詞」を「予告副詞」と「検討副詞」に分け、さらに「予告副詞」には「ぜんぜん」「いったい」などを含む「呼応の副詞」と「幸運にも」「残念ながら」を含む「評価の副詞」があり、「検討副詞」には、「たしかに」「やっぱり」を含む「認定の副詞」、「とくに」「おもに」を含む「限定の副詞」、「正直」「ぶっちゃけ」を含む「発話の副詞」があるとしている。

副詞「やはり」が含まれる「認定の副詞」の特徴として、話し言葉で多いこと、フィラーとして働くこと、聞き取りに役立つこと、相槌になることに加えて、「やっぱり」「なるほど」

「たしかに」「けっこう」などは外国人が使いにくい副詞であると述べている。図 2-5 に石黒（2023）の分類を示す。



## 2. 10 副詞の体系化を目指した先行研究

本節では、副詞の分類・体系化を目指した研究・副詞の体系に言及した先行研究を概観した。これらの研究の中で、「やはり」「もちろん」「確かに」「なるほど」が属するカテゴリーをまとめ、表 2-3 に示した。

表 2-3 : 分類・体系化することを目指した先行研究

渡辺 (1971)	・ 注釈の誘導副詞： <u>もちろん</u> , 無論, 事実, 実際 ・ 批評の誘導形： <u>確かに</u> , 明らかに
工藤 (1980・ 2000)	B 認識的な叙法 a) 基本叙法 6) 断定： <u>勿論</u> , 無論 C 条件的な叙法 20) 譲歩： <u>もちろん</u> , <u>たしかに</u> , <u>なるほど</u> D 下位叙法 22) 確認・同意： <u>なるほど</u> , <u>確かに</u> 26) 予想・予期：案の定, <u>やはり</u>

中右 (1980)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真偽判断の副詞： おそらく，多分，<u>もちろん</u>，無論，きっと，必ず，確か，<u>確かに</u></li> </ul>
川端 (1983)	<ul style="list-style-type: none"> <li>D 事実としての明白さ・確実さ，論理としての妥当性： <u>確かに</u>いつか逢ったひと，春は<u>もちろん</u>いい気分，無論，当然</li> <li>E 先行文の関係－前提を持つこととの関係： ① 予期や反予期：はたして，<u>やっぱり</u>雨か，案の定，意外にも ② 事実性においてことがらを規定：事実，実際      ③ 関係副詞：そもそも ④ ②の逆構造：所詮，結局，鉄の男も<u>やはり</u>人の子，<u>勿論</u>，無論，当然，<u>確かに</u></li> </ul>
西原 (1991)	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 伝達方法に関わる：「表現・内容伝達の過程を調整する」[確認]実には，<u>たしかに</u>，<u>なるほど</u>，全く／「後続する談話機能の予測」[同意]<u>なるほど</u></li> <li>② 話者の判断：「明示的に示される判断」[確信]かならず，きっと，<u>もちろん</u>，当然</li> <li>③ 伝達の言語理解：命題の連鎖が作る文脈の他に背景知識・恒常的認知体系必要 [推論の妥当性]<u>やはり</u>      [筋道の正しさ]<u>なるほど</u></li> </ul>
森本 (1994)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・29の「話し手の主観的・心理的態度を表す副詞」の一群を選定し，体系化を試みる</li> <li>・過去平叙文＋「+だろう」結局，<u>やっぱり</u>，とうぜん</li> <li>・過去平叙文＋「-だろう」あきらかに，<u>たしかに</u>，たしか，<u>もちろん</u>，じつは</li> </ul>
石黒 (2023)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・副詞を2系統，4類，11種に分類</li> <li>・2系統4類（属性副詞 - 情態副詞と程度副詞・陳述副詞 - 予告副詞と検討副詞）</li> <li>・陳述副詞 - 検討副詞 - 認定の副詞：<u>たしかに</u>，<u>やっぱり</u></li> </ul>

### 3. 副詞「やはり」の意味・機能に関する研究

本節では，森田（1989），西原（1988），森本（1994），深尾（1995），蓮沼（1998），加藤（1999），曹（2001），金谷（2017）の先行研究・記述から，ここまでの副詞「やはり」の意味・機能の捉え方を明らかにする。

#### 3.1 森田（1989）－基本的意味

森田『基礎日本語辞典』（1989）によると副詞「やはり」の基本的意味「現実の状況が，話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる」とある。そして，話し手の観念内の基

準として「①過去の状態を基準に据えた「やはり」「②他の状況を基準に据えた「やはり」「③現状が本来の姿であるという認識を基準に据えた「やはり」「④話し手が心に描いた状態を基準に据えた「やはり」「⑤外在する規則を基準に据えた「やはり」」の5種類の基準に分類し、(14)のように説明を加えている。

(14) ①過去の状態を基準に据えた「やはり」：過去の情態から推して現状もそうであろうと予測した通り。「相変わらず」と類似しているが、「相変わらず」は変を前提とした不変化状態に言い「やはり」は不変化を前提とした不変化状態を指す。

- ・「大人になってもやはり昔の癖は変わらない」
- ・「結婚してもやはり旧姓を名乗っている」

②他の状況を基準に据えた「やはり」：他者を基準としてそれから類推して。対比する他の事柄・状況から推して、「当然こちらも……であろう」と予測する状態がある場合に用いる。「同様に」「同じく」とほぼ同じ意味である。

- ・「兄も優秀だったが、弟もやはり優秀だ」
- ・「みなと同様、私もやはりストライキには反対だ」

③現状が本来の姿であるという認識を基準に据えた「やはり」：本来あるべき状態と比較して、現状に多少の相違は見られるが、本質的には差がないとする場合。

- ・「雨は少ないけれど、やはり梅雨だ」
- ・「負けは負けでも、やはり横綱だけあって堂々たる戦いぶりだ」

④話し手が心に描いた状態を基準に据えた「やはり」：その事柄・状態が話し手の期待、予想、常識的判断、指向判断と比べて差がない場合。「期待通り」「思った通り」「案の定」に相当する。

- ・「やはり彼は白だった」
- ・「語学の学習はやはり難しい」

⑤外在する規則を基準に据えた「やはり」：社会の通念・規則・法則などによって定まっており、変更が利かない場合。

- ・「いくら頼んでも、やはりだめなものだめだ」
- ・「どんなに皆が否定しても、地球はやはり回っている」

話し手が照らす観念の基準が、ほぼ網羅されている。書籍の性質から、語用論からの記述はなされていない。本論では、話し手が照らすのは話し手の観念内にある基準と現実の状況（話し手の外部の情報）だけではなく、話し手が一旦下した判断と逡巡後に新たに下した判断の場合もあるという立場をとる。

### 3.2 西原（1988）－語用論的前提の一つの類型

西原は「話者の前提<sup>9</sup>－「やはり（やっぱり）」の場合－」（1988）の中で、副詞「やはり」の基本的な意味は「話者が必然、あるいは妥当であるとする日常推論体系伝達。話者にとって発話が妥当な論理的帰結」であるとしている。副詞「やはり」を例として語用論的前提の一つの類型を検討している。副詞「やはり」が働く作用域の違いによって、「文の命題」「命題の連鎖」「命題の外にある社会的・文化的文脈」の3種類に用法を分けている。

(15) ①一文中の命題を作用域とする。情報追加機能である。取りたて助詞「も」と共起する場合。

- ・「そんなことでもやっぱり心痛んじゃうんでしょね」命題：XがYで心が痛む。 (西原 1988 : 93)

②連鎖する命題を作用域とする。文脈（命題が結束性を保って連続していく過程）全体を作用域とし、自分自身による妥当な推論の帰結を主張する場合。

- ・「何ととっても日本の場合には、企業規模の格差ですね。労働時間が非常に違う。つまり小さい企業はとて長く働く。……国際比較を考えてみた場合にね、今一番問題になっている二千時間を超えている国って先進諸国でにほんだけなんですよね。だからこれはねえ、やっぱりその経済的とかいろんな意味でなく、やっぱり政治的に考えてね。二千時間は切った方がいいと私は思ってるんです。」 (西原 1988 : 94)

<sup>9</sup> 西原（1988）では、「発話が伝達手段として成立する以前に、膨大な背景的知識が話し手と聞き手の間で共有されている必要があり、その発話成立の必要条件を「前提」と呼ぶ」とある。本稿では、前提、語用論的前提に関する定義や説明は主に金水・今仁（2000）を参考にした。「Pの発話が健全に行われるためには、Qが旧情報でなければならないなら、QはPの前提である」を語用論的前提の定義としている。

③命題の外にある社会的・文化的文脈。語用論的前提。広く世間一般の常識に照らし合わせても妥当な論理的帰結であるとする。

- ・「あの、ワインもそうですね。もっともこのワインに関しては、一番飲むのはどこか、消費率のトップですわ。やはり産地であります。ドイツとかフランス、えーついでヨーロッパの各国ということなんです」命題：ワインは産地で沢山消費される。 (西原 1988 : 95)

文脈・談話の中で語用論の立場から副詞「やはり」を分析している。作用域の差から分析している点が斬新である。西原(1988)は、発話成立の必要条件として、膨大な背景的知識が話し手と聞き手の間で共有されている必要であると述べているが、「命題の外にある社会的・文化的文脈」以外の作用域が文脈の中に前提が明示されている「文の命題」「命題の連鎖」場合も「膨大な背景的知識が話し手と聞き手の間で共有されている」と言えるのであろうか。

### 3.3 森本(1994)－熟慮した結果であることを示すシグナル

森本は『話し手の主観を表す副詞』(1994)の中で、「やはり」を「結局」「当然」などと類を同じくするとしている。これらは、「文脈の中での文の機能的な位置づけを明らかにする」機能を持ち、共起制限では「基本平叙文、「だろう」構文でも現れる」という共通の特徴を持つことで下位区分しているグループである。なかでも副詞「やはり」は、命令文系統(「やはり」「当然」)、疑問文(「やはり」「結局」)にも生起することができることから、極めて自由に生起できる(制限が少ない)副詞だと観察している。副詞「やはり」の基本的意味は「期待されていることの実現を示す」と述べている。そして、「その期待は話し手が一般的に起こると想定することであり、言語的な先行文脈の他話し手の経験、共通知識など一般的原則から引き出される」としている。

(16) P : 何かニュースはありませんか。

Q : a. やはり国会が解散しました。

b. やはり原発で事故が起きました。

c. やはり一晩で山ができました。

(森本 1994 : 133)

また (16) の会話で (16) c. の解答は、やや奇妙であるところから、副詞「やはり」はディスコースレベルでの分析が必要になるとし、語用論的機能から「やはり」が適切に使われるには、話し手と聞き手が共有する知識が前提とされていて、そこから話し手の期待することが引き出されなければならない」と述べている。さらに (16) a. (16) b. が受け入れやすいのは、ニュースとしての一般的な話題であり共有の度合いが高いからではないかと指摘している。副詞「やはり」を用いる話し手は共有の知識を前提にしているが、話し手がそう思い込んでいるに過ぎないとも述べている。

(17) P : ぼくは行きます。

Q : やめたほうがいいよ。

P : そうですね……

Q : やめろよ。

P : ええ……a. 行きます。

:           b. やっぱり行きます。

(森本 1994 : 134)

(17) の場合、話し手の「行く」という意志の表明が「やっぱり」を用いるための共有知識として機能していて、「やっぱり」は到達した結論が状況について熟慮した結果であることを示すシグナルであると指摘している。副詞「やはり」がうまく使われるかどうかは、語用論的配慮にかかっている部分が大きいとしている。

語用論的観点から、「やっぱり」は到達した結論が状況について熟慮した結果であることを示すシグナルであるとの見解は本論で援用したい。しかし、前提との関係の記述は「やはり」を用いる話し手は共有の知識を前提にしているが、話し手がそう思い込んでいるに過ぎない」とも述べ、「やはり」がうまく使われるかどうかは、語用論的配慮にかかっている」とあり、ここまでの森本の論に比べやや漠然としている感がある。

### 3.4 深尾 (1995) —話し手が妥当だと考える判断

深尾は「副詞「やはり」「やっぱり」について」(1995)で、先行研究を検討し、副詞「やはり」の「意味／機能」を「やはり」は話し手が妥当だと考える判断を表す。その判断は、

その時々自身の信念、気持ちに照らして決定される」と規定している。そして、3種類の「やはり」の「意味／機能」の関連について、客観的な「やはり1」から、主観を交えた「やはり2, 3」へと連続しているとし、(18)のように述べている。

(18) 「やはり1」：命題を構成する命題内副詞-そのまま、同じく、同じように

イ) 以前と変わらない状態であること

ロ) 二つ以上の事柄の a) 対比／b) 並列

- ・話題として取り上げたことが、別の事柄に一致する。基準となる事柄が、明示される場合が多い。

「やはり2」：モダリティ表現-思った通りに、予期した通り

- ・ある事柄、出来事を見て、その結果自分が予測したことは正しかった、思った通りだったという気持ちを述べるのに使われる。

「やはり3」：モダリティ表現-意見や気持ちを述べるときに用いる

- ・話し手のその時々判断、気持ちを表しており、話題として取り上げたことが、自身の信念、考え、気持ちに一致するという意味を持つ。話し手の心的態度を表す。

特に、「やはり3」については、(19)の用例をあげ、「私たちの考え、気持ちは時間、状況とともに刻々と変化するものであり、私達はその時々で自分に最も近い気持ち、最も適切だと思っている判断を行っているといえる。副詞「やはり」は「話題として取り上げたことが、恒常的原理的なものに適合する」という意味だけでなく、自分にとってその時点、その状況で最も適切だと思われる判断をしているということを表している」と述べている。

(19) 盛り蕎麦下さい。いや、やっぱり掛蕎麦にしてください。(深尾 1995 : 38)

深尾(1995)は、ここまでの多くの研究者の見解である「話題として取り上げたことが、恒常的原理的なものに適合する」に加えて、「その状況で最も適切だと思われる判断をしている」という新たな立場を提示している論となっている。

### 3.5 蓮沼 (1998) — 基本機能と談話機能

蓮沼は「副詞「やはり・やっぱり」をめぐって」(1998)の中で、副詞「やはり」は「表現類型との共起関係が自由な点や多様な意味・用法を持つ点で、副詞下位分類のうちの単独のカテゴリーに収まりきらない多義的かつ多機能に用いられる副詞」であると捉え、多様な用法の解明を試みている。まず、副詞「やはり」には基本機能と談話機能があるとしている。森田 (1989) の説を踏襲した基本機能は「前提命題と当該の命題の適合の再確認・確認を行うもの」と捉えることができるとし、森田 (1989) の「依然として」「同様に」「思った通り」の機能を提示している。ここでいう「前提命題」とは言語的文脈に明示されているもの、必ずしも明示されていない話者の既有知識や予想、常識・社会通念といった暗黙の前提を含むこと、「適合」とは「厳密な意味での外面的な合致ではなく、意味的な同一性・平行性が認められる程度の場合を含む」と定義している。次に基本的機能として次の5点を挙げている。

- (20) ①森田の「過去の状態を基準に据えたやはり」と同じ：「相変わらず」「依然として」
- ・「昔からきれいな人だったが、十年たった今でもやはりきれいだ」
- ②森田の「他の状況を基準に据えたやはり」と同じ：「同様に」Xは／もP」「YもやはりP」術語Pを共有する命題が連続：西原の「文の命題内」に同じ
- ・「お母さんも美人だが、娘さんもやはり美人だ」
- ③話し手が心に描いた状態を基準に据えたやはり。話し手の期待、予想、常識的判断、指向判断と比べて差がない。予想の的中を表す。：「思った通り」「案の定」
- ・「噂には聞いていたが、彼の奥さんはやはり美人だった」
- ④対話やインタビューで多用される「やはり」、いろいろ考えてから自分の判断を述べる場合に使われる。：「何といても」
- ・「好きな女性のタイプは？」「やっぱり着物の似合う美人ですね」
- ⑤一般知識を引き合いに出して、現状は一般的な原理に裏付けられた妥当な帰結であると言うとき。：「さすがに」
- ・「昔は評判の美人だったが、やはり年齢による衰えは隠せない。」

次に、副詞「やはり」の談話機能については、森本（1994）が指摘した「到達した結論が状況について熟慮した結果であることを示すシグナル」を談話機能の一つとして認め、「先行文脈の情報、話者が前提とする知識との称号を行った結果、結論が情報・前提的知識に根拠づけられた妥当な結論だ」という話者の認識的態度・発言態度を表明する機能だ」と説明し副詞「やはり」の基本機能とは質を異にするが、「やはり」の機能の談話における変容」と捉えることができるとしている。さらに、談話機能は副詞「やはり」の基本機能が談話において形骸化したものであるとする板坂（1971）の説を引き「文脈や前提知識の検証を行っていないにもかかわらず、熟考の姿勢を装うことによって聞き手に対する配慮や自分の判断の妥当性を示す」目的で用いられる場合があることを指摘し、「独断の緩和」「判断の責任回避」「他者との協調的態度」を示す目的で方略的に使用されているとしている。

また、談話における副詞「やはり」の特徴的な用法として、副詞「やはり」がインタビューや対談に顕著に現れる現象を挙げ、発話内容の吟味や適切な表現の選択など、話者が談話の編集を行う際の「間つなぎ」として機能する副詞「やはり」の存在を指摘している。

- (21) ①方略的使用：本来の機能が形骸化している。含意・表現効果の利用をもっぱらの目的に使用される。実際には文脈や前提知識の検証を話者が行ってもいないにもかかわらず、熟考の姿勢を装うことによって、聞き手に対する配慮や、自分の判断の妥当性を示す目的で用いられる。自分の「独断の緩和」、 「判断の責任回避」、他者との「調和的態度」を示す目的で使用される。
- ②フィラー：発話内容の吟味や適切な表現の選択など、話者が談話の編集する際の「間つなぎ」フィラーとしても機能している。知識の検証・確認という「やはり」の働きが実時間的に展開する談話において発揮される。

先行研究の取り入れ方や、自分の論の組み立て方など、参考になるまとめ方をしており、本論に援用した。副詞「やはり」は文法上の特性・共起する分のタイプ（表現類型）が自由であることを述べている。類義的な意味である「やはり」「さすがに」「けっきょく」と比較することによって、違いを明らかにしている。特に、「けっきょく」と「やはり」を比較し、「やはり」は疑問詞疑問文には表れないことを述べている。

- (22)
- |      |   |                    |  |
|------|---|--------------------|--|
| *やはり | { | a : 議長は誰に決まったんですか。 |  |
|      |   | b : どうなったんですか。     |  |
| 結局   |   | c : いつ会うことにしたんですか。 |  |
|      |   | d : 何を食べたの。        |  |
- (蓮沼 1998 : 145)

蓮沼 (1998) では、副詞「やはり」に基本的機能と談話機能が存在することが述べられ、多様な意味・機能が抽出されているが、なぜ、基本的機能と談話機能が存在するのか、多様な意味・機能が抽出できるのかについては言及されていない。

### 3.6 加藤 (1999) — 副詞「やはり」の研究史

副詞「やはり」の研究史を整理した加藤は、「「やはり」論の問題点—その対立する論点の整理と展望—」(1999)の中で、「「やはり」論において、単に見解が異なることを越えて、正反対ともとれる主張がある」とし、2点の対立した見解について言及している。指摘の1点目は、副詞「やはり」の構造面の言及で、前提命題との一致で説明できる用例と説明できない用例が存在していること、もう1点は、「やはり」の表現態度に関して、同調的態度と自説固執的な態度の対立、自発的・感覚的なものとする見方と(論理的)妥当性の主張とする見方の相対立する見解が存在するとしている。

前者の前提命題との一致で説明できる用例と説明できない用例の存在については、前提命題との一致をとる論として、金田一 (1962)、大関 (1993) の「日本社会に共通する価値判断が前提」、板坂 (1971)、西原 (1991) の「話者の固定的観念が前提」を挙げている。それに対して、前提命題との一致で説明できない用例を指摘している論としては深尾 (1995) の論を引いている。加藤 (1999) は、論の中で「「やはり」に後続表現との一致が語られる〈先行してすでにあるもの〉(前提)が必要であることは間違いない」と結論する一方で、前提命題との一致で説明できなかった次の(23)(24)の用例も、板坂 (1971)、蓮沼 (1998) の談話機能「独断の緩和」「判断の責任回避」「他者との協調的態度」で説明できるとしている。(23)の用例は説明できるが、(24)は違う解釈が必要であるという立場を本論は取る。

(23) (迷った末に、店員が進めるものとは別のものに決めようという時に)

せっかくいろいろ相談に乗ってもらって申し訳ないんですが、やっぱりこっち

にしておきます。 (加藤 1999 : 168)

(24) 盛り蕎麦をください。いや、やっぱり掛蕎麦にしてください。 (深尾 1995 : 38)

後者の副詞「やはり」の表現態度の対立である「同調的態度と自説固執的な態度の対立」については、板坂 (1971) の「自発的・感覚的なもの」と西原 (1991) の「判断の妥当性の主張を表すもの」の論を、「同調か固執か」については、板坂 (1971) と多田 (1979) の「相手や世間への同調」の論を検討したのちに、相対立する表現態度の解明には、副詞「やはり」の全体像のどこに位置するか探る必要があるとしている。

相対立する表現態度の存在は、表現態度が対立しているのではなく、副詞「やはり」を用いる場面や状況や発話意図により様々な表現態度が存在すると考えたい。

### 3.7 曹 (2001) - 順接と逆接の理論

加藤 (1999) 以降の研究で「前提命題と当該の命題の適合の再確認・確認」では説明できない説に言及している研究には曹 (2001) がある。曹は「順接と逆接の論理からみた「やっぱり」の機能について」(2001) で、談話における副詞「やはり」の多義的な機能を明らかにするために、順接と逆接の理論<sup>10</sup>に基づく検討と考察をしている。論の中で、副詞「やはり」は「話し手の主観的な判断を表す」ことを認めたくえて、順接の理論上では「妥当な推論の結果としての話し手の判断」を、逆接の理論上では「話し手の認識の確認や再確認」という機能が認められるが、二つの論理は相反するものではないとしている。さらに、順接の理論からは応答表現としての副詞「やはり」、逆接の理論からは発話を修正する (repair) 機能を持つ副詞「やはり」が認められるとしている。以下 (25) (26) に順接・逆接の複文で用いられている用例、(27) に前置きとして用いられる用例、(28) に順接の理論からの応答表現、(29) に逆接の理論からの発話を修正する (repair) 機能を持つ用例を示した。

(25) 星が出ているから、やっぱり明日もいい天気だろう。 (曹 2001 : 40)

(26) 今日の試合はがんばったが、やっぱり負けてしまった。 (曹 2001 : 41)

(27) 人が一緒にいれば意見の食い違いや面倒なこともあると思いますが、やっぱり

<sup>10</sup> 曹の論では明示されていないが、「順接の理論」は、根拠一掃結・理由や原因・条件など出来事から当然予想される展開、「逆接の理論」は前件から予想されない展開であると考えられる。

家族と一緒に住むことは、かけがえのないことだと思うのです。

(朝<sup>11</sup>) (曹 2001 : 41)

(28) 「住む場所決まりましたか」

「まだ全然。」私は笑った。

「やっぱり」

(キ<sup>12</sup>) (曹 2001 : 43)

(29) (食堂でうどんかそばか迷っている)

「うどんください。いや、やっぱりそばにします。そばください」(曹 2001 : 44)

(25) (26) の「やはり」は、いずれも心の中に描いた複数の事態と現前の状況の照合を表していると考えられる。順接・逆接の理論の提示以前に「二つの論理は相反するものではない」と言えるのではないか。(27) は前置きとして用いられる場合(話者が選ばなかった心の中に描いた複数の事態の一つを提示している)、(28) (29) は「順接の理論」「逆接の理論」から認められる機能としているが、順接・逆接の理論と副詞「やはり」の関わり(の解説(そもそも関係があるのかも含めて)が必要ではないか。

### 3.8 金谷 (2017) ——一致説の否定

加藤 (1999)、曹 (2001) 以降の研究で「前提命題と当該の命題の適合の再確認・確認」では説明できない説に言及している研究には金谷 (2017) がある。金谷は、「やっぱり」についての一考察—「一致説」への反論— (2017) の中で、従来の副詞「やはり」に対する多くの研究者の統一見解である「やはり」のはたらきは、P に先行する Q が P に一致することを示す」という説(以下「一致説」と呼ぶ)に異義を唱え、「やはり」は発話の前の段階で P でない可能性も考えたこと」「迷いがあつたことを聞き手に伝達する」談話標識であることを主張する論を展開している。論の中で、まず「一致説」の共通の見解として、①話し手の主観的態度を表わすもの②なんらかの先立つもの Q と「やっぱり (P)」の Q と「やっぱり (P)」の命題 P が「一致」することを表わす③「やっぱり」文の解釈には、話し手と聞き手の間に背景的知識が共有されなければならないの 3 点を挙げ、①については「やはり」は文の命題に作用しないという見解に反対はしないが、命題外だからといっ

<sup>11</sup> 曹の論文での引用。(朝)『99年度版朝日新聞 CD-ROM』

<sup>12</sup> 曹の論文での引用。(キ)吉本ばなな『キッチン』福武書店

て「主観」を表すものではない」とし、②③は「用例に基づいて直感的に導かれたものであると思われる」としている。次に、「一致説」の「期待通り」「想定」は「常識的 Q が発話に先行して存在し、それが P と一致するのだという説明……Q に聞き手を誘導するのが「やっぱり」の機能」であるとし、曹 (2001) の論と用例 (27) を引き、先立つ Q が「やっぱり」文の解釈に必要ではないと考える点 や逆接文における「やっぱり」の使用の説明に Q を用いない点から、逆接文における「やっぱり」の用法を積極的に認めることを提案している<sup>13</sup>。さらに、蓮沼 (1998) で「やっぱり」の意味変化を通時的観点から研究すべきという説を受け、『日本国語大辞典 第2版』の記述と、金谷の内省、論文で引用した用例から「やっぱり」の意味が、命題的なものから、そうではないものへと変化してきたことは間違いないこと、「古い用法が「一致説」を指示する根拠となり逆接文における「やっぱり」の使用の認定を阻んでいる可能性がある」という立場から論を展開し、根拠として通言語的観点から、「語源の「じっとしている」「そのまま」から、「依然として」「～と同様に」までの流れに比べ、逆接文での使用は一見飛躍があるように見えるかもしれない。ところが、類似の現象が他言語でも観察される」と英語・中国語・韓国語の例を挙げ、「通言語的に平行する現象があることを鑑みると、逆接文における「やっぱり」は、それ自体が積極的に認められるべき用法であると思われる」としている。金谷は「一致説」と金谷の主張を二律背反であるとして論じているが、本稿では加藤 (1999) の見解を妥当であるとする。また、通時的観点・通言語的観点からの論証は、副詞「やはり」の別の通時的研究・通言語の研究を待たなければならないと考える。ただし、直前の選択を変更する場合に副詞「やはり」が必須とする用例(29)を提示して、副詞「やはり」の意味・機能が形骸化したフィラーに近い使用について、「あの一」「え一」などのようなフィラーと区別すべきとしている点には注目したい。

### 3.9 多様な意味・機能と問題の所在

本節では、3節で概観してきた先行研究や辞書類で提出された副詞「やはり」の意味・機能をまとめる。3節で抽出された副詞「やはり」の多様な意味・機能を表2-4に示した。

副詞「やはり」には、「I-1 依然として」、「I-1 同様に」、「I-2 同じ結果に帰結」、「II 予期した通り」、「III 熟考した結果」、「IV 選択の終了の宣言」、「V 形式・内容を選択途中」があり、考察の対象とする現象や切り取り方により様々な論が存在していることが確認でき

<sup>13</sup> 用例 (27) は逆接文とは言えない。接続助詞「が」が「前置き」の機能で用いられている用例。

たが、抽出された副詞「やはり」の意味相互の関係の検討は十分とは言えない。

表 2-4 : 先行研究で言及されている副詞「やはり」の意味・機能

	意味・機能	用例	先行研究
I-1	依然として 同様に	・ストーブをつけたが、 <u>やはり</u> 寒い。・彼も <u>やはり</u> 国家試験を目指している。	深尾(1995), 蓮沼(1998), 加藤(1999)
I-2	同じ事態に帰結	利口そうでも <u>やはり</u> 子供は子供だ。	蓮沼(1998), 加藤(1999), 渡邊(2012)
II	予期した通り	待ち合わせの時間に、 <u>やはり</u> 彼は遅れた。	工藤(1982), 川端(1983), 森山(1988・1989), 西原(1991), 森本(1994), 深尾(1995), 蓮沼(1998), 加藤(1999), 渡邊(2012)
III	熟考した結果	<u>やっぱり</u> 私は留学したい。	板坂(1971), 西原(1991), 森本(1994), 蓮沼(1998), 加藤(1999)
IV	選択の終了の宣言	紅茶。あ、 <u>やっぱり</u> コーヒーにします。	深尾(1995), 加藤(1999), 曹(2001), 金谷(2017)
V	選択途中	そーっすねー <u>やっぱりー</u> , あの, えー, まあ,	中田(1991), 蓮沼(1998), 金谷(2017)

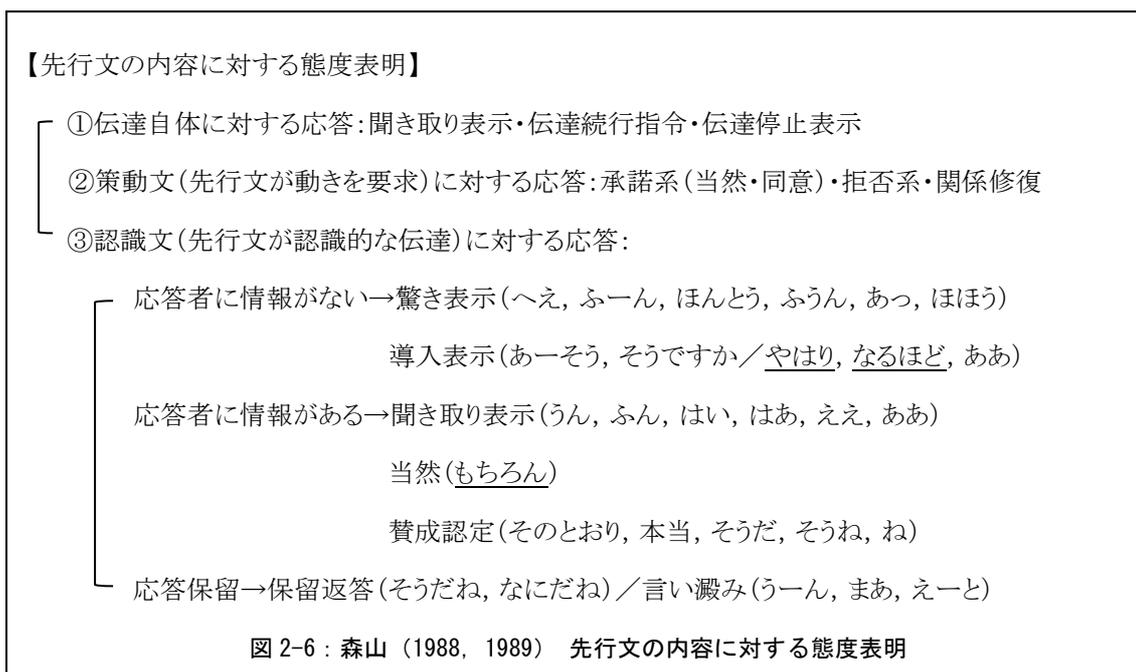
#### 4. 談話における副詞の働きに関する研究

本節では、談話における副詞の働きに関する研究として、森山(1988・1989)、中田(1991)の研究を概観する。

##### 4.1 森山(1988・1989)－応答に関する研究

森山の「認識のムードとその周辺」(1988)、「応答と談話管理システム」(1989)は、談話管理のシステムの一つとして、応答の表現について広く考える必要があるという意図から、談話標識としての応答の諸形式(感動詞・副詞・接続詞)の意味と機能について考察し

ている。その中で、「応答とは、談話展開の標識の一つであり、応答表現の形式として取り上げるものは、「用法的（先行するコンテキストを必要とする）」「形式的（応答のサインとして慣用され、定型化している）」「機能的（談話運用上の聞き手側の情報伝達行為に対するサインとして機能する）」と述べている。その上で、「展開制御系統の応答」と「態度表明系統の応答」について考察し、「態度表明系統」について図 2-6 に示すように分類している。



この中で認識文に対する応答で、応答者に情報がある場合「もちろん」「そ系」を使うが、情報がない場合「やはり」「あー形」を用いるとしている。さらに、「応答者にもととの情報がない場合の肯定的反応である納得表示の導入表示類」として、「そうですか」「やはり」「なるほど」などを挙げ、副詞「やはり」は新情報導入類（未知肯定）の下位の予測性のあるタイプであると述べている。

本研究では対話場面の副詞「やはり」を調査対象にしていくが、その際命題に対しての話し手の心的態度の考察、聞き手の知識の想定、談話に特有な現象への考察が必要である。副詞「やはり」を検討する際、「相手の発話意図を推測するための談話標識」であり、「他者の心の理論を反映している言語形式」である点に留意する必要がある。

## 4.2 中田（1991）－間つなぎ

中田は「談話における副詞のはたらき」（1991）で、副詞は「談話の中で興味深い機能を担っている」とし、話し言葉の用例に基づいて間投的用法、心理的働きかけ、発話行為、談話の構成の表示の4つの観点から談話の中の副詞の機能を検討している。その中で、間投的に使われることで発話の勢いを強めたり、抑えたり、調子を整えたりする副詞があるとし、図2-7に例をまとめた。

### 【間投的な用法】

- ①強調：強調されているのは、発話に込められた話者の心的な姿勢と伝えかけの調子
  - ・一体どんなものか、まったくどうやって、果たして…か、いくら…でも、何もあんなに、何しろ…なので
- ②やわらげ、ぼかし：述べることを和らげたり言い切ることを避ける。配慮やとりなしに通じる。
  - ・少しこう分析する、ちょっと票読みをしてみた／一応、なんか、まあ、幾分、いくらか、おおよそ、おそらく、けっこう、たいてい、多分、たしか、どうも、なんとなく、何やら、割に
  - ・別の和らげの要素—…なんじゃないかな—／…とかって、…みたいなの
- ③間つなぎ：書き言葉にない言い淀みや間つなぎの言葉がある。聞き手にとって、理解のための時間的余裕が得られる。
  - ・まあ、非常に、いわゆる、ま、少し、一応、なんか、やっぱり／すごくちょっと、本当にもう

図 2-7：中田（1991） 談話における副詞の間投的な用法の例

間つなぎについては、「限られた長さの発話に何度も出現して言い淀みの代わりをしたり、次の話を組み立てる間を補う点では、間投詞と同様の働きをしている」こと、「どのような語がどの程度の頻度で出現するかは話し手個人の癖による」こと、「発話時の心理状態によって出現の度合いが変わってくるのが推測される」ことが述べられている。

## 5. 副詞「やはり」論で残された課題

以上、先行研究を概観してきた。3節、4節で検討した先行研究の成果と残された副詞「や

はり」の課題を表 2-5 にまとめた。

表 2-5 : 3 節・4 節で言及した先行研究で残された課題

節	分野	研究と残された課題
3 節	意味・機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な副詞「やはり」の意味・機能の抽出がなされている。</li> <li>・基本的意味と談話における機能があることが述べられている。</li> <li>・前提との関わりから副詞「やはり」を解明する研究がなされてきている。</li> <li>・多様な意味・機能の関係の検討は不足している。</li> <li>・副詞「やはり」の意味・機能の全体像は提示されていない。</li> </ul>
4 節	談話における働き	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し言葉における副詞「やはり」の検討の手掛かりになる。</li> <li>・談話標識としての応答の諸形式（感動詞・副詞・接続詞）の意味と機能について考察している。</li> <li>・談話の中の副詞の機能について考察している。副詞「やはり」は副詞の間投的な用法で「間つなぎ」の機能を持つとしている。「やわらげ、ぼかし」での用法もある可能性がある。</li> </ul>

3 節で検討した副詞「やはり」の意味・機能についての研究は、多様な意味・機能の抽出がなされており、基本的意味と談話における機能があることが述べられている。ここまでの研究の多くは、前提との関わりから副詞「やはり」を解明しようとしているが、多様な意味・機能の関係の検討は不足しており、副詞「やはり」の意味・機能の全体像は提示されていない。4 節で検討した談話における副詞の働きについての研究は、応答の諸形式（感動詞・副詞・接続詞）の意味と機能、「間つなぎ」の機能を持つ副詞の間投詞的な働きに言及しており、話し言葉における副詞「やはり」検討の手掛かりになる研究である。

## 6. 本研究における用語の定義

本節では、本研究で扱う議論に必要な用語として「意味・機能」、「中心的意味とスキーマの意味」、「前提」、「呼応と共起」、「談話機能」を取り上げ、その定義を行う。

## 6.1 意味・機能

本研究では副詞「やはり」を意味論的観点からも、語用論的観点からも論じる。そのため「意味・機能」という用語を用いるが、森本（1994）の以下の説による。

(30) ……本稿では「意味／機能」という表し方をする場合が多い。概略的に、名詞と副詞を見ると、名詞の意味的構造は語彙的な特質を詳述することで述べることができる（どのようにすればそれが一番よく分析できるかは別の問題である）が、副詞の意味的構造については対象とするものが語彙的意味なのか、機能（つまり、どのように語が働くか）なのか、あるいは両方なのか、判然としないことが少なくない。その複雑さの程度は副詞によって異なる。本稿では、この点を考慮して、「意味／機能」とし、「意味」と「機能」それ自体の問題はこれ以上追求しないことにする。 (森本 1994 : 22)

森本（1994）は、「副詞の意味的構造については、対象となるものが語彙的意味なのか、機能なのか、あるいは両方なのか、判然としないことが少なくない。その複雑さの程度は副詞によって異なっている」とし、「意味」か「機能」かの問題を追及せず「意味／機能」とすると述べている。本研究では森本（1994）の説をとり「意味・機能」とする。

## 6.2 中心的意味とスキーマ的意味

本研究では副詞「やはり」の多義性を論じる。多義性の検討は靱山・深田（2003a）（2003b）、松本（2010）に従っている。多義語の分析で明らかにしなければならないこととして、靱山・深田（2003b）では「多義的別義の認定」、「プロトタイプの意味の認定」、「複数の意味の相互関係の明示」、「複数の意味すべてを総括するモデルの解明」の4点を挙げている。「プロトタイプの意味」「中心義」はほぼ同様の概念とある。

一般に「頭」「あげる」「高い」など多義性を持つ語は、認定された意味・機能の1つが中心的意味であり、そこから意味拡張のメカニズム（「メタファー」「メトニミー」「一般化」「特殊化」）に従って意味・機能が拡張し、多義性を持つことが多いが、副詞「やはり」では認定したいずれかの意味・機能が中心的意味であるとは考えにくい。松本（2010）は、Lindner（1982）の英語の前置詞 *out* の分析を引き、「異なる意味間の共通性を捉える意味を

スキーマと呼び、それを階層的に認定して語義のネットワークを構築する」ことを述べ、さらに日本語の格助詞「から」と「より」のスキーマを検討している。副詞「やはり」の多義性の有り様は、松本（2010）で検討している格助詞「から」と「より」に近いことから、「認定した全ての意味・機能に適合する抽象的な意味」であるスキーマ的意味を認定することとした。

### 6.3 前提

先行研究の中で副詞「やはり」は前提との関わりの中で論じられることが多いが、前提の定義は研究者によって異なりがある。金水・今仁（2000）では、前提はまず論理学・言語学の中で取り上げられたと述べ、前提が生じる表現として（31）に示した Fauconnier（1994）の例文を引き伝統的に語彙的・統語論的特徴から見た前提を「特定の文法形式によって生じる前提を文法的前提（grammatical presupposition）と呼ぶ」としている。

(31) 定記述 (definite description) : the person who won (勝った人は…)

叙述動詞 (fictive) : We regret that someone won. (我々は誰かが勝ったことを残念がっている)

分裂文 (cleft) : It was Mary who won. (勝ったのはメアリだ)

アスペクト表現 (aspectual) : Somebody stopped winning. (誰かが勝つのを止めた)

反復の副詞 (adverbial iterative) : Somebody won again. (誰かがまた勝った)

その他 Mary won, too. : (メアリも勝った) (金水・今仁 2000 : 216)

さらに「前提の定義を過不足なく定義することは大変困難である」と前置きし、前提の意味論的定義と語用論的定義を以下のように記述している。

(32) 意味論的定義 : P とその否定¬P がともに Q を含意するなら、P (および¬P) は Q を前提とする。

語用論的前提 : P の発話が健全に行われるためには、Q が旧情報でなければならないなら、Q は P の前提である。 (金水・今仁 2000 : 217)

前提についての記述は、他に西原（1988）で「発話が伝達手段として成立する以前に、膨大な背景的知識が話し手と聞き手の間で共有されている必要があり、その発話成立の必要条件を「前提」と呼ぶ」となされている。本研究では、前提に関する定義や説明は主に金水・今仁（2000）を援用し、語用論的前提の定義を「Pの発話が健全に行われるためには、Qが旧情報でなければならないなら、QはPの前提である」とした。

#### 6.4 呼応と共起

「呼応」と「共起」は、工藤（1980・2000）での「叙法副詞」の分類の観点の一つである。工藤（1980・2000）では、論の中で「呼応」と「共起」について以下のように記述している。

- (33) ……「共起」現象は、同じレベル（節 clause）に同居しているということだから、比較的簡単に形式化しうるだろう。ただし「同じレベル」かどうかは、結局は、意味抜きには不可能だろう……これに対して、「呼応」は、単なる同居ではなく、<むすびつき> であるから、つきつめていけば<意味>的關係である。

（工藤 1980 : 205）

- (34) 「共起」と「呼応」が基本的に（あるいはこの際、大多数の場合というべきか）並行関係にあることも、まぎれもない事実である。……「共起」はいわば量的現象、「呼応」は質的關係だが、質的なものが量的現象を生じるとともに、量的現象が質的变化をもたらすとも、一般的に言える。文の中での意味機能が、使用のくりかえしの中で、しだいに単語の意味機能として「やきつけられていく」のである。

（工藤 1980 : 205）

また、宮島（1983）は、「呼応」とは「文中である特定の語が用いられると、後にそれに応じた特定の文法形式が現れること」と定義している。「呼応」しない「評価副詞（注釈の副詞）」における制限は、大部分の語形とは共起するが、特定少数の語形とは共起しない、という形での制限ではないか」と述べている。さらに特定少数の形式とは共起しないという、「消極的な呼応」をも「呼応」と呼ぶべきかについて検討し、「共起制限」という表現は現象の記述である点から「注釈の副詞」は「共起表現・消極的な呼応」をするとしている。

本研究では「共起」と「呼応」の関係について、工藤（1980・2000）の「「共起」現象は、同じレベル（節 clause）に同居している」、「「呼応」は、単なる同居ではなく<むすびつき>である」、「「共起」は量的現象、「呼応」は質的關係だが、質的なものが量的現象を生じるとともに、量的現象が質的变化をもたらす」の説、宮島（1983）の「「呼応」とは「文中である特定の語が用いられると、後にそれに応じた特定の文法形式が現れること」であり、「「注釈の副詞」は「共起表現・消極的な呼応をする」の説をとる。

## 6.5 談話管理

本研究では対話場面の副詞「やはり」を調査対象にしていくが、その際命題に対しての話し手の心的態度の考察、聞き手の知識の想定、談話に特有な現象への考察が必要である。田窪は「名詞句のモダリティ」（1989）で「談話管理理論」について（35）のように言及している。

- (35) (言語活動の基本である情報の交換をする際)「言語使用者は思いついたことをコードに載せて発信したり、発された発話コードに基づいて解読したりする以上のことをしなければならない。対話・談話における情報の交換を「談話管理」と呼ぶ。その際、前もって相手の知識を想定しておく必要がある。……「相手の知識内に存在しない物事を述べる（新規の情報を伝える）」「相手の知識内に存在する物事を述べる（前提となり、話し手が導き出した帰結としての新規情報を知らせる・前提に注目させることにより、相手がその新規情報を帰結として導き出すことを助けることになる。」
- (田窪 1989 : 212)

と、「談話管理」を定義し、情報交換をする際に必要となる条件を述べている。さらに、談話管理者（談話管理に参加する話し手・聞き手）の主な仕事として「初期状態の値の設定」、「登場要素の管理」、「共通知識の確認：相手の知識に関する想定管理、言葉の使用法に関するメタ言語的な確認」、「信念の維持管理」の4点を挙げている。

また、田窪・金水は「複数の心的領域による談話管理」（1996）の中で

- (36) われわれは対話を行う際、発話の計画を立てたり、相手の発話の意図を推測する

ために、相手の知識について何らかの評価を行うのが普通である。この問題は、いわゆる他者の心の理論が言語形式に反映しているかいないかの問題として捉え直すことができる。(田窪・金水 1996 : 72)

としている。

本研究では、本章 4.1 節で述べた森山 (1988・1989) の「談話管理」の定義「談話における、発話内容や話し手・聞き手関係の調整」、田窪 (1989) の「対話・談話における情報の交換を「談話管理」と呼ぶ。その際、前もって相手の知識を想定しておく必要がある」、田窪 (1992) の「談話管理理論は、対話による情報交換により、知識がふえていたり、信念が変化したり、態度や行動が影響を受けたりといった、言語コミュニケーションの実態を動的に捉える理論を構成し、それにもとづいて談話構造における各言語間の差異を原理的に説明することを目標とする」、田窪・金水 (1996) の「対話を行う際、発話の計画を立てたり、相手の発話の意図を推測するために、相手の知識について何らかの評価を行うのが普通である」の知見に従う。副詞「やはり」を検討する際、「相手の発話意図を推測するための談話標識」であり、「他者の心の理論を反映している言語形式」である点を念頭に置く。

## 7. 第2章のまとめ

以上、本章は、副詞「やはり」の蓄積された先行研究を概観した。まず、副詞分類上の位置は、「陳述副詞」(山田 1936)、「誘導副詞」(渡辺 1971)であり、呼応がなく(工藤 1982)、発話時に話し手の主観を表す(森本 1994) 一群に属している副詞であることを確認した。次に副詞「やはり」の意味・機能に関する研究、談話における副詞の働きに関わる研究を調査し、様々な立場から副詞「やはり」の意味・機能の研究がなされているが、複数ある意味・機能間の関係を考察した研究は不足していること、ここまでの研究の多くは、内省・新聞・小説・シナリオといった書き言葉に近い用例を用いての研究であり、実証的データを用いた学習者の使用実態の調査と検討は十分でないことを観察した。

次の第3章と第4章は、本研究の基礎的研究として副詞「やはり」の多義性と母語話者の異形態の使用実態を論じる。第3章は「研究課題1) 副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので、かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか」に対応している章で、副詞「やはり」の多様な意味・機能を包

括的記述できる枠組みを検討する。。

### 第3章 副詞「やはり」の多義性考

#### 1. 第3章の目的

第2章では本研究の前提となる先行研究を概観し、副詞「やはり」研究の成果と残された課題を述べた。第3章と第4章は、本研究の基礎研究である副詞「やはり」の多義性と母語話者の異形態の使用実態を論じる。本章では副詞「やはり」の多義性を論じ、意味・機能の全体像を模索するが、副詞「やはり」を発話するに至るメカニズムと意味・機能の枠組みを提示することは、学習者にとっても母語話者にとっても意義があると考えられる。

以下、2節では、問題意識と本章の研究課題を述べ、3節では本章に関わる先行研究をまとめる。4節では、副詞「やはり」の多義的別義とスキーマ的意味の認定を行い、5節で多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるかを検討する。6節で結論を述べ、7節で本章をまとめる。

#### 2. 問題の所在

副詞「やはり」は、他に「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の異形態<sup>14</sup>を持ち、日本語母語話者の会話に頻出する副詞である。日常生活の中で私達が触れる「やはり」は、「緊急事態宣言、もう懲り懲りですよ。やっぱり（≡いろいろ考えて）店閉めるしかないかな（朝日新聞デジタル 20210710）<sup>15</sup>」「A:最高点は湯川君だって。B:やっぱり。（≡予期した通り）」（観察）「今でもやはり（≡依然として）、あの辺は静かな住宅地ですよ（観察）」など多義的であり、多様な意味・機能を持っていると指摘され（西原 1988, 森本 1994, 蓮沼 1998 など）、究明するための研究は多くなされてきている。

これまでの「やはり」の意味・機能に関する研究には、日本語から日本文化を論じた文献での言及、副詞の分類や体系化を目指した研究での意味・機能、「やはり」を研究対象に据えた研究における意味・機能と多岐にわたる。しかし、多くは多様な意味・機能の抽出と分

<sup>14</sup> 「やはり」の異形態には他に「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」があるが、文体的、位相的な差異を除けば意味・機能は変わらないと考える。第3章2節から6節では「やはり」に代表させる。

<sup>15</sup> 用例は先行研究、コーパス（コーパス名 会話 ID）、Web上の記事、観察などによる。

析であり、複数存在する「やはり」の意味・機能間の関係についての考察や、多義性<sup>16</sup>の検討は十分とは言えない。そこで、本稿では、次の3点を明らかにすることを目的として調査と検討を行い、「やはり」の多義性を論じ、意味・機能の全体像を模索したい。

課題1：「やはり」の多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか。

課題2：「やはり」の多様な意味・機能間の関係はどうなっているか。

課題3：前提命題との一致で説明できない「やはり」が存在する理由は何か。

本稿は、話し手の認識に関わる副詞「やはり」を解明し、日本語教育に資する情報を得ることを目的とする研究の一部に属している。日本語教育において、多様な意味・機能を持つ「やはり」の全体像を提示することは、日本語学習者の「やはり」の理解と産出に繋がると考える。

### 3. 本章に関わる先行研究

「やはり」の副詞分類上の位置は、従来の研究に従い「陳述副詞」（山田 1936：367-393）、「誘導副詞」（渡辺 1971：301-340）であり、呼応がなく（工藤 1982）、発話時に話し手の主観を表す（森本 1994）一群に属しているという立場で論を進めることとする。「やはり」の先行研究での議論は、中心的意味を検討した研究、多様な意味・機能の存在を検討した研究の2点にまとめられる。

#### 3.1 中心的意味を検討した研究

副詞の分類や体系化を目指した研究の中で、「やはり」の中心的意味に言及している研究には、工藤（1982）、川端（1983）、西原（1991）、森本（1994）がある。工藤（1982）では、「やはり」は呼応を持たない「下位叙法」に分類され、「案の定」「予想通り」と同様に「話し手の予想や世間の評判・常識などの異同」を表すとしている。川端（1983）は、「や

---

<sup>16</sup> 多義性の検討は靱山・深田（2003a）（2003b）、松本（2010）に従った。多義語の分析で明らかにしなければならないこととして、靱山・深田（2003b）では「多義的別義の認定」、「プロトタイプの意味の認定」、「複数の意味の相互関係の明示」、「複数の意味すべてを総括するモデルの解明」の4点を挙げている。「プロトタイプの意味」「中心義」はほぼ同様の概念とある。本稿では副詞「やはり」の多義性の有り様から「スキーマ的意味」を用いる。

「やはり」は、先行文に前提を持つ副詞であり、「案の定」「はたして」と同様に「予期や反予期」を持つとしている。西原（1991）では、「やはり」は「話者が発話以前に持っていた背景的認知体系が存在し、そこから生じる推論の妥当性が前提<sup>17</sup>となっている」と述べている。森本（1994）は、SSA 副詞<sup>18</sup>として 29 の副詞を取り上げ、緩やかな体系性を検討する中で「やはり」の基本的意味は「期待されていることの実現を示す」と述べている。副詞の体系化を目指した 1990 年代前半までの研究<sup>19</sup>では、「やはり」の中心的意味を「予期」「予測」であるとしている。

次に、加藤（1999）はここまでの「やはり」の研究史を整理し、「「やはり」論において単に見解が異なることを越えて、正反対ともとれる主張がある」とし、「やはり」の中心的意味に関して、前提命題との一致で説明できる用例と説明できない用例が存在していることを挙げている。論の中で、前提命題との一致をとる論として、金田一（1962）、大関（1993）の「常識や社会通念が前提」、板坂（1971）、西原（1988）の「話者の固定的観念が前提」、蓮沼（1998）の「「前提命題」と「当該命題」の適合の再確認」を挙げ、前提命題との一致をとる説は多くの研究者によって主張されてきたと述べている。それに対して、「やはり」は話し手が妥当だと考える判断を表す」として前提命題との一致で説明できないとする深尾（1995）の説と（1）の用例を引き、前提命題との一致を含意しない「やはり」の存在を認めている。

（1）盛り蕎麦をください。いや、やっぱり掛蕎麦にしてください。（深尾 1995 : 38）

加藤（1999）以降の研究で「前提命題と当該の命題の適合の再確認・確認」では説明できない説に言及している研究には曹（2001）、金谷（2017）がある。曹（2001）は、深尾（1995）、加藤（1999）の用例を発話を修正する機能を持つ「やはり」として挙げている。金谷（2017）は、一致説<sup>20</sup>に異義を唱え、「やはり」は発話の前の段階で「P でない可能性も考えたこと」を聞き手に伝達する談話標識であると主張する論を展開する際に前述の用例を根拠として

<sup>17</sup> 西原（1988）では「発話が伝達手段として成立する以前に背景的知識が話し手と聞き手の間で共有されている必要がある、その発話成立の必要条件を「前提」と呼ぶ」とある。

<sup>18</sup> 森本（1994）の用語。話し手の主観的・心理的態度を表す副詞（a speaker's subjective attitude）

<sup>19</sup> 近年では、渡邊（2012）がフランス語の副詞 *toujours* との比較から「やはり」を「ステレオタイプを再確認する副詞」として論じている。

<sup>20</sup> 金谷（2017）の用語。従来の「やはり」に対する研究者の見解を一致説と記述している。

挙げている。ここまでの中心的意味を考察した研究では、前提命題との一致で説明できない「やはり」との関係の言及は不足している。

### 3.2 多様な意味・機能の存在を検討した研究

本節では、先行研究と辞書類から抽出できる「やはり」の多様な意味・機能を整理する。

辞書は編集方針により掲載する語義や提出順などに差異はあるが、共時的な語義が網羅的に記述されていると考える。表 3-1 に『日本国語大辞典 第 2 版』(2001), 『基礎日本語辞典』(森田 1989)<sup>21</sup>, 『現代副詞用法辞典』(飛田・浅田 1994) での記述をまとめた。本稿では、語義の提出順は便宜的に『日本国語大辞典 第 2 版』(2001) に従った。

『日本国語大辞典 第 2 版』(2001) では、現在副詞「やはり」の意味としてはほとんど用いられていない①「静かにじっとしているさまを表す語」と、②「事態・状況が変化していないさま：同様」、③「さまざまに考えられても、またはさまざまな経過を経ても、結局は同じ結果、同じ事態に終結することを認める気持ちを表す語：同様の帰結」、④「予期した通りの事態であるさま：予期」を立てている。

森田 (1989) 『基礎日本語辞典』では、副詞「やはり」の意味・機能を「現実の状況が、話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる」とし、現実の状況と比較する「話し手の観念内にある基準」により、⑤過去の状態を基準に据えた「やはり」、⑥他の状況を基準に据えた「やはり」、⑦現状が本来の姿であるという認識を基準に据えた「やはり」、⑧外在する規則を基準に据えた「やはり」、⑨話し手が心に描いた状態を基準に据えた「やはり」の 5 種類に分類している。これらは、『日本国語大辞典 第 2 版』の②「同様」と⑤⑥、③「同様の帰結」と⑦⑧、④「予期」と⑨は対応していると考えられ、森田 (1989) の分類は、『日本国語大辞典 第 2 版』①を除いた記述に従っている。

---

<sup>21</sup> 森田 (1989) は第 2 章 3.1 節でも述べたが、本節では『日本国語大辞典 第 2 版』(2001), 『現代副詞用法辞典』(1994) との比較をするために再掲した。

表 3-1 : 辞書類での副詞「やはり」の記述

	『日本国語大辞典 第2版』 (2001) 日本国語大辞典 第二版編集委員会	『基礎日本語辞典』(1989) 森田良行	『現代副詞用法辞典』(1994) 飛田良文・浅田秀子	
—	①動かさないでそのままにしておくさま。静かにじっとしているさまを表す語。	—	—	
同様	②事態・状況が変化していないさま。同じであるさまを表す語⇨「依然として」	現実の状況が、話し手の観念内にある基準と差がない場合に用いる	⑤過去の状態を基準⇨「相変わらず」	⑩現在の状態がこれまでと変化せずに続いている様子を表す⇨「依然として」「相変わらず」
			⑥他の状況を基準⇨「同様に」「同じく」	⑪同様である様子を表す⇨「また」
同様の帰結	③さまざまに考えられても、またはさまざまな経過を経ても、結局は同じ結果、同じ事態に終結することを認める気持ちを表す語		⑦現状が本来の姿であるという認識を基準	⑫価値を再認識する様子を表す⇨「さすが」「なんといっても」
			⑧外在する規則を基準(社会通念・法律・法則)	—
予期	④予期した通りの事態であるさま。順当な事態であるさまを表す語		⑨話し手が心に描いた状態を基準⇨「案の定」「期待通り」	⑬予想通りの結果になる様子を表す⇨「案の定」「はたして」
逡巡	③さまざまに考えられても、またはさまざまな経過を経ても、結局は同じ結果、同じ事態に終結することを認める気持ちを表す語	—	⑭改めて考え直す様子を表す。話者が自分の中で様々のことを反芻した結果、到達した結論を述べる	自分に向かって言う場合 相手に対して答える場合。熟考された結果。婉曲に述べる。 配慮が暗示 会話途中で用いられる間投詞の用法

飛田・浅田（1994）『現代副詞用法辞典』では、『日本国語大辞典 第2版』の②「同様」に対応する⑩「現在の状態がこれまでと変化せずに続いている様子を表す」と⑪「同様である様子」、③「同様の帰結」に対応する⑫「価値を再認識する様子を表す」、③「予期」に対応する⑬「予想通りの結果になる様子を表す」を提示し、それに加えて、⑭「改めて考え直す様子を表す。日常会話中心の用法。話者が自分の中で様々のことを反芻した結果、到達した一定の結論を述べる時に用いる」を立てている。さらに⑭を「自分に向って言う場合」「相手に対して答える場合」「会話の途中で用いられている間投詞の用法」に3分類している。このことは、『現代副詞用法辞典』が「適切な用例から語義を抽出して帰納することによって、現代語の意味・用法の実態を客観的に記述する」、「現代語に特有の意味・用法は積極的に取り上げる」という編集方針のもと編まれていることに起因している。この中で、相手に対して答える場合は「熟考された結果の発現であることを強調するニュアンスになり、断定を和らげて婉曲に述べる。断定をして孤立化することへの怖れと、周囲の人間への配慮が暗示される表現である」と指摘している。

「やはり」の多様な意味・機能を整理した研究である蓮沼（1998）では、「やはり」を「表現類型との共起関係が自由な点や多様な意味・用法を持つ点で、副詞の下位分類のうちの単独のカテゴリーに収まりきらない多義的かつ多機能に用いられる副詞」と捉え、多様な用法の解明を試みている。その中で、「やはり」には基本機能と談話機能があると指摘している。森田（1989）の説を踏襲した基本機能は「前提命題と当該の命題の適合の再確認・確認を行うもの」と捉えることができるとし、森田（1989）の「依然として」「同様に」「思った通り」の機能を提示している。談話機能は「やはり」の基本機能が談話において形骸化したものであるとし、「熟慮した結果」（森本 1994）として機能するとしている。さらに、板坂（1971）の説「方略的に熟考の姿勢を装う」を引き、「独断の緩和」「他者との協調的態度」などを示す目的での使用もあるとしている。また、中田（1991）と同様に「やはり」がインタビューや対談に顕著に現れる現象を挙げ、発話内容の吟味や適切な表現の選択など、話者が談話の編集を行う際の「間つなぎ」として機能する「やはり」の存在を指摘している。

蓮沼以外で談話における「やはり」に言及している研究には、森山（1989）、西原（1991）、森本（1994）がある。森山（1989）は、談話管理のシステムの一つとして「やはり」は新情報導入類の予測性のあるタイプであるとしている。西原（1991）は「「やはり」は語用論的考察が必要」と述べ、森本（1994）は「到達した結論が状況について熟慮した結果であることを示すシグナルとして機能」と指摘している。ここまでの研究で、「やは

り」の意味・機能への言及が多岐に渡っていることは確認できたが、「やはり」に多様な意味・機能が生じる理由、蓮沼（1998）の「やはり」に談話機能が生じる理由の議論は残されている。

#### 4. 「やはり」の多義的別義とスキーマ的意味の認定

##### 4.1 「やはり」の多義的別義の認定

まず、「やはり」の意味・機能（個別義）として、先行研究と辞書類から抽出した意味・機能を表 3-2 にまとめた。

表 3-2：先行研究と辞書類で言及されている「やはり」の意味・機能

用例	意味・機能(言い換え)	辞書*	先行研究
ストーブをつけたが、やはり寒い。	≒「依然として」「相変わらず」	【日本】【森田】 【飛田・浅田】	深尾(1995), 蓮沼(1998), 加藤(1999)
彼もやはり国家試験を目指している。	≒「同様に」「同じく」「もまた」	【日本】【森田】 【飛田・浅田】	深尾(1995), 蓮沼(1998), 加藤(1999)
利口そうでもやはり子供は子供だ。／やはり横綱は強い。	≒「結局」「さすが」「同じ結果に帰結」	【日本】【森田】 【飛田・浅田】	蓮沼(1998), 加藤(1999), 渡邊(2012)
待ち合わせの時間に、やはり彼は遅れて来た。	≒「案の定」「はたして」「予期した通り」	【日本】【森田】 【飛田・浅田】	工藤(1982), 川端(1983), 森山(1989), 西原(1991), 森本(1994), 深尾(1995), 蓮沼(1998), 加藤(1999), 渡邊(2012)
旅行もいいけど、やっぱり一番いいのは家だよ。	≒「熟慮した結果」「独断の緩和」「協調的態度」	【飛田・浅田】	板坂(1971), 西原(1991), 森本(1994), 蓮沼(1998), 加藤(1999)
車で行こう、ん、やっぱり新幹線にしよう。	≒「じゃなくて」	【飛田・浅田】	深尾(1995), 加藤(1999), 曹(2001), 金谷(2017)
そうねー やっぱりー、あの、えー、なんてんですかね。	≒「談話の編集を行う際の「間つなぎ」」	【飛田・浅田】	中田(1991), 蓮沼(1998), 金谷(2017)

\*【日本】『日本国語大辞典 第2版』(2001), 【森田】『基礎日本語辞典』(1989), 【飛田・浅田】『現代副詞用法辞典』(1994)

その結果、「やはり」には「依然として、相変わらず」「同様に、同じく」「結局、さすがに、同じ結果に帰着」「案の定、予期した通り」「熟慮した結果、独断の緩和、協調的態度」「～じゃなくて」「談話の編集を行う際の「間つなぎ」」の意味・機能が存在することが確認できた。

## 4.2 スキーマ的意味の抽出と認定

「頭」「あげる」「高い」など多義性を持つ語は、認定された意味・機能の1つが中心的意味であり、そこから意味拡張のメカニズム<sup>22</sup>に従って意味・機能が拡張し、多義性を持つことが多いが、「やはり」では認定したいずれかの意味・機能が中心的意味であるとは考えにくい。「やはり」の多義性の有り様は、松本（2010）<sup>23</sup>で検討している格助詞「から」と「より」に近いことから、「認定した全ての意味・機能に適合する抽象的な意味」であるスキーマ的意味を認定することとした。

前節で確認した「やはり」の用例を検討し、スキーマ的意味の抽出をする。

- (2) a. ストーブをつけたが、やはり寒い。
- b. 彼もやはり国家試験を目指している。
- c. 利口そうでもやはり子供は子供だ。
- d. 約束の時間にやはり彼は遅れてきた。
- e. 旅行もいいけど、やっぱり、一番いいのは家だよ。
- f. 車で行こう、ん、やっぱり新幹線にしよう。
- g. そうねー やっぱりー、あの、えー、なんてんですかね。

「a. ストーブをつけたが、やはり寒い」は、ストーブをつける以前の状況の情報が話し手の中にあり、ストーブをつけた後の新情報と照合して「やはり（≡依然として）寒い」と発話している。「b. 彼もやはり国家試験を目指している」は、彼の他に国家試験を目指してい

---

<sup>22</sup> 靱山・深田（2003a）では「メタファー」「メトニミー」「一般化」「特殊化」を挙げている。

<sup>23</sup> 松本（2010）は、Lindner（1982）の英語の前置詞 out の分析を引き、「異なる意味間の共通性を捉える意味をスキーマと呼び、それを階層的に認定して語義のネットワークを構築する」ことを述べ、さらに日本語の格助詞「から」と「より」のスキーマを検討している。

る人の情報を持っている話し手が、彼が国家試験を目指しているという新情報と照合して「やはり（≒同様に）目指している」と発話している。「c. 利口そうでもやはり子供は子供だ」は、子供の典型の知識と子供の典型に反する対象の子供の情報が話し手の中にあり、新情報（子供の典型に近い振る舞い）と照合し「やはり（≒いろいろあるが結局）子供だ」と発話している。「d. 約束の時間にやはり彼は遅れてきた」は、彼は約束の時間に来るか否かを想定し、遅れて来るを選ぶ過程があり、その後に新情報と照合して「やはり（≒予想通り）遅れて来た」と発話している。次に、「e. 旅行もいいけど、やっぱり、一番いいのは家だよ」は、話し手が意見や見解を述べる際、選択肢が複数あり逡巡したこと、その中の1つを選択する過程を経たうえで「やっぱり（≒熟考した結果）家がいい」と発話している。「f. 車で行こう、ん、やっぱり新幹線にしよう」は、実時間の中で直面する判断で、複数の選択肢の中から逡巡して選択した車をキャンセルして、今新幹線を選択したことを「車、やっぱり（≒じゃなくて）新幹線で」と会話の相手を意識しないで宣言している。「g. そうねー やっぱり、あの、えー、なんてんですかね」は、実時間の中で進行する対話で、発言内容の吟味や適切な表現の選択など、発話の編集を行う際に用いられ、「あの」「えー」などのフィラーと共に共起して出現している。発話者が「やっぱり（≒妥当と考える内容や表現に一致するものを模索中であること）」を対話の相手に伝える機能を有している。

以上の検討から、本稿では、森田（1989）を援用して「やはり」のスキーマ的意味の認定を試みた。（3）にスキーマ的意味、（4）に多様な意味・機能を示した。

（3）「やはり」は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」というスキーマ的意味を持つ。「概念内の何と照合するか」によって「やはり」に異なった意味・機能が生じる。

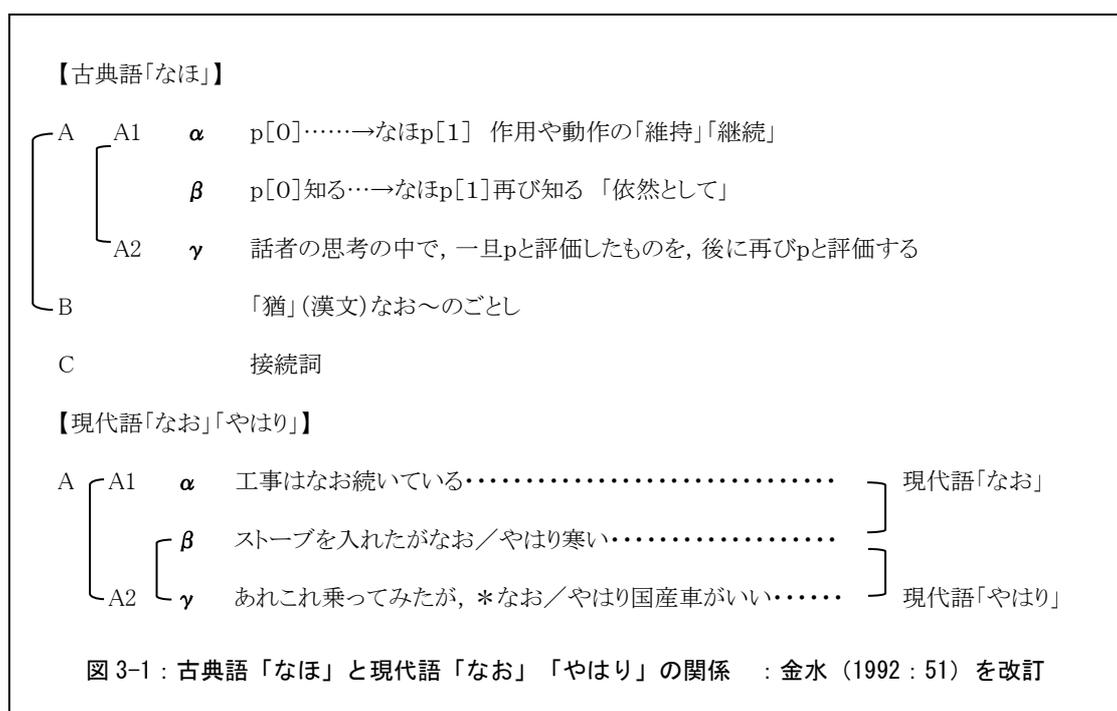
（4）「やはり」には、「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」「III 熟考した結果」「IV 他の選択肢を排除」「V 形式・内容を選択途中」の意味・機能が存在する。

## 5. 多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか

本節では、「やはり」の多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるのかを検討し、多様な意味・機能間の関係を明らかにする。検討に先だって、金水（1992）の知見を概観する。

### 5.1 金水（1992）の考察の検討

金水（1992）は、古典語の「なほ」と現代語の「なお」「やはり」の用法を前提命題の観点から考察している。論の中で、古典語「なほ」と現代語の「なお」「やはり」の関係を示した記載を図 3-1 に引用した。



金水（1992）は、「古典語の「なほ」の中心的意味は「それ以前に同一命題が肯定されていた」という前提の下に、再び当該の命題を肯定するもの」とありとし、「それ以前」の意味の発生時によって「 $\alpha$ ：外界の対象の状態・動作等の発生時」「 $\beta$ ：外界の状態の知覚・認識時」「 $\gamma$ ：主観的な判断を下した時点」の3種類に下位区分できると述べている。次に、

「現代語の「なお」は  $\alpha$ ,  $\beta$  の用法は持つが,  $\gamma$  は後発の語彙「やはり」に譲り渡している」としている。「やはり」が担っているのは, 「 $\beta$ : p [0] 知る...→やはり p [1] 再び知る—依然として」と「 $\gamma$ : 話者の思考の中で, 一旦 p と評価したものを, 後に再び p と評価する」であり,  $\gamma$  は「「p だと思ったが, <やっぱり> p だった」という場合, 何らかの意味での時間的關係性に基づく指標, [0] と [1] の間に「ひょっとしたら, p ではないかもしれない」と思いめぐらす過程があったと考えてよい」と述べている。

## 5.2 金水 (1992) と蓮沼 (1998) の指摘を検討する

金水 (1992) では  $\beta$  系と  $\gamma$  系の存在, 蓮沼 (1998) では「基本機能」と「談話機能」の存在が指摘されている。まず, なぜ「やはり」に  $\beta$  系 (基本機能) と  $\gamma$  系 (談話機能) が生じるのかについて考えてみたい。

表 3-3 に金水 (1992) を援用した「やはり」の意味・機能の分類を示した。

表 3-3: 金水 (1992) を援用した「やはり」の意味・機能の分類

スキーマ的意味	「やはり」の担う $\beta$ , $\gamma$	働く領域	照合	抽出された意味・機能
話し手の概念内の何らかのものと照合し, 一致したことを表す	$\beta$ : p[0]知る...→ やはりp[1]再び知る	知覚・知識 = 事実由来 の認識	外界の 新情報	I-1 依然として
				I-2 同様に
				I-3 同じ結果に帰結
				II 予期した通り
	$\gamma$ : (話者の思考の中) 一旦pと評価したものを, 後に再びpと評価する	評価・判断 = 事実由来 の認識	話し手内の 判断・評価	III 熟考した結果
IV 他の選択肢を排除				
V 形式・内容を選択途中				

金水 (1992) の  $\beta$  系は「外界の状態の知覚・認識時」の話し手の「知覚・知識」に関わっていると考えられ, 「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」が属している。これらが照合する「何らかのもの」は話し手の概念内の知識一般や個人の体験的知識であり, それと話し手の外界からもたらされる新情報である。一方,  $\gamma$  系は「主観的な判断を下した時点」の話し手の「判断・評価」に関わっていると考えられ, 「III 熟考した結果」「IV 他の選択肢を排除」「V 形式・内容を選択途中」が属している。これらが

照合する（照合しようとしている）「何らかのもの」は、話し手が一旦下した判断・評価であり、発話に際して再び下す判断・評価である。

「やはり」に $\beta$ 系（基本機能）と $\gamma$ 系（談話機能）が生じる理由は、①「やはり」を発話するに至る過程（話し手が心の中で認識したり判断した事柄や情報と実時間の中で提示される新情報を照合し、一致する過程を経て発話される）があること、②「やはり」が働く領域が事実由来の認識と思考由来の認識の両領域にわたっていることに起因すると考える。すなわち、「やはり」を発話するに至る過程は、「知覚・知識」に関わる $\beta$ 系の「やはり」では「概念内の何らかのものと照合し、一致したこと」の確認が外部情報との事実認識であるため瞬時に行われるのに対し、「判断・評価」に関わる $\gamma$ 系の「やはり」には、「再び話し手の判断・評価を認識し、かつ肯定する」前の段階に「一旦判断を下す」「異なる判断があるのではないかと逡巡する」過程が介在する。それにより、事実由来の認識と思考由来の認識では発話に至る過程に違いが生じることから、 $\beta$ 系と $\gamma$ 系の「やはり」が存在すると考える。

### 5.3 多様な意味・機能はスキーマ的意味からどのように生じるか

本節では、「やはり」が照合する「概念内の何らかのもの」の内実を検討することを通して、「知覚・知識＝事実由来の認識」の領域で働く「やはり」に「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」が、「判断・評価＝思考由来の認識」の領域で働く「やはり」に「III 熟考した結果」「IV 他の選択肢を排除」「V 形式・内容を選択途中」の意味・機能がどのように生じるかを検討する。

まず、「知覚・知識＝事実由来の認識」の領域で働く「やはり」の用例「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」を（5）から（7）に、「II 予期した通り」を（8）から（10）に示す。

（5）（旧友に再会して）おう、こんなところで奇遇だなあ。やっぱりあの会社に勤めてんのか。 （飛田・浅田 1994：566）

（6）……それで文系の部活でもやっぱりそうゆう体力作りするから、二キロ痩せたとかゆってたわ。 （CEJC：K004\_001）

（7）やっぱりキリンですね、飲みごたえ、違うね。 （渡邊 2012：181）

「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」は想起・認識した話し手の観念内の基準と新情報を照合し、一致を確認した際発話される。(5)は「I-1 依然として」の用例で、「以前に勤めていた会社」という過去の情報との照合、(6)は「I-2 同様に」の用例で、話者の持つ外界の「運動系の部活は体力作りをする」という情報との照合であり、想起する情報は単数である。(7)は「I-3 同じ結果に帰結」の用例で、「麒麟ビール」と「麒麟ビール以外のビール」の情報を想起し「麒麟ビールは他のビールよりおいしい」という事前の知識と、「今飲んでいる麒麟ビールが非常においしい」という情報を照合している。

(8) 彼はやはり犯人ではなかった。元恋人が真犯人だった。

(9) 「でもありますよ、タクシーとかで遠回り、遠回りされたり」

「え？やっぱり？」

(BTSJ : JF179)

(10) はげしい雨のなか、娘がずぶぬれになって帰宅した。その5分後、息子もずぶぬれになって帰ってきたのを見て、わたしは「やっぱり!」という。

(渡邊 2012 : 182)

「II 予期した通り」は未然の事態や結果が分かっていない出来事に対して予想される複数の候補から1つを選択し、その後に新情報と照合して一致する場合に発話される。話し手は複数の想定を比較して1つを選択しているが、「II 予期した通り」ではその過程で逡巡はない。(8)は「犯人は彼か否か」から「彼ではない」を選んだ話し手が、その後に新情報と照合して一致する場合、(9)は「旅行先で嫌だったこと」という問いの回答として「タクシーで遠回りされる」も想定していた話し手の応答での用例である。(10)は「息子はずぶぬれで帰る」を予期していた話し手の独り言となっている。

「知覚・知識＝事実由来の認識」の領域で働く「やはり」で「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」と「II 予期した通り」の違いが生じるのは、話し手の期待感によると考える。話し手の思考の中に原認識(想定)と対立認識(想定に反するもの)があり、原認識と対立認識のどちらに期待を持っているかで、原認識(想定)が対立認識(想定に反するもの)より強い場合は「II 予期した通り」に、反対に対立認識(想定に反するもの)が原認識(想定)より強い場合は「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」となる。

次に、「判断・評価＝思考由来の認識」の領域で働く「やはり」で、「III 熟考した結果」の用例を(11)から(15)に、「IV 他の選択肢を排除」の用例を(16)から(18)に、「V 形式・内容を選択途中」の用例を(19) (20)に示す。

- (11) インドもすごい楽しかったよ，でも，やっぱり，一番いいのはタイなんだよ  
(CEJC : K002\_016)
- (12) やはり，今日は早退させていただきたいのですが， (加藤 1999 : 170)
- (13) 「ちょっと寄ってお茶でも飲んでいきませんか」  
「やっぱりやめときます」 (蓮沼 1998 : 140)
- (14) せっかくいろいろ相談に乗ってもらって申し訳ないんですが，やっぱりこっち  
にしておきます。 (加藤 1999 : 168)
- (15) (ブログで) 夏休みといえばやっぱりジブリ (shana.mama20220818)

「III 熟考した結果」は、意見や見解を述べる際、選択肢が複数あり逡巡してその中の 1 つを選択したことを含意して発話される。実際に話し手が様々のことを反芻した結果、到達した一定の結論を述べるときに発話されることも、熟考の姿勢を装うことによって聞き手に対する配慮や自分の判断の妥当性を示す目的で方略的に用いられることもある。(11)は話し手の意見を述べる際、(12)は許可願いや宣言をする際に熟考した結果であることを表している。(13)は相手の意向に沿えない応答、(14)は一旦選択した結果を取り消す場合、言下に否定せず逡巡することにより、他者への配慮を含意している。(15)は広告文特有の「やはり」で、架空の世界知識をもとに、暗に世間の評価が確立していることを含意し、表現された判断の妥当性を示している。

- (16) 紅茶。あ、やっぱり，コーヒーにします。 (金谷 2017 : 189)
- (17) これ (動物の遊具) 乗る，やっぱり，ブランコ乗る。
- (18) (旅行) 行こうかな。やっぱ，やーめた。 (飛田・浅田 1994 : 567)

「IV 他の選択肢を排除」は、実時間の中で直面する判断で、複数の選択肢の中から他の選択肢を排除したことを含意して発話される。(16)は、レストランで飲み物を選択することに直面した話し手が、紅茶の選択をキャンセルして、今、コーヒーを選んだことを宣言し

ている。(17) (18) は聞き手を必要としない独り言の用例 (発話することも可能) で、(17) は幼児が動物の遊具の選択をキャンセルして、今ブランコを選んだこと、(18) は旅行に行くか否か逡巡して、行かないことを今決定したことを言語化している。

(19) あの、ちょっと、やっぱり、なんかこう、あっち寄りすぎて、ね、アメリカの匂いがふんぷんする (CEJC : T002\_019)

(20) なんか、やっぱり、ちょっと、こう、なんてんですかね。(中田 1991 : 91)

「V 形式・内容を選択途中」は、実時間の中で進行する対話で、発言内容の吟味や適切な表現の選択など、発話の編集を行う際に、心内を検索途中であることを含意して発話される。(19) は同僚と「ローフード」を話題として会話する際に、(20) は意見を述べる際に出現している「やはり」である。フィラーに近い使用であるため、独り言であるか否かは判断できない。

さらに、前提命題との一致で説明できない思考由来の領域で働く「IV 他の選択肢を排除」と「V 形式・内容を選択途中」の「やはり」について言及したい。図 3-2 に「判断・評価＝思考由来の認識」の領域で働く「やはり」を発話する過程を示した。

想起したもの	「やはり」を発話する過程	結果
単数：揺るぎ無し →		「やはり」を用いない
複数：揺るぎ有り	逡巡→他の候補を削除→照合→一致しない→	「やはり」を用いない
	逡巡→他の候補を削除→照合→一致 (聞き手配慮) →	III 熟考した結果
	逡巡→他の候補を削除 (話し手目当て) →	IV 他の選択肢を排除
不明：揺るぎ有り	検索中 (話し手目当て・聞き手配慮) →	V 形式・内容を選択途中

図 3-2 : 思考由来認識の領域で働く「やはり」を発話する過程

「III 熟考した結果」と「IV 他の選択肢を排除」は「やはり」を発話する過程で、複数の候補を想起し逡巡している点は同様である。しかし、「III 熟考した結果」が逡巡した結果、1つを選択し、熟考した結果として聞き手に伝えるために「やはり」を発話しているのに対

して、「IV 他の選択肢を排除」は他の選択肢を排除して、今、1つを選択したことを発話者自身に向けて宣言している点が異なる。「III 熟考した結果」が聞き手目当ての「やはり」であるのに対し、「IV 他の選択肢を排除」は聞き手への伝達を意図しない「やはり」であり、「前提命題と一致」というスキーマ的意味に重きを置かない「やはり」である。「V 形式・内容を選択途中」は、発話するために心内を検索しているが、想起する内容や表現が定まらず、検討をしているという話し手の思考過程が言語化したフィラー的な使用の「やはり」である。「V 形式・内容を選択途中」も「IV 他の選択肢を排除」と同様に、聞き手への伝達を意図しない「やはり」である。これらの前提命題との一致で説明できない「やはり」は、判断の過程も含めて表現される談話において、逡巡に重きが置かれた結果、スキーマの意味が希薄化したため生じると考える。

#### 5.4 「やはり」の意味・機能を包括的に提示する枠組み

ここまで「やはり」が発話に至る場合を対象に論じてきたが、圧倒的に多くの「やはり」を発話するに至らない場合が存在している。それは、話し手の概念内に何らかのものが無い場合、事実由来の認識の領域で働く「やはり」では対象について情報や知識を持たない場合、思考由来の認識の領域で働く「やはり」では対象についての判断や評価に揺るぎがなく逡巡しない場合である。また、外界の新情報、話し手内の判断・評価と照合して、一致が認められない場合も「やはり」を発話するに至らない。

「やはり」の多様な意味・機能は、話し手が照合する概念内の「何らかのもの」の内実と、「やはり」を発話するに至る過程の違いにより生じると考える。そこで、「やはり」が働く領域、概念内の「何らかのもの」の種類、照合する新情報が外界からもたらされるものか話し手の内部の情報か、逡巡を伴うか、逡巡の強さはどうか、他者に配慮した発話か、話し手の思考の中で他の選択肢を排除したことを言語化するか、選択を続けるかを観点として「やはり」を発話に至る過程に従って整理し、表 3-4 にまとめる。

表 3-4 : 発話に至る過程から考えた「やはり」の意味・機能

領域	意味・機能	肯定されていた命題	照合する命題	発話「やはり」	逡巡	配慮
知覚 ・ 知識	I-1:依然として	単数の情報を想起(時)	新情報を認識	照合→一致	—	—
	I-2:同様に	単数の情報を想起(他)	新情報を認識	照合→一致	—	—
	I-3:同じ結果に帰結	複数の情報を想起	新情報を認識	照合→一致	—	—
判断 ・ 評価	II:予期した通り	複数の判断・評価を想定 →1つを選択	新情報を認識	照合→一致	—	—
	III:熟考した結果	複数の判断・評価を想定 →1つを選択	選択した判断 ・評価を想起	照合→一致	した	有
	IV:他の選択肢を排除	複数の判断・評価を想定 →1つを選択	選択した判断 ・評価を想起	他の選択肢 を排除(今)	今終了	—
	V:形式・内容を選択途中	不明→検索途中	なし	選択途中	逡巡中	有

## 6. 結論

研究課題に従って本章をまとめる。

課題 1 : 「やはり」の多様な意味・機能は中心的意味からどのように生じるか。

「やはり」は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」という中心的意味・スキーマ的意味を持つ。「やはり」が照合する「概念内の何らかのもの」の内実により異なった意味・機能が生じる。

課題 2 : 「やはり」の多様な意味・機能間の関係はどうなっているか。

「やはり」は事実由来の認識と思考由来の認識の両領域で働く副詞であり、事実由来の認識に関わる「やはり」は、話し手の原認識(想定)と対立認識(想定に反するもの)に対する期待の強弱により「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」の違いが生じる。思考由来の認識に関わる「やはり」は、話し手の信念の強さに由来する逡巡の度合いの強弱と、判断過程のどの段階で発話するかにより「III 熟考した

結果」 「IV 他の選択肢を排除」 「V 形式・内容を選択途中」の違が生じる。「やはり」の意味・機能を包括的に提示する枠組みとして表3を提案した。

課題3：前提命題との一致で説明できない「やはり」が存在する理由は何か。

前提命題との一致では説明できない思考由来の「やはり」は、発話するに至る過程が存在すること、判断の過程も含めて表現される談話において、逡巡に重きが置かれた結果、スキーマ的意味が希薄化したため生じる。

## 7. 第3章のまとめ

第3章は、「研究課題1）副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので、かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか」に対応する章で、本研究の基礎研究の一つ副詞「やはり」の多義性を検討し、複数存在する意味・機能の全体像を整理した。

次の第4章は、「研究課題2）副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けしているか」に対応している章で、母語話者の副詞「やはり」の異形態の使用実態を調査・検討する。

## 第4章 副詞「やはり」の異形態についての一考察

### 1. 第4章の目的

第2章で本研究の前提となる先行研究を概観し、副詞「やはり」研究の成果と残された課題を述べ、第3章では本研究の基礎研究の一つである副詞「やはり」の多義性について論じた。第4章では、もう一つの基礎研究である母語話者の副詞「やはり」の異形態の使用実態をCEJCを用いて調査・検討し、さらに本研究の位置付けを述べる。

以下、2節では、問題意識と本章の研究課題を述べ、3節では本章に関わる先行研究をまとめる。4節では、調査の概要を述べ、5節で母語話者が「やっぱり」と「やっぱ」を使い分けているかに言及し、6節で結論と今後の課題を述べる。さらに、7節で第3章と第4章をまとめ本研究の位置付けを記す。8節は本章のまとめである。

### 2. 問題の所在

副詞「やはり」は、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の異形態を持ち、日本語母語話者（以下、母語話者）の会話に頻出する副詞である。この副詞「やはり」の4つの形態はいずれかの形態に統合されることなく並行して用いられているが、ここまでの研究では、「位相的な差異を除けば、これらの意味・機能は「やはり」に準じて扱ってよい」（蓮沼 1998）とされ、『現代副詞用法辞典』（飛田・浅田 1995）ではその使い分けに関して「「やはり」は標準的な表現で、公式の発言中心に用いられる。「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の順にくだけた表現となる。特に「やっぱし」「やっぱ」は若い人中心に用いられる」と記述されている。「やはり」と他の3形態「やっぱり」「やっぱ」「やっぱし」に関する調査、出現数に着目した詳細な検証はなされているが、使用した人数に関する調査や検討は十分ではない。

そこで、本稿では『日本語日常会話コーパス（Corpus of Everyday Japanese Conversation）』（以下、CEJC）のデータを用いて、副詞「やはり」の4つの形態を使用した人に着目して調査し、口語で多く用いられる「やっぱり」「やっぱ」について検討する。

### 3. 本章に関わる先行研究

#### 3.1 副詞「やはり」の意味・機能に関する研究

副詞「やはり」の副詞分類上の位置は、従来の研究に従い「陳述副詞」（山田 1936）、「誘導副詞」（渡辺 1971）であり、呼応がなく（工藤 1982）、発話時に話し手の主観を表す（森本 1994）一群に属しているという立場で論を進めることとする。次に、副詞「やはり」の多様な意味・機能については、多くの研究の蓄積の中から、森田（1989）、森山（1989）、金水（1992）、深尾（1995）、蓮沼（1998）、加藤（1999）を援用し、本稿においては、（1）（2）とし、多様な意味・機能を表 4-1 のように捉えることとする。

- （1）副詞「やはり」は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」というスキーマ的意味を持つ。「概念内の何と照合するか」によって副詞「やはり」に異なった意味・機能が生じる。
- （2）副詞「やはり」は、知覚・知識の領域と判断・領域の領域で働く。知覚・知識の領域で働く副詞「やはり」からは「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」が、判断・領域の領域で働く副詞「やはり」からは「III 熟考した結果」「IV 他の選択肢を排除」「V 形式・内容を選択途中」が生じる。

表 4-1：本稿における副詞「やはり」の意味・機能

働く領域	照合	意味・機能	用例
知覚・知識 事実由来の認識	外界の 新情報	I-1:依然として	ストーブをつけたが、 <u>やはり</u> 寒い。
		I-2:同様に	彼も <u>やはり</u> 国家試験を目指している。
		I-3:同じ結果に帰結	利口そうでも <u>やはり</u> 子供は子供だ
		II:予期した通り	待ち合わせの時間に、 <u>やはり</u> 彼は遅れた。
評価・判断 思考由来の認識	話し手内の 評価や判断	III:熟考した結果	<u>やっぱり</u> 私は留学したい。
		IV:他の選択肢を排除	車で行こうかな。ん、 <u>やっぱり</u> 電車にしよう。
		V:形式・内容を選択途中	そーっすねー <u>やっぱり</u> 、あの、まあ、……

### 3.2 副詞「やはり」の異形態に関わる研究

「やはり」の異形態に関わる研究としては、小磯（2019）と山崎（2019a）がある。小磯（2019）では、『日本語日常会話コーパス』（CEJC）を用いた研究の可能性が述べられている。その中で「やはり」の4つの形態「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」に着目し、出現率を『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）間で出現数の割合を比較している。その結果、4形態の出現率は書き言葉か話し言葉かによって異なり、さらに書き言葉の場合はレジスターが何か、話し言葉の場合は独話か対話かによって異なることを指摘している。日常場面で自然に生じる会話を記録したCEJCでは、「やっぱり」「やっぱ」の使用が多く「やはり」は観察されなかった<sup>24</sup>こと、話者の年代による傾向では、10代、20代は「やっぱ」の使用率が高く、年齢が上がるに従い「やっぱり」の使用率が高くなることが報告されている。

山崎（2019a）は、国立国語研究所のコーパス開発センターで公開しているコーパスの中でWeb検索ツール「中納言」に搭載されているコーパスの統計情報を紹介する論の中で、小磯（2019）でも論じられていた書き言葉における頻度分布をレジスターと語形により詳細にまとめている。BCCWJにおける各レジスター別の4つの形態の出現に関して、「法律」では副詞「やはり」が一例も出現していないこと、「白書」では「ヤハリ」のみ出現していること、「国会会議録」では、「ヤハリ」が「ヤッパリ」の4.8倍出現していると述べている。また、「ヤハリ」と「ヤッパリ」については、「新聞」「出版・書籍」「ベストセラー」「図書館・書籍」では「ヤハリ」は「ヤッパリ」の2倍程度出現しているのに対し、「知恵袋」「雑誌」「韻文」「ブログ」では「ヤハリ」と「ヤッパリ」が同程度出現していること、「ヤっぱ」の出現はごく僅かであるが、「雑誌」や「ブログ」「知恵袋」で出現していることを報告している。

これらの先行研究から、副詞「やはり」が書き言葉で用いられるか話し言葉で用いられるか、書き言葉ではどのレジスターで用いられるかで、ある程度、形態の住み分けができていくこと、話し言葉での副詞「やはり」の出現数に着目すると「やっぱり」と「やっぱ」は年代によって出現率が異なっていることが実証的に示されている。

---

<sup>24</sup> 2018年版（50時間版）には副詞「やはり」の出現がなかったが、2022年版には出現している。

### 3.3 本章の目的

副詞「やはり」は話し言葉で多く用いられることから、「あまり」「あんまり」「あんまし」「あんま」や「びたり」「びったり」「びったし」のような形態の変化が起きやすい可能性を持つ語であるとはいえる。以上の書き言葉のコーパス、主に独話データを収録したコーパス<sup>25</sup>、日常会話のコーパスを用いた先行研究によって、コーパス間やレジスター間での4つの形態の出現数に着目した調査・考察がなされ、「やはり」は書き言葉、「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」は話し言葉に多く用いられるという住み分けができていていることが明らかにされている。しかし、一つのコーパスの中で使用した人数に着目した調査をすること、話し言葉で多く用いられている「やっぱり」と「やっぱ」を併用する個人がどう使い分けているかについての検討は不足している。

そこで、本稿ではCEJCのデータを用い、母語話者の使用実態を次の2点から明らかにすることを目的とし、調査・考察を行う。

課題1：副詞「やはり」の4つの形態を使用した人数から見た母語話者の使用傾向にはどのような特徴があるか。

課題2：「やっぱり」「やっぱ」の2形態を用いている母語話者の使用傾向にはどのような特徴があるか。

## 4. 調査の概要

### 4.1 調査の方法

CEJC（中納言 2.6.0 データバージョン 2022.03）を用いた調査を次の手順で行う。

- ①コーパス検索アプリケーションCEJCデータを『中納言』を利用して語彙素「矢張り」（前後文脈の語数100）をダウンロードする。CEJCコアデータの韻律情報を入手する。
- ②CEJC全データで、副詞「やはり」の4つの形態を使用した人数に着目して集約する。

---

<sup>25</sup> CSJには独話データと対話データが存在するが、総収録時間（658.8時間）中、独話データは646.6時間（98.1%）、対話データは12.2時間（1.9%）である。

- ・ 4 形式の年代別・男女別使用人数，個人が使用した形態の種類を調査・検討する。
  - ・ 会話の属性，対話の相手の属性から見た使用人数を調査・検討する。
- ③ 「やっぱり」「やっぱ」の 2 形態を併用する調査協力者 39 名のデータを集約する。
- ・ 出現位置，意味・機能から見た傾向を調査・検討する。
  - ・ 韻律情報から見た傾向を調査・検討する。

## 4.2 使用データ

CEJC は，さまざまなタイプの日常会話 200 時間を収録したコーパスである。「日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象とすること，多様な場面の会話をバランスよく集めること，音声だけでなく映像まで含めて収録・公開し会話行動を総体的に解明するための研究環境を提供することを目指して」（小磯他 2022）構築され，2022 年 3 月に公開されている。

CEJC が対象とする会話は，収録のために集められた会話でない点に特徴があり，収録法は，個人密着法（性別・年齢の点から均衡性を考慮して選別された調査協力者 40 名に収録機材等を貸し出し，日常会話を収録してもらう方法）と，特定場面法（個人密着法で収録した会話の場面や話者のバランスを検証し，個人密着法では収録が難しい場면을，調査者が主体となり収録する方法）で収録されている。

CEJC の規模は，会話数 577，異なり話者数 862 名，短単位の語数は約 240 万語となっている。また，個人密着法で収録した会話の中から 20 時間を選別して人手修正・複数のアノテーション（係り受け情報・談話行為情報・韻律情報）を付与した「コア」のデータがある。会話の形式は雑談，用談・相談，会議・会合，授業・レッスンで，会話時間は雑談（138.0 時間，68.9%），用談・相談（38.9 時間，19.4%），会議・会合（19.1 時間，9.5%），授業・レッスン（4.2 時間，2.1%）となっている。データには，話者数 2 名から 16 名の会話が含まれている。

本稿での調査は，課題 1 については CEJC 全データを，課題 2 については年齢・性別から均衡性を考慮して選定された調査協力者 40 名の中で「やっぱり」「やっぱ」の 2 形態を併用している 39 名のデータとコアデータの韻律情報を使用した。ただし，本調査は副詞「やはり」を使用した人数に焦点を当てた調査であることから，収録された話者 862 名のデータの中から安定して検討できないデータは調査対象から除外して検討することが妥当と考え

た。そこで、語数 250 を閾値<sup>26</sup>として 209 名を対象から除外した。また、10 歳未満の対象者 16 名に関しても、データの収集が 10 歳未満の年少者の発話を反映していない恐れがあること<sup>27</sup>を考慮して対象から除外し、語数 250 以上で 10 歳以上の対象者 637 名のデータを本調査の対象とした。

## 5. 副詞「やはり」の 4 形態を使用する人数からみた母語話者の使用傾向

### 5.1 CEJC における 4 形態の使用人数と割合

本節では母語話者の日常会話における副詞「やはり」の 4 形態の使用傾向を検討するため、副詞「やはり」の年代別・男女別の使用人数、使用形態、個人が使用した形態の種類を調査した。以下にその結果を記述する。

まず、「やはり」を使用した人数を年代別・男女別にまとめ表 4-2 に示した。

表 4-2 : 副詞「やはり」の年代別・男女別使用人数と割合

年齢	男性			女性			合計		
	使用人数(%)	対象全		使用人数(%)	対象全	使用人数(%)	対象全		
10-19	10 (35.7)	28		10 (43.5)	23	20 (39.2)	51		
20-29	32 (62.7)	51		27 (65.9)	41	59 (64.1)	92		
30-39	34 (64.2)	53		35 (70.0)	50	69 (67.0)	103		
40-49	28 (77.8)	36		51 (67.1)	76	79 (70.5)	112		
50-59	38 (79.2)	48		48 (68.6)	70	86 (72.9)	118		
60-69	28 (63.6)	44		34 (82.9)	41	62 (72.9)	85		
70-94	23 (57.5)	40		19 (63.3)	30	42 (60.0)	70		
NA	1 (33.3)	3		3 (100.0)	3	4 (66.7)	6		
総計	194 (64.0)	303		227 (68.0)	334	421 (66.1)	637		

<sup>26</sup> 閾値 250 は収録者 862 名の語数データの記述統計量の第一四分位数, 205.2 から算出した。データの記述統計量は次の通りである。Min. 1st Qu. Median Mean 3rd Qu. Max.  
0.0 250.2 1306.0 2794.1 2893.5 43986.0

<sup>27</sup> 10 歳未満の対象者のデータは数が少なく、安定した検討に適さないこと、データ収集の方法が調査協力者の日常で展開される大人の会話の中に存在する年少者の会話であり年少者の実態を反映していない恐れがあることを考慮した。

本調査の対象者 637 名の中で副詞「やはり」を使用した人の割合は、男性 60.0%、女性 68.0%、全体では 66.1%の母語話者が会話の中で副詞「やはり」を使用していることが観察できた。年代別では、19 歳以下の使用した人数の割合は 39.2%だが、他の年代では 6 割を超えている。また、年代別・男女別では、全般的には女性の割合が男性の割合を上回っているが、40-49 歳と 50-59 歳では、男性が約 10%女性を上回っている。副詞「やはり」の使用人数の割合では性差による大きな違いは認められなかった。

次に、副詞「やはり」の出現形態の出現頻度と使用人数・割合を年代別にまとめ表 4-3 に示した。「やはり」を使用した人は 421 名中 12 名 (2.9%)、「やっぱし」を使用した人は 18 名 (4.3%) でごく僅かだった。「やはり」は年代別の傾向はなく、30-69 歳で 1.6%から 5.1%の割合で使用されている。「やっぱし」は 60-94 歳では 11.9%の人の使用が見られたが、他は年代に関わらず 0%から 6.3%の間の割合で使用されている。「やっぱり」は全体では 345 名 (81.9%) の人が使用している。10-19 歳 (70.0%) から 70-94 歳 (88.1%) と年代が上がるに従い、使用した割合が漸増している。次に、「やっぱ」は 60-69 歳 (66.7%)、70-94 歳 (52.4%) であるが、他の年代は 8 割前後の割合で使用しており、全体としては 316 名 (75.1%) の使用率になっている。

表 4-3 : 副詞「やはり」の年代別の出現形態と割合

年齢	やはり			やっぱり			やっぱ			やっぱし			総計	
	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数
10-19	0	0	(0.0)	27	14	(70.0)	52	14	(70.0)	1	1	(5.0)	80	20
20-29	0	0	(0.0)	142	40	(67.8)	377	52	(88.1)	0	0	(0.0)	519	59
30-39	5	3	(4.3)	342	50	(72.5)	378	58	(84.1)	1	1	(1.4)	726	69
40-49	12	4	(5.1)	434	68	(86.1)	335	63	(79.7)	8	5	(6.3)	789	79
50-59	9	4	(4.7)	409	75	(87.2)	289	63	(73.3)	3	1	(1.2)	710	86
60-69	2	1	(1.6)	446	57	(91.9)	248	42	(67.7)	20	5	(8.1)	716	62
70-94	0	0	(0.0)	142	37	(88.1)	43	22	(52.4)	10	5	(11.9)	195	42
NA	0	0	(0.0)	5	4	(100)	2	2	(50.0)	0	0	(0.0)	7	4
総計	28	12	(2.9)	1947	345	(81.9)	1724	316	(75.1)	43	18	(4.3)	3742	421

表 4-3 で「やっぱ」を使用した 316 名について、年代別・男女別の使用者数と割合をまとめ表 4-4 に示した。男性は 20-29 歳 (96.9%) を、女性は 10-19 歳 (90.0%) をピークに使用人数の割合は漸減している。また、男女別の関連を見るために世代全体の合計に対して  $\chi^2$  検定を行った結果、有意な偏りは見られなかった。 ( $\chi^2(1)=1.975, ns$ )

表 4-4 : 「やっぱ」年代男女別の使用人数と割合

	男性: 人数/(%)			女性: 人数/(%)		
10-19	5	/10	(50.0)	9	/10	(90.0)
20-29	31	/32	(96.9)	21	/27	(77.8)
30-39	30	/34	(88.2)	28	/35	(80.0)
40-49	24	/28	(85.7)	39	/51	(76.5)
50-59	32	/38	(84.2)	31	/48	(64.6)
60-69	18	/28	(64.3)	24	/34	(70.6)
70-94	12	/23	(52.2)	10	/19	(52.6)
NA	0	/1	(0.0)	2	/3	(66.7)
総計	152	/194	(78.4)	164	/227	(72.2)

以上の調査から、小磯 (2019) で示された日本語日常会話コーパスにおいて、出現数では「やっぱり」の使用が全出現頻度 3742 の中で 1947 (52.0%) と最も多いことが追認でき、加えて全体の 81.9% の人が使用していることが確認できた。さらに、「やっぱ」については、70 歳以上は 52.4% の使用であるが、その他の年代は 10 代、20 代だけでなく全世代で用いられていること、「やっぱ」の使用に年代ごとの男女差はないことを確認した。

## 5.2 個人が使用した形態の種類

本節ではそれぞれが何種類の形式を使用しているか考察するため、年代別に個人が使用した形式の種類を集計した。4 形態の何れか 1 形態を使用している人は 172 名 (40.9%)、2 形態を併用している人は 228 名 (54.2%)、3 形態を併用している人は 21 名 (4.5%) で、

4形態すべてを用いている人はいなかった。さらに、これらを詳しく検討するため、個人が用いた形態の種類別にまとめ、表 4-5 と図 4-1 に 1 形態のみ用いている人、表 4-6 に 2 形態を併用している人の年代別の使用人数と割合を示した。

表 4-5：個人が使用した形態の種類 1 形態

年齢	やはり (%)	やっぱり (%)	やっぱ (%)	やっぱし (%)	計 (%)	総計
10-19	0 (0.0)	6 (30.0)	6 (30.0)	0 (0.0)	12 (60.0)	20
20-29	0 (0.0)	7 (11.9)	19 (32.2)	0 (0.0)	26 (44.1)	59
30-39	0 (0.0)	10 (14.5)	19 (27.5)	0 (0.0)	29 (42.0)	69
40-49	1 (1.3)	15 (19.0)	9 (11.4)	0 (0.0)	25 (31.6)	79
50-59	0 (0.0)	21 (24.4)	10 (11.6)	1 (1.2)	32 (37.2)	86
60-69	0 (0.0)	19 (30.6)	4 (6.5)	0 (0.0)	23 (37.1)	62
70-94	0 (0.0)	19 (45.2)	3 (7.1)	1 (2.4)	23 (54.8)	42
NA	0 (0.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	4
計	1 (0.2)	99 (23.5)	70 (16.6)	2 (0.5)	172 (40.9)	421

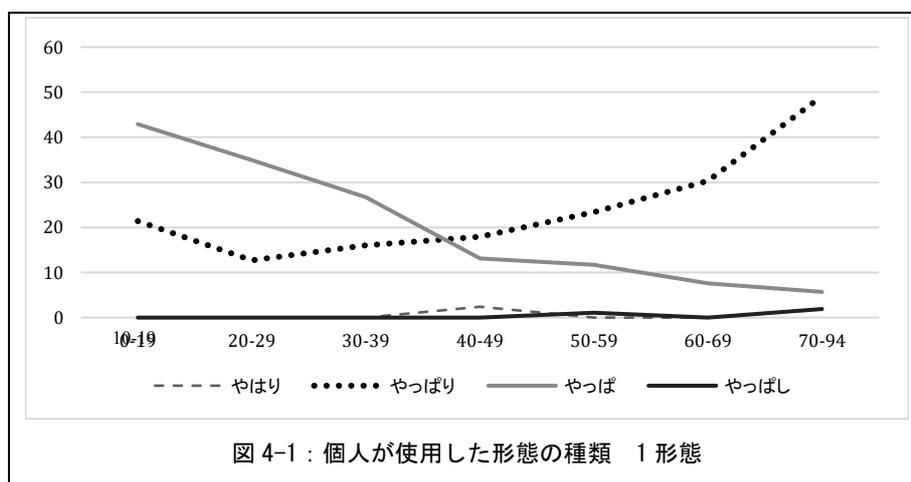


図 4-1：個人が使用した形態の種類 1 形態

まず、1 形態だけを用いた 172 名 (40.9%) については、「やっぱり」を単独で用いた人が 99 名 (23.5%) と最も多く、「やっぱ」のみを用いた人が 70 名 (16.6%) でそれに次いでいる。年代ごとに見ていくと、「やっぱり」のみを用いた人の割合は年代が上がるに従って増えている。割合が最も低い世代は 20-29 歳で 11.9% であるが、70-94 歳では 45.2% とな

っている。それに対して、「やっぱ」のみを用いた人の割合は「やっぱり」と逆で年代が上がるに従って減り、10-19歳では30.0%、20-39歳では32.2%、30-39歳では27.5%と約3割だが、40-49歳では11.4%、50-59歳では11.6%と約1割、60歳以上の世代は、60-69歳では6.5%、70-94歳では7.1%と1割未満の使用になっていた。「やっぱり」「やっぱ」の1形態だけを用いた人の割合は世代によって異なっていることが観察できた。

表 4-6：個人が使用した形態の種類 2 形態

年齢	やはり・やっぱり(%)	やっぱり・やっぱ(%)	やっぱ・やっぱし(%)	計(%)	総計
10-19	0 (0.0)	7 (35.0)	0 (0.0)	7 (35.0)	20
20-29	0 (0.0)	33 (55.9)	0 (0.0)	33 (55.9)	59
30-39	1 (1.4)	36 (52.2)	0 (0.0)	37 (53.6)	69
40-49	0 (0.0)	46 (58.2)	1 (1.3)	47 (59.5)	79
50-59	1 (1.2)	50 (58.1)	0 (0.0)	51 (59.3)	86
60-69	1 (1.6)	33 (53.2)	1 (1.6)	35 (56.5)	62
70-94	0 (0.0)	15 (35.7)	1 (2.4)	16 (38.1)	42
NA	0 (0.0)	2 (50.0)	0 (0.0)	2 (50.0)	4
総計	3 (0.7)	222 (52.7)	3 (0.7)	228 (54.2)	421

・「やはり・やっぱ」「やはり・やっぱし」「やっぱり・やっぱし」の形態を併用している人はいなかった。

次に、2形態を併用している人は228名（54.2%）で、「やっぱり」「やっぱ」を併用している人が222名（52.7%）と最も多かった。年代ごとの傾向は特にみられず、10-19歳と70-94歳の世代は約35%であり、20-69歳の世代は5割強の使用率で推移していた。3形態を用いている人は「やはり・やっぱり・やっぱ」9名（1.9%）、「やっぱり・やっぱ・やっぱし」12名（2.6%）いたが、年代別の傾向は見られなかった。CEJC全体では「やっぱり」「やっぱ」の2形態を併用している人は243名（57.8%）存在する。

### 5.3 属性の違いによる異形態の使用数と使用人数

本節では副詞「やはり」の異形態の使用が会話の属性、対話相手の属性によってどう異なるかを検討する。

まず、会話の属性については、CEJC のデータで「形式」<sup>28</sup>に記載されている「雑談」「用談・相談」「会議・会合」「授業・レッスン」別に、477名、3742のデータを集計し、表4-7に示した。

表 4-7：会話の属性（形式）別の使用数と使用人数・割合

形式	やはり		やっぱり			やっぱ			やっぱし		総計		
	頻度	人数 (%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数
雑談	13	5 (1.6)	1328	242	(78.8)	1249	233	(75.9)	36	13	(4.2)	2626	307
用談・相談	1	1 (1.1)	353	79	(84.9)	298	73	(78.5)	2	2	(2.2)	654	93
会議・会合	9	6 (9.1)	201	57	(86.4)	132	45	(68.2)	1	1	(1.5)	343	66
授業・レッスン	5	1 (9.1)	65	8	(72.7)	45	9	(81.8)	4	2	(18.2)	119	11
総計	28	13 (2.7)	1947	386	(80.9)	1724	360	(75.5)	43	18	(3.8)	3742	477

4形態の中で「やはり」と「やっぱし」は、延べ使用人数が「やはり」13名、「やっぱし」18名と少数であるため会話の属性別の傾向の記述は控える。「やっぱり」と「やっぱ」の使用数に関して、関連を見るために $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な関連が見られた。

( $\chi^2(3)=11.498$ ,  $p<.01$ ) 残差分析の結果、「雑談」では「やっぱ」の出現が、「会議・会合」では「やっぱり」の出現が有意に多いことが確認されたが、使用した人数に関しては有意な偏りは見られなかった。(  $\chi^2(3)=0.973$ , ns)

使用した人の割合は、「雑談」では「やっぱり」242名(78.8%)、「やっぱ」233名(75.9%)、「用談・相談」では「やっぱり」79名(84.9%)、「やっぱ」73名(78.5%)、「授業・レッスン」では「やっぱり」8名(72.7%)、「やっぱ」9名(81.8%)、と同程度の対象者が使用している。「会議・会合」では「やっぱり」57名(86.4%)、「やっぱ」45名(68.2%)と、使用した人の割合に15%強の差が見られた。また、「雑談」「用談・相談」「会議・会合」では「やっぱり」を使用する人の割合が、「授業・レッスン」では「やっぱ」を使用する人の割合がやや高いという傾向が観察できた。

<sup>28</sup> 会話の形式別の収録時間は「雑談」(138.0時間, 68.9%)、「用談・相談」(38.9時間, 19.4%)、「会議・会合」(19.1時間, 9.5%)、「授業・レッスン」(4.2時間, 2.1%)となっている。

次に、対話の相手の属性によって4形態をどう使用しているかを調査した。CEJCでは、調査協力者から見た対話の相手との関係性が表4-8のように分類されている。本調査ではこれに従い、家族、家族親戚との会話、関係性が特定できない初対面の会話は除き、相手との関係性が特定できる友人知人、仕事、先生生徒の会話に出現する副詞「やはり」のデータを対象とした。また、属性や立場が同等である「同僚・元同僚」「友人知人」は対話相手との年齢差が5歳未満の場合に同世代とした。

表4-8：調査協力者からみた対話の相手の関係

	階層 1	家族,家族親戚,友人知人,仕事,先生生徒,初対面
属性		家族:父母,子供,配偶者,兄弟姉妹,祖父母,孫,義父母,義理の子供
	階層 2	仕事:同僚,取引先など他社の人,サービス提供者,客,その他 先生生徒:先生,生徒
年齢	同世代 3	年下,同世代,年上 年齢差が5歳未満の場合に同世代

・「同世代1」は年齢差が15歳未満の場合を、「同世代2」は年齢差が10歳未満の場合を同世代としている。

発話者から見て属性や立場が異なる相手との会話で出現する385名、2770のデータを、仕事関係を4種類（他社の人・上司、年上の同僚、同年代の同僚、部下・年下）に、友人知人を3種類（年上・先輩、同世代、年下・後輩）に、サービス場面を2種類（提供者、客）に、先生生徒を2種類（先生、生徒）に分類し、結果を表4-9、図4-2に示した。

4形態の中で「やはり」と「やっぱし」は、延べ使用人数が「やはり」15名、「やっぱし」9名と少数であるため対話相手の属性別の傾向の記述は控える。「やっぱり」と「やっぱ」の使用数に関して、関連を見るために $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な関連が見られた。（ $\chi^2(10)=109.755$ ， $p<.01$ ）残差分析の結果、仕事関係の「年上の同僚との会話」「年下・部下との会話」、友人知人との会話の「年下・後輩との会話」では「やっぱり」の出現が、友人知人との会話の「同年代の相手との会話」、先生生徒の会話で「生徒との会話」では「やっぱ」の出現が有意に多いことが確認されたが、使用した人数に関しては有意な偏りは見られなかった。（ $\chi^2(10)=3.562$ ，ns）

表 4-9 : 対話相手の属性別の使用数と使用人数・割合

対話相手の属性	やはり		やっぱり		やっぱ		やっぱりし		総計		
	頻度	人数(%)	頻度	人数(%)	頻度	人数(%)	頻度	人数(%)	頻度	人数	
仕事	他社・上司	3	1 (3.7)	105	24 (88.9)	87	22 (81.5)	1	1 (3.7)	196	27
	年上	5	4 (9.1)	183	34 (77.3)	108	31 (70.5)	0	0 (0)	296	44
	同年代	1	1 (6.3)	46	15 (93.8)	55	11 (68.8)	0	0 (0)	102	16
	部下・年下	1	1 (2.3)	170	39 (88.6)	90	26 (59.1)	0	0 (0)	261	44
友人知人	年上・先輩	1	1 (1.8)	204	43 (76.8)	156	46 (82.1)	3	1 (1.8)	364	56
	同年代	0	0 (0)	268	66 (75.0)	350	70 (79.5)	17	3 (3.4)	635	88
	年下・後輩	1	1 (2.0)	239	44 (88.0)	167	41 (82.0)	0	0 (0)	407	50
サービス	1	1 (7.7)	49	10 (76.9)	43	10 (76.9)	3	1 (7.7)	96	13	
先生生徒	9	1 (7.7)	72	10 (76.9)	44	12 (92.3)	2	2 (15.4)	127	13	
先生生徒	0	0 (0)	45	14 (87.5)	119	14 (87.5)	1	1 (6.3)	165	16	
生徒先生	5	1 (7.7)	66	11 (84.6)	43	11 (84.6)	0	0 (0)	114	13	
NA	0	0 (0)	4	4 (80.0)	3	3 (60.0)	0	0 (0)	7	5	
総計	27	15 (3.9)	1451	314 (81.6)	1265	297 (77.1)	27	9 (2.3)	2770	385	

・NA:年齢不明の5名のデータは別に集計した。

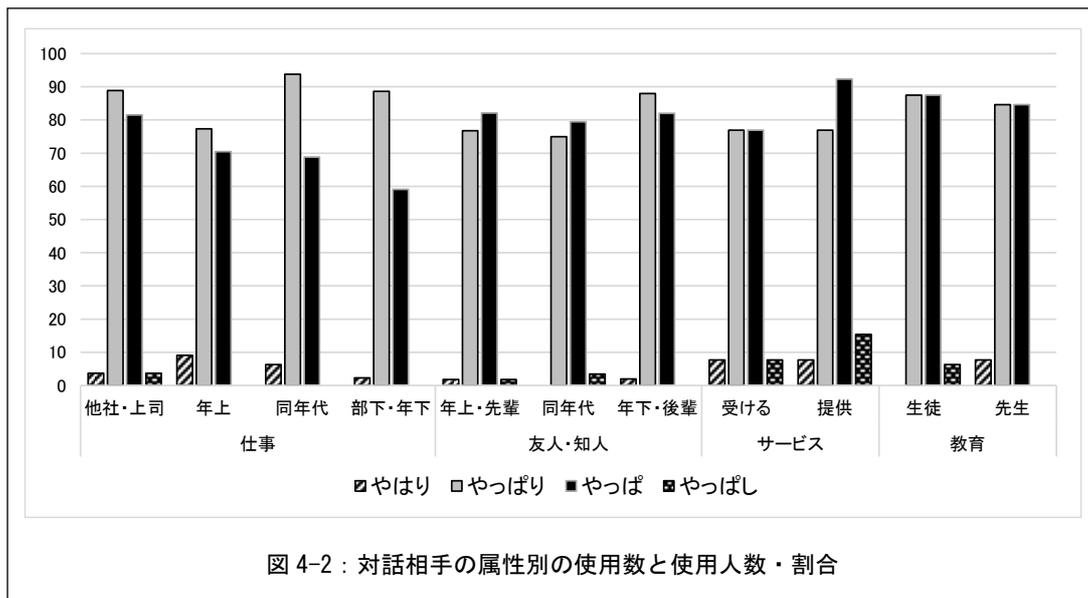


図 4-2 : 対話相手の属性別の使用数と使用人数・割合

図2に示した通り、使用した人の割合は、仕事関係では「やっぱり」を使用した人の割合が「やっぱ」を使用した人の割合より高い。しかし、「やっぱ」を使用した人の割合は話し手から見て立場や状況が上がるに従い、「部下・年下」(59.1%)、「同年代の同僚」(68.8%)、「年上の同僚」(70.5%)、「他社・上司」(81.5%)と漸増しており、「やっぱ」が「やっぱり」の「ぞんざいな言い方、くだけた形態」であるという解釈だけでは説明できない傾向が観察できた。友人知人との会話では、「やっぱ」は「年上・先輩」「同世代」「年下・後輩」との会話のいずれも約80%の人が使用していた。「やっぱり」は、「年上・先輩」(76.8%)、「同世代」(75.0%)と同程度であるが、「年下・後輩」では88.0%の人が使用していた。サービス場面では、「受ける」では、「やっぱり」「やっぱ」とも76.9%の割合の使用であるが、「提供する」では「やっぱり」は76.9%であるのに対し、「やっぱ」は92.3%となっている。先生生徒の場面では、「先生」「生徒」と立場を逆にする属性の人との会話であるが、同じ割合で「やっぱり」と「やっぱ」を使用していた。

#### 5.4 CEJCにおける副詞「やはり」の使用傾向

CEJCにおける副詞「やはり」の4形態の使用した人数に着目した使用傾向として、既に小磯(2019)により報告されている通り「やっぱり」の使用頻度が最も多いことを追認し、使用した人数も調査対象者の約8割が使用していることを確認した。「やっぱ」はそれに次いで全体では7割強が使用している。さらに、個人が使用した形態を年代別に調査すると、70歳以上の人でも5割強が「やっぱ」を使用していることから、10代、20代の人だけが用いる形態であるとは言えないと考える。このことは1950年代から1970年代に収録された『昭和話し言葉コーパス』<sup>29</sup>の会話データにおいても、「やっぱ」は全体で約3割の人が使用しており、年代による異なり(当時の若い人が多く用いていること)は観察できないことから窺える<sup>30</sup>。また、個人が使用した形態の種類調査からは、1形態のみを用いている人の割合が各年代とも約4割存在すること、2形態の併用では「やっぱり」「やっぱ」が最も多く全体の約5割が使用していることが確認できた。1形態のみを用いた人の中で「やっぱり」

<sup>29</sup> 『昭和話し言葉コーパス(SSC)』には、1950年代から1970年代に収集された約44時間の独話と会話の音声データが収録されている。本稿では27時間の会話データを使用した。巻末p.240に結果をまとめ示した

<sup>30</sup> 各年代の内訳は、10-19(17.6%)、20-49(約35%)、50-59(20%強)、60-69(40%)、70-(30%強)となっている。

のみを使用する人の割合は年代と共に高くなり、逆に「やっぱ」のみを使用する人の割合は年代と共に低くなっていることが観察できた。

次に、「やっぱ」は「やっぱり」のぞんざいな言い方、くだけた形態か」を検討するため、性差により異なりがあるか、会話の属性、対話の相手の属性によって異形態をどう使用しているかを調査した。その結果、「やっぱり」と「やっぱ」の使用に関しては、男女による差が見られないこと、会話の属性においても顕著な差が見られないことを確認した。対話の相手の属性では、仕事関係での会話で、「やっぱ」より「やっぱり」を使用する割合が高いことが観察できた。このことから、「やっぱ」は「やっぱり」よりぞんざいな言い方であると認識している人が存在することが窺えた。このことは何に所以するか検討するため、奈良時代から明治・大正までの資料を収録した『日本語歴史コーパス』<sup>31</sup>での副詞「やはり」の出現を確認した。歴史的には、古典語「なほ」の意味・機能の一部を引継ぎ、室町時代以降に出現したと言われている副詞「やはり」だが、「やっぱ」は江戸時代の洒落本<sup>32</sup>のみに、「やっぱし」は明治・大正時代の「雑誌」「小説」「明治初期一口語」に出現している。「やっぱり」に比べ「やっぱし」「やっぱ」は後発であることから派生した言い方であること、「やっぱ」は船頭「安」の言葉、俠者「吉」の言葉として出現していることから、江戸時代後期に生きる『深川新話』『俠者方言』の作者は「やっぱ」をぞんざいな言葉として認識していたことがうかがえる。一方で、仕事関係で「やっぱ」を使用した人の割合は、立場や状況が下の属性を持つ人との会話から上の属性を持つ人との会話になるに従って漸増しているという調査結果から、「やっぱ」が「やっぱり」の「ぞんざいな言い方、くだけた形態」であるという解釈だけでは説明できない要因が存在する可能性があるのではないか。

## 6. 母語話者は「やっぱり」と「やっぱ」を使い分けているか

### 6.1 「やっぱり」「やっぱ」の出現位置と意味・機能

本節では、母語話者は「やっぱり」と「やっぱ」を使い分けているか否かを検討するために、調査協力者40名の中で「やっぱり」「やっぱ」の2形態を併用している39名のデータ1649を出現位置と意味・機能から検討する。

<sup>31</sup> 『日本語歴史コーパス』での出現数の割合は、「やはり」1999 (78%)、「やっぱり」555 (21.7%)、「やっぱし」7 (0.3%)、「やっぱ」2 (0.1%)であった。巻末p241に結果をまとめ示した。

<sup>32</sup> 江戸時代後期の江戸語・上方語が描写された会話文を含む。遊里に取材した文学作品。

まず、「やっぱり」「やっぱ」が発話の中で出現する位置について検討する。CEJCの発話単位は「#(文脈中の発話単位区切り記号)」で示されている。そこで、「やっぱり」「やっぱ」の出現位置を「節頭：発話単位の頭に出現する」「節尾：発話単位の末尾に出現する」「一語文：「やっぱり」「やっぱ」のみで発話単位をなす」「節中：節頭・節尾・一語文のいずれでもない」として分類した。結果を表4-10に示す。

表4-10：「やっぱり」「やっぱ」の出現位置

	一語文	節頭	節中	節尾	総計
やっぱり	84 **	239 **	518	12	853
やっぱ	26 **	288 **	476	6	796
計	110	527	994	18	1649

\*\* :  $p < .01$

「やっぱり」「やっぱ」の形態に関して、出現位置との関連を見るために $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(3) = 36.986, p < .01)$  残差分析の結果、一語文では「やっぱり」の出現が、節頭では「やっぱ」の出現が有意に多いことが示された。さらに、出現位置別の内実を検討するために、表4-1に示した本稿における副詞「やはり」の意味・機能の枠組みに基づいて、出現した「やっぱり」「やっぱ」の用例を検討し、分類した。表4-11に「やっぱり」「やっぱ」の出現位置と意味・機能別の出現数と割合を示した。

表4-11：「やっぱり」「やっぱ」の出現位置と意味・機能別の出現数と割合

	一語文		節頭		節中		節尾		総計
	やっぱり	やっぱ	やっぱり	やっぱ	やっぱり	やっぱ	やっぱり	やっぱ	
I	2 (2.4)	4 (15.4)	60 (25.1)	81 (28.1)	276 (53.3)	239 (50.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	662
II	<b>50 (58.5)</b>	<b>3 (11.5)</b>	71 (29.7)	80 (27.8)	37 (7.1)	42 (8.8)	3 (25.0)	0 (0.0)	286
III	15 (17.9)	3 (11.5)	66 (27.6)	75 (26.0)	121 (23.4)	114 (23.9)	<b>5 (41.7)</b>	<b>2 (33.3)</b>	401
IV	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (2.1)	5 (1.7)	0 (0.0)	6 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	16
V	<b>17 (20.2)</b>	<b>16 (61.5)</b>	37 (15.5)	47 (16.3)	84 (16.2)	75 (15.8)	<b>4 (33.3)</b>	<b>4 (66.7)</b>	284
計	84	26	<b>239</b>	<b>288</b>	<b>518</b>	<b>476</b>	12	6	1649

結果から、「節頭」と「節中」の意味・機能別の使用割合は拮抗していることが観察できた。また、「一語文」では、「やっぱり」の 58.4% (50/84) が「II 予期した通り」で、「やっぱ」の 61.5% (16/26) が「V 形式・内容を選択途中」で用いられていた。

(3) に「一語文」の用例を示した。

(3) 【共通の知り合いについて雑談】友人宅で友人と飲みながら

A: 結構してんじゃねえかな#

B: あのフェイスブックとかで出てくるのであれ苗字変わってねえなってやつとかいるけど#

A: あーあーあーあーあーあーあー#

B: たまに#

A: ほぼしてんじゃないの#

B: やっぱり#

A: まあね#

(CEJC : S002\_014)

(3) は「II 予期した通り」の意味・機能で用いられている用例で、友人と複数の共通の知り合いの噂話をする中で「多くが結婚している」という友人の見解に、自分もそう予期していたという意味で「やっぱり」を用いている。同様の状況で「やっぱ」が登場する場合は「やっぱねー」という形式で用いられていた。

次に、「節尾」では、「やっぱり」の 41.7% (5/12) が「III 熟考した結果」で、33.3% (4/12) が「V 形式・内容を選択途中」で、25.0% (3/12) が「II 予期した通り」で用いられていた。

「やっぱ」は 66.7% (4/6) が「V 形式・内容を選択途中」で、33.3% (2/6) が「III 熟考した結果」で用いられていた。(4) に「節尾」の用例を示した。

(4) 【送別会について相談】大学でゼミの先生と

A: ほかの子たちあんまりその他学年にぐいっていくタイプではないので#

B: なるほどね#

A: そうするとやっぱり#

B: なるほど#

A: あと最後まで残ってるとか自分らもうあー終電ねえやみたいなのをやってしまうので……

(CEJC : T010\_009)

(4)は「III 熟考した結果」の意味・機能で用いられている用例で、発話者の見解が「…ぐいっていくタイプではない」という共通基盤を築いた後に述べられていく。「そうするとやっぱり」の後は省略されているが、対話相手のゼミの先生はその見解を理解して「なるほど」と納得している。この場面では、先生との会話という待遇を考えると、「やっぱ」の使用は躊躇われる。節頭、節中では発話者が語る文脈の中で「やっぱり」「やっぱ」のどちらを使うかは意識されていないが、一語文や節尾では待遇が意識されている可能性がある。

## 6.2 「やっぱり」「やっぱ」のアクセント型

副詞「やはり」のアクセント型に関して、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」は中高音であるのに対し、「やっぱ」には頭高型と無核型のアクセント型が存在する。では、「やっぱ」アクセント型の違いは「やっぱり」との意味・機能との異なりに関連があるのだろうか。そこで、CEJC コアデータの韻律情報に含まれる「やっぱり」209、「やっぱ」199のデータを集計した。

その結果、「やっぱり」にはアクセント型が3種類ある<sup>33</sup>。頭高型「ya'Qpari (5.7%, 12/209)」と中高音「yaQpa'ri/yaQpa'ri:/Qpa'ri (84.6%, 176/209)」と無核型「yaQpari/yaQpari: (10.0%, 21/209)」があり、使用した人の延べ人数の割合では中高音は58名(98.3%)が使用しており、中高音がデフォルトであることが観察できた。

次に「やっぱ」には、頭高型「ya'Qpa/yaQ'pa/ya'Qpa: (70.4%, 140/199)」と無核型「yaQpa/yaQpa:/yaQpa'/yaQpa':/Qpa/pa (29.6%, 58/209)」があり、頭高型と無核型は7対3の割合で使用されていた<sup>34</sup>。

さらに、「やっぱ」の頭高型と無核型のアクセント型について傾向を観察するため、調査協力者39名の会話に出現する「やっぱ」796のアクセント型を調査した。この中で無核型のみを使用している協力者1名の3データと判断不明の4データを除いた789についてまとめ、結果を表4-12に示した。「やっぱ」の2種類のアクセント型に関して、意味・機能との関連を見るために $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(4)=8.769, .05 < p < .10)$  残差分析の結果、「II予期した通り」では無核型の「やっぱ」の出現が有意に多い

<sup>33</sup>巻末 p.242 に「「やっぱり」の韻律情報」と「「やっぱり」韻律年代別の使用人数を示した。

<sup>34</sup>巻末 p.243 に「「やっぱ」の韻律情報」と「「やっぱ」韻律年代別の使用人数を示した。

傾向があり、「V形式・内容を選択途中」では頭高型の「やっば」の出現が有意に多いことが示された。しかし、母語話者は頭高型と無核型の「やっば」を使い分けているか否かについては、アクセント型と意味・機能の出現数と割合に着目した調査では考察できなかった。

表 4-12：出現位置別の「やっば」のアクセント型

	やっば:頭高型		やっば:無核型		【参考】やっぱり	
	頻度	(%)	頻度	(%)	頻度	(%)
I	200	(41.8)	121	(38.9)	338	(39.6)
II	68 <sup>+</sup>	(14.2)	58 <sup>+</sup>	(18.6)	161	(18.9)
III	109	(22.8)	82	(26.4)	207	(24.3)
IV	6	(1.3)	7	(2.3)	5	(0.6)
V	95 <sup>*</sup>	(19.9)	43 <sup>*</sup>	(13.8)	142	(16.6)
総計	478		311		853	

+ :  $p < .10$ , \* :  $p < .05$ ,

### 6.3 「やっば」はやはり「やっぱり」とは違うのか

母語話者は「やっぱり」と「やっば」を使い分けているか否かを検討するために、「やっぱり」「やっば」の2形態を併用しているデータを「出現位置と意味・機能」, 「「やっば」のアクセント型」から調査した。

その結果, 「出現位置」では一語文で「やっぱり」, 節頭の「やっば」の出現が有意に多いことが観察された。「出現位置別の意味・機能」では, 「節頭」と「節中」の意味・機能別の使用割合は拮抗していた。「一語文」では, 「やっぱり」の「II 予期した通り」で, 「やっば」の「V 形式・内容を選択途中」での使用の割合が, 「節尾」では, 「やっぱり」の「III 熟考した結果」で, 「やっば」の「V 形式・内容を選択途中」での使用の割合が高かった。

「節頭」「節中」では, 発話者は「やっぱり」「やっば」のどちらを使うかは意識されないが, 「一語文」や「節尾」では待遇が意識される傾向があるのではないかと。

「やっば」のアクセント型と副詞「やはり」の意味・機能は何らかの関係があり, 「やっぱり」と「やっば」の使い分けに関連するのではないかとこの予測からアクセント型と意味・

機能を調査した。しかし、全体では頭高型の出現が多いこと、「Ⅱ予期した通り」では無核型が、「Ⅴ形式・内容を選択途中」では頭高型の「やっぱ」の出現が有意に多いことが観察されたが、理由の考察に至らなかった。用例の質的考察、一語文と接尾に出現する無核型の「やっぱ」に後接する発話の検討、節中に出現する「やっぱ」のアクセント型と前接する語のアクセント型の関係の考察など、詳細な調査が必要である。

## 7. 結論

研究課題に従って本章をまとめ、残された課題を述べる。

課題1：副詞「やはり」の4形態を使用した人数から見た母語話者の使用傾向にはどのような特徴があるか。

- ① 「やっぱり」は使用数だけでなく、使用した人数も対象者の8割で最も多い。「やっぱ」それに次いで全体では7割強の人が用いており、使用する世代も10代、20代の人のみでなく全世代に渡っている。また、副詞「やはり」の4つの異形態のうち1形態のみを用いている人は全世代に渡り4割強存在する。
- ② 仕事関係の人との会話では、「やっぱ」より「やっぱり」を使用する割合が高いことから、仕事の場面では「やっぱ」より「やっぱり」がふさわしいと認識している人が多いと推察される。一方、「やっぱ」を使用した人の割合は、立場や状況が下の属性を持つ人との会話から上の属性を持つ人との会話になるに従って漸増している調査結果から、「やっぱ」が「やっぱり」の「ぞんざいな言い方、くだけた形態」であるという解釈だけでは説明できない要因が存在する可能性がある。

課題2：「やっぱり」「やっぱ」の2形態を用いている母語話者の使用傾向にはどのような特徴があるか。

- ① 「出現位置」では、一語文で「やっぱり」、節頭の「やっぱ」の出現が有意に多い。「出現位置別の意味・機能」では、「節頭」と「節中」の意味・機能別の使用割合はそれぞれ拮抗していた。「一語文」では、「やっぱり」の「Ⅱ 予期した通り」で、「やっぱ」の「Ⅴ 形式・内容を選択途中」での使用の割合が高かった。

② 「やっぱ」のアクセント型は、全体では頭高型の出現が多いこと、「Ⅱ 予期した通り」では無核型が有意に多く、「Ⅴ 形式・内容を選択途中」では頭高型の「やっぱ」の出現が有意に多い傾向があることが観察された。

観察結果の理由を考察するための調査が不足している。韻律との関係を含めた用例の詳細な質的調査が必要である。今後の課題としたい。

## 8. 本研究の位置付け

第3章と第4章では、第2章で明らかになった副詞「やはり」研究で残された課題である多様な意味・機能と母語話者の異形態の使用実態を記述した。

まず、副詞「やはり」の多義性を検討し、複数存在する意味・機能の全体像を整理した結果、「副詞「やはり」のスキーマ的意味は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」であり、副詞「やはり」が照合する「概念内の何らかのもの」の内実により異なった意味・機能が生じること」、「副詞「やはり」は事実由来の認識と思考由来の認識の両領域に働く副詞であり、事実由来の「やはり」では話し手の原認識と対立認識に対する期待の強弱により、思考由来の「やはり」では、逡巡の度合いの強弱と判断過程のどの段階で発話するかにより異なった意味・機能となること」、「前提命題との一致で説明できない「やはり」は、判断の過程も含めて表現される談話において、逡巡に重きが置かれた結果、スキーマ的意味が希薄化したため生じる」の3点を記述した。

次に、CEJCを用い、副詞「やはり」を使用した人数に焦点をあてて使用実態を調査した結果、「やっぱり」は使用数だけでなく、使用した人数も対象の8割で最も多い。「やっぱ」は若い人のみでなく全世代で用いられている」、「副詞「やはり」の4つの形態のうち1形態のみを用いている人は全世代にわたり4割強存在する」、「「やっぱり」と「やっぱ」の使い分けでは、一語文は「やっぱり」、節頭は「やっぱ」の出現が有意に多い」「「やっぱり」のアクセント型は中高型がデフォルトである。「やっぱ」のアクセント型は頭高型の出現が多い」の4点が観察された。。

本研究では、第3章の副詞「やはり」の多義性は意味論的観点からのアプローチ、第4章の副詞「やはり」の形態の使用実態は社会言語学的観点からのアプローチをとった。さらに、

第6章から第8章では学習者コーパスを用い、第2言語習得の立場から社会言語学的観点、習得研究の観点、語用論の観点から副詞「やはり」の一側面にアプローチする。本研究は、話し言葉における副詞「やはり」の側面に複数の観点からアプローチする多角的研究であると位置付ける。

## 9. 第4章のまとめ

第4章は、「研究課題2) 副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているか」に対応する章で、母語話者が副詞「やはり」の4つの形態をどのように使用しているか、使用実態を調査した。さらに、第3章と第4章の検討を踏まえ本研究の位置付けを述べた。

次の第5章は、第6章から第8章での学習者コーパスを用いた調査・検討に先立って、本研究の方法であるコーパスを用いた研究について述べ、本研究で調査の対象とする学習者コーパスを概観する。

## 第5章 研究方法と対象とするコーパス

### 1. 第5章の目的

第3章では、副詞「やはり」が多様な意味・機能を持つことを、第4章では、異形態を持つことを検討した。第3章で記述した、副詞「やはり」の多様な意味・機能の枠組みと、第4章で調査した母語話者の異形態の使用実態を本研究の基礎研究とし、それらを踏まえ本章では、本研究で取る研究方法と対象について言及する。まず、コーパスを用いて研究することの意義を述べ、次に第6章、第7章、第8章で調査対象とする3種類の学習者コーパスを概観する。

以下、2節はコーパスを用いて研究することの意義、学習者コーパスを用いることの意義を述べる。次に、3節では表5-1に示した3種類のコーパスを概観する。4節で本論の研究方法についてまとめ、5節で本章をまとめる。

表5-1：調査対象とするコーパス

	コーパス名	対象データ
1	『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language)』 (I-JAS)	インタビューデータ
2	『北京日本語学習者縦断コーパス(Beijing corpus of Japanese as a Second language)』 (B-JAS)	インタビューデータ
3	『BTSJ (Basic Transcription System for Japanese) 日本語自然会話コーパス』 (BTSJ)	雑談データ

### 2. 研究方法

#### 2.1 コーパスを用いた研究

本研究は学習者コーパスを用いて副詞「やはり」を調査・考察する。本節では、まずコー

パス<sup>35</sup>を用いて研究することの意義を山崎（2016, 2019b）、前川（2007）、大関（2012・2017）を引いて確認する。

前川（2007）は大規模均衡コーパスが日本語学に与える影響について述べた論の中で、「従来から行われてきた研究がコーパスによって一層進展すると期待される corpus-based な研究」と「コーパスなくしては行えない corpus-driven な研究」について言及し以下のように述べている。

コーパス言語学の可能性を論じて Tognini-Bonelli（2001）は corpus-based investigation と corpus-driven investigation の区別を主張している。前者は従来から言語研究において検討されてきた諸問題をコーパスを利用して解決しようとする研究である。一方後者は、コーパスそのもののなかから従来の言語研究では認識されてこなかった現象を発見し、それを解決しようとする研究である。前者にとってコーパスは研究ツールであるが、後者にとってのコーパスは研究対象そのものである。

（前川 2007 : 20）

さらに、前川（2007）は、corpus-driven な研究の可能性について文法性判断を例として挙げ、「従来の文法研究では文と非文との境界は明確に（二值的に）定まるものと考えてきだが、文法性判断に異動が存在する状態が稀な例外ではないとすれば、文と非文との関係を連続的な変化としてとらえることが考えられる」とし、文の候補として与えられた文字列の程度を評価することが新しい文法の主要な目的となると予測している。そして、corpus-driven な言語学がめざすべき目標は、「文法性の程度を評価する連続量の計算法」と、「その評価値の高低が何に起因するかを説明するための理論が含まれていてしかるべきである」と述べている。

山崎（2019b）は、日本語コーパスを利用した研究事例を紹介し、コーパスの活用法や研究における位置付けを述べた論の中で、コーパスの利用する意義として「研究における客観性と再現性の確保」「手法や手順を適切に示せば、第三者が結果を確認することが可能で、

---

<sup>35</sup> 山崎（2019b）では、一般的なコーパスの定義として「(1) 実際に使われた言葉を、(2) 代表性を持たせるべく、(3) 大量に集め、(4) 研究用の情報を付け、(5) コンピュータで検索できるようにしたデータベース」の5点を挙げこれらの条件の1つでも欠けるとコーパスとは言えないと述べている。また、代表性とは「ランダムサンプリングにより、母集団から偏りのない抽出が行われているという意味の統計学の概念。無作為に抽出されていることが望ましい。代表性とは、価値判断を含まない」としている。

研究の透明性が高まる」としている。さらに、コーパスの利用がもたらした変化として「定性的研究と定量的研究の関係の再構築という観点から捉えることができる。両者は、対立的な関係と思われがちであるが、むしろ、相補的な関係と捉えたほうがよい」とし、定量的な研究の特徴として、「網羅的記述」を挙げている。

コーパスから抽出されたデータを対象として分析を進めると、現象の全体像が把握できるのであるが、その中には例外があったり、自身の解釈にとって都合の悪い例があったりすることがある。そのような例を安易に切り捨てず、全体の中うまく位置付けるような解釈を導くことができれば、研究をさらに精緻化することができる。

(山崎 2016 : 14)

とし、コーパスのメリットの一つとしてデータを瞬時に集めることができるという点を挙げている<sup>36</sup>。

また、大関 (2017) は、第二言語習得研究の立場から学習者コーパスを使った研究の意義と限界を説いた講演の中で、「コーパスからは、学習者の言語使用の事実が得られる」とし、実験研究は仮説の検証はできるが、言語使用の「事実」はわからないと述べ、「ある言語形式がどんな形で使われているのか、どんな機能で使われているのか、それがどのように変化(発達)していくのかを見るためにはコーパスが必要」と述べている。その上でコーパスで分かることとして「意味のある文脈の中で、学習者が目標言語を使って伝えたいことをどう伝えていくのかが見られる」とし、具体的には「学習者が何をどう使っているかという事実」、「どんなパターンやどんな機能で使っているか」、「どんな変化のプロセスが見られるか」を挙げている。反対にコーパスで分からないこととして「起こらなかったこと」については解釈が困難であり、使えないのか、使わなかったのかはわからない」としている。

## 2.2 3種類の学習者コーパスを調査対象にすること

本研究では、3種類の学習者コーパスを用いて **corpus-driven** な立場から調査・考察するが、学習者コーパスを用いること、3種類のコーパスを用いることについて言及する。

まず、学習者コーパスを用いる理由は以下の3点による。

---

<sup>36</sup> もう1つ重要な変化として、非母語話者への貢献を挙げている。

- ①本研究の目的の1つは副詞「やはり」について「日本語教育に資する知見を得ること」である。そのために、副詞「やはり」の学習者の使用実態を把握することは必須であり、学習者の使用実態を踏まえなければ論は成立しない。
- ②副詞「やはり」には多くの研究の蓄積があるが、従来の副詞「やはり」の研究の考察は、内省・新聞・雑誌・小説・シナリオの用例によるものが多く、書き言葉に近い用例からの調査・検討であった。また、副詞「やはり」の研究は形態別の出現数を数えるといった量的研究を除き、実証的なコーパス等の言葉を用いた研究は不足している。
- ③学習者の使用実態の調査と考察から副詞「やはり」を検討することはこれまでされてこなかった。本研究では、語義の辞書的記述や日本語教材による提示だけでは全体像の把握が難しいと考えられる副詞「やはり」を学習者がどう理解し、どう産出しているのかを調査・検討する。母語話者の使用が学習者の習得のゴールではないが、学習者が理解し産出した副詞「やはり」と母語話者の使用実態の異なりの考察から、母語話者が意識してこなかった副詞「やはり」の一面の解明（を炙り出すこと）に繋がると考える。

次に、本研究では学習者の使用実態では I-JAS, B-JAS, BTSJ, を、母語話者の使用実態では、CEJC, を用いて調査する。コーパスはコーパスの設計やデータの集め方により、集められたデータに特徴がある。第5章、第6章、第7章では、3種類の学習者コーパスを対象とする。I-JAS と B-JAS のデータは、いずれも15の質問から成る約30分の半構造化インタビューのデータである。I-JAS は12の言語、17の国と地域1050人のデータを横断的に集めたもの、B-JAS は中国の大学に在籍する17人の4年間の日本語使用を縦断的に集めたものである点が異なっている。I-JAS と B-JAS はインタビューデータであり、調査者の質問に学習者が回答する形式をとっている。本研究では2つの学習者コーパスに加え、質問者と回答者の役割が固定していない日常会話に近い会話での学習者の実態を調査するために BTSJ を調査対象とした。BTSJ には様々な目的で収集された自然会話、インタビュー、ロールプレイ、ドラマなどの会話データが存在するが、その中から本研究の調査目的に照らして、自然会話のデータを調査対象とする。

## 2.3 意義と限界を踏まえた解釈

本節では、コーパスを用いて研究する際に留意すべき点を述べる。まず、コーパスにはデータの集め方により、集められたデータに性質がある。分析や結果の解釈はそれぞれのコーパスのデータの特徴を考えに入れる必要があるだろう。また、コーパスから得られる言語資料は設計のデザインに従って収集された資料の結果であり、発話者の発話時の意図や心情をフォローアップインタビューで問うことはできない。収集された文字資料・音声資料・映像資料からの分析、考察であることを念頭に置く必要がある。

本研究では、対象のコーパスにおいて副詞「やはり」がどんな形で使われているのか、どんな意味・機能で使われているのか、それがどのように変化していくのかを定量的に調査することから始める。次に、「corpus-driven な調査によって得られた評価値の高低が何に起因するかを説明するための理論を検討し、全体の中うまく位置付ける解釈」(前川 2007) ができる考察を加え、「定性的研究と定量的研究の関係の再構築(相補的な関係)」(山崎 2016, 2019b) が体現できる研究を目指したい。

## 3. 対象とするデータ概観

本節では調査対象とする学習者コーパスを概観し、「コーパスの理念と基礎情報」「コンテンツ」「語彙の特徴」「解釈する際留意する点」を記述する。

### 3.1 I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language)

#### 3.1.1 I-JAS の理念と基礎情報

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』は「第二言語としての日本語の習得研究とし、さまざまな要因の違いが日本語習得にいかに関与するかを日本語学、言語学、社会言語学、心理言語学、語彙論、談話研究などの領域から分析することを目的」(迫田他 2016) として構築された、「日本語学習者の話し言葉・書き言葉を大量に収集して電子化した言語資料で、I-JAS 中納言(検索システム)を備えたコーパス」(迫田他 2020) である。表 5-2 に示した日本を含む 17 の国と地域で、12 言語を母語とする日本語学習者 1000 名日本語母語話者 50 名、計 1050 名の話し言葉と書き言葉を横断的に調査・収集し構築したコーパスで、2012 年から 9 年の年月を費やし 2020 年 3 月に完成し公開されている。

表 5-2：収録されている学習者の国と地域

	環境	母語	収録人数
1	海外 教室 環境	スペイン語	50
2		ドイツ語	50
3		フランス語	50
4		ロシア語	50
5		英語	100
6		インドネシア語	50
7		タイ語	50
8		ベトナム語	50
9		ハンガリー語	50
10		トルコ語	50
11		中国語	100
12		中国語(台湾)	100
13		韓国語	100
計			850

	環境	母語	収録人数
14	国内	教室環境学習者*1	100
15		自然環境学習者*2	50
計			150

\*1: 体系的に日本語を学習している  
\*2: 体系的に日本語を学習していない

	環境	母語	収録人数
16	国内	日本語	50
計			50

合計

JFL 環境の日本語学習者	850
JSL 環境の日本語学習者	150
日本語母語話者	50
合計	1050

収録されている調査対象者は、日本語が第2言語であること、日本語母語話者と30分の対話に対応でき、ある程度読み書きが可能である学習者であることを条件としている。習得環境別に3種類の対象者「海外の教室環境学習者（JFL環境）」「国内の教室環境学習者（初級の段階で来日してJSL環境で学んでいる、日本の教育機関で1年以上学習している、日本語を体系的に学んでいる）」「国内の自然環境学習者（来日時10歳以上で来日してから1年以上経過している、JSL環境にあるが日本語を体系的に学んでいない）」のデータを収録している。また、統制群として日本語母語話者（日本在住である、バイリンガルでない）のデータも収録してある。

また、学習者の日本語能力のレベルは、2種類の客観テスト、「J-CAT<sup>37</sup>」と「SPOT<sup>38</sup>」で

<sup>37</sup> J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は、400点満点で聴解・語彙・文法・読解から日本語能力を判定するテスト。

<sup>38</sup> SPOT (TTBJ: Tsukuba Test-Battery of Japanese) は、90点満点で言語運用力の面から日本語能力を測定するテスト。

確認されている。学習者の「J-CAT」のレベル別人数を表 5-3 に、J-CAT スコア互換表を表 5-4 に、母語別の得点のばらつきを図 5-1 に示す。同様に「SPOT」のレベル別人数を表 5-5 に、SPOT レベルの目安を表 5-6 に、母語別の得点のばらつきを図 5-2 に示す。<sup>39</sup>

表 5-3:J-CAT レベル別人数

レベル	人数	割合
超級	2	0.31
上級	99	15.23
中級	523	80.46
初級	26	4.00
総計	650	100.00

表 5-4:J-CAT スコア互換表

J-CAT	Proficiency Level	JLPT
-100	Basic	Level 4 :初
101-150	Pre-Intermediate	Level 3 :中
151-200	Intermediate	— :中
201-250	Intermediate-High	Level 2 :中
251-300	Pre-Advanced	Level 1 :上
301-350	Advanced	— :上
351-400	Near Native	— :超

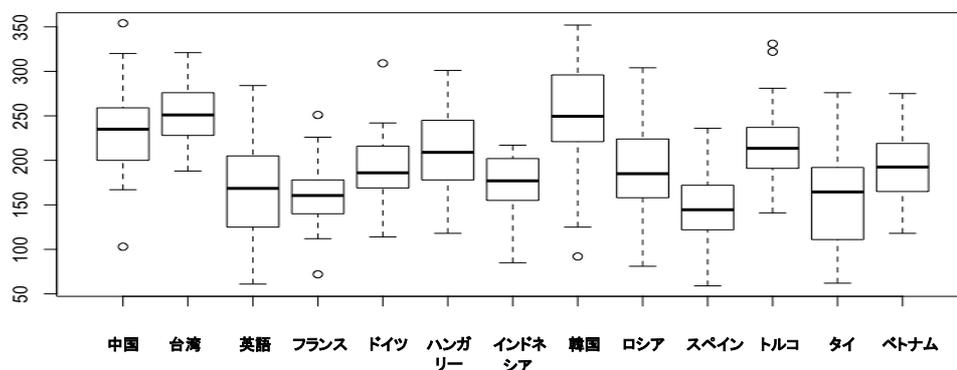


図 5-1:国別「J-CAT」得点

表 5-5:SPOT レベル別人数

レベル	人数	割合
上級	61	9.38
中級	462	71.08
初級	126	19.38
入門	1	0.15
総計	650	100.00

表 5-6:SPOT レベルの目安

得点	レベル
0~30	入門
31~55	初級
56~80	中級
81~90	上級

<sup>39</sup> 表 5-3, 図 5-1, 表 5-5, 図 5-2 の数値は第 5 章の調査対象者 JFL の学習者 650 名のものである。

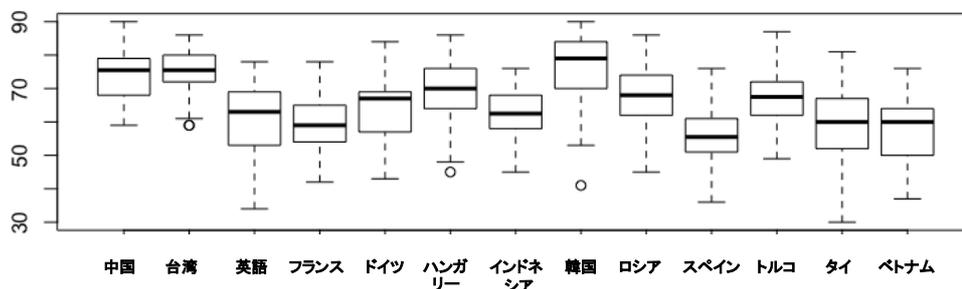


図 5-2: 国別「SPOT」得点

本調査の学習者の日本語のレベルは以下の特徴がある。

SPOT の結果では中級レベル 71.08%，上級レベル 9.38%，初級レベル 19.38%となっている。韓国語を母語とする協力者は 42%，中国語(台湾)を母語とする協力者は 22%，中国語・ハンガリー語を母語とする協力者は 18%が上級レベルである。一方，スペイン語を母語とする協力者の 50%が初級，ベトナム語を母語とする協力者の 44%が初級，トルコ語を母語とする協力者の 34%が初級・入門レベル<sup>40</sup>，英語を母語とする協力者の 30%初級レベルとなっており，母語別のレベルの割合には差が見られる。

J-CAT の結果では中級レベル 80.46%，超・上級レベル 15.54%，初級レベル 19.38%となっている。中国語(台湾)を母語とする協力者は 50%，韓国語を母語とする協力者は 48%，中国語を母語とする協力者は 42%が上級レベル，トルコ語を母語とする協力者の 20%，英語を母語とする協力者の 14%が初級レベルとなっており，母語別のレベルの割合には差が見られる。

SPOT の結果は「自然な速度で即時解答という即時的処理能力を要求するテストであるため，手続き的知識の自動化を間接的に推計している」(小林 2014)，「「SPOT90-2」の得点は「J-CAT」の「Reading」と「Listening」の得点と相関している」(李 他 2015)としている。表 4.4 「J-CAT スコア互換表」と表 4.5 「SPOT レベルの目安」による「中級」「初級」線引きは，本データではやや異なりがある。

<sup>40</sup>入門レベル 1 名の得点は 30 点であり，初級レベル (31～55 点) に近いレベルといえる。

### 3.1.2 I-JAS のコンテンツ

実施されたタスクは表 5-7 の通り 7 種類のタスクのデータが収録されている。「ストーリーテリング」「対話」「ロールプレイ」「絵描写」「ストーリーライティング」は全員に、「メール文」「エッセイ」は任意で実施されている。

表 5-7 : I-JAS タスク

	タスク種類	内容	データの種類
事前 調査	メール文	教師へのメール文①推薦状を依頼②期日までに課題提出できないことを伝える③依頼に対応できないことを伝える	作文
	エッセイ	「私たちの食生活：ファーストフードと家庭料理(600字程度)」	作文
対面 調査	ストーリーテリング	連続したイラストを描写①ピクニック(4コマ)②鍵(5コマ)	発話
	対話	半構造化インタビュー	発話
	ロールプレイ	①アルバイト出勤日数の変更を依頼 ②店長からの仕事内容の変更を断る	発話
	絵描写	イラストを見て説明する	発話
	ストーリーライティング	ストーリーテリングの課題①②を文章化	作文

調査対象とするタスクは、本調査が話し言葉の使用実態の調査であることから、「対話」のデータを使用することとした。

「対話」(30分の半構造化インタビュー)の特徴と内容の留意点を迫田(2016)では次のように記している。①自然な日本語会話の流れを重視し、学習者の自然な言語運用のデータが収録できることを目的としている。②OPI(Oral Proficiency Interview)を参考にしており、OPIテストの資格を有した調査員が調査を実施している。③評価を目的としたインタビューではないので、突き上げや、話題を大きく変化することはせず、ほぼ統一された話題に沿って対話を展開し、データ間での比較ができるようにしている。

分析の対象とする「対話」の半構造化インタビューの話題を表 5-8 に記した。

表 5-8: 半構造化インタビューの話題詳細

	話題・ロールプレイタスク	
話題 1	天候・交通手段・来日の動機など	アイスブレイキング
話題 2	昨日の出来事	アイスブレイキング
話題 3	日本語学習の動機・日本に対する関心事	日本や日本語に対する興味・関心
話題 4	日本の本・映画・ドラマなどの紹介	日本や日本語に対する興味・関心
話題 5	学習者の出身地	故郷・出身地
話題 6	学習者の出身地の料理や産物	故郷・出身地
話題 7	学習者の出身地の有名な観光地	故郷・出身地
話題 8	学習者の誕生日・伝統的な行事	過去の体験
話題 9	小さい頃, どんな子供だったか	過去の体験
話題 10	児童・青年期の好きだった恩師	過去の体験
話題 11	恐怖体験・幸福体験	過去の体験
話題 12	将来の夢や進路	将来・未来
話題 13	住むとしたら都会と田舎どちらがいいか	意見述べ
話題 14	お金と時間, どちらが大切か	意見述べ
話題 15	この後の過ごし方など	クールダウン

具体的な話題は、①アイスブレイキングー「天候・交通手段・来日の動機など」「昨日の出来事」、②日本や日本語に対する興味・関心ー「日本語学習の動機・日本に対する関心事」「日本の本・映画・ドラマなどの紹介」、③学習者の出身地・故郷ー「学習者の出身地」「学習者の出身地の料理や産物」「学習者の出身地の有名な観光地」、④過去の体験ー「学習者の誕生日・伝統的な行事」「小さい頃, どんな子供だったか」「児童・青年期の好きだった恩師」「恐怖体験・幸福体験」、⑤将来・未来ー「将来の夢や進路」⑥意見述べー「住むとしたら都会と田舎どちらがいいか」「お金と時間, どちらが大切か」、⑦クールダウンー「この後の予定」の 15 の話題が順序立てて用いられている。

ただし、日本語母語者へのインタビュー項目は、②日本や日本語に対する興味・関心ー「日本語学習の動機・日本に対する関心事」を実施していない。代わりにアイスブレイキング段階で、各自の関心事についての話題が展開されており、旅行やスポーツや読書などの趣味や

身の回りの仕事や家族のことが語られている。

### 3.1.3 I-JAS 対話データの語彙的特徴

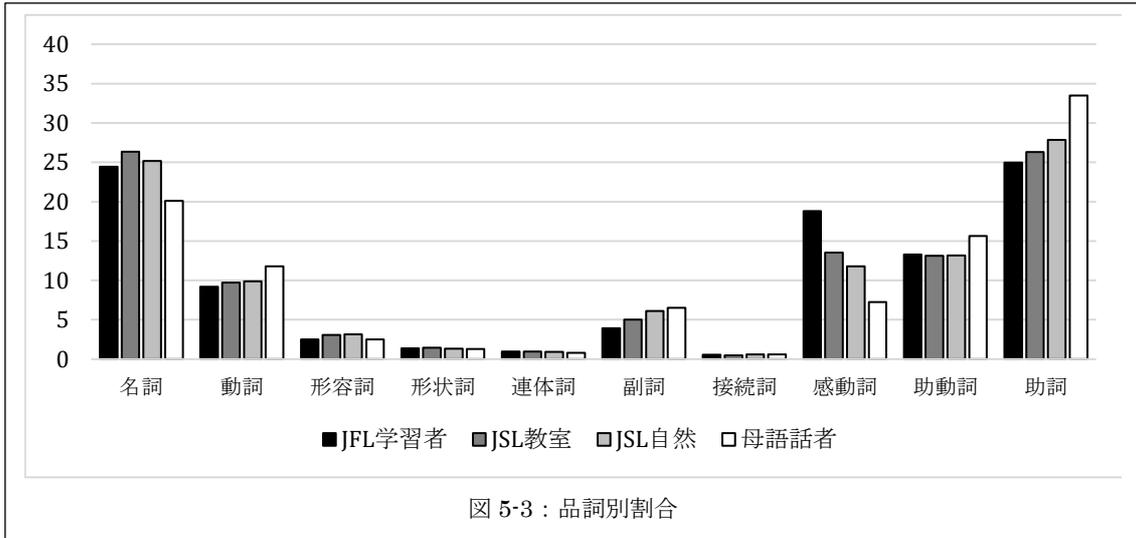
本節では、対象とした I-JAS の JFL 学習者の語彙的特徴を JSL 教室環境学習者、JSL 自然環境学習者と比較して記述する。

まず、「品詞別頻度、割合」を表 5-9、図 5-3 にまとめた。JFL 学習者、JSL 教室環境学習者、JSL 自然環境学習者に加え、統制群として I-JAS 母語話者を合わせて示した。副詞については、ごくわずかであるが差異が見られ、JFL 学習者 (3.92%)、JSL 教室環境学習者 (5.00%)、JSL 自然環境学習者 (6.12%)、I-JAS 母語話者 (6.54%) の順に割合が高くなっていった。副詞と反対に、フィラーが含まれる感動詞の割合が、JFL 学習者 (18.79%)、JSL 教室環境学習者 (13.55%)、JSL 自然環境学習者 (11.78%)、I-JAS 母語話者 (7.23%) の順に割合が低くなっていることが観察できた。

表 5-9:品詞別頻度・割合

	名詞	動詞	形容詞	形状詞	連体詞	副詞	接続詞	感動詞	助動詞	助詞	合計
JFL	381740	143910	38937	21286	15337	61277	8945	293571	207517	390184	1562704
%	24.43	9.21	2.49	1.36	0.98	3.92	0.57	18.79	13.28	24.97	100
JSL 教	50990	18839	5959	2787	1898	9686	898	26234	25404	50972	193667
%	26.33	9.73	3.08	1.44	0.98	5.00	0.46	13.55	13.12	26.32	100
JSL 自	38266	15016	4796	2011	1404	9300	906	17912	20037	42342	151990
%	25.18	9.88	3.16	1.32	0.92	6.12	0.6	11.78	13.18	27.86	100
母語	42623	24965	5274	2728	1741	13855	1295	15313	33122	70929	211845
%	20.12	11.78	2.49	1.29	0.82	6.54	0.61	7.23	15.64	33.48	100

表中で、JFL : JFL 環境で学ぶ学習者、JSL 教 : JSL 教室環境で学ぶ学習者、JSL 自 : JSL 自然環境で学ぶ学習者、母語 : 日本語母語話者をそれぞれ示す。



次に、各コーパスの副詞の「延べ・異なり・TTR<sup>41</sup>」を表 5-10 にまとめた。JFL 学習者、JSL 教室環境学習者、JSL 自然環境学習者に加え、統制群として I-JAS 母語話者のデータを合わせて示した。

表 5-10: 延べ・異なり・TTR

	JFL 学習者	JSL 教室環境	JSL 自然環境	母語話者
異なり	317	128	160	315
延べ	64690	9686	9300	13855
TTR	0.0049	0.0132	0.0172	0.0227

使用した語彙の多様性を示す TTR 値は、JFL 学習者(0.0049)、JSL 教室環境学習者(0.0132)、JSL 自然環境学習者 (0.0172)、I-JAS 母語話者 (0.0227) であった。用いた副詞の多様性は「JFL 学習者<JSL 教室環境学習者<JSL 自然環境学習者<I-JAS 母語話者」の順に豊かになっていることが観察できた。

次に、JFL 学習者、JSL 教室環境学習者、JSL 自然環境学習者、I-JAS 母語話者別の副詞の出現数の上位 10 位までをまとめ、表 5-11 に示した。

<sup>41</sup> TTR(type-token ratio)は語彙の多様性を示す指標の 1 つで、テキストに占める総語数 (token) と異語数 (type) に基づき算出する。「発表語彙の発達した学習者は、語彙の繰り返しを避け、さまざまな言い換え表現を使用するなど、より多様な語彙を産出する」という仮説に基づいた指標。Read (2000) は語彙の豊かさを示す指標として、4 つの観点、語彙の多様性 (lexical variation or lexical diversity)、語彙の洗練性 (lexical sophistication)、語彙の密度 (lexical density)、誤りの数 (number of errors) をあげている。

JFL 学習者と JSL 教室環境学習者の上位 10 位は順位は異なるが同様の副詞が出現している。になっている。JSL 自然環境学習者は「やはり」「まあ」「こう」「いろいろ」が、母語話者は「こう」「やはり」「まあ」「けっこう」「どう」が異なっている。

表 5-11: JFL 学習者, JSL 教室環境学習者, JSL 自然環境学習者,

I-JAS 母語話者別の副詞の出現数の上位 10 位

	JFL 学習者		国内教室環境		国内自然環境		母語話者	
	副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度	副詞	頻度
1	ソウ	14372	ソウ	2970	ソウ	2581	ソウ	3650
2	チョット	8146	チョット	1317	チョット	877	モウ	911
3	タブン	4603	タブン	780	モウ	641	チョット	855
4	トテモ	4577	モウ	658	タブン	409	コウ	836
5	アマリ	3903	アマリ	603	アマリ	335	<u>ヤハリ</u>	693
6	モウ	2695	トテモ	379	<u>ヤハリ</u>	286	マア	692
7	タクサン	2684	イチバン	335	イチバン	220	アマリ	433
8	ヨク	2322	ヨク	306	マア	189	ケッコウ	424
9	イチバン	2212	タトエバ	298	コウ	185	タブン	359
10	タトエバ	1885	<u>ヤハリ</u>	259	イロイロ	175	ドウ	295

・「ヤハリ」は JFL 学習者では 11 位 (1577) であった。

最後に、環境の異なる学習者全体の中で副詞「やはり」を使用した人の割合を表 5-12 に示した。JFL 学習者 (32.9%), JSL 教室環境学習者 (28.0%) と 3 割程度の使用であるのに対し、JSL 自然環境学習者は 90% が副詞「やはり」を使用していることが観察された。

表 5-12: 副詞「やはり」使用人数・割合

	JFL 学習者	JSL 教室環境	JSL 自然環境	I-JAS 母語話者
副詞「やはり」使用	214	21	45	50
割合	32.9	28.0	90.0	100
全体人数	650	75	50	50

### 3.1.4 解釈する際に留意すべき点

I-JAS データを分析する際の留意点を2点記したい。

一つは、I-JAS データ採集の特徴から、やや頻繁に話題の変わる「半構造化インタビュー」であるということだ。名大会話コーパス<sup>42</sup>のデータは母語話者同士の雑談が収録されているが、I-JAS データには(1)のように「やっぱりね」「やっぱ」と対話の相手の意図を副詞「やはり」を用いることにより発話者も同じように予期していたと表明したり、(2)のように一つの話題に対して「うん」によりお互いの会話の意図が同じ方向に進んでいることを確認し合っている中に出現する「やっぱり」は、対話ではなく個人の発話で、発話の形式や内容を検索しているときに出現する副詞「やはり」のように思えるが、(1)(2)のような使用は少ないのではないかと考える。

- (1) A: 上代文学はF先生みたいなのは、ちょっと違うからって。#  
B: うん#  
A: 最初にくぎが刺される。#  
B: そうそう。#  
A: あんなふうにあの、実際歩いたりするんじゃ、あれとはなんか流派が違う  
みたいな、なんか、そういう言い方した。#  
B: うん#  
A: うん#  
B: うん。#  
A: 要するに、ば、ばかにするじゃないけど、あんなじゃないからって。#  
B: ああ、でも、なんか、そうかもしれんなってね。#  
A: やっぱりね。#  
B: やっぱ心理系、その福祉の中でも、心理系っていうのに来るのには、みんな、ま、フロイトとかユングとか読んできてるのかもしれないけどね。#  
A: うん#  
B: そういうんじゃないんだよね。#

---

<sup>42</sup>「名大会話コーパス」は日本語母語話者同士の雑談が、30分～1時間が収録されている。会話参加人数は2名が原則だが、3名、4名での会話もある。話題を一切制限していない雑談であるが、参加者は録音していることを知らされている。

- A: そうそう#
- B: もっと科学的なものなんだよねっていうことをひたすら言って。#
- A: \*\*\*手を抜いてたような気がする。 (名大会話コーパス: data050)
- (2) A: ほーんとに未知の世界だから。#
- B: うん#
- A: でー、何か夜になったら真っ暗になるし、虫はいっぱいいるっていう状況で。#
- B: うん#
- A: うーん#
- B: そうだよー#
- A: もう何か、ホームシックになってね、大変な子はいたよ。#
- B: うん#
- A: うん#
- B: うん#
- A: やっぱり#
- B: うん#
- A: で、そういう子に対してさ、日本語だけでさ続けること絶対無理じゃない?#
- B: うん#
- A: 無理、無理。#
- B: うん、もうほんとにね、泣いてもう精神的に、よろよろになってる子にはね、日本語で話しかけたら余計だめだから、もうそんなときはねー、英語でなだめるしかない。# (名大会話コーパス: data016)

迫田他 (2016) には「決して、「質問-答え」のようなインタビュー問答ではなく、リラックスできる雰囲気を作ることが大切」とインタビュー採取に際しての留意点が述べられているが、話題が 15 と多く準備されているとしても、ある程度固定化した話題である点、質問と答えというかたちでインタビューが展開されるという点 (学習者は答えを担当することが多い) そこから抽出できる傾向を考察していくという認識を念頭に置きたい。

また、もう一つは、迫田他（2016）にはデータの目的として「音声・音韻の研究、言いよどみや言いさし、ポーズ、ターンテークングやコードスイッチングなどの会話分析研究、非言語によるコミュニケーション研究に対応できる データは目指さない」とあるが、対話データである関係上、特に副詞「やはり」については抽出された「言いよどみや言いさし」について考察することになる。この点も、書き起こしデータ・音声データから抽出できる傾向の範囲内での考察である点に留意したい。

## 3.2 B-JAS (Beijing corpus of Japanese as a Second language)

### 3.2.1 B-JAS の理念と基礎情報

『北京日本語学習者縦断コーパス：B-JAS』は、日本語教育や日本語の第二言語習得研究の実証研究に資する縦断コーパスの構築を目的とし、中国語を母語とする日本語学習者の話し言葉や書き言葉を縦断的に収集して電子化した言語資料である（野山 2018）。B-JAS は I-JAS に準拠して構築されており、調査の項目や調査方法は I-JAS に準じている。

調査は、2016 年から 2019 年にわたり、中国の大学に在籍する学習者 17 名を対象に実施された。調査の概要を表 5-13 に示した。全 11 回の調査の中で、作文データは 11 回、発話データは 8 回収録されている。また、各学年の初回の調査で日本語能力を測るため、J-CAT と SPOT が実施されている。調査の過程で、1 名を除く 16 名の学習者が日本の大学に留学しており、8 回調査（2018 年 5 月）は日本で行われている<sup>43</sup>。

---

<sup>43</sup> 日本に留学しなかった CCB06 は、全てのデータにおいて副詞「やはり」を用いていない学習者の一人であった。そのため、日本留学が副詞「やはり」の使用に影響するかについては検討できない。

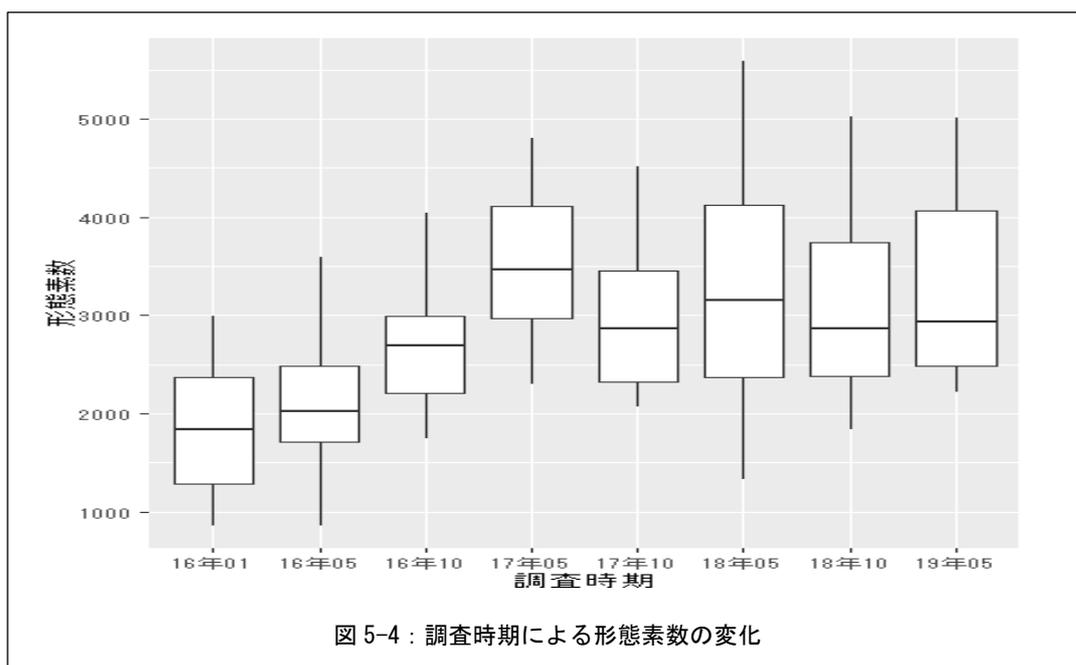
表 5-13 : 調査の概要

調査回	調査時期	学 年	作文 データ	発話 データ	J-CAT SPOT
1回	2016年1月	1	○	第1回	○
2回	2016年5月		○	第2回	—
3回	2016年10月	2	○	第3回	○
4回	2017年1月		○	—	—
5回	2017年5月		○	第4回	—
6回	2017年10月	3	○	第5回	○
7回	2018年1月		○	—	—
8回	2018年5月		○	第6回	—
9回	2018年10月	4	○	第7回	○
10回	2019年1月		○	—	—
11回	2019年5月		○	第8回	—

さらに、各回の個人別の形態素数を表 5-14 に、調査時期による形態素数の変化を図 5-4 にまとめた。この結果から、形態素数は第 1 回から第 4 回にかけて漸増していること、第 5 回から第 8 回は使用した形態素数の平均はほぼ一定していることが観察できた。

表 5-14 : 個人のデータの形態素数と標準偏差・分散

id	1 年		2 年		3 年		4 年		総計	sd	var
	第1回	第2回	第3回	第4回	5回	第6回	第7回	第8回			
CCB01	1062	2406	2110	3698	3133	1881	2382	3007	19679	819.9	672275.3
CCB02	1518	1641	1748	2294	2143	1326	2293	2216	15179	384.4	147731.4
CCB03	2314	2209	4037	3865	2556	5584	3318	2939	26822	1127.8	1271921.1
CCB04	2580	2489	2996	4790	3450	4255	4196	5005	29761	979.9	960137.6
CCB05	1383	1529	1972	2704	2245	2371	2882	2918	18004	587.4	345034.6
CCB06	1193	1193	1899	2968	2319	1876	1839	2483	15770	611.7	374208.2
CCB07	2253	1844	2923	3166	2870	3149	4215	4112	24532	814.5	663474.6
CCB08	949	1712	2926	3643	2533	2978	2490	2479	19710	822.4	676295.9
CCB10	2494	1839	2461	2413	2670	2470	2708	2213	19268	276.3	76357.4
CCB11	2247	3317	3397	4364	3261	4292	4004	3467	28349	685.0	469266.8
CCB12	1488	1773	2434	4113	4514	4119	3739	4068	26248	1192.2	1421458.9
CCB13	2925	2625	3378	4671	3564	5375	3735	4335	30608	918.4	843476.9
CCB14	2992	3597	3597	4805	3655	3853	5018	4494	32011	697.9	487126.6
CCB15	1834	2044	2491	2698	2864	3197	1957	2816	19901	493.2	243223.1
CCB16	863	863	2990	2976	2155	2658	2864	2299	17668	883.4	780474.6
CCB17	2367	2830	2206	3222	4043	3278	2765	3906	24617	665.8	443273.8
CCB18	1288	2027	2688	3459	2065	2341	1959	2798	18625	655.5	429623.0
総計	31750	35938	46253	59849	50040	55003	52364	55555	386752		
sd	699.1	710.3	644.4	818.0	719.3	1206.3	932.0	886.7			
var	488672.1	504579.0	415286.8	669205.6	517329.4	1455221.0	868702.7	786201.1			



15 の話題からなる約 30 分の半構造化インタビューのデータだが、個人差があり、特に第 6 回の分散が大きくなっている。このことは、日本語レベルの向上に伴い、簡潔に目標の表現ができるようになった学習者と、既習の表現を使いこなして回答した学習者がいたことが個人差に繋がっている可能性がある。

次に、学習者の調査時点における日本語レベルの指標として J-CAT の結果を示す。図 5-5 に各学年の初めの調査時に行われた J-CAT の結果、表 5-15 に J-CAT スコア互換表、表 5-16 に個人別 J-CAT の結果を示した。

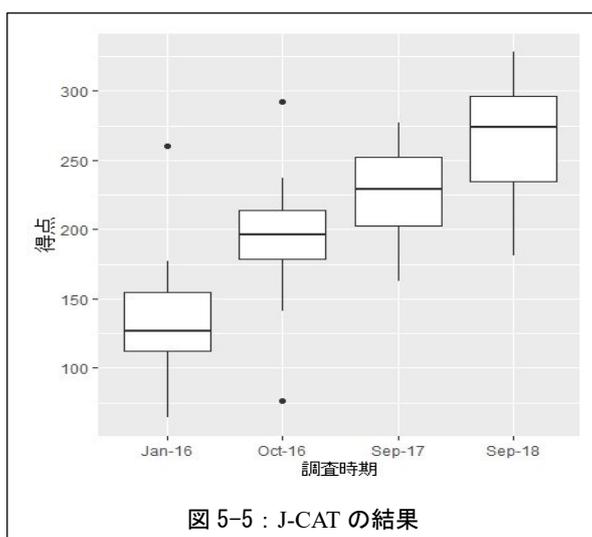


表 5-15: J-CAT スコア互換表(再掲)

J-CAT	Proficiency Level	JLPT
-100	Basic	Level 4 :初
101-150	Pre-Intermediate	Level 3 :中
151-200	Intermediate	— :中
201-250	Intermediate-High	Level 2 :中
251-300	Pre-Advanced	Level 1 :上
301-350	Advanced	— :上
351-400	Near Native	— :超

表 5-16 : 個人別 J-CAT の結果

ID	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	総計	標準偏差	分散
CCB01	177	204	229	296	906	44.13899	1948.25
CCB02	260	292	251	299	1102	20.40221	416.25
CCB03	115	196	260	278	849	63.88417	4081.19
CCB04	157	237	252	328	974	60.69802	3684.25
CCB05	64	76	163	238	541	70.55982	4978.69
CCB06	89	141	164	181	575	34.65094	1200.69
CCB07	123	179	261	294	857	67.29552	4528.69
CCB08	84	208	193	209	694	52.06006	2710.25
CCB10	150	195	237	269	851	44.73463	2001.19
CCB11	140	155	220	212	727	34.77337	1209.19
CCB12	116	188	193	201	698	34.09179	1162.25
CCB13	127	144	246	284	801	66.40171	4409.19
CCB14	139	183	203	301	826	59.26846	3512.75
CCB15	169	214	277	257	917	41.57147	1728.19
CCB16	155	220	210	316	901	57.94556	3357.69
CCB17	108	214	210	235	767	49.27664	2428.19
CCB18	112	215	253	274	854	62.29968	3881.25
総計	2285	3261	3822	4472	13840	802.40482	643853.5
sd	43.165	45.197	33.065	42.132			
var	1863.2	2042.7	1093.3	1775.1			
abc	134.4	191.8	224.8	263.1			

この結果から学年が進むにつれて学習者の日本語のレベルは上がっていることが分かる。平均点から見た学習者のレベルは、1 年次 134.4（中級前半），2 年次 191.8（中級），3 年次 224.8（中級後半），4 年次 263.1（上級前半）であった。

### 3.2.2 B-JAS のコンテンツ

B-JAS の枠組みは I-JAS を基盤としており、タスクの内容や収録の手法は I-JAS に準拠している。表 5-17 に B-JAS のタスクを示した。縦断的な調査であることから、比較できる範囲でタスクのバリエーションを増やす配慮がなされている。

表 5-17 : B-JAS タスク

	タスク種類	内容	データ
対面 調査	ストーリーテリング	連続したイラストを描写 I-JAS 版と同様:①ピクニック(4 コマ)②鍵(5 コマ) B-JAS 版:①お片付け(4 コマ)②お手伝い(5 コマ)	発話
	対話	半構造化インタビュー ①I-JAS 版と同様②B-JAS 版:意見述べのバリエーションあり	発話
	ロールプレイ	I-JAS 版と同様①アルバイト出勤日数の変更を依頼②店長からの仕事内容の変更を断る B-JAS 版①推薦状を依頼②先生からの観光案内の依頼を断る	発話
	絵描写	イラストを見て説明する(I-JAS と同様のイラスト)	発話
事後 調査	ストーリーライティング	ストーリーテリングの課題を文章化 I-JAS 版と同様:①② B-JAS 版:①②	作文
	作文	「私」に関わる 11 の異なる課題の作文(200 字~1600 字)を オンラインで提出 統制群として母語話者作文あり	作文

本研究での調査対象は、I-JAS での調査と同様に 15 の話題から成る約 30 分の半構造化インタビューを収録した「対話データ」を用いた。表 5-18 にインタビューの話題を示す。縦断的な調査であることから、比較できる範囲で構造化インタビューの話題にバリエーションを加える配慮がなされている。

表 5-18: インタビュー話題詳細

	話題	
話題 1	天候・交通手段・来日の動機など	アイスブレーキング
話題 2	昨日の出来事	アイスブレーキング
話題 3	日本語学習の動機・日本に対する関心事	日本や日本語に対する興味・関心
話題 4	日本の本・映画・ドラマなどの紹介	日本や日本語に対する興味・関心
話題 5	学習者の出身地	故郷・出身地
話題 6	学習者の出身地の料理や産物	故郷・出身地
話題 7	学習者の出身地の有名な観光地	故郷・出身地
話題 8	学習者の誕生日・伝統的な行事	過去の体験
話題 9	小さい頃, どんな子供だったか	過去の体験
話題 10	児童・青年期の好きだった恩師	過去の体験
話題 11	恐怖体験・幸福体験	過去の体験
話題 12	将来の夢や進路	将来・未来
話題 13	住むとしたら都会と田舎どちらがいいか 子供に習い事を多くさせるか子供の自由にさせるか	意見述べ
話題 14	お金と時間, どちらが大切か 遣り甲斐のある仕事と給料のいい仕事どちらを選ぶか	意見述べ
話題 15	この後の過ごし方など	クールダウン

### 3.2.3 B-JAS 対話データの語彙的特徴

考察対象のデータを R MeCab Unidic-cwj-3.1.0 版を用い形態素解析し, データにおける品詞別形態素数とその割合を表 5-19 に, 各回の名詞・副詞・感動詞の形態素数の割合を図 5-6 にまとめた。

表 5-19：品詞別形態素数と割合

	名詞	動詞	形容詞	形状詞	連体詞	副詞	接続詞	感動詞	助動詞	助詞	合計
第1回	12410	2248	596	433	344	920	425	6899	2700	5410	32385
%	38.3	6.9	1.8	1.3	1.1	2.8	1.3	21.3	8.3	16.7	100
第2回	12491	3211	918	604	653	1261	651	7181	3588	7251	37809
%	33.0	8.5	2.4	1.6	1.7	3.3	1.7	19.0	9.5	19.2	100
第3回	14340	3758	963	545	1074	1645	765	9780	4085	9300	46255
%	31.0	8.1	2.1	1.2	2.3	3.6	1.7	21.1	8.8	20.1	100
第4回	19270	5479	1323	772	1706	2502	1042	8971	5516	13302	59883
%	32.2	9.1	2.2	1.3	2.8	4.2	1.7	15.0	9.2	22.2	100
第5回	15308	4769	1254	567	1725	2014	879	6717	4855	11855	49943
%	30.7	9.5	2.5	1.1	3.5	4.0	1.8	13.4	9.7	23.7	100
第6回	16814	5723	1425	724	1361	3426	1101	4994	5779	13690	55037
%	30.6	10.4	2.6	1.3	2.5	6.2	2.0	9.1	10.5	24.9	100
第7回	15365	5658	1144	653	1020	3295	943	4880	5940	13504	52402
%	29.3	10.8	2.2	1.2	1.9	6.3	1.8	9.3	11.3	25.8	100
第8回	16701	5703	1309	655	1412	3726	935	5539	5837	13784	55601
%	30.0	10.3	2.4	1.2	2.5	6.7	1.7	10.0	10.5	24.8	100

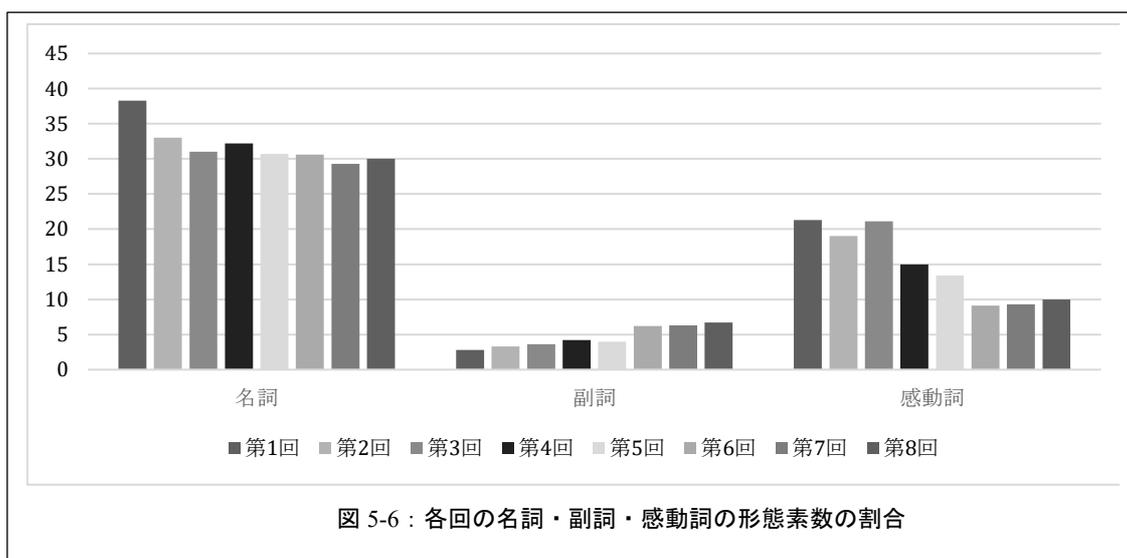


図 5-6：各回の名詞・副詞・感動詞の形態素数の割合

副詞は第1回(2.8%)から第5回(4.0%)までは漸増し、第6回から第8回は、第6回(6.2%)第7回(6.3%)第8回(6.7%)と6%代の割合になっていた。また、名詞は、第1回(38.3%)と全体の約4割をしめていたが、以降はいずれの回も第2回(33.0%)、第3回(31.0%)、第4回(32.2%)、第5回(30.7%)、第6回(30.6%)第7回(29.3%)第8回(30.0%)と約30%の割合であった。感動詞は第1回(21.3%)、第2回(19.0%)、第3回(21.1%)と高い割合で使用され、第4回(15.0%)、第5回(13.4%)と漸増し、第6回から第8回は、第6回(9.1%)第7回(9.3%)第8回(10.0%)と9%強の割合となっていた。

各回のインタビューデータの収録時間と記号、補助記号、空白を除いた形態素数を表5-20に示した。収録時間の総計は75:37:56、形態素数の総計は389315であった。使用語彙の豊かさを示すTTRは、感動詞・フィラーの出現が他の6回に比べて多い第1回、第2回を別にして、学年が進むにつれて使用語彙が豊かになっている。

表5-20：収録時間、総形態素数、TTR、副詞の中での副詞「やはり」出現の割合

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
収録時間	9:08:17	9:37:50	9:22:36	10:10:06	9:35:18	9:01:06	8:57:03	9:45:40
形態素数	32385	37809	46255	59883	49943	55037	52402	55601
TTR	0.0446	0.0499	0.0395	0.0373	0.0416	0.0450	0.0456	0.0471
副詞(延べ)	920	1261	1645	2502	2014	3426	3295	3726
副詞(異なり)	91	98	128	141	129	154	136	155
「やはり」出現数	8	16	63	73	104	124	142	158
「やはり」/副詞(%)	(0.87)	(1.27)	(3.83)	(2.92)	(5.16)	(3.62)	(4.31)	(4.24)
使用した人	4	7	10	11	13	15	12	14
使用した人の割合(%)	(23.5)	(41.2)	(58.8)	(64.7)	(76.5)	(88.2)	(70.6)	(82.4)

次に、表5-21に第2回・第4回・第6回・第8回に出現する副詞上位10を示した。副詞「やはり」は第2回(17位)、第4回(10位)、第6回(6位)、第8回(6位)であった。他の副詞では「もう」「まあ」順位が上がり、「とても」「ずっと」順位が下がっていることが観察できた。

表 5-21 : 副詞の中出現数上位 10

順位	第 2 回		第 4 回		第 6 回		第 8 回	
	単語	出現数	単語	出現数	単語	出現数	単語	出現数
1	ソウ	442	ソウ	592	ソウ	741	ソウ	945
2	トテモ	135	チョット	221	マア	422	マア	566
3	チョット	95	マア	156	チョット	400	タブン	379
4	ズット	82	トテモ	149	タブン	377	チョット	243
5	タブン	81	タブン	139	トテモ	139	モウ	240
6	イチバン	69	ドウ	129	ヤハリ	126	ヤハリ	161
7	タエバ	67	モウ	94	アマリ	118	モシ	101
8	ドウ	47	イチバン	86	コウ	113	アマリ	96
9	イロイロ	35	ズット	76	モウ	101	トテモ	92
10	ヨク	34	ヤハリ	74	ズット	75	ゼンゼン	73

・第2回で「ヤハリ」は17位であった。

### 3.2.4 解釈する際に留意すべき点

B-JAS の枠組みは I-JAS に準拠しているため、解釈する際に留意すべき点は 3.1.4 に記述した点と同様である。さらに、縦断調査であるために、半構造化インタビューの話題が奇数回と偶数回では、微調整がされているため、軽々に比較できない点があること、広義の順序効果<sup>44</sup>の可能性がある点は留意すべきである。

## 3.3 BTSJ (Basic Transcription System for Japanese)

### 3.3.1 BTSJ の理念と基礎情報

『BTSJ 日本語自然会話コーパス : BTSJ 』は、「人間の相互作用としての「言語運用」の語用論分析に適した形で文字化され、蓄積された「自然会話のコーパス」の作成と自然会話

<sup>44</sup> 順序効果とは、実験や調査による測定で、測定する対象を被験者・調査対象者に提示する順序の相違が、測定・回答結果に影響を及ぼすという効果である。広義には順序の違いや時間差によって表れる順応の過程や順向抑制、逆向抑制などの現象を意味する。

データを研究者間で共有化することが必須である」(宇佐美・中俣 2013) という社会的要請に基づいてデータを収集したコーパスで、『BTSJ1000 人日本語自然会話コーパス』として 2023 年に完成版が公開されている。その目的は「「相互行為としての会話」の対人コミュニケーション論、語用論的分析に適したコーパスの構築」(宇佐美・山崎 2018) であるとしている。

コーパスの特徴として、宇佐美 (2023) では、次の 3 点を挙げている。①「言語社会心理学的アプローチ」(宇佐美 1999) と「総合的会話分析」(宇佐美 2015) の方法論に基づき、会話参加者の年齢、性別、話題などを統制したデータ群が収録されている。②発話の重なりや沈黙など、語用論的分析に不可欠な情報を記して細やかな定性的分析を可能にしている。統一された文字化のルール「基本的な文字化の原則」(BTSJ: Basic Transcription System for Japanese) によって文字化したトランスクリプトの形で提供する。③「人間の相互作用としての会話分析」は、「会話自体」の分析のみならず、「録音された会話以外の社会的要因」の分析も重視している。収録された会話はグループごとに、収集の目的や会話の条件が統制されている。

### 3.3.2 BTSJ のコンテンツ

BTSJ には、様々な目的をもって収集された多岐にわたるデータが存在する。表 5-22 に示したように様々な目的をもって収集された 25 の会話グループ、計 377 会話<sup>45</sup>のデータが存在する。BTSJ 会話情報を表 5-23 にまとめた。

---

<sup>45</sup> 論を執筆した 2021 年当時の総会話数。2023 年版は 474 会話となっている。

表 5-22 : BTSJ 会話情報

会話情報	内容
参加者の母語	母語場面・接触場面
ジャンル	面談・討論・機能を含む会話(誘い・謝罪・断り)・雑談・OPI
会話方式・形式	対面・電話
真正性	自然会話・インタビュー・ロールプレイ・ドラマ
話題	OPI・誘い・謝罪・断り・論文指導・指定なし
話者の関係	友人・親しい関係・教師と学生・先輩と後輩・OPI テスターと被験者・初対面
性別	男女・男性同士・女性同士
社会的属性	学生(大学生・大学院生・日本語学校学生)・教師・社会人・記載なし

本調査では、接触場面の自然会話で、学習者と母語話者が協働して会話を組み立てていく雑談における傾向を考察するために、表 5-23 に示した会話から「母語場面・接触場面（中上級学習者との会話）」「雑談」「話題－指定なし」「収録時間－15：00～30：00」の条件に適合する会話を選定した。本調査では、表 5-23 に示した 8 のサブグループにわたる 53 会話、延べ 106 人のデータを分析対象とした。

表 5-23 : 分析対象とするデータ

	接触場面		母語場面	
	初対面	友人	初対面	友人
対話相手の母語	韓国語・ 中国語(台湾)	中国語・ 中国語(台湾)	日本語	日本語
発話文数	6,762	6,065	5,895	5,686
収録時間	255 分 13 秒	277 分 17 秒	266 分 33 秒	205 分 24 秒
会話 【グループ番号】	3グループ 13 会話 【8】121/125/129	2グループ 14 会話 【10】142/143/144/ 145/146/147/148/ 149/150/151	4グループ 15 会話 【11】154/157/160 【13】175/176/187 【14】91/193/197/ 199/201/203/205 【23】330/332	3グループ 11 会話 【6】112/113/114/ 115/116 【15】207/208/209 【23】329/331/333
会話番号	【9】131/133/135 /139/141 【11】152/155/156 /158/159	【22】325/326/327/ 328		

### 3.3.3 BTSJ 対話データの語彙的特徴

対象の 53 会話を R McCab Unidic-cwj-3.1.0 版を用い形態素解析し、語彙的特徴を表 4 にまとめた。記号、補助記号、空白を除いた検索対象語数は母語話者 116,576、学習者 93,293 であった。学習者、母語話者別の TTR は表 5-24 の通りである。使用語彙の豊かさを示す TTR は学習者は初対面の相手との会話のほうが友人との会話より使用語彙は豊富であるのに対し、母語話者は接触場面、母語場面とも友人との会話のほうが初対面会話より TTR 値は高い。ただし、接触場面の学習者の初対面相手との会話での TTR 値は感動詞（フィラーを含む）の割合が 14.2%（表 5-26）と他と比べて高いことに起因していると考えられる。

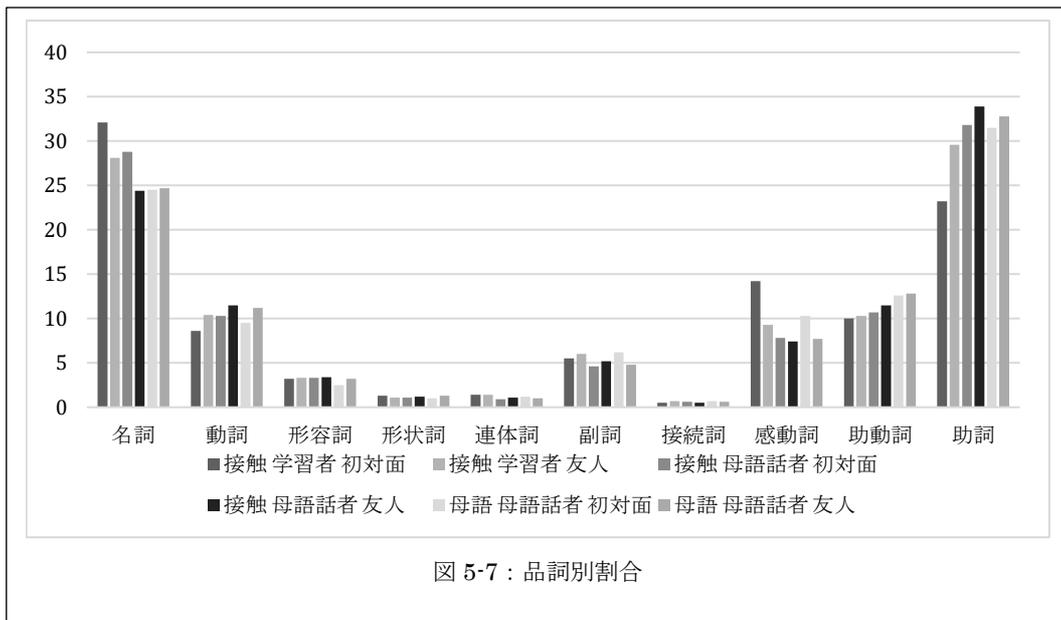
表 5-24 : 副詞「やはり」延べ・異なり・TTR

	接触場面				母語場面	
	学習者		母語話者		母語話者	
	初対面	友人	初対面	友人	初対面	友人
異語数(type)	1361	1821	1737	1932	2668	2832
総語数(token)	15166	22937	25509	27736	58559	45864
TTR	0.0897	0.0794	0.0681	0.0697	0.0456	0.0617

次に、学習者と母語話者の会話の場面別、関係に親疎別の形態素の品詞の割合を表 5-25、図 5-7 に示した。副詞が全体に占める割合は、「接触場面学習者-初対面」（5.5%）、「接触場面学習者-友人」（6.0%）、「接触場面母語話者-初対面」（4.6%）、「接触場面母語話者-友人」（5.2%）、「母語場面母語話者-初対面」（6.2%）、「母語場面母語話者-友人」（4.8%）であり、対象とする BTSJ データにおいては特筆すべき差異は観察されなかった。インタビューデータでの副詞の割合と比べると I-JAS では JSL 自然環境学習者（6.12%）、B-JAS では第 6 回（6.2%）第 7 回（6.3%）第 8 回（6.7%）の結果に近い。他の品詞では感動詞の割合が「接触場面学習者-初対面」（14.2%）であり、他の環境の学習者や母語話者の 10%以下の割合と異なっていた。

表 5-25：形態素解析，品詞別割合

	接触場面				母語場面	
	学習者		母語話者		母語話者	
	初対面	友人	初対面	友人	初対面	友人
	延べ(%)	延べ(%)	延べ(%)	延べ(%)	延べ(%)	延べ(%)
名詞	4871 (32.1)	6439 (28.1)	7350 (28.8)	6779 (24.4)	14360 (24.5)	11319 (24.7)
動詞	1301 (8.6)	2377 (10.4)	2620 (10.3)	3183 (11.5)	5537 (9.5)	5120 (11.2)
形容詞	486 (3.2)	750 (3.3)	830 (3.3)	931 (3.4)	1452 (2.5)	1462 (3.2)
形状詞	195 (1.3)	248 (1.1)	285 (1.1)	324 (1.2)	609 (1.0)	577 (1.3)
連体詞	205 (1.4)	313 (1.4)	230 (0.9)	302 (1.1)	710 (1.2)	480 (1.0)
副詞	836 (5.5)	1370 (6.0)	1184 (4.6)	1437 (5.2)	3617 (6.2)	2204 (4.8)
接続詞	82 (0.5)	160 (0.7)	157 (0.6)	142 (0.5)	394 (0.7)	257 (0.6)
感動詞	<b>2158 (14.2)</b>	2144 (9.3)	1999 (7.8)	2059 (7.4)	6044 (10.3)	3521 (7.7)
助動詞	1510 (10.0)	2358 (10.3)	2738 (10.7)	3184 (11.5)	7395 (12.6)	5874 (12.8)
助詞	3522 (23.2)	6778 (29.6)	8116 (31.8)	9395 (33.9)	18441 (31.5)	15050 (32.8)
合計	15166	22937	25509	27736	58559	45864



さらに、母語話者・学習者別に副詞の TTR 値、高頻度出現語により抽出した特徴語により概観した。出現する副詞の多様性を示す TTR 値を表 5-26 に示した。

表 5-26 : 学習者・母語話者別副詞概観高頻度の副詞 1~20

母語話者			学習者		
延べ	6561		延べ	5002	
異なり	213		異なり	194	
TTR	0.0325	116576	TTR	0.0388	93293

学習者と母語話者の TTR は、学習者 (0.0388) , 母語話者 (0.0325) であり、学習者の副詞に多様性があるという結果が出ている。ただし、このことは文字起こしの揺れ、「オノマトペ」の認定の揺れなどが関係している可能性がある。<sup>46</sup>

次に、学習者と母語話者データの副詞の出現数の調整頻度 (PMW) を求め、高頻度出現語として上位 20 位を表 5-27 に示した。

学習者と母語話者データの高頻度出現語の結果から、副詞「やはり」は母語話者では 5 位、学習者では 9 位であることが観察された。本調査で対象とした BTSJ の雑談データでは、学習者、母語話者とも上位 3 位までは「そう」「ちょっと」「もう」であった。また、副詞「やはり」と同様に発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ一群の副詞「確かに」「なるほど」「もちろん」の調整頻度の順位は、学習者は、「もちろん」35 位、「なるほど」61 位、「確かに」86 位であり、母語話者は「確かに」21 位、「もちろん」53 位であった。

<sup>46</sup> TTR に関して、学習者の数値は誤差がある可能性がある。「ジュウ」「バク」「クン」「ツト」「アタ」「タラ」「タタ」「ノホン」「リュウト」「シラ」「メエ」などもオノマトペとしてカウントされており、オノマトペの認定に揺れがあると思われる。

表 5-27 : 学習者・母語話者別の高頻出の副詞と PMW (1 位~20 位)

	母語話者			学習者		
	Term	Freq	PMW	Term	Freq	PMW
1	ソウ	2549	21865.6	ソウ	1689	18104.3
2	チョット	352	3019.5	チョット	430	4609.1
3	モウ	345	2959.4	モウ	316	3387.2
4	コウ	266	2281.8	アマリ	203	2175.9
5	<u>ヤハリ</u>	260	2230.3	マア	173	1854.4
6	ドウ	258	2213.1	ドウ	164	1757.9
7	ケッコウ	227	1947.2	ゼンゼン	146	1565.0
8	マア	204	1749.9	タブン	145	1554.2
9	アマリ	195	1672.7	<u>ヤハリ</u>	133	1425.6
10	タブン	168	1441.1	ケッコウ	121	1297.0
11	ゼンゼン	145	1243.8	マダ	103	1104.0
12	マダ	112	960.7	コウ	83	889.7
13	ヨク	106	909.3	イチバン	81	868.2
14	タトエバ	81	694.8	ヨク	79	846.8
15	ズット	77	660.5	イッパイ	76	814.6
16	<u>ナルホド</u>	73	626.2	イロイロ	65	696.7
17	イッパイ	64	549.0	ズット	63	675.3
18	モット	52	446.1	タトエバ	59	632.4
19	イロイロ	51	437.5	モシ	54	578.8
20	イチバン	49	420.3	ハジメテ	50	535.9

### 3.3.4 解釈する際に留意すべき点

BTSJ は、データの収集をした研究者が、各自の研究の目的に沿って収集した多岐にわたるデータをまとめたコーパスであり、明文化された文字化の原則に従って文字化されている点に特徴がある。宇佐美・山崎 (2018) では「333 会話全体を一括して分析するために編

まれているのではないので、現状では、データの均衡性が保たれている「サブグループ」単位の分析を推奨している」とあるが、BTSJの成立の経緯から考えても留意する必要があると考える。また、学習者のレベルについては、客観的データがなく収集した研究者に任されている点も念頭に置く必要がある。本研究では、会話の種類・会話の属性、会話参加者の属性を限定して調査することとした。さらに、定量的に傾向を検討したいと考え、宇佐美・山崎（2018）では推奨されていないが、「接触場面」「母語場面」、「雑談」「話題指定なし」に加え「初対面と友人・親しい関係」で絞った複数のサブグループにわたるデータで傾向を調査・考察する。参加者の性別については考慮しないこととした。

#### 4. 第5章のまとめ

本章では、本研究の研究方法与対象について言及すした。まず、コーパスを用いて研究することの意義を検討し、その後第6章、第7章、第8章で調査対象とする3種類の学習者コーパスを概観した。それぞれのコーパスについて、「コーパスの理念と基礎情報」「コンテンツ」「語彙の特徴」「解釈する際留意する点」を記述した。

次の第6章からは、学習者コーパスにおける副詞「やはり」を調査、検討する。第6章は、「研究課題3）-1 インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は、使用数、形態と出現位置、意味・機能別にどのようになっているか」に対応する章で、学習者横断コーパスのインタビューデータを用いて、学習者と母語話者の副詞「やはり」の使用実態を探っていく。

## 第6章 学習者横断コーパスから見た副詞「やはり」

### 1. 第6章の目的

第6章から第8章は、学習者コーパスを用いて学習者の副詞「やはり」の使用実態を調査・考察する。副詞「やはり」の研究は、形態的バリエーションや多様な意味・機能を中心に、母語話者の使用をめぐる議論が進む一方、日本語教育のための学習者の使用実態の調査は不足している。そこで、本章では学習者と母語話者の使用実態の比較ができる『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』のデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形態、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査した。研究課題を次のように設定した。

課題1：副詞「やはり」の使用数、形態から見た使用実態はどのようなものか。

課題2：副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態はどのようなものか。

以下、2節は問題意識の所在を述べ、3節では本章と関連のある習得に関わる先行研究を概観し、4節では調査の概要を述べる。調査結果と考察として、5節では出現数、形態から見た使用実態を、6節では出現位置と意味・機能から見た使用傾向を記述し、7節で結論を述べる。8節は本章のまとめである。

### 2. 問題の所在

副詞「やはり」は、他に「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の異形態を持ち、日本語母語話者（以下、母語話者）の会話に頻出する副詞である。また、日常生活の中で私達が触れる副詞「やはり」は、(1)の電車の中の高校生の会話<sup>47</sup>のように多義的に用いられ、多様な意味・機能を持っていると指摘されている（西原 1988, 森本 1994, 蓮沼 1998, 加藤 1999 など）。

---

<sup>47</sup> 引用した用例はコーパス、ネットの記載、先行研究、観察などによる。I-JAS データから引用している会話はサンプル ID を付した。文字化記号は I-JAS における記号表記に則っている。下線は稿者が施した。

(1) A: B ちゃん, コースどうする?

B: んー, やっぱ (≒いろいろ考えて) 文系に変更するしかないかな。昨日の物理のテスト, 平均点いかなかった。

A: 私も山ちゃんもやっぱり (≒同様に) 平均点以下だよ。あーあーだね。

B: 最高点は湯川君だって。

A: やっぱり。(≒予期した通り)

また, 副詞「やはり」は発話時に話し手の認識を表す副詞であり, 聞き手にとって話し手の発話意図を推測する手掛かりとなる談話標識でもある。複数の形態, 多様な意味・機能を持つ副詞「やはり」を理解し適切に使用することは, 円滑なコミュニケーション構築に繋がると考える。

では, 日本語学習者 (以下, 学習者) にとって, 副詞「やはり」の使用はどうだろう。日本語教育の中で副詞「やはり」は『日本語能力試験出題基準 改訂版』(国際交流基金編 2007) では 3 級語とされており, 現行の日本語教材の中では, 表 6-1 に示したように, 中級前期段階の会話・読解の中で導入されている。

表 6-1: 日本語教材における初出の副詞「やはり」の扱い

日本語教材	提出課	提出の設定	形式	意味・機能
『J- Bridge Vol.1』	L19	会話:先生と	やっぱり	熟考した結果
『みんなの日本語中級 I』	L11	会話:先輩と	やっぱり	熟考した結果
『新日本語の中級』	L19	会話:同僚と	やっぱり	熟考した結果
『新日本語の中級』	L19	読解:意見述べ	やはり	熟考した結果
『日本語の中級 J301』	L3	読解:相談・回答	やはり	同じ結果に帰結
『日本語の中級 J501』	L6	文法:「～なんて」	やっぱり	予期した通り/帰結
『文化中級日本語 I』	L1	読解:体験談	やはり	依然として
『日本語能力試験出題基準改訂版』	3級語	3・4 級語彙	やはり	—

初出の副詞「やはり」であることから, 教材の作成者が重要と考える「やはり」の意味・機能で最も基本的なものが提示されていると考えられる。いずれの教材も, 語彙知識としての副詞「やはり」の指導を目的としたものであり, 談話での運用を考慮した指導法の提示は

確認できない。中級レベルでの副詞「やはり」導入のあと、学習者は副詞「やはり」の異形態をどのように選択し、多様な意味・機能をどのように使い分けているのか、その実態についての調査は不足している。

そこで、本稿では学習者の副詞「やはり」の使用の実態を解明するため、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』のインタビューデータを用いて調査し、母語話者との比較を通して検討する。

### 3. 本章に関わる先行研究

#### 3.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究

「副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究」は、第4章、3.1節「副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究」に記した、スキーマ的意味と意味・機能の枠組み（P.64（2）（3）表4-1参照）と同様である。

#### 3.2 副詞「やはり」の異形態に関わる研究

「副詞「やはり」の異形態に関わる研究」は、第4章、3.2節で述べた小磯（2019）と山崎（2019a）の研究（P.65参照）と同様である。

#### 3.3 学習者の習得に関わる研究

副詞「やはり」の使用の変化についての研究には、川口（1993）と山内（2009）がある。

川口（1993）は副詞「やはり」の前提の習得を扱った研究である。論の中で、西原（1988）を受け副詞「やはり」は「話者の主観」「客観的状況」「社会通念」の3種類の語用論的前提を持つとし、母語話者513名（中学校1・3年生、高校2年生、大学生、社会人）と日本語学習歴1年以上の学習者59名へのアンケートにより習得状況を調査している。母語話者の年齢別の習得と学習者の習得の順序を検証した結果、母語話者も学習者も、習得は「話者の主観」「客観的状況」「社会通念」の順に進むことを報告している。さらに、学習者が副詞「やはり」の使用法を学ぶには、日本社会における「社会通念」を学ぶ必要があると結論している。川口（1993）は副詞「やはり」の理解に焦点を当てた研究で、調査対象の分類基準とな

った3種類の語用論的前提である「話者の主観」「客観的状况」「社会通念」は、それぞれ第6章、3.1節の表6-2に示した副詞「やはり」の意味・機能の枠組みでは、「話者の主観＝「待ち合わせの時間に、やはり彼は遅れた」＝II 予期した通り」「客観的状况＝「彼もやはり国家試験を目指している」＝I-2 同様に」「社会通念＝「利口そうでもやはり子供は子供だ」＝I-3 同じ結果に帰着」に相当する。副詞「やはり」の多様な意味・機能の中では、「知覚・知識」に関わる部分を対象とした研究である。多様な意味・機能を持つ副詞「やはり」の前提を分類し、習得の順序を考察している研究は他にない。

次に、山内（2009）では「茶釜」<sup>48</sup>を用いて OPI データを形態素解析し「N グラム統計<sup>49</sup>」を使って、使用された語から日本語能力を推測する研究が報告されている。その中で、OPI の各レベルを判定する上で有効な決め手となる語をアンモナイト形態素<sup>50</sup>として提示しているが、副詞「やはり」は表6-2に示した通り、「ちょっと」「ですけど」とならんで上級レベルのアンモナイト形態素であると報告している。

表 6-2 : 山内（2004・2009）に示されたアンモナイト形態素

	中級学習者	(回)	上級学習者	(回)	超級学習者	(回)
1位	はいはい	127	ちょっと	98	んですけ	198
2位	ですはい	72	ですけど	71	そういう	163
3位	ています	50	おもいま	66	ですけど	140
4位	ますはい	48	<u>やっぱり</u>	65	っていう	133
5位	ちょっと	48	とおもい	64	んですけど	129

### 3.4 本稿の目的

本稿は、副詞「やはり」を解明し、日本語教育に資する情報を得ることを目的とする研究の一部に属している。前述した通り、副詞「やはり」の副詞分類上での位置と意味・機能を記述することに主眼が置かれた研究、母語話者の異形態の使い分けが実証的に示されてい

<sup>48</sup> 形態素解析ソフトの名前。奈良先端科学技術大学院大学の松本裕治氏の研究室で開発され、1997年に公開された。

<sup>49</sup> 言語テキストの中の、任意の長さの文字列の出現頻度を知ることができる手法

<sup>50</sup> 山内（2009）の造語。ある形態素が発話されると、それを発話した話者の OPI における日本語レベルを推定できる形態素。

る研究は、いずれも副詞「やはり」考察の基礎となる研究である。川口（1993）は、副詞「やはり」の習得を扱い、約 600 名の対象者に文中での副詞「やはり」の意味を記述してもらう方式でデータを集め考察を加えた意義ある研究であると考えられる。しかし、学習者の産出についての調査と、副詞「やはり」の意味・機能の中で表 2 で見た知覚・知識に関わる「やはり」だけでなく判断・評価に関わる「やはり」も含めた副詞「やはり」の意味・機能全体についての調査は不足している。

学習者は日本語の習熟度が上がる中でどのように副詞「やはり」の多様な意味・機能と複数の形態を使用しているか、実態の解明を通して副詞「やはり」の指導の検討に繋がりたいと考えた。そこで、学習者と母語話者の使用実態がパラレルに観察できる構造を持った I-JAS のデータを用い、学習者の使用実態を前述した「課題 1：副詞「やはり」の使用数、形態から見た使用実態はどのようなものか」、「課題 2：副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態はどのようなものか」の 2 点から明らかにすることを試みた。

## 4. 調査の概要

### 4.1 調査の方法

I-JAS（中納言 2.4.5，データバージョン 2020.03）を用いた調査を次の手順で行う。

- ① I-JAS のデータで、本稿で調査対象とするタスク、対象者を絞る。
- ② コーパス検索アプリケーション I-JAS データを『中納言』を利用して「矢張り」（前後文脈の語数 100）をダウンロードする。同時に、データ配布サイトから、プレインテキストと音声ファイルを入手する。
- ③ ②のデータに基づき、使用数、形態から見た学習者の使用実態を母語話者との比較を通してまとめる。
- ④ ②のデータに基づき、出現位置と意味・機能から見た学習者の使用の特徴を母語話者との比較を通してまとめる。

### 4.2 使用データ

I-JAS は「第二言語としての日本語の習得研究とし、さまざまな要因の違いが日本語習得

にいか影響を与えるかを日本語学, 言語学, 社会言語学, 心理言語学, 語彙論, 談話研究などの領域から分析することを目的」(迫田他 2016) として構築され, 2020 年 3 月に完成した学習者コーパスである。日本を含む 17 の国と地域で, 12 の言語を母語とする学習者の話し言葉および書き言葉を横断的に調査・収集したコーパスで, 1050 人(学習者 1000 人, 母語話者 50 人)のデータが公開されている。収録されている課題には, 発話データ(独話, 対話, ロールプレイ)と, 作文データ(ストーリーライティング, メール, エッセイ)がある。

本稿では, 多様な学習歴を持つ JSL 環境の学習者は除き, JFL 環境の学習者を対象とした。分析対象者は第 4 次公開までのデータ, 「JFL 学習者」650 名<sup>51</sup>(12 の言語, 13 の地域を母語とする学習者各 50 名), 「日本語母語話者」50 名の計 700 名のデータを使用した。

調査対象とする課題は, 約 30 分の半構造化インタビューを収録した「対話」のデータを使用することとした。「対話」データの特徴を迫田他(2016)では, 「①学習者の自然な言語運用のデータが収録できることを目的としている。②OPI (Oral Proficiency Interview) を参考にしており, OPI テスターの資格を有した調査員が調査を実施している。③ほぼ統一された 15 の話題に沿って対話を展開し, データ間での比較ができるようにしている」と記している。

## 5. 副詞「やはり」の出現数, 形態から見た使用傾向

### 5.1 母語別の使用数から見た使用傾向

対象のデータで, 学習者の母語の別による副詞「やはり」の使用数を集計した。集計に当たり, 母語別に個人の使用数の分布を図 6-1 にまとめた。この結果から明らかになった, 個人で極めて多用している 6 名を, 外れ値として集計から外した。6 名の内訳は, 英語母語話者 2 名(57 回・48 回), ハンガリー語母語話者 1 名(45 回), 中国語(台湾)母語話者 1 名(43 回), 日本語母語話者 2 名(62 回・44 回)である。副詞「やはり」の使用数から算出した 100 万語あたりの母語別の調整頻度(PMW)を図 6-2 に, 外れ値を外して集計した使用数から見た使用実態を表 6-3 に示した。

---

<sup>51</sup> 2020 年 3 月時点で, 5 次公開のデータが公開されている。本稿では, 4 次公開までのデータを使用した。中国語学習者は, 3 次公開までの 50 名のデータを使用している。

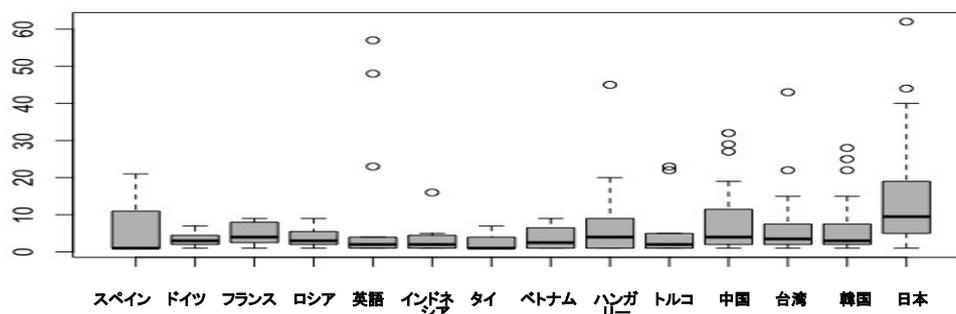
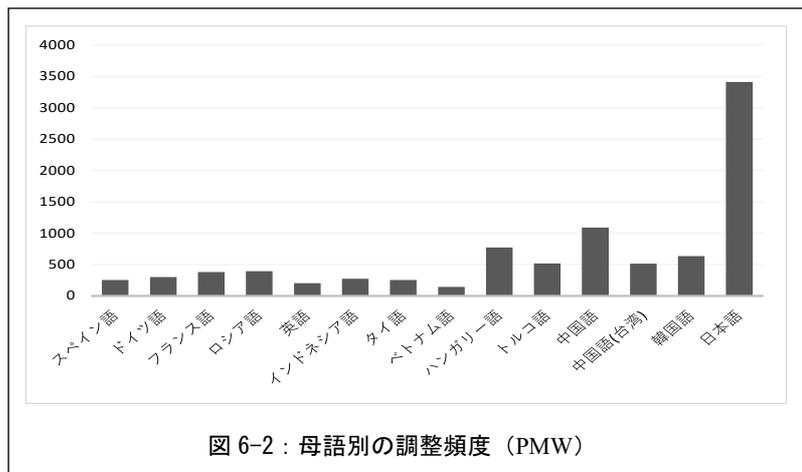


図 6-1：母語別の個人の使用数の分布

表 6-3：母語別の使用数から見た使用実態

母語	調査人数	使用人数	(%)	使用数	平均*1	使用者平均*2	PMW
スペイン語	50	3	(6.0)	23	0.5	7.7	252.22
ドイツ語	50	11	(22.0)	37	0.7	3.4	300.39
フランス語	50	7	(14.0)	35	0.7	5	379.65
ロシア語	50	11	(22.0)	47	0.9	4.3	394.47
英語	48	12	(25.0)	43	0.9	3.6	204.05
インドネシア語	50	7	(14.0)	30	0.6	4.3	273.31
タイ語	50	12	(24.0)	29	0.6	2.4	251.51
ベトナム語	50	5	(10.0)	15	0.3	3.0	141.44
ハンガリー語	49	15	(30.6)	87	1.8	5.8	771.50
トルコ語	50	9	(18.0)	58	1.2	6.4	516.63
中国語	50	31	(62.0)	245	4.9	7.9	1090.53
中国語(台湾)	49	23	(46.9)	117	2.4	5.1	513.03
韓国語	50	27	(54.0)	179	3.6	6.6	635.25
学習者計	646	173	(26.7)	1138	1.8	6.5	534.23
日本語	48	48	(100)	587	15.2	15.2	3412.33
総計	694	220	(31.7)	1831	2.6	7.6	859.55

表中、平均\*1は「使用数/調査人数」、使用者平均\*2「使用数/使用人数」で算出



この結果から、次の傾向が観察できた。母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では、日本語母語話者の使用に特徴がある。まず、「使用した人の割合」では、日本語母語話者の調査対象者全員が副詞「やはり」を使用しているのに対して、学習者の使用している割合は 26.7%で、4人中3人が使用していないという結果になっている。

次に、使用した個人の平均も（使用数/調査人数）は学習者は 6.6 回であるのに対し、日本語母語話者は 2 倍強の 15.2 回使用している。学習者の 4 分の 3 が副詞「やはり」を使用していないことは、学習者のレベルによる影響があると考えられる。副詞「やはり」は『旧日本語能力試験出題基準』では 3 級語であり、日本語教育の中では、中級前期段階で導入されることが多い。会話の中で産出するまでにはタイムラグがあると考えるのが妥当だろう。SPOT の結果<sup>52</sup>による学習者のレベル別の使用人数は表 6-4 の通りで、レベルが上がるにつれ、使用の割合は初級（5.5%）、中級（27.5%）、上級（68.9%）と増えているが、このデータで母語話者の 100%が副詞「やはり」を使用することとは隔たりがある。また、副詞「やはり」を極めて多用しているとして集計から外した 4 名の日本語学習歴を見ると、SPOT の結果ではいずれも中級レベルではあるが、「1 年の日本留学経験がある（2 名）」「2 か月の日本留学とホームステイ経験がある（1 名）」「日本語を話す家族がいる（1 名）」となっており、日本語母語話者との対面での交流を有する 4 名であった。日本語母語話者との豊富な

<sup>52</sup> I-JAS には、「SPOT」「J-CAT」の結果が記載されている。本稿では「SPOT」の得点を「SPOT レベルの目安」に基づいて互換し「初級」「中級」「上級」を定めた。「SPOT」では上級レベル 61 名（9.4%）、中級レベル 462 名（71.1%）、初級レベル 127 名（19.5%）、「J-CAT」では上級レベル 101 名（15.5%）、中級レベル 523 名（80.4%）、初級レベル 26 名（4.0%）となっている。人数のバランスを考慮し「SPOT」の得点を使用した。

接触経験が副詞「やはり」の多用に影響を及ぼしていることが見てとれる。

表 6-4：レベル別の学習者人数

学習者レベル	調査人数	使用人数	(%)
初級	127	7	(5.5)
中級	462	127	(27.5)
上級	61	42	(68.9)
総計	*650	*176	(27.1)

「\*」は外れ値の学習者も含めた数値である

## 5.2 出現形態から見た使用傾向

副詞「やはり」の異形態には「やはり」「やっぱり」「やっぱ」「やっぱし」があることは前述したが、4種類の形態が統合されることなく用いられている。レベル別の学習者と母語話者に加え、参考として CEJC での出現形態を集計し表 6-5 に示した。

表 6-5：副詞「やはり」の形態別の使用数と割合

	やはり(%)	やっぱり(%)	やっぱし(%)	やっぱ(%)	総計
初級学習者	3 (21.4)	11 (78.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	14
中級学習者	152 (17.1)	717 (80.6)	0 (0.0)	21 (2.4)	890
上級学習者	28 (12.0)	181 (77.3)	0 (0.0)	25 (10.7)	234
学習者計	183 (16.1)	909 (79.9)	0 (0.0)	46 (4.0)	1138
母語話者	30 (4.3)	523 (75.5)	1 (0.1)	139 (20.1)	693
【参考】CEJC	41 (0.9)	2316 (53.2)	47 (1.1)	1949 (44.8)	4353

結果から、次の点が観察できた。I-JAS インタビューデータにおいて学習者が使用した形態は、「やっぱり」を使用する割合が 79.9%で最も多く、母語話者が使用した割合 75.5%に近かった。「やはり」は初級 21.4%、中級 17.1%、上級 12.0%と漸減し、反対に「やっぱ」は初級 0.0%、中級 2.4%、上級 10.7%と漸増している。

さらに、「やはり」と「やっぱ」の使用について考えたい。

まず、「やはり」を使用する割合は、I-JAS 母語話者は 4.3%、CEJC 母語話者は 0.9%であるのに対し、I-JAS 学習者は 16.1%であり、学習者は「やはり」を使用する割合が高いが、このことは学習者が使用した教材に関係があると考えられる。日本で作成された中級レベルの教材では、副詞「やはり」が読解や文法の例文で提示される場合は「やはり」の形態、会話で提示される場合は「やっぱり」の形態で提示されていることが JFL 教室環境の学習者の使用する形態に影響を与えていると考える。

次に、「やっぱ」を使用する割合は、上級レベルの学習者でも 10.7%と、I-JAS 母語話者 20.1%、CEJC 母語話者 44.8%の使用率とは隔たりがある。しかし、「やはり」「やっぱり」の形態で指導を受けた JFL 教室環境の学習者に「やっぱ」の形態が出現していることは興味深い。そこで、「やっぱ」を使用している個人に注目して調査し、結果を表 6-6 に示した。

表 6-6 : 「やっぱ」を使用した人数

	調査人数	使用人数	(%)	使用頻度
初級学習者	127	0	(0.0)	0
中級学習者	462	16	(3.5)	21
上級学習者	61	6	(9.8)	25
学習者計	650	22	(3.4)	46
母語話者	50	33	(66.0)	139

中級レベルで「やっぱ」を使用した人数は 16 名 (3.5%) で、16 名中 12 名が 1 回のみ使用している。上級レベルでは 6 名 (9.8%) が使用しているが、3 名は 1 回、1 名は 2 回の使用になっている。個人で「やっぱ」を多用した中国語母語話者 1 名 (7 回)、韓国語母語話者 1 名 (13 回) については、日本国内に母語話者の友人がいる学習者、日本のアニメやドラマに興味を持ち、多く接している学習者であることが分かった。「やっぱ」を使用した他の学習者にも、密度を異にして「やっぱ」を多用した 2 名と同じような母語話者との交流、日本文化 (映画・ドラマ・アニメなど) との接触があるのではないかとと思われるが、I-JAS に付属する調査協力者の背景情報からは実証できない。また、母語話者では 33 名 (66.0%) の人が「やっぱ」を用いていることが観察できた。初対面のインタビュアーとの会話で、20

代から 50 代の調査対象者が年代に関わらず 50%以上が用いていることが観察できた。

副詞「やはり」の形態別のアクセント型に関しては、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」は中高型であるのに対し、「やっぱ」には頭高型・無核型の 2 種類がある。表 6-7 にデータに出現する「やっぱ」のアクセント型<sup>53</sup>を学習者と母語話者別にまとめた。学習者と母語話者の「やっぱ」のアクセント型について関連を見るために  $\chi^2$ 検定<sup>54</sup>を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(1)=29.132, p<.01)$  残差分析の結果、学習者は無核型「やっぱ」の出現が有意に多く、母語話者は頭高型「やっぱ」の出現が有意に多いことが示された。学習者のレベル別では頭高型・無核型の割合に大きな差はなく、中級レベルでは頭高型 (38.1%)、無核型 (61.9%)、上級レベルでは頭高型 (48.0%)、無核型 (52.0%) であった。それに対して、母語話者のアクセント型は頭高型 (84.9%)、無核型 (15.1%) と頭高型の「やっぱ」が無核型の 5 倍強存在している。

表 6-7 : 「やっぱ」のアクセント型

	頭高型 (%)	無核型 (%)	計
初級学習者	0 (0.0)	0 (0.0)	0
中級学習者	8 (38.1)	13 (61.9)	21
上級学習者	12 (48.0)	13 (52.0)	25
学習者計	20** (43.5)	26** (56.5)	46
母語話者	118** (84.9)	21** (15.1)	139

\*\*  $p<.01$

## 6. 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向

### 6.1 副詞「やはり」の発話における出現位置

本節では、副詞「やはり」の出現位置について検討したい。I-JAS における発話の区切りについては、「対話形式のタスクは、話者の交代をもって改行する」という規則に則って書

<sup>53</sup> 稿者 1 名の調査による。「やっぱ」を使用した 55 名、185 データを、「キー周辺の再生」と「音声ファイル」を用いて聴取し判断した。

<sup>54</sup> 一語文は副詞「やはり」の出現位置という観点では特殊なものであり、本データにおいて出現数も少ないことから検定の対象から外した。

き起こしがされており、話者の交代は「#」で示されている。そこで、副詞「やはり」の出現位置を「ターン冒頭に出現する＝発話開始部」「ターン末尾に出現する＝発話終了部」「副詞「やはり」のみで文をなす＝一語文」「発話開始部・発話終了部・一語文のいずれでもない＝発話中間部」として分類した。なお、「機能語＋やはり」も発話開始部、「やはり＋機能語」も発話終了部とすることとした<sup>55</sup>。発話開始部・発話中間部・発話終了部・一語文の用例を表 6-8 に示す。

表 6-8：発話開始部・発話中間部・発話終了部・一語文の用例

話者	発話内容	位置
【JJJ56】	<C>: ……熱中していることっていうと、山になりますか？# <K>: そうですね(ふーん)はい、まあ手軽で、はい、行けるんでまあ山ですかね# <C>: へー(はい)、今まで(ええ)なんか(ん)すごく一番高いあの山(あー)っていうのはどんなどころに行かれましたか# <K>: あー <u>やっぱり</u> 日本だと富士山# <C>: 富士山# <K>: ですかね <u>やっぱり</u> ねはい# <C>: ふーん、あとは好きな山とかってあるんですか？# <K>: 好きな山、ですかねー、えー、ま、 <u>やっぱり</u> 行きやすいんで <u>やっぱ</u> 高尾山とか(うんうんうんうんうん)簡単に手軽に登れるんで高尾山…………… (I-JAS:JJJ56)	←開始部       ←終了部   ←中間部
【GAT46】	<C>: 日本に行きたい？{笑}日本のじゃあ次行くとしたら日本のどこに行きたいですか# <K>: あー# <C>: 沖縄ー# <K>: <u>やっぱり</u> ー# <C>: リベンジ# <K>: んー、それもいいですね、(はい) (I-JAS:GAT46)	←一語文

・表中の記号は、<K>:日本語学習者、<C>:調査担当者、( ):相槌、#:話者交代 を表している。

副詞「やはり」の一語文・発話開始部・発話中間部・発話終了部別の使用数を学習者のレ

<sup>55</sup> 「機能語＋やはり」は発話冒頭部とした。なお、「接続詞」は機能語との見解がいくつかあるが、三宅(2005)から、「接続詞」は内容語とした。

ベルごとに集計し、結果を表 6-9 に示した。なお、多用した 4 名のデータ 193 も集計し表に加えた。

結果から、次の点が観察できた。学習者と母語話者の出現位置との関連を見るために一語文を除いて  $\chi^2$  検定<sup>56</sup>を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(2)=20.174, p<.01)$  残差分析の結果、学習者は発話開始部の出現が有意に多く、母語話者は発話中間部の出現が有意に多いことが示された。さらに、初級レベルの学習者は、発話開始部、発話中間部とも 50% の出現で、一語文・発話終了部の出現はなかった。中・上級レベルの学習者の出現率は同様の傾向で、一語文は、中級レベル 0.4%、上級レベル 1.7%、発話開始部は中級レベル 26.7%、上級レベル 27.8%、発話中間部は中級レベル 70.7%、上級レベル 68.4%、発話終了部は中級レベル 2.2%、上級レベル 2.1% だった。母語話者は、一語文 0.3%、発話開始部 16.7%、発話中間部 80.4%、発話終了部 2.6% だった。多用した 4 人のデータでは、発話開始部 16.6%、発話中間部 83.4% の出現となっており、母語話者の出現位置の割合に近いことが観察された。

表 6-9 : 発話の中での出現位置

	一語文 (%)	開始部 (%)	中間部 (%)	終了部 (%)	総計
初級学習者	0 (0)	7 (50.0)	7 (50.0)	0 (0)	14
中級学習者	3 (0.4)	186 (26.7)	493 (70.7)	15 (2.2)	697
上級学習者	4 (1.7)	65 (27.8)	160 (68.4)	5 (2.1)	234
多用した 4 名	0 (0)	32 (16.6)	161 (83.4)	0 (0)	193
学習者計	7 (0.6)	<b>290**</b> (25.5)	<b>821**</b> (72.1)	20 (1.8)	1138
母語話者	2 (0.3)	<b>116**</b> (16.7)	<b>557**</b> (80.4)	18 (2.6)	693
総計	9 (0.5)	406 (22.2)	1378 (75.3)	38 (2.1)	1831

\*\* $p<.01$

## 6.2 I-JAS データに出現する副詞「やはり」の意味・機能

本節では、学習者と母語話者が用いた副詞「やはり」の意味・機能を検討する。3.1 節の

<sup>56</sup> 一語文は副詞「やはり」の出現位置という観点では特殊なものであり、本データにおいて出現数も少ないことから検定の対象から外した。

表 6-2 に記した副詞「やはり」の意味・機能の枠組みに従い分類した。具体的な用例を表 6-10 に示す。

表 6-10：本稿で用いる副詞「やはり」の意味・機能の用例

意味・機能	用例
I-1 依然と して  I-2 同様に  I-3 同じ結 果に帰結	(I-1): 学生時代に友達が事故で亡くなった話 <K>もう四半世紀だってゆって(うん), で, なんか同窓会になってもその話(あー), で, ちょっと前でも, <u>そ, やっぱり</u> , その話# (I-JAS:JJJ23) (I-2): 話し手が熱中していること, パンの話が続いている <K>えーとですね, えー, 私の一番仲のいい友達で, <u>やっぱり</u> , パン好きなんです すね, (へー)…… (I-JAS:JJJ32) (I-3): 両親は誕生日も忘れていたし, 喧嘩もしたという子供の頃のエピソード <C>あじゃあそのまんまその日は, 覚えてなかったんですか, わすれ最後には, 分かったんですか# <K>うんー最後, あ, <u>やっぱり</u> , 晩御飯は一緒に食べました# (I-JAS:CCM13)
II 予期した 通り	: 出身地で名産は何かという質問への回答 <K>あー応その, 漁港で, (んー)たまに, なんか, 漁獲高日本一みたいなのがや ってるんで, <u>やっぱ</u> , 海鮮がおいしいかなと, 思います# (I-JAS:JJJ03)
III 熟考した 結果	III 熟考した結果: 都会と田舎どちらに住みたいかという質問と回答 (「中間はだめ」と言われている) <C>ど, どっちか, どっちか# <K>どっちー# <C>うーん# <K>うーん, うーん, <u>やはり</u> , 都会かな# (I-JAS:CCT37)
IV 他の選択 肢の排除	: 何が専攻したいかという質問と回答 <K>……例えばあの【大学名2】#< <C>んー, の, 大学院ね?# <K>大学院です#< <C>それはだから英語科? 日本語科?# <K>んー, 英語, <u>やっぱり</u> , 日本語いえ日本語より英語のほうが好きです# (I-JAS:CCM46)

V 形式・内容を 選択途中	:子供の頃, 友達を作るのは上手ではなかったという語り <K>.....私はちょっとなんかええとシャイの方でしたから, .....自分で本を 読み終るとか, ええと勉強したりするとかー(うん)人でしたが(うん), でー, <u>や</u> <u>っ</u> ば, ええと, 何てゆうかうん# (I-JAS:EUS14)
------------------	--

データの中で使用された副詞「やはり」の意味・機能を枠組みに従って分類・集計し、学習者のレベル別の使用数を表 6-11 に示した。用例の中に、文意を推し量ることができず意味・機能の判断ができなかった用例が 15 例あり、「不明」として表に記した。また、多用した 4 名のデータ 193 も集計し表に加えた。

表 6-11：本データで使用された副詞「やはり」の意味・機能

	I	(%)	II	(%)	III	(%)	IV	(%)	V	(%)	不明	(%)	総計
初級学習者	2	(14.3)	2	(14.3)	8	(57.1)	0	(0)	1	(7.1)	1	(7.1)	14
中級学習者	204	(29.3)	41	(5.9)	338	(48.5)	2	(0.3)	105	(15.1)	7	(1.0)	697
上級学習者	73	(31.2)	16	(6.8)	126	(53.8)	0	(0)	18	(7.7)	1	(0.4)	234
多用した 4 名	69	(35.8)	10	(5.2)	55	(28.5)	1	(0.5)	52	(26.9)	6	(3.1)	193
学習者計	<b>348**</b>	(30.6)	<b>69**</b>	(6.1)	<b>527**</b>	(46.3)	3	(0.3)	<b>176*</b>	(15.5)	15	(1.3)	1138
母語話者	<b>269**</b>	(38.8)	<b>97**</b>	(14.0)	<b>190**</b>	(27.4)	0	(0)	<b>137*</b>	(19.8)	0	(0)	693
総計	617	(33.7)	166	(9.1)	717	(39.2)	3	(0.2)	313	(17.1)	15	(0.8)	1831

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

結果から次の点が観察できた。学習者と母語話者の意味・機能の使用数の関連を見るために出現数が少ない「IV」のデータを除き、「I」「II」「III」「V」について $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な関連が見られた。 $(\chi^2(3)=82.077, p<.01)$  残差分析の結果、学習者は「III 熟考した結果」での使用が有意に多く、母語話者は「I-1 依然として, I-2 同様に, I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」「V 形式・内容を選択途中」での使用が有意に多いことが示された。さらに、初級レベルの学習者は、使用数が 14 と少ないため、傾向の判断は安定していると言えないが、「III 熟考した結果」での使用の割合が 57.1%で最も多かった。中・上級レベルの学習者の使用の割合は、「I-1 依然として, I-2 同様に, I-3 同じ結果に帰結」で

は中級レベル 29.3%，上級レベル 31.2%，「II 予期した通り」では中級レベル 5.9%，上級レベル 6.8%，「III 熟考した結果」では中級レベル 48.5%，上級レベル 53.8%と日本語のレベルが上がるに従い漸増している。一方、「V 形式・内容を選択途中」では中級レベル 15.1%，上級レベル 7.7%と割合は半減している。多用した 4 名は SPOT によるレベルでは中級に属するが、「III 熟考した結果」は 28.5%と中級学習者の約 60%であり、「V 形式・内容を選択途中」は 26.9%と中級レベルの学習者の割合の 1.5 倍強となっている。

### 6.3 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用傾向

本節では、本調査の対象がインタビューデータであることを念頭に置き、副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た学習者の使用傾向を用例を引いて記述する。6.1, 6.2 の調査の結果から、学習者の発話開始部における産出、母語話者の発話中間部における産出、学習者と母語話者の「V 形式・内容を選択途中」での産出に特徴があることが観察された。

#### 6.3.1 学習者の発話開始部における産出

発話開始部において、学習者が有意に多くの副詞「やはり」を使用していることの内実を見ると、表 6-12 に示した通り、学習者の使用数 290 の中の 241 (83.1%) が「III 熟考した結果」での使用であった。本データが基本的に質問と回答の連鎖から対話が成り立っていると考えられるインタビューデータであることから、発話開始部においてはインタビューアの質問に対する回答が発話される。

表 6-12：発話開始部における意味・機能別の使用数

	I	II	III	IV	V	不明	計
学習者	39	5	241	1	3	1	290
(%)	(13.4)	(1.7)	(83.1)	(0.3)	(1.0)	(0.3)	(100)
母語話者	25	10	74	0	7	0	116
(%)	(21.6)	(8.6)	(63.8)	(0.0)	(6.0)	(0.0)	(100)
総計	64	15	315	1	10	1	406

下記の用例(2)(3)はYN疑問文、(4)(5)は選択疑問文、(6)(7)(8)はWH疑問文でなされた質問とその回答の用例だが、副詞「やはり」は前接する疑問文の形式のいずれにも違和感なく、熟考した結果の回答として機能していることが観察できる。

- (2) <C> やっぱりお金が大切ですか?#  
 <K> やっぱり, お金が大切# (I-JAS:VVN41)
- (3) <C> あー, 中国のドラマと日本のドラマって違いますか?#  
 <K> やはり, 違い, と思います# (I-JAS:CCM49)
- (4) <C> (時間とお金) うん, どちらも大事ですね, だけどどっちかってゆったら?#  
 <K> やっぱ, お金かな# (I-JAS:KKD33)
- (5) <C> (タイ語と日本語) そうですか, タイ語とどっちが難しいですか?#  
 <K> えっとー, やっぱり日本語です, はい# (I-JAS:TTH30)
- (6) <C> この大学を卒業したらどんな仕事をしたいですか?#  
 <K> {笑} うーんえっとー やっぱり私は先生になりたいと〈うーん〉思います… (I-JAS:IID13)
- (7) <C> んー, そうですね, その『ワンピース』の中で, どの人物が好きですか?#  
 <K> んー, やっぱりルフィかな# (I-JAS:CCM01)
- (8) <C> (都会がいいという回答に対して) ……何ですか?#  
 <K> ん, んー, やっぱり, ちょっと便利だし〈うんうんうんうん〉, あー, 安全性も〈うん〉, 都会のほうがいいかもしれないと思っていますね (I-JAS:KKD05)

### 6.3.2 母語話者の発話中間部における産出

発話中間部において、母語話者が有意に多くの副詞「やはり」を使用していることの内実を見ると、表 6-13 に示した通り、母語話者の使用数 557 の中で 237 (42.5%) が「I-1 依然として、I-2 同様に、I-3 同じ結果に帰結」での使用であった。さらに「I-1 依然として」「I-2 同様に」「I-3 同じ結果に帰結」別では、「I-1 依然として : 17 (7.2%)」、「I-2 同様に : 193 (81.4%)」、「I-3 同じ結果に帰結 : 27 (11.4%)」であり、出現数の約 8 割が「I-2 同様に」での出現であった。

表 6-13 : 発話中間部における意味・機能別の使用数

	I	II	III	IV	V	不明	計
学習者	302	52	281	2	170	14	821
(%)	(36.8)	(6.3)	(34.2)	(0.2)	(20.7)	(1.7)	(100)
母語話者	237	81	112	0	127	0	557
(%)	(42.5)	(14.5)	(20.1)	(0.0)	(22.8)	(0.0)	(100)
総計	539	133	393	2	297	14	1378

発話内で逆接・順接の接続表現が副詞「やはり」に先行して出現する場合については、曹(2001)で指摘されているが、複文での副詞「やはり」の使用の多さは母語話者の特徴であると考えられる。(9)(10)(11)に逆接の接続表現が先行する環境で、(12)(13)に順接の接続表現が先行する環境で副詞「やはり」が出現する用例を示す。

(9) <C> ……年末の、なんか、予定とかもう決まってるんですか?#

<K> 年末は特に予定決まっていんですけどやっぱりディズニーランドの〈あ〉、年越しの、があって〈はい〉、でも、抽選制で〈あ〉、十月の初旬に結果が来るんです…… (I-JAS:JJJ06)

(10) <C> どんな夢がありますか?#

<K> えーっとですねー〈うん〉夢ですね、まあやっぱり研究者を目指してるわけーなんですけど、〈はい〉、んーなるべく、やっぱり、そのー、なんかそのーまあさまつなね、なさまつな、やっぱり、その、やっぱりほんとにー、少しはなんか、ねー後に残るような研究をしたいなって…… (I-JAS:JJJ04)

(11) <K> 人が集まると組織になるわけでー#

<C> うん#

<K> でもするとなかなかー何かー、を、を、するってゆう仕事をするってゆう上でやっぱりどうしても、いろいろ時間がかかったりとか〈うん〉、あーなんかこうなかなか実益につながらないちょっと〈ふーん〉しがらみがあったりとかって〈はい〉あると思うんですけど、やっぱ、そういったところできるだけなくしてー# (I-JAS:JJJ13)

(12) <C> なるほど、なんかお料理でこう名産とか#

<K> あ一応その、漁港で、〈んー〉 たまに、なんか、漁獲高日本一みたいなのがや  
ってるんで、やっぱ海鮮がおいしいかなと、思います# (I-JAS:JJJ03)

(13) <K> そうですね 〈うん〉 それはありますね 〈うん〉 やっぱり盆地なので 〈うん〉  
やっぱりこう山に囲まれてるので 〈ふーん〉、やっぱり,, なんていうんです  
かね、寒暖の差はありますね…… (I-JAS:JJJ56)

石黒 (1999) は、「逆接は、前提という一般性の高い関係を否定することから生じる抵抗感を和らげる表現である」と述べている。逆接の接続表現の存在は、ここまでの対話の情報を受容したこと、そしてそれを踏まえてここまでの流れとは別の方向で発話することの前提触れである。(9) (10) (11) の用例で、「～けど、やはり……」「でも、やはり……」と続く流れから、聞き手は (9) 「年末の予定は決まっていないが、何か選択肢がある」、(10) 「話し手が研究者を目指しているという共通基盤を理解したうえでの発言が続く」、(11) 「しづらみがあることは当然だと思っているうえでの発言が続く」と、次の内容の方向を予測して、構えて聞くことができるのではないか。「確かに」「なるほど」「もちろん」を用いた譲歩構文と通じるものがある。

同様に、順接の接続表現の存在は、対話の相手との共通基盤を提示する役割をしている。(12) (13) の用例で、(12) は「漁獲高日本一をやっているという新情報を話題に登場させ、選択肢の範囲を限定する」、(13) は「この後の発話の前提として、盆地であること、山に囲まれていることに言及する」という会話の共通基盤を作る機能を果たしていると考えられる。

### 6.3.3 学習者と母語話者の「V形式・内容を選択途中」での産出

副詞「やはり」が「V形式・内容を選択途中」で用いられる場合、「発話内容の吟味や適切な表現を選択・編集の心的操作を表示する」機能を担っていると考えられる。「V形式・内容を選択途中」の用例は学習者も母語話者もフィラーと共起する場合が多い。「V形式・内容を選択途中」での副詞「やはり」の使用数と割合を表 6-14 (再掲 表 6-11 の一部) に示した。

表 6-14 : 「V 形式・内容を選択途中」の  
使用数と割合 (再掲 表 6-11 一部)

	V	(%)	総計
初級学習者	1	(7.1)	14
中級学習者	105	(15.1)	697
上級学習者	18	(7.7)	234
多用した 4 名	52	(26.9)	193
学習者計	176	(15.5)	1138
母語話者	137	(19.8)	693
総計	313	(17.1)	1831

中級学習者は 15.1% (105/697), 上級学習者は 7.7% (18/234) と, 上級での使用の割合は中級の約 2 分の 1 になっている。また, 母語話者の使用の割合は 19.8% (137/693) であった。学習者と母語話者の産出の特徴を検討するために, (14) (15) に学習者の用例, (16) (17) に母語話者の用例を示す。

(14) <K> (来日して驚いたことは何かという質問への回答, 先生に教えてもらっていた) …あの日本に来て, あ, や, やっぱり, あー, あー, 教えた通りに#

<C> うん#

<K> ですから, あんまりあー, 驚いたことはありません# (I-JAS:RRS32)

(15) <K> (故郷を語る) あむ, 私はね, とっても小さいむ, むり, 村から, 〈はい〉あの, 来ますから, まあ, やっぱり, あのー, えーあのー, 町に歩いて人と, みんなを知りますから, 〈はー〉まあ, ん, いつも, あの, あいさつをして, …… (I-JAS:HHG26)

(16) <C> うんー, じゃ時間もお金で買える#

<K> 買えると言うわけじゃないんですけども, うんーうなんだろうなーと, いやーやー やっぱ そうかな, どっちだろうな 〈うん〉 時間かなお金か, いやお金かなーと 〈{笑}〉 いやーむいやこれは難しいですね# (I-JAS:JJJ35)

(17) <K> (これからの夢を聞かれて) そーっすねー やっぱりー, あの, えー, まあ, いわゆるまあ私はこの世界で別に, 〈はい〉スターでも何でもないのでから, 黙ってて, 〈うん〉仕事に来るわけじゃないわけですね…… (I-JAS:JJJ50)

学習者の産出では, (14) は「日本のイメージは (先生に) 教えてもらった通りですから」と述べる際にフィラー「あ・あー」「や」と共起して, (15) は「小さい村から来ましたから, 町を歩いている人をみんな知っているから」と述べる際にフィラー「まあ」「あー」「えー」と共起して副詞「やはり」が出現しており, 話すべき内容や表現の選択をしていることが見て取れる。一方, 母語話者は (16) では大切なのは時間かお金かに迷う話し手の判断過程の言語化として, (17) は「自分はスターではないので黙っていて仕事に来るわけではない」という話し手が判断に迷う場合に出現している。また, 野田 (2015) は, 非母語話者の感動詞の不自然な運用の特徴の一つとして「どう返答するかを考えているときに「そうですね」などを使わずに沈黙が続く場合がある」と述べ, その原因として, 「考えているときに沈黙を避ける表現を習得していないこと」, 「答えを考えながら自動的にその表現を使えるまでに至っていないこと」の 2 点を挙げている。本節で用いた用例でも, 母語話者は (16) 「うんーうなんだろうなー」(17) 「そーっすねー」に後接して副詞「やはり」が出現しており, 「迷っている, 考えている」ことを対話相手に伝え, 沈黙が生じる緊張を緩和している例が観察できた。母語話者の発話で, 無意識に産出されるフィラーの中に出現する副詞「やはり」は, 単なる間つなぎではなく「考えているから少し待ってほしい」という発話者の心的状況を対話の相手に伝える働きをしていると考える。

## 7. 結論

研究課題に従って本稿をまとめ, 残された課題を述べる。

課題 1: 副詞「やはり」の使用数, 形態から見た使用実態はどのようなものか。

母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では母語話者の使用に特徴がある。副詞「やはり」を使用した学習者は全体の 4 分の 1 であるのに対し, 母語話者は対象の全員が副詞「やはり」を使用していた。また, 使用した個人の平均も学習者の 2 倍強使用してお

り、本データの調査では母語話者の副詞「やはり」の多用が観察できた。

副詞「やはり」の3つの形態では、学習者は「やっぱり (79.9%)」「やはり (16.1%)」「やっぱ (4.0%)」の順に、母語話者は「やっぱり (75.5%)」「やっぱ (20.1%)」「やはり (4.3%)」の順に使用している。学習者の「やはり」「やっぱり」の使用は学習者が使用した教材に関係がある。母語話者は、初対面のインタビュアーとの会話で、「やっぱ」は年代に関わらず50%以上の人が用いていることが観察できた。

課題2：副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態はどのようなものか。

学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現位置と意味・機能の調査から、学習者は発話開始部での出現が有意に多く、インタビュアーの質問に対して回答する際に「III 熟考した結果」として用いられていることが観察できた。母語話者は発話中間部での出現が有意に多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いていた。意味・機能では「1-2 同様に」での使用が多かった。また、「V 形式・内容を選択途中」での使用は、フィラーと共起することが多いことは共通しているが、学習者は内容と表現の選択であるのに対し、母語話者は「迷っている、考えている」ことを対話相手に伝え、沈黙が生じる緊張を緩和している用例が観察できた。

## 8. 第6章のまとめ

本章は、「研究課題3)-1 インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は使用数、形態と出現位置、意味・機能の面からどのようになっているか」に対応している。I-JASのデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形態、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査した。その結果、横断コーパスにおける使用実態として、次の4点が観察された。

- ① 母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では学習者は総じて、副詞「やはり」を母語話者に比べてあまり多用しない。
- ① 副詞「やはり」の3つの形態では、学習者は「やっぱり」「やはり」「やっぱ」の順に、母語話者は「やっぱり」「やっぱ」「やはり」の順に使用している。

- ③ 学習者は発話開始部での副詞「やはり」の出現が多い。質問に対する回答する際に「Ⅲ 熟考した結果」の意味・機能で用いることが多い。
- ④ 母語話者は発話中間部での副詞「やはり」の出現が多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いている。

次の第7章は、「研究課題3)-2 インタビューデータにおける学習者の使用の変化は、出現数、形態、意味・機能の面からどのようになっているか」に対応する章で、学習者縦断コーパスのインタビューデータを用いて、学習者の副詞「やはり」の使用の変化を探っていく。

## 第7章 学習者縦断コーパスから見た副詞「やはり」

### 1. 第7章の目的

第7章では『北京日本語学習者縦断コーパス：B-JAS』のインタビューデータを対象に、副詞「やはり」の学習者の使用の変化を調査・考察する。その理由は以下による。

本論、第6章では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』を用いて「異なる母語を持つ学習者の副詞「やはり」の使用実態」を明らかにすることを目的として調査を行った。しかし、横断コーパスを用いた調査では、調査時点での学習者のレベルによる使用実態の違いは観察できるが、日本語の習熟度が上がる過程で、副詞「やはり」の使用がどのように変化したのか、多様な意味・機能と複数の形態を持つ副詞「やはり」が学習者にとって何か学習しやすく何が学習しにくいのかは論じることができない。

そこで、本章ではI-JASの枠組みを踏襲した枠組みを持ち、中国語を母語とする学習者17人を4年間にわたり縦断的に調査したB-JASのインタビューデータを用い、学習者の習熟度別の副詞「やはり」の使用実態を明らかにすることから学習者の副詞「やはり」の使用の変化を探りたいと考え、研究課題を次のように設定した。

課題1：日本語の習熟度が上がる過程で、副詞「やはり」の出現数と形態の使用はどのように変化するか。

課題2：日本語の習熟度が上がる過程で、学習者は複数ある「やはり」の意味・機能をどの順番で使用できるようになるか。

以下、2節では、本章と関連のある習得に関わる先行研究を概観し、3節では調査方法と対象のデータについて述べる。4節では副詞「やはり」の出現数の変化と使用する形態の変化を定量的に、5節では副詞「やはり」の意味・機能の使用の変化を定性的に記述し、6節で結論を述べる。7節は本章のまとめである。

## 2. 本章に関わる先行研究

### 2.1 副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究

「副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究」は、第4章、3.1節「副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究」に記した、スキーマ的意味と意味・機能の枠組み（P.64（2）（3）表4-1参照）と同様である。

### 2.2 副詞「やはり」の形態に関わる研究

「副詞「やはり」の異形態に関わる研究」は、第4章、3.2節で述べた小磯（2019）と山崎（2019a）の研究（P.65参照）と同様である。

### 2.3 副詞「やはり」の習得に関わる研究

「副詞「やはり」の習得に関わる研究」は、第6章、3.3節で述べた川口（1993）と山内（2009）の研究（P.119参照）と同様である。

## 3. 調査の概要

### 3.1 使用データ

B-JAS は、日本語教育や日本語の第二言語習得研究の実証研究に資する縦断コーパスの構築を目的とし、中国語を母語とする日本語学習者の話し言葉や書き言葉を縦断的に収集して電子化した言語資料である（野山 2018）。B-JAS は I-JAS に準拠して構築されており、調査の項目や調査方法は I-JAS に準じている。

調査は、2016年から2019年にわたり、中国の大学に在籍する学習者17名を対象に実施された。全11回の調査の中で、作文データは11回、発話データは8回収録されている。発話データを収録した調査の概要を表7-1に示した。

表 7-1：調査の概要

学年	調査時期	発話データ	J-CAT・SPOT
1	2016年1月	第1回	○
	2016年5月	第2回	—
2	2016年10月	第3回	○
	2017年5月	第4回	—
3	2017年10月	第5回	○
	2018年5月	第6回	—
4	2018年10月	第7回	○
	2019年5月	第8回	—

発話データは第1回の収録<sup>57</sup>を除いて10月と5月に実施されている。また、各学年の初回の調査で日本語能力を測るため、J-CAT<sup>58</sup>とSPOTが実施されている。発話データに含まれる「ストーリーテリング」「対話」「ロールプレイ」「絵描写」のタスクの中から、本稿では15の話題から成る約30分の半構造化インタビューを収録した「対話データ」を用いることとした。調査の過程で、1名を除く16名の学習者が日本の大学に留学しており、第8回調査（対話調査では6回）は日本で行われている。

### 3.2 調査方法

B-JASを用いた量的調査と使用例を用いた質的調査を次の手順で行う。調査の手順は以下の通りである。

- ① B-JAS 考察対象の対話データを unidic-csj-3.1.0 を用いて形態素解析し、短単位（形態素）「矢張り」を抽出する。
- ② 学習者の習熟度別の副詞「やはり」の出現数、形態の変化を定量的にまとめる。
- ③ 学習者の用例を用いて、習熟度別の変化を意味・機能に注目して定性的にまとめる。

<sup>57</sup> 日本語の学習歴がゼロの対象者が大多数であることから、第1回調査は大学入学直後の2015年10月ではなく、約4か月の日本語学習を経た2016年1月に実施されている。

<sup>58</sup> J-CATの平均点から見た学習者のレベルは、1年次134.4（中級前半）、2年次191.8（中級）、3年次224.8（中級後半）、4年次263.1（上級前半）であった。結果から、学年が進むにつれて学習者の日本語レベルは上がっていることが確認できた。（第4章）

#### 4. 副詞「やはり」の出現数, 形態の変化

##### 4.1 副詞「やはり」の出現数の変化

まず, 各回のインタビューデータの収録時間と記号, 補助記号, 空白を除いた形態素数を表 7-2 に示した。収録時間の総計は 75:37:56, 形態素数の総計は 389315 であった。

表 7-2 : 収録時間, 総形態素数, TTR, 副詞の中での副詞「やはり」出現の割合 (再掲)

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
収録時間	9:08:17	9:37:50	9:22:36	10:10:06	9:35:18	9:01:06	8:57:03	9:45:40
形態素数	32385	37809	46255	59883	49943	55037	52402	55601
TTR	0.0446	0.0499	0.0395	0.0373	0.0416	0.0450	0.0456	0.0471
副詞(延べ)	920	1261	1645	2502	2014	3426	3295	3726
副詞(異なり)	91	98	128	141	129	154	136	155
「やはり」の出現数	8	16	63	73	104	124	142	158
やはり/副詞(%)	(0.87)	(1.27)	(3.83)	(2.92)	(5.16)	(3.62)	(4.31)	(4.24)
使用した人	4	7	10	11	13	15	12	14
使用した人の割合(%)	(23.5)	(41.2)	(58.8)	(64.7)	(76.5)	(88.2)	(70.6)	(82.4)

形態素数は第 1 回から第 4 回にかけて漸増していること, 第 5 回から第 8 回は使用した形態素数の平均はほぼ一定していることが観察できた。14 の話題からなる約 30 分の半構造化インタビューのデータだが, 個人差があり, 特に第 6 回の分散が大きくなっている。このことは, 日本語レベルの向上に伴い, 簡潔に目標の表現ができるようになった学習者と, 既習の表現を使いこなして回答した学習者がいたことが個人差に繋がっている可能性がある。使用語彙の豊かさを示す TTR は, 感動詞・フィラーの出現が他の 6 回に比べて多い第 1 回, 第 2 回を別にして, 学年が進むにつれて使用語彙が豊かになっている。

また, 副詞「やはり」出現数は第 1 回の 8 から第 8 回の 158 へ漸増している。副詞の出現数に対する副詞「やはり」の割合は, 第 1 回から第 4 回までは, 第 1 回 0.87%, 第 2 回 1.27%, 第 3 回 3.83%, 第 4 回 2.92% と微増しているが, 第 5 回以降は第 5 回 5.16%, 第 6 回 3.62%,

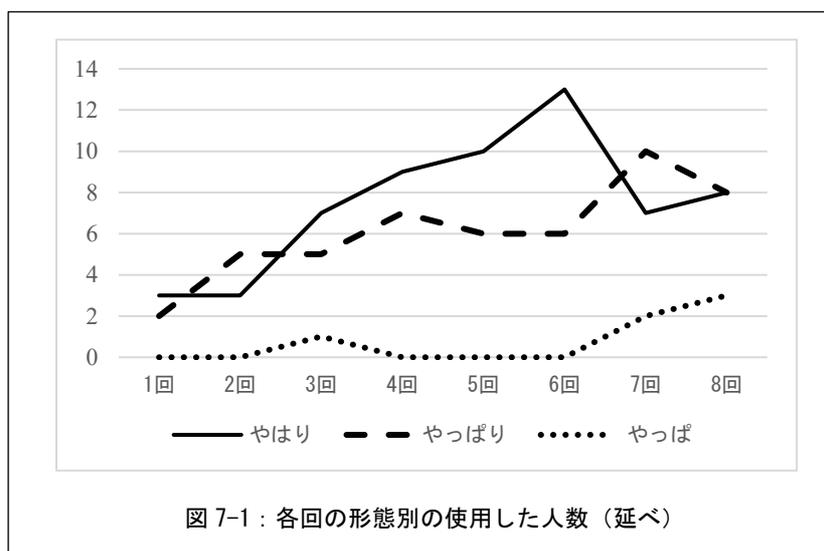
第7回4.31%、第8回4.24%と傾向は読めない。副詞「やはり」を使用した人の割合は、第1回から第4回までは、第1回の23.5%から第4回の64.7%と漸増しており、第5回以降は70.0%以上の人が使用している。

## 4.2 B-JAS 学習者が使用した形態の変化

B-JAS 学習者が使用した各回の「やはり」「やっぱり」「やっぱ」<sup>59</sup>の使用数と使用した人数を表7-3に、各回の形態別の使用した人数を図7-1に示した。<sup>60</sup>

表 7-3：各回の形態別の使用数と使用した人数 (N=17)

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	総計
やはり	6 (3)	4 (3)	33 (7)	39 (9)	75 (10)	75 (13)	43 (7)	40 (8)	315 (15)
やっぱり	2 (2)	12 (5)	29 (5)	34 (7)	29 (6)	49 (6)	86 (10)	88 (8)	329 (14)
やっぱ	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	13 (2)	30 (3)	44 (4)



3つの形態の使用数と使用人数の変化では、「やはり」は第1回（使用数6、使用人数3）から第6回（使用数75、使用人数13）にかけて増加し続けていたが、第7回と第8回の調

<sup>59</sup> 対象のデータでは、「やっぱし」の使用はなかった。

<sup>60</sup> 巻末 p.244 に「B-JAS に出現した副詞「やはり」の調整頻度」を示した。

査では、第7回（使用数 43，使用人数 7），第8回（使用数 40，使用人数 8）と使用数，使用人数とも減少している。「やっぱり」は第1回（使用数 2，使用人数 2）から第8回（使用数 88，使用人数 8）にかけて使用数，使用人数とも増加していた。ただし、「やっぱり」の使用人数のピークは第7回の 10 名であった。「やっぱ」は第3回（使用数 1，使用人数 1<sup>61</sup>）に出現しているが，日本留学を終えた後の調査，第7回（使用数 13，使用人数 2），第8回（使用数 30，使用人数 3）に出現していた。

さらに，個人別の使用形態を表 7-4 に示した。

表 7-4：個人別の使用形態

やはり	やっぱり	やっぱ	人数	id
○	×	×	1	CCB02
×	○	×	0	—
×	×	○	0	—
○	○	×	10	CCB01, CCB05, CCB07, CCB11, CCB12, CCB13, CCB15, CCB16, CCB17, CCB18
×	○	○	1	CCB03
○	×	○	0	—
○	○	○	3	CCB04, CCB10, CCB14
×	×	×	2	CCB06, CCB08

8 回の調査で 1 形態のみ使用した人は 1 名で「やはり」を使用していた。2 形態を使用した人では、「やはり」「やっぱり」を使用した人は 10 名，「やっぱり」「やっぱ」を使用した人は 1 名であった。「やはり」「やっぱり」「やっぱ」の 3 形態を使用した人は 4 名，副詞「やはり」を使用しなかった人は 2 名<sup>62</sup>であった。

次に，使用した形態数の 8 回の変化をまとめ，表 7-5 と図 7-2 に示した。第 1 回から第 6

<sup>61</sup> 第3回に出現する「やっぱ」は，「そして，えーと，あー，その，その日は，やっぱ (=やっぱ)，うーん，たぶん，母は，あーん，えーとー，うーん，とても，あー，いい，えーと，しょく，食事を，たべ，食べ物を，作ってー，…… (B-JAS : 2-CCB03)」に出現する「やっぱ」で，「[やっぱ=G=やっぱ]」のアノテーションがついている。この「やっぱ」は第7回以降に出現する「やっぱ」とは異なる考える。

<sup>62</sup> 使用しなかった 2 名は，B-JAS の他のタスクでも副詞「やはり」を用いていない。

回の調査は、使用しない人の数が減り、個人が使用する形態が増えている。このことは予想通りの結果であるが、日本留学から帰国してからの第7回と第8回の結果は、第7回（使用しなかった人7名、1形態使用4名、2形態使用6名）、第8回（使用しなかった人3名、1形態使用9名、2形態使用5名）であった。第8回は第1回から第5回の変化の延長線上に予想されるが、日本で調査した第6回と、帰国直後の第7回の結果は他の回と傾向を異にしていた。なお、17名の中で留学しなかった1名は、副詞「やはり」を使用していないため、日本留学が副詞「やはり」の使用に影響をもたらすか否かの検討はできない。

表 7-5：形態別の使用数と使用した人数 (N=17)

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
使用なし	13 (76.5)	11 (64.7)	8 (47.1)	6 (35.3)	4 (23.5)	2 (11.8)	6 (35.3)	3 (17.6)
1形態	3 (17.6)	5 (29.4)	6 (35.3)	7 (41.2)	10 (58.8)	11 (64.7)	4 (23.5)	9 (52.9)
2形態	1 (5.9)	1 (5.9)	3 (17.6)	4 (23.5)	3 (17.6)	4 (23.5)	7 (41.2)	5 (29.4)

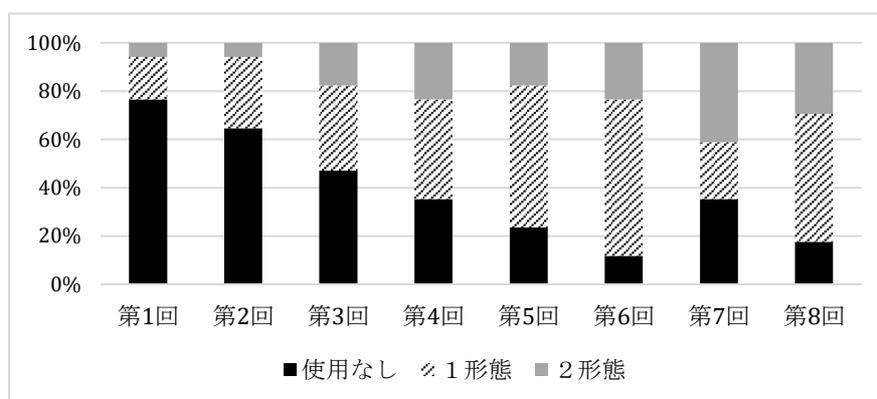


図 7-2：個人別副詞「やはり」の使用形態

## 5. B-JAS「やはり」の用例の質的分析

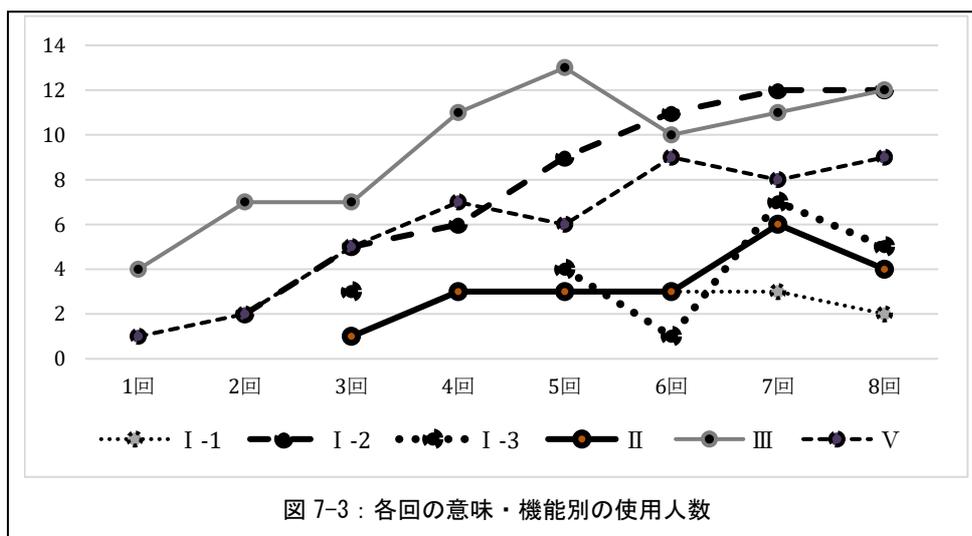
### 5.1 意味・機能の使用の変化の概要

本節では、学習者が複数ある副詞「やはり」の意味・機能をどの順番で使用するようになるのかを定性的に検討していくが、それに先立って定量的にはどのように変化しているのかを概観するため、第6章、3.1節の表 6-2 に示した副詞「やはり」の意味・機能の枠組み

に従い、用例を分類し表 7-6、図 7-3 に示した。

表 7-6：意味・機能別の出現数と人数

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回	総計
I-1	0 (0)	0 (0)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	4 (3)	4 (3)	2 (2)	12
I-2	0 (0)	2 (2)	15 (5)	12 (6)	29 (9)	48 (11)	39 (12)	48 (12)	193
I-3	0 (0)	0 (0)	4 (3)	0 (0)	5 (4)	1 (1)	8 (7)	5 (5)	23
II	0 (0)	0 (0)	2 (1)	3 (3)	4 (3)	8 (3)	13 (6)	4 (4)	34
III	6 (4)	10 (7)	16 (7)	31 (11)	48 (13)	37 (10)	46 (11)	52 (12)	246
IV	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0
V	2 (1)	4 (2)	24 (5)	25 (7)	18 (6)	20 (9)	29 (8)	34 (9)	156
総計	8 (4)	16 (7)	63 (10)	71 (11)	104 (13)	118 (15)	139 (12)	145 (14)	664



意味・機能の中で「IV 他の選択肢を排除」での使用は 8 回の調査を通してなかった。「III 熟考した結果」と「V 形式・内容を選択途中」は全ての回で使用されている。「I-2 同様に」は第 2 回から、「II 予期した通り」は第 3 回から、「I-3 同じ結果に帰結」は第 5 回から、「I-1 依然として」は第 6 回から出現している。

## 5.2 B-JAS の副詞「やはり」の用例の質的分析の手順

日本語の習熟度が上がる中で、学習者が複数ある副詞「やはり」の意味・機能をどのよう

に使用しているのかを定性的に検討していくが、調査対象者を「使用頻度」「異形態の使い分け」「J-CATの結果」「談話機能」をもとにクラスター分析を行い、分類したグループの代表的な学習者の使用例を観察することとした。「使用頻度のPMW(本章5.1節)」「使用した語形別の出現数(本章5.1節)」「4年次のJ-CATの結果(第5章3.2.1節)」については既に示した。

本稿での「談話機能」は、居關 他(2017)の「次元・談話機能」の枠組みを援用し、副詞「やはり」が出現する発話を「談話機能」で分類したものとする。「次元・談話機能」の枠組みの詳細を表7-7に示す。

表7-7：参照する談話機能の枠組み「次元・談話機能」

次元	談話機能
タスク	質問, 情報提供, 申し出, 依頼, 依頼への対処, 提案, 提案への対処, 情報提供+質問
自己フィードバック	自己肯定, 自己否定
他者フィードバック	他者肯定, 他者否定, 他者フィードバック誘出
発話順番管理	発話順番取得, 発話順番維持, 発話順番奪取, 発話順番指定, 発話順番開放, 自己肯定+発話順番取得
時間管理	滞り, 一時停止
談話構造化	相互行為構造化, 対話開始
自己伝達管理	自己中断, 独り言
他者伝達管理	補完, 訂正
社会的付き合い管理	謝罪, 感謝, 出合いの挨拶, 別れの挨拶, 自己紹介

・居關 他(2017)P.105 表 1「次元・談話機能」

本稿で分析対象とする B-JAS のデータはインタビューデータであるので、基本的には調査者からの「タスクー質問」に対する「他者フィードバックー他者肯定, 他者否定, 他者フィードバック誘出」からなっていると考えられる。しかし、データを観察していくと、「タスクー質問」に対する「他者フィードバック」に加えて新情報を提示している「タスクー情報提供」と考えられる発話, その他「時間管理ー滞り」「他者伝達管理ー補完, 訂正」の部分があることが分かった。そこで、「他者フィードバックー他者肯定, 他者否定, 他者フィードバック誘出」を「質問に対する応答」, 「タスクー情報提供」を「情報提供」, 「質問に対する応答」「情報提

供」以外の部分を「その他」として分類した。「質問に対する応答」の凡例を（１）に、「情報提供」の凡例を（２）に、「その他」の凡例を（３）に示す。

（１） <C> どっちのほうが好きですか？日本語で読むのと、翻訳されているので読むのと

<K> やっぱり中国語のほうがもっと、あの、気楽に一読めますから、〈あー〉、日本語ならば、自分が今外国語、を読んでいます

(B-JAS : 08-CCB14)

（２） <K> うーん、青島にとってビール、い、ビールを飲み人が多い、でもー、他のー、他の、ひ、他の地域の、人は〈はい〉、うーんやっぱりー男性、男性、とか、だーん、男性が、ビール、お、お酒が、う、たい、う、たぶん好きです、でも女性、は、うーん、お酒が好きじゃない

(B-JAS : 05-CCB03)

（３） <C> そうゆう、なんか、ネット上で、繋がったりするんですか。友達、新しい友達ができたりとか

<K> えーど、うん

<C> それはない

<K> んー、少ないですね、うん、うん

<C> そこまではやっぱりない

<K> やっぱり、リアルな人ー、あ、と、付き合うのが好きです

<C> あー、そうなんです、〈はい〉、わかりました、 (B-JAS : 11-CCB10)

各回の談話機能別の出現数と使用人数を表 7-8 に、個人の談話機能別の出現の有無を表 7-9 にまとめた。「質問に対する応答」で使用する人数が各回の使用人数の中で最も多いこと、日本語の習熟度が上がる中でインタビュー어의質問に対する応答だけでなく更なる情報を伝ようとする学習者が増え、その中で副詞「やはり」が用いられていることが、第 1 回（1 名）から第 8 回（14 名）の変化から観察できた。さらに、インタビューデータには少ないはずの学習者とインタビュー어의共話が含まれる「その他」は、留学から帰国してからの調査では、第 7 回（10 名）、第 8 回（9 名）であり、第 1 回（0 名）から第 6 回（4 名）の使用人数と大きく異なっていた。

表 7-8 : 談話機能別の出現数と人数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
応答	4 (4)	12 (7)	38 (7)	31 (10)	66 (13)	62 (12)	66 (11)	78 (13)
情報提供	4 (1)	2 (2)	23 (7)	41 (7)	36 (9)	54 (11)	54 (11)	68 (14)
その他	0 (0)	2 (2)	2 (1)	1 (1)	2 (2)	8 (4)	26 (10)	12 (9)
総計	8 (4)	16 (7)	63 (10)	73 (11)	104 (13)	124 (15)	146 (12)	158 (14)

表 7-9 : 個人の談話機能別副詞「やはり」出現の有無

	第1回			第2回			第3回			第4回			第5回			第6回			第7回			第8回		
	応	情	他	応	情	他	応	情	他	応	情	他	応	情	他	応	情	他	応	情	他	応	情	他
CCB01	1	0	0	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0
CCB02	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	1	1	1
CCB03	0	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1
CCB04	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1
CCB05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0
CCB06	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
CCB07	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0
CCB08	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
CCB10	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1	0	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1
CCB11	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1
CCB12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1
CCB13	1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
CCB14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1
CCB15	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1
CCB16	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0
CCB17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
CCB18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	0
計	4	2	0	6	2	2	7	7	1	10	7	1	13	9	2	12	11	4	11	11	10	13	14	9

・表中の1: 副詞「やはり」出現あり, 0: 副詞「やはり」出現なし

以上の「個人別の調整頻度<sup>63</sup>」「使用した形態別の出現数<sup>64</sup>」「4年次のJ-CATの結果<sup>65</sup>」「談話機能別出現の有無」の調査をもとに、階層型クラスター分析を行った。データ間のユークリッド距離の計算にはWard法を採用し、結果を図7-4に示した。クラスター分析の結果により、グループの特徴を記述できる点を考慮した上で、カッティングポイントを4.0と定め、17名の学習者を4類型に分けた。

この結果から17名の学習者が「第1回から第4回の調査には副詞「やはり」が出現しないが、使用している回の使用数が多いCCB05, CCB12, CCB04, CCB18のグループ (CCB04は別の傾向も有り)」、「調査回のほぼ全ての回に出現していて、「やはり」「やっぱり」「やっぱ」の形態を使用しているCCB03, CCB10, CCB14のグループ」、「副詞「やはり」を一度も使用していないCCB06, CCB08のグループ<sup>66</sup>」、「各回バランスよく出現していて「やはり」「やっぱり」を使用しているCCB02, CCB07, CCB01, CCB13と、出現数が1か2の回が3回以上あるCCB011, CCB15, CCB16, CCB17のグループ」に分類されることが観察できた。そこで、それぞれのグループの中から、CCB05, CCB10, CCB07の用例を考察することとした。

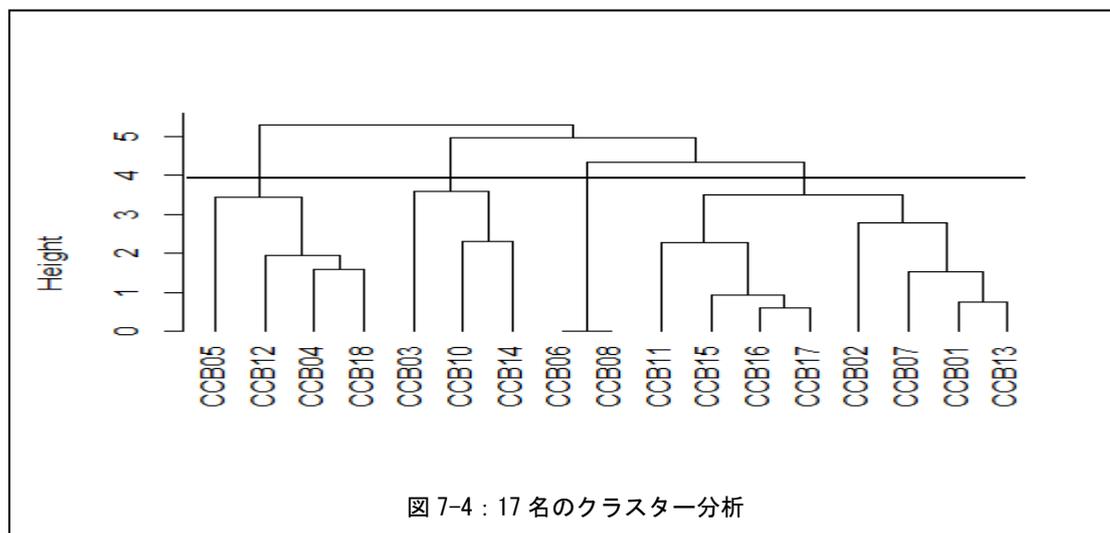


図7-4：17名のクラスター分析

<sup>63</sup> 巻末 p.245 に「個人別副詞「やはり」の出現数」をまとめ、結果を示した。

<sup>64</sup> 巻末 p.246 に「個人別の使用した形態」をまとめ、結果を示した。

<sup>65</sup> 第5章 3.2.1 節 p 104 「表 5-17 個人別の J-CAT」を参照。

<sup>66</sup> CCB06, CCB08 は対象としなかった B-JAS の他のタスクでも副詞「やはり」を使用していない。

### 5.3 学習者 CCB10 の副詞「やはり」の使用の変化

表 7-10 : CCB10 の副詞「やはり」出現数

CCB10	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	総計
出現数	0	3	1	2	3	17	23	11	60

表 7-10 に CCB10 の副詞「やはり」の出現数を示した。CCB10 のデータでは、第 2 回から第 5 回では出現数が 3 以下であるが、第 6 回から第 8 回での出現数は 10 以上となっている。特に、留学の感想や思い出を語っている第 7 回 (23) が最も多く出現している。形態では「やっぱり」が日本語レベルが中級前半である第 2 回調査から出現していること、第 6 回、第 7 回調査では「やっぱ」の使用が見られること、「やはり」と「やっぱり」、「やっぱり」と「やっぱ」を併用している回があることが観察された。

次に、各回に出現する用例の意味・機能を分類し、表 7-11 に示した。8 回の調査の中で「IV 他の選択肢を排除」での使用はなかった。

表 7-11 : CCB10 の副詞「やはり」の意味・機能

CCB 10	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
I-1	—	—	—	—	—	1	1	—
I-2	—	1	—	—	—	8	6	2
I-3	—	—	—	—	1	2	1	—
II	—	—	—	—	—	—	4	—
III	—	1	1	1	1	3	10	6
IV	—	—	—	—	—	—	—	—
V	—	1	—	1	—	3	1	3
不明	—	—	—	—	1	—	—	—

第 2 回では、故郷の料理や日本語学習のきっかけの話題の中で (4) に示したように質問に対する回答する部分に出現している。意味・機能としては「III 熟考した結果」での使用となっている。

- (4) <C> へー，じゃあ，その先生のことも，日本語を勉強する一，理由になりましたか？
- <K> あー，うーん，
- <C> 関係ない？
- <K> ん，影響がありますけど，まあ，うーん，やっぱり私が，あ，好きですから，〈うんうんうん〉日本語を勉強しました (B-JAS : 02-CCB10)

第4回での使用も第2回での使用と同様で，過去の思い出の話題の中で「好きだった先生，などはいますか？」という質問に「はいやっぱり一，小学校の先生です」と回答する部分に出現しており，「Ⅲ 熟考した結果」での使用となっている。第6回では，調査場所に来る交通手段を問われた会話の中でと，故郷，将来，意見述べの話題の中で出現していた。

(5)「Ⅴ 形式・内容を選択途中」の意味・機能で，形式か内容を探しながら話したり，(6)「Ⅲ 熟考した結果」の意味・機能で，回答を逡巡したことが言語化できている用例が見られた。

- (5) <K> はい，うーん，うーん，やっぱり昆明市の人々は一，でんちゆ（湖名）に恵，まれて，うーん，ま昔の時は，あ，今も，飲用水も，でんちゆ（湖名）から取り一，〈ふーん〉，うん，と，取り，まし，取ります (B-JAS : 06-CCB10)

- (6) <K> それは困りますね，はい，えーと，ん，ん，やっぱり，その，えー，日本語に関する仕事，と，給料が高い仕事，うーん，う，両者を比べて，その一，給料の差とか，まあ，忙しいの，忙しい，ま，とゆうと，どんなに忙しいとか，そうゆうようなものを考えてから，ん一，ま，…… (B-JAS : 06-CCB10)

第7回では日本留学の感想や思い出を語る中で副詞「やはり」が出現しているが，「I-1 依然として」「I-2 同様に」「I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」「IV 形式・内容を選択途中」の意味・機能での用例が出現している。(7)から(9)に用例を示した。

- (7) <C> ふーん、日本人との交流は、どうでしたか？  
 <K> はい、交流は、そうですね、慣れたと言ってもなんかやっぱり、本音と建前ってゆうのは、〈あー〉んー、やっぱ、わからないです、はい  
 <C> うーんそうか、どんな時にそう思ったんですか？ (B-JAS : 07-CCB10)
- (8) <C> ……北海道に行かれたんですよねー〈はい〉、北海道はどんなところでしたか、過ごしてみて  
 <K> あー、そうですねー、北海道っていえば、何とか、えー、最果てとか、〈うん〉まあ、辺境とかと言った、ちょっと、ロマンチックな、ふ、雰囲気**が**強いと思いますが、〈うん〉やっぱり実際に行ってみて、まあ、綺麗**な**ところでした、はい  
 <C> あ、そうですかー  
 <K> うん、好きでした、はい  
 <C> うーん、景色が綺麗ってゆうことですか？  
 <K> え、そうですね、景色も、えー、なんか、暑くないので、〈うん {笑}〉暑がり屋なので {笑} 〈うーんうんうんうん〉、うーん、なんか、今年はやっぱ日本は、もうひょうび、猛暑日が続いてて、〈はい〉でも北海道はとても過ごしやすかったです、はい (B-JAS : 07-CCB10)
- (9) <K> ……おじさんは、空港会社の、なんか、会社員なので、〈へー〉子供の時、まあ、時々、なんか、空港、あ、こ、あー、なんか、こ、空港に行って {笑}、行っていてなんか、んー、飛行機になんか興味ーを持つようになりました、はい  
 <C> あー、そうなんですかー、じゃ飛行機自体が好きですか  
 <K> そうですね、〈うーん〉パイロットにもなりたかったですけど、やっぱ、〈あー〉目が悪いので {笑}、できないです  
 <C> 目が、目が悪いんですか。、〈はい〉あー、中国はパイロットの条件で、目が  
 <K> 厳しいです (B-JAS : 07-CCB10)

(7) は、質問への回答に「はい、……そうですね、……なんかやっぱり」と「IV 形式・

内容を選択途中」の用例、「本音と建前ってゆうのは、やっぱ、わからない」と「I-1 依然として」の意味・機能で用いている用例、(8)は「北海道は、ロマンチックな、雰囲気強い」と前置きをしたあと「やっぱり……綺麗なところでした」と「II 予期した通り」の意味・機能で用いている用例と、「今年はやっぱ日本は、猛暑日が続いてて」と「I-2 (例年と、日本の他の場所と) 同様に」の用例、(9)は「……なりたかったが、目が悪いのでやっぱりなれなかった」と「I-3 同じ結果に帰結」の意味・機能で用いている。

第8回では、思い出を問う話題や意見述べの中で副詞「やはり」を用いているが、「給料が高い仕事と、給料が安くても自分のためになる仕事とどちらを選ぶか」という質問に対し「やっぱ」を用い(10)のように発話している。回答の内容を自分の中で編集する際「やっぱ、う、若い時は、……何てゆえばいいです、若い時はやっぱ……」と「考えているから少し待ってほしい」という発話者の心的状況を対話相手に伝える機能を用いていることが観察できた。野田(2015)は、非母語話者の感動詞の不自然な運用の特徴の一つとして「どう返答するかを考えているときに「そうですね」などを使わずに沈黙が続く場合がある」と述べ、その原因として、「考えているときに沈黙を避ける表現を習得していないこと」、「答えを考えながら自動的にその表現を使えるまでに至っていないこと」の2点を挙げている。同様の状況でI-JASの母語話者データで、「そうですね」「何ですかね」「何だろうな」などに後接して副詞「やはり」が出現して、「迷っている」「考えている」ことをある意味で積極的に伝えることをしている例が観察されたが、CCB10は(10)の用例で母語話者に近い形で副詞「やはり」を用いていた。

- (10) <K> えーと、そうですね、最初の時はー、たぶん、んー、給料の高い仕事ーを、え、選ぶと思います、えー
- <C> はい
- <K> ま、やっぱ、う、若い時は、んー、んー、なんか、その、たた、戦う、このー、何てゆえばいいです、若い時はやっぱ、奮闘ーすべき、だと思しますので、やっぱ、給料の高い仕事が、まあ、すんー、おおすと、生活にもいいし、
- <C> まあ、そうですね、〈うーん〉うん、あ、そうですか

(B-JAS : 08-CCB10)

#### 5.4 学習者 CCB07 の副詞「やはり」の使用の変化

表 7-12 : CCB07 の「やはり」出現数

CCB07	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	総計
出現数	0	1	5	25	13	4	7	4	59

表 7-12 に CCB07 の副詞「やはり」の出現数を示した。CCB07 のデータでは、第 4 回 (25) と第 5 回 (12) 出現が多く、他の調査回では第 2 回 (1) , 第 3 回 (5) , 第 6 回 (4) , 第 7 回 (7) , 第 8 回 (4) と一桁の出現となっている。形態においても、第 4 回と第 5 回は「やはり」と「やっぱり」を併用しているが、他の調査回は「やはり」のみの使用となっている。さらに、各回に出現する用例の意味・機能を分類し、表 7-13 に示した。8 回の調査の中で「I-1 依然として」, 「I-3 同じ結果に帰結」, 「II 予期した通り」, 「IV 他の選択肢を排除」での使用はなかった。

表 7-13 : CCB07 の副詞「やはり」の意味・機能

CCB 07	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
I-1	—	—	—	—	—	—	—	—
I-2	—	—	2	2	3	3	1	2
I-3	—	—	—	—	—	—	—	—
II	—	—	—	—	—	—	—	—
III	—	1	2	14	8	1	6	2
IV	—	—	—	—	—	—	—	—
V	—	—	—	9	2	—	—	—
不明	—	—	1	—	—	—	—	—

第 3 回の CCB07 のデータでは、(11) に示した用例で意見述べの中で、質問に回答する部分に出現している。意味・機能としては「III 熟考した結果」での使用となっていた。

- (11) <C> ……町がいいですか。？田舎がいいですか？
- <K> おー，あー，両方も，メリットと，〈うんうん〉デメリットがありますけど，やはりー，私は一，都会，はい，です
- <C> どうして，ですか？
- <K> うーん，あー，も，もちろん，あの一，田舎暮らしは，あの一，あ，静かに自由な時間が多いで，あの一，あー，のんびりして，のんびりして，〈はいはいはい〉あ，毎日ー，楽しんでー，あの一，あー，暮らしています
- (B-JAS : 03-CCB07)

次に，第4回のデータでは25回と副詞「やはり」を多用していることが，他の回とは異なっている。本節ではこの点について検討する。(12) (13) に用例を示す。

- (12) <K> もしー，じ，あー，私の家族は，あの一，まあ，おっかねがー，お金を，心配する，ひ，こと，あの，しつ必要では，なーいんです，から，あの，やっぱりー，お，お，ん，あの，にば，二番目ーの一，〈はい〉仕事ーを，選びたーいんですねー
- <C> うんうんうんうん
- <K> あの，もしー，両親は，もう，あの一，しごくが，なくてー，〈うーん〉あの一，特別なー，お金を稼ぐー手段，を，なーい，な，なければー，やはり やはり，やはりー，い，あー，あの一，給料がー，高いー，事業をー，選びたーいんですねー
- (B-JAS : 04-CCB07)
- (13) <C> 日本に住んでたらどうですか。？じゃ
- <K> 日本の，あ，日本の一，あ，今のしゃっかい（社会）の一，あの一，あの，厳しいですか
- <C> うーん，す，たぶん中国よりは，厳しくないと思いますけどねー
- <K> あー，はい，でも，あの一，おー，はい，な，じゃあやっぱりー，やっぱり，やっぱり，何をしなくってー，あー，子供は，あの，自分でー，あの一，成長，を，す，あ，子供が，あの，じ，自分でー，自分のことを，解決ー，す，解決？
- (B-JAS : 04-CCB07)

(12) では「やはり やはり, やはり, 給料が高い事業を選びたいですね」, (13) では「じゃあやっぱりー, やっぱり, やっぱり, 子供が自分で自分のことを, 解決する」と副詞「やはり」を3連続で発話している。第4回では他にも「うーん, やはり, やはり, あの一, う, あの一, 文系の一, 授業はもっと, 面白いと思います」や「やはり やはりー, 家族と一緒にー, 一緒にー, 何を, 何をしてもー, いいんですけど, 家族と一緒にー, とゆうことは, 重要です」と副詞「やはり」を重複した発話もあった。

B-JAS では, 他の3名の学習者も副詞「やはり」を重複して用いていた。その用例を(14)から(16)に示す。

(14) 時間とお金のどちらが大切かという質問への回答

<K> ……あーん, うーん, やっぱり, やはり, あ, 時間が, 大切, です,

(B-JAS : 01-CCB13)

(15) 日本語について難しいことはないかという質問への回答

<K> はい, やはり, やっぱり, つ, そねは確かにー, あります

(B-JAS : 04-CCB14)

(16) 将来の夢についての語り

<K> そうですね。 やっぱり やっぱり 博士, に一行ったら, あの一, その, なんか, あの一, 研究なんか院生, 修士だけーで終わったら, あの一, カウンセラーとして, あの, 説得力がないような, なさそうな, 感じ…  
…

(B-JAS : 08-CCB03)

(14) の用例は CCB13 のデータで時間とお金のどちらが大切かという質問に「やっぱり, やはり, 時間が大切です」と回答している用例, (15) の用例は CCB14 のデータで, 日本語についての話題で, 「やっいて難しいことはないか」という質問に対し, 「はい, やはり, やっぱり, それは確かにあります」と回答している用例, (16) の用例は CCB03 のデータで将来の夢の話題で「やっぱりやっぱり博士に行ったら, 研究なんか院生, 修士だけで終わったら, カウンセラーとして, 説得力がなさそうな感じ」と説明している用例だが, CCB07 のように1つの調査回に複数回は出現していない。「やはり」の重複が6回出現することは CCB07 のデータ特有のことである。また, CCB07 のデータでは「もちろん」出現も他の学習者に比べて多く, 出現数は第1回(5), 第2回(5), 第3回(4), 第4回(2),

第5回(0)，第6回(0)，第7回(8)，第8回(2)となっている。

石黒圭は「「もちろん」は独り言では用いられない言葉であり，副詞「やはり」は独り言でも他者に対しても用いられる言葉である」(2018 談)ことを指摘しているが，「もちろん」は重複して使うことで，話者の確信が強調され，聞き手に向かって発することで意味を持つ言葉である一方，「やはり」は聞き手に対しても，自己の内面に対しても用いられ，重複して使うことは，話者の逡巡の深さを表すと考えられる。

CCB07 の(12) (13)の重複した使用が逡巡の深さを表しているか，単なる言い直しであるのかの判断はできない。I-JASの学習者のデータにも，3連続で「やはり」を発話している用例には，都会と田舎のどちらがいいかという話題で「どんなライフスタイルができるか」という質問に対し，「や，やっぱり，やはりやはり，都会，都会の，生活が好きです，あの一，だって，あの，ん一，都会で，あの正しい，アクティビティーが，ある一，あるはずです，(I-JAS : EUS29)」や，ロールプレイのデータで申し出を断る際に逡巡の深さを示す用例，「そうかもしれませんが，えっと一，やっぱり，あ，やはりえっと一，接客一の仕事，がしたいと思います，(I-JAS : EAU36)」が観察されている。

CCB07のデータで「やはり」を重複して用いる用例は第4回以外は出現しておらず，(17)に示した第5回の用例のように「やはり(≡「III 熟考した結果」)，日本に行って，もっとやりたいことを探したい」，「はい，でも，やはり(≡「I-2 同様に」)，最初はきっと大変」の使用となっていた。

(17) <C> 行動心理学がやりたかったんですね

<K> そうです

<C> あ一，そうなんですか一

<K> 行動し，あ，はいはい，〈あ一〉，心理心理，はい。，〈うーん〉，そ，そして，あの，九月の最後一に，あの一，日本に行くつもりで，〈うんうん〉，やはり，日本，日本に行って，あの一，もっと，やりたいこと，を探したいのです

<C> ん一

<K> はい，でも，ん一，やはり，最初は，きっと大変なんです。，〈ん一〉，言語一も，あの，基本的なことは，できる一，できるんですけど……

(B-JAS : 05-CCB07)

## 5.5 学習者 CCB05 の副詞「やはり」の使用の変化

表 7-14 : CCB05 の副詞「やはり」出現数

CCB05	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	総計
出現数	0	0	0	0	16	4	5	16	41

表 7-14 に CCB05 の副詞「やはり」の出現数を示した。CCB05 のデータでは、副詞「やはり」は第 5 回以降に出現しており、出現数は第 5 回 (16) , 第 6 回 (4) , 第 7 回 (5) , 第 8 回 (16) であった。形態では第 5 回, 第 6 回, 第 7 回は「やはり」と「やっぱり」を併用しており、第 8 回は「やっぱり」のみを使用している。

また、各回に出現する用例の意味・機能を分類し、表 7-15 に示した。8 回の調査の中で「I-1 依然として」, 「I-3 同じ結果に帰結」, 「IV 他の選択肢を排除」での使用はなかった。

表 7-15 : CCB05 の「やはり」の意味・機能

CCB05	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
I-1	—	—	—	—	—	—	—	—
I-2	—	—	—	—	4	—	3	7
I-3	—	—	—	—	—	—	—	—
II	—	—	—	—	—	—	—	1
III	—	—	—	—	9	3	2	6
IV	—	—	—	—	—	—	—	—
V	—	—	—	—	3	1	—	2
不明	—	—	—	—	—	—	—	—

J-CAT の結果<sup>67</sup>から CCB05 の日本語のレベル（第 5 章 3.2.1 節 表 5-17 p.106 参照）を詳細に見てみると、1 年次（64 点：初級）、2 年次（76 点：初級）、3 年次（163 点：中級）、4 年次（238 点：中級後期）となっており、日本語のレベルが中級に達していない 1 年次の第 1 回調査と第 2 回調査、2 年次の第 3 回調査、第 4 回調査では副詞「やはり」の出現がないことは興味深い。山内（2004・2009）に副詞「やはり」は上級話者のアンモナイト形態素であるという指摘があったが、CCB05 のデータでは日本語のレベルが初級である場合副詞「やはり」が出現していない<sup>68</sup>。

CCB05 は副詞「やはり」が出現する第 5 回以降、意見述べの部分で副詞「やはり」を用いている。本節では第 1 回から第 8 回の調査回で意見述べの部分の発話を検討することとし、(18) から (21) に副詞「やはり」を用いていない調査回の用例を示した。

(18) <C> ……二十年あとに、えーとー、家を買います。、そして住みます。、田舎と、都会と、どちらがいいと思いますか？、都会とー、田舎とー、どちらに住みたいですか？

<K> 住みたい

<C> うん住みます、〈うん〉家を買います、住みます、どこがいいですか？、どっちがいいですか？

<K> うんー、んー、んー、田舎、田舎です (B-JAS : 01-CCB05)

(19) <C> 五歳の子供がいますね。、……で、あなたは、その子を五歳の子供を自由に、遊ばせたい、ですか。？自由に

<K> 自由に、あん、えん

<C> 自由、自由 {書く音} 遊ばせたいですか。？それとも、英語の勉強とか、あとはピアノとか、バイオリンとか、あとはなんかわかんない。す、水泳とか、〈うん〉スポーツとかね。〈はい〉そうゆうのたくさんさせたいですか。？どちらがいいですか？

<K> うーん、えーとー、うーん、あ、えいぎょ (英語) はー、あん、え、私は、あ勉強、あ、英語は

<sup>67</sup> J-CAT の点数と JLPT レベルの互換表では、0-100：初級、101-150：中級前期、151-200：中級、201-250：中級後期、251-300：上級前期、301-350：上級、351-400：超級とされている。

<sup>68</sup> B-JAS データでは、1 年次から 4 年次の J-CAT の結果で初級相当のレベル（1-100 点）だった学習者が他に 2 名存在するが、本調査ではその 2 名も副詞「やはり」を使用していない。

<C> はい

<K> あ、あ、あべん、あ、英語、英語、勉強は、あー、えー、えーと、あー、必要、必要、必要ですから、うん、あ、それからえいぎよ（英語）はあ、うーん、え、あく、あー、す、[あ、えいぎよ（英語）は、あー、あー、あー、大事の一、あー、こと一、こと、え、大事のことを、ことをします。、えん、えーと一、うーん、あー、そのあとは一、あー、えー、そのあとは一、あー、ピアノを、あー、ピアノを、おー、あー、きま、き、きます。、えーと一、うー、うー、あー、ほかの、ほかの時間は、あー、あ、子供の、お、自分を、あー、あー、あー、何も、何も好きです

(B-JAS : 02-CCB05)

(20) <C> そうすると、まあ、お金がたくさん、貰ったら、家を建てる時はどっちがいいですか？

<K> うーん

<C> 町がいいですか。？田舎がいいですか？

<K> うーん

<C> 町がいいか。、田舎がいいか

<K> うーん、あの一、あー、か

<C> 町がいいですか？

<K> はい、町がいい

(B-JAS : 03-CCB05)

(21) <C> 給料が一、凄く高いんですけど一、〈うん〉忙しい仕事と一、〈うーん〉給料は、少ないんだけども一、〈うーん〉あの一、自分にとって、いい仕事、あの一、やりがいがある仕事、だったら、〈うーん〉どちらがいいと思いますかー？

<K> うーん、自分で一、好きな一、しごと一、うーん、な、私にとって一、うーん、自分、自分の好きな仕事一、すれば、されば、あー、お金は一、お金が、少し一、うーん、だいじょぶな、とっています

<C> うん

<K> でも一、あ一、とても、す、少し一

<C> {笑}

<K> あー，でも私は自分でー，あー，あー，自分の会社を，創作，したいの  
がー，うーん，もしー，さっきは，お金は，うーん，とてもー，あー，  
きんー，とて，お金の状況はー，きんじょう，と思っています。 ， お  
ー，それはー，大丈夫な (B-JAS : 04-CCB05)

副詞「やはり」を用いなかった調査回で，(16)の第1回調査では，基本的な既習語彙を用いた対話だが，対話の成立のためにインタビュアーの助けを借りている。(17)の第2回調査では，日本語で話したい意欲はあるが，質問の回答にはなっていない。(18)の第3回調査では，質問を何回か繰り返してもらった後に回答している。(19)の第4回調査では，フィラーは多いが，既習語彙を用いてお金を選ぶと回答していることが観察できた。

次に副詞「やはり」を用いている調査回の用例を(22)から(25)に示した。

(22) <C> じゃ，あの一，お金と一，時間と，どちらがたくさんあったほうがいいと思いますか？

<K> んー，お金ーと時間ーど，やはり時間ーが，多くのほうがいいと思いますね。 ， うーんー，今年ーはー，日本に来た時，あの一，たくさん，サラリーマンを見て，みんな毎日忙しい，のふうに，す，その場合はー，たとえ，お金が，あれば，かかる時間も，ありませんかもしれません (B-JAS : 05-CCB05)

(23) <C> ……忙しい，すごい忙しいんですが，〈ん〉，お給料がすごい高い仕事と一，えーと，給料は安いんですけど，自分がやりたい仕事だったら〈んー〉どちらを選びますか？

<K> そうですよねー。 ， 私ーならやはり，給料が高い仕事が欲しいです

<C> んー，どうしてですか？

<K> うん，なんかきー。 ， やはり，生きることは，一番大事な，ことだと思います。 ， 〈ふーん，うーん〉 ， うーん，給料が安いなら，たぶん，自分好きなものとか，しーたいこととか，のことができーなかった，でき，なくなります。 ， それならー，たぶん，好きな，仕事，なら嬉しくないになりました (B-JAS : 06-CCB05)

(24) <C> ……どこかに住むとしたら，都会がいいですか田舎がいいですかー？

<K> そうですよねー，やはり，都会が，いいですよね。 ，〈うーん〉訳は，なんか，うーん，交通，だとか，便利なんです。 ，あるいは，えーつとー，うーん，買い物とか，何か欲しいたら，すぐに，買えます。

(B-JAS : 07-CCB05)

(25) <C> 今じゃなくて将来ね

<K> はい，将来はー，うーん，やっぱりー，都市に，住んで，〈あーあー〉住みたいです

<C> どうしてですか？

<K> うーん，やっぱりー，都市はもっと，現代的，し，あー，しけん（資源）と，あー，機会はー，いっぱいあるです。…… (B-JAS : 08-CCB05)

第5回調査から第8回の用例では，質問に対して適切に回答しているだけでなく，(22)の第5回調査では，「お金ーと時間ーど，やはり時間ーが，多くのほうがいいと思いますね」と「Ⅲ 熟考した結果」で使用していた。(23)の第6回調査では「そうですよねー，私ーならやはり，給料が……」「うん，なんかさー，やはりー，生きることは……」，(24)の第7回調査では「そうですよねー，やはり，都会が……ね」と，「そうですよね」に後接して「やはり」が出現していた。(25)の第8回調査では「うーん，やっぱりー，……」と副詞「やはり」が「うーん」に後接するすることにより，より自然な形(母語話者の使用に近い)「Ⅲ 熟考した結果」での使用になっていることが観察できた。

## 5.6 その他の学習者の用例

CCB05, CCB10, CCB07 の学習者以外の用例で特徴のある用例を以下に示す。いずれも第6回調査で出現している CCB14 の用例で，調査者と共話している中に出現する用例と，他者への協調的態度を示す用例を(26) (27) に示す。

- (26) <K> や, 【地名1】は一, あの, 大阪のような, 大都市と比べて, そんなに一賑やかではなく, 〈へー〉, そして田舎一とも言えなくて, その, バランスがいい, 都市と言えますから, すごく気に入ります,
- <C> ふーん, そうですか, 〈はい〉, 一番のお気に入りは何ですか.? その
- <K> 【地名1】で
- <C> 【地名1】の
- <K> 【地名1】, やっぱり海ですね., 〈ふーん〉【地名1】と言えば, 海のほうは, かいこうのほうが, すごく, あの, 空気もきれいしー, あの, けーしきも, きれいで, 〈ふーん〉はい, すごくよく, 海を隣に散歩に行きます。
- (B-JAS : 06-CCB14)

- (27) <K> たぶん, 戦敗, 後(あと)の, たぶん1950年代から今までの, 日本の, きーん現代, 社会の歴史についての授業, とゆう授業なので, 先生の, 日本語はすごく, わかりにくくて
- <C> んー,
- <K> そして第一回目の授業が終わって, 先生のほうに行って「すみません, こ, その, その, 授業を, 受けたい, ん, と思っていますけど, 留学生に対してはやっぱり, あのーちょっと難しいですね, おすすめですか?」先生は「いや, おすすめではないんです, 留学生に対しては, 難しいです, ……」
- (B-JAS : 06-CCB14)

(26) は留学先のお気に入りの場所について調査者と学習者で「一番のお気に入りは, その」「【地名1】で」「【地名1】の」「【地名1】, やっぱり……」と相互補完しながら会話を進めている。次に, (27) は留学先の授業で受講する授業について担当の先生に質問する際, 「すみません, この授業を受けたいと思っていますけど, 留学生に対してはやっぱりちょっと難しいですね, おすすめですか」と副詞「やはり」を用いており, 「授業は留学生にとって, 私も予期していますが, (やっぱり≒「II 予期した通り」) ちょっと難しいですね」と発話している。談話において他者との調和的態度を示す副詞「やはり」の用例である。また, 山内(2004・2009)が指摘する上級学習者のアンモナイト形態素「やっぱり」「ちょっと」「おもいま」「ですけど」を用いている。

B-JAS インタビューデータでは、2者択一して自分の意見を述べる際に副詞「やはり」が多く出現しているが、他に出現しやすい状況として、強い記憶の回想に触れるときや、好悪を語るときなど発話者が心内を検索する際に出現することが観察された。用例を(28)(29)に引く。

(28) <K> ……、例えば私と他の、人が、あの、同じようなミス、が、を犯した時、先生はあの、子、あの子をおかった、たんですけど、あ、いや、あ、先生はあの子に怒ったんですけど、私には、やっぱり、まるで何(なに)も怒ってないように、{笑}、何(なに)も言っていなかったんです……つまり一つの試験で、私は、んー、やっぱり、その時、た、調子がちょっと悪くて、だからその時、その、試験の結果、英語の結果はそんなに良く、な、良くなって、だから、うん、先生が、私を、その、事務室に呼びました (B-JAS : 06-CCB18)

(29) <K> その時、私の母これ、あの一、私の、母は、父の、様子?、たば、煙草を吸っている様子を見て、まあ、やはり、腹が立つ、つまり、あの、母は一?、私の父に健康のために、

<C> ふーん

<K> や、あの、煙草をやめようと一、何回(も言っていたんですけど一、  
<うん>)、私の、父はやはり、き、聞かなか、聞かなくて、<ふーん、  
ふん>、だから一時々、けんこう、喧嘩、起こっていたんです

(B-JAS : 08-CCB18)

(28)は過去の記憶を語る中で、「一つの試験で、私は、んー、やっぱり、その時、た、調子がちょっと悪くて」と記憶を辿る際に「V形式・内容を選択途中」で出現している。

(29)は「煙草を吸っている様子を見て、まあ、やはり、腹が立つ」と話者が家族の感情を語ったり、「父はやはり聞かなくて」喧嘩になると、家族の中に争いが起こったことを語る際に副詞「やはり」が出現している。

## 6. 結論

B-JAS のデータを用い、日本語の習熟度が上がる過程で副詞「やはり」の使用がどのように変化するかについて、使用率と形態、意味・機能の変化から見た使用実態を調査した。その結果、観察された点を課題に従って述べる。

課題 1：学習者の習熟度による副詞「やはり」の出現数・形態はどのように変化するか。

まず、学習者の日本語のレベルは、各学年の初めの調査時に行われた J-CAT の結果から中級前半から上級前半に上がっていることが確認できた。副詞「やはり」の調整頻度では第 1 回 247.0 から第 8 回 2841.7 にかけて漸増している。形態別では、「やはり」の調整頻度は第 5 回 1501.7 がピークでその後は漸減しているのに対し、「やっぱり」は第 7 回 1641.2 に向かって漸増しており、第 6 回と第 7 回で「やはり」と「やっぱり」の出現は逆転している。「やっぱ」は第 7 回、第 8 回の調査で出現している。次に、使用した人数は第 1 回 3 人から第 6 回・7 回・8 回の 15 人に向かって漸増している。

使用した人数に関しては、形態別では「やはり」は第 6 回 13 名をピークに第 7 回と第 8 回は半減しているが、「やっぱり」は第 7 回は 10 名で最も多く出現頻度と同様に第 6 回と第 7 回で「やはり」と「やっぱり」の使用人数は逆転している。しかし、学習者がいずれも第 6 回調査の前後で日本に留学していることの影響、日本語の習熟度との関係、母語話者との接触の有無との関係によるか否かは、別の詳細な調査が必要である。また、個人が使用している形態は「やはり」のみを用いた人 1 名、「やはり」「やっぱり」の 2 形態を用いた人 10 名、「やはり」「やっぱり」「やっぱ」の 3 形態を用いた人 4 名であり、「やっぱし」を用いた人はいなかった。

課題 2：学習者は複数ある副詞「やはり」の意味・機能どの順番で使用するようになるか。

出現した副詞「やはり」を本稿でとる意味・機能で分類した結果、用例の初出の調査回は、「I-1 依然として」は第 6 回、「I-2 同様に」は第 2 回、「I-3 同じ結果に帰結」は第 5 回、「II 予期した通り」は第 3 回、「III 熟考した結果」は第 1 回、「V 形式・内容を選択途中」は第 1 回であり、「IV 他の選択肢を排除」での使用はなかった。この結果、B-JAS 学習者のインタビューデータにおける副詞「やはり」の意味・機能の使用順は、「III 熟考した結果」、「V 形

式・内容を選択途中」→「I-2 同様に」、 「II 予期した通り」→「I-3 同じ結果に帰結」→「I-1 依然として」の順に使用するようになっていた。ただし、「V 形式・内容を選択途中」での使用がなぜ第1回調査から出現しているのかについては、(学習していなくても使用できるものなのかについては) この調査からは論じることはできない。

クラスター分析により抽出した3名の用例の質的分析から以下の4点が観察された。①日本語のレベルが上がるに従い、使用する副詞「やはり」の意味・機能の種類が増えている。副詞「やはり」を導入する際、「II 予期した通り」と「III 熟考した結果」は初期の段階で指導されると考えられが、「II 予期した通り」の出現の時期は2年次前半になっている。このことは、本データが15の話題から成るインタビューデータであることとの関係があり、主に質問と回答から成るデータでは、「II 予期した通り」は出現する状況になりにくいことが考えられる。②日本語のレベルが上がる過程で、1名の学習者に副詞「やはり」を2連続・3連続で用いる用例が観察された。しかし、この傾向は第4回の調査回に限られており、以降は重複して用いることをしなくなっていた。③本データでは、J-CATの結果によるレベル判定で日本語のレベルが初級である場合副詞「やはり」は出現しないことが観察された。④日本語のレベルが上がること、日本への留学という状況や、副詞「やはり」を使わざるを得ない話題や文脈があることにより、副詞「やはり」の意味・機能の使用の幅が広がっているのではないか。

## 7. 第7章のまとめ

本章は、「研究課題3)-2 インタビューデータにおける学習者の使用の変化は、出現数、形態、意味・機能の面からどのようにになっているか」に対応している。B-JASのインタビューデータを用いて、副詞「やはり」の学習者の使用の変化を調査・考察した。縦断コーパスにおける使用実態(使用の変容)として、次の4点が観察された。

- ① 日本語の習熟度が上がるとともに副詞「やはり」の出現数が増加することが観察された。
- ② 副詞「やはり」の使用した形態の変化では、「やはり」と「やっぱり」は「やはり」の出現がやや多い傾向で拮抗して用いられていたが、「やはり」は第5回の調査がピークでその後は使用が漸減しており、第6回と第7回で「やはり」と「やっぱり」の出現は逆転していること、「やっぱ」は日本留学から帰国後の第7回、第8回の調査で出現すること

が観察された。

- ③ 学習者が、副詞「やはり」の意味・機能を使用した順番としては、「III 熟考した結果」→「V 形式・内容を選択途中」→「I-2 同様に」、 「II 予期した通り」→「I-3 同じ結果に帰結」→「I-1 依然として」であること、B-JAS のインタビューデータには「IV 他の選択肢を排除」を使用していないことを確認した。
- ④ 用例の質的分析から、日本語のレベルが上がること、日本への留学という状況や、副詞「やはり」を使わざるを得ない話題や文脈があることにより、副詞「やはり」の意味・機能の使用の幅が広がっていくことが観察された。

次の第8章は、「研究課題 3) -3 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は、会話の属性別（接触場面か母語場面か）、対話相手との関係別（親疎）でどのような異なりがあるか」に対応する章で、第5章と第6章で調査対象としたインタビューデータとは異なる雑談データにおける副詞「やはり」の使用実態を調査・検討する。

## 第8章 自然会話コーパスから見た副詞「やはり」

### 1. 第8章の目的

第8章では『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020年版) : BTSJ』の雑談データを対象に、副詞「やはり」の学習者と母語話者の使用実態を調査・考察する。その理由は以下による。

本論ではここまで、第6章は学習者横断データ、第7章は学習者縦断データの副詞「やはり」を調査・検討してきたが、いずれも15の質問からなる半構造化インタビューにおける実態であった。インタビューデータとは異なる日常の会話に近い形式の会話で副詞「やはり」がどのように使用されているのか、定量的側面・定性的側面からの実態を把握する必要があると考えた。

そこで、「雑談は、話者相互が協働して会話を組み立てていくことから、日常の副詞「やはり」の使用に近い副詞「やはり」の使用傾向が観察できるだろう」、「対話の相手が学習者か母語話者か、初対面の人との会話か友人との会話かという異なりは、共有する背景知識の多寡、対話相手への配慮という点で副詞「やはり」の出現に何らかの影響をもたらす（副詞「やはり」の出現は対話の相手によって異なる）だろう」という仮説を立て、BTSJの接触場面・母語場面の会話、関係性の親疎が異なる会話データから、副詞「やはり」の使用実態を調査・考察することとした。研究課題を以下のように設定した。

課題1：雑談における学習者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎で出現率に違いはあるか。

課題2：雑談における母語話者の副詞「やはり」の使用で、接触場面・母語場面の別、話者の関係の親疎で出現率に違いはあるか。

課題3：雑談において副詞「やはり」の発話中の出現位置ごとの出現環境に、どのような特徴があるか。

以下、2節では、本章と関連のある接触場面に関する先行研究と応答表現としての副詞「やはり」の先行研究を概観し、3節では調査方法と対象のデータについて述べる。4節では関係の親疎別、会話の場面別出現率を定量的に記述し、5節では出現位置ごとの傾向を定量的

に記述し、6 節で結論を述べる。7 節は本章のまとめである。

## 2. 第 8 章に関連する先行研究

### 2.1 接触場面に関連する先行研究

接触場面の人間関係に関わる研究には多くの蓄積がある。接触場面に関わる研究として西條 (2005) , Heritage (2008) , 柳田 (2013) の研究を、対話相手の親疎に関わる研究として武田 (2016) の研究を、両領域に渡る研究として宇佐美・張 (2020) を概観する。

接触場面の会話には、「非対称性」「知識勾配」があるとされている。西條 (2005) は「接触場面の会話における非対称性が会話の進行に伴ってどのように発現し、参加者相互によってどのように管理されるか」を調査し、それを克服するための会話管理方略として「先行発話への応答」と「語の反復」が特徴的に用いられていることを述べている。また、Heritage (2008) は「話題情報に関わる話者間の「知識差」を解消するために、質問が行われる」としている。柳田 (2013) は、接触場面における母語話者のコミュニケーション方略の仕組みを明らかにする研究の中で、接触経験の多い母語話者が用いる方略として、「あいづちの多用」「理解表明と理解あいづちの併用」を挙げている。

次に、親疎に関わる研究としては、関係性が異なる日本語話者同士の相互行為に見る重複発話に着目し、互いの協調性の関係にどう影響するか、頻度と機能の面から考察した武田 (2016) がある。その中で、あいづち(笑い)を伴う重複発話は自由対話の方が課題達成談話より多いこと、初対面ペアは距離感や沈黙への気遣いを反映する重複発話が見られたことを報告している。宇佐美・張 (2020) では、親疎の異なる話者の接触場面における「バランスをとるための笑い」を分析し、「初対面会話では、母語話者>非母語話者、友人同士の会話では、母語話者<非母語話者」、「母語話者は、友人<初対面、非母語話者は、友人>初対面」と出現の仕方が逆になっていると報告している。

以上は、語用論的観点から「質問」「あいづち」「笑い」「沈黙」に着目した調査から得られる知見であり、これらの研究の蓄積を副詞の中の 1 つの形式である副詞「やはり」の考察に軽々に援用することはできない。しかし、副詞「やはり」が母語話者の会話で多用される点、副詞「やはり」が発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞である点から考えて、談話における副詞「やはり」の振る舞いを探索的に調査することは、副詞

「やはり」の持つ談話での機能の一側面の解明に繋がると考える。

## 2.2 副詞「やはり」に関する先行研究

「副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究」は、第4章、3.1節「副詞「やはり」の意味・機能に関わる研究」に記した、スキーマ的意味と意味・機能の枠組み（P.64 (2) (3) 表 4-1 参照）と同様である。

次に、応答表現としての機能に関して森山（1989）は、応答を談話展開の標識の一つとしてとらえ、応答表現を、談話運用上の聞き手側の情報伝達行為に対するサインとして機能する「態度表明系の応答」と、談話における情報伝達の関係・内容などの展開を制御する「展開制御系の応答」に分け、先行文のタイプ<sup>69</sup>、情報の有無を加味し分類している。副詞「やはり」は「態度表明系－認識的文に対する応答－情報がない場合－導入表示類（納得）」と、「展開制御系－関係を設定・確認－言い淀み」として機能するとしている。

曹（2001）は、談話における副詞「やはり」の多義的な機能を明らかにするために、順接と逆接の環境に出現する副詞「やはり」を考察をしている。その中で、順接の理論からは「妥当な推論の結果としての話し手の判断」と応答表現としての副詞「やはり」が、逆接の理論からは「話し手の認識の確認や再確認」と発話を修正する機能を持つ副詞「やはり」<sup>70</sup>が認められるとしている。鈴木（2020）は、BTSJの接触場面の雑談の会話における副詞「やはり」の使用傾向を調査し、学習者の使用率は、話し手と聞き手の親疎関係に関わらず、日本語レベルが上がるにつれて高くなること、母語話者の使用率は、親しい学習者が相手の場合、相手の日本語レベルによる差が小さいが、初対面の会話の場合、対話相手のレベルを考慮して副詞「やはり」の使用を控えていることの2点を報告している。

本研究ではこれまでに蓄積された副詞「やはり」の先行研究を踏まえ、実証的データの調査と検討から副詞「やはり」の一側面を模索する立場をとる。本章においては、雑談データにおける副詞「やはり」の使用の特徴を定量的に観察し、その後に談話における副詞「やはり」の出現の特徴と、対話相手の属性の異なりにより副詞「やはり」がどう使われているか

<sup>69</sup> 森山（1989）では、文のタイプを「応答不要文(自己完結的な感嘆文)」「策動文(命令文や意志文)」「応答要求文(判定疑問文／不定疑問文)」「(聞き手情報)非配慮伝達文、認識的な文(平叙文)」としている。また、林（2016・2017）を援用した。

<sup>70</sup> 「本稿における副詞「やはり」の意味・機能」（第4章 3.1節 表 4-1）では、「IV：他の選択肢を排除」に相当する。

定性的検討を行う。

### 3. 調査の概要

#### 3.1 調査方法

語用論的分析のために構築されている自然会話コーパス、『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2020 年版』を用いた量的調査と使用例を用いた質的調査を行う。手順は以下の通りである。

- ①BTSJ のデータ、377 会話から研究課題に照らし、対象とするデータを絞る。
- ②考察対象のデータを形態素解析し、データの語彙的・語用論的特徴を概観する。
- ③対象のデータを用いて、副詞「やはり」の学習者・母語話者別、話し手と聞き手の親疎関係別の使用数から見た使用実態を調査し、定量的にまとめる。
- ④対象のデータを用いて、副詞「やはり」の出現位置を、発話開始部・発話中間部・発話終了部別に調査し、定量的にまとめる。
- ⑤発話の中で副詞「やはり」がどのような形式と出現するかを出現位置別に調査し、副詞「やはり」の出現環境を質的に記述する。

#### 3.2 対象とするデータ概要

人間の相互作用としての会話の分析は、会話自体の分析のみならず、会話以外の社会的要因の分析も重視することが必要である（宇佐美 2018・2020）という観点から構築されたコーパスで、BTSJ には、表 7-2 に示したように様々な目的をもって収集された 25 の会話グループ、計 377 会話のデータが存在する。

本調査では、接触場面の自然会話で、学習者と母語話者が協働して会話を組み立てていく雑談における傾向を考察するために、表 8-1 に示した会話から「母語場面・接触場面（中上級学習者との会話）」「雑談」「話題－指定なし」「収録時間－15：00～30：00」の条件に適合する会話を選定した。

表 8-1 : BTSJ 会話情報

会話情報	内容
参加者の母語	母語場面・接触場面
ジャンル	面談・討論・機能を含む会話（誘い・謝罪・断り）・雑談・OPI
会話方式・形式	対面・電話
真正性	自然会話・インタビュー・ロールプレイ・ドラマ
話題	OPI・誘い・謝罪・断り・論文指導・指定なし
話者の関係	友人・親しい関係・教師と学生・先輩と後輩・OPI テスターと被験者・初対面
性別	男女・男性同士・女性同士
社会的属性	学生（大学生・大学院生・日本語学校学生）・教師・社会人・記載なし

本調査では、表 8-2 に示した 8 のサブグループにわたる 53 会話、延べ 106 人のデータを分析対象とする。なお、宇佐美・山崎（2018）では、BTSJ は「会話全体を一括して分析するために編まれていないので、現状では、データの均衡性が保たれている「サブグループ」単位の分析を推奨している」とあるが、本論では定量的に傾向を考察するため複数のサブグループに渡るデータを使用することとした。

表 8-2 : 分析対象とするデータ（再掲）

	接触場面		母語場面	
	初対面	友人	初対面	友人
対話相手の母語	韓国語・ 中国語(台湾)	中国語・ 中国語(台湾)	日本語	日本語
発話文数	6,762	6,065	5,895	5,686
収録時間	255 分 13 秒	277 分 17 秒	266 分 33 秒	205 分 24 秒
会話	3グループ 13 会話	2グループ 14 会話	4グループ 15 会話	3グループ 11 会話
【グループ番号】	【8】121/125/129	【10】142/143/144/ 145/146/147/148/ 149/150/151	【11】154/157/160	【6】112/113/114/ 115/116
会話番号	【9】131/133/135 /139/141 【11】152/155/156 /158/159	【22】325/326/327/ 328	【13】175/176/187 【14】91/193/197/ 199/201/203/205 【23】330/332	【15】207/208/209 【23】329/331/333

#### 4. 副詞「やはり」の出現率

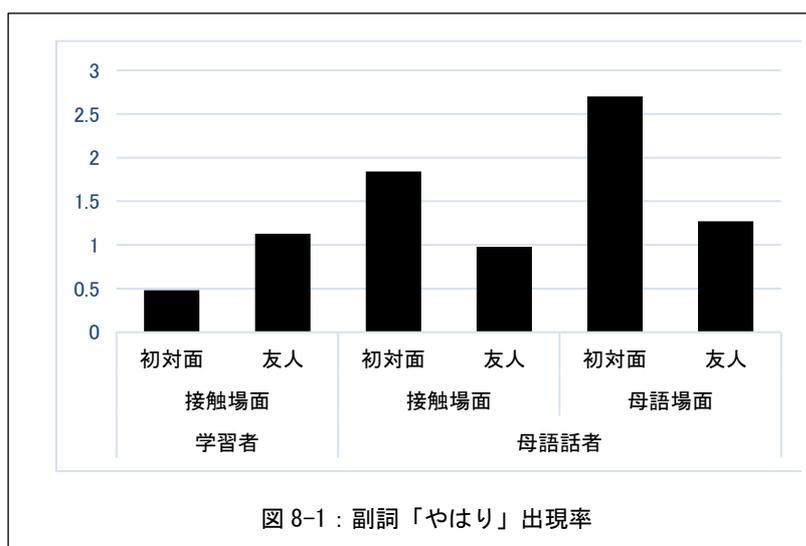
##### 4.1 会話の属性、関係の親疎別の出現率

接触場面・母語場面、話者の関係の親疎別の使用傾向を考察するため、会話別の副詞「やはり」出現数・出現率（出現数/発話文数）と使用していない会話数をまとめ、表 8-3、図 8-1 に示した。

表 8-3：出現数・出現率

	学習者		母語話者			
	接触場面		接触場面		母語場面	
	初対面	友人	初対面	友人	初対面	友人
会話数	13	14	13	14	15	11
発話数	3,151	3,007	3,151	3,178	5,895	5,686
出現数	15	34	58	31	159	73
出現率 (%)	(0.48)	(1.13)	(1.84)	(0.98)	(2.70)	(1.28)
未使用の 会話数 (%)	6/13 (46.2)	1/14 (7.1)	4/13 (30.8)	2/14 (14.3)	5/30 (16.7)	5/22 (22.7)

・表中の「出現率」は、「=出現数/発話数」で算出した。



副詞「やはり」の接触場面・母語場面別、話者の関係の親疎別の出現率の比較から次の点が観察できた。まず、学習者の対話の相手の親疎の違いでの出現率は、初対面会話 0.48%、友人との会話 1.13%となっており、友人との会話は初対面会話より出現率が高かった。次に、母語話者の出現率は、接触場面の初対面会話では 1.84%、友人との会話では 0.98%、母語場面の初対面会話では 2.70%、友人との会話では 1.28%となっていた。対話の相手の親疎の違いでは、接触場面、母語場面とも初対面会話の出現率が高く、接触場面の初対面会話では 1.84%、友人との会話では 0.98%となっていた。母語場面の初対面会話では 2.70%、友人との会話では 1.28%となっており、母語場面の初対面会話での副詞「やはり」の出現率は接触場面・母語場面別、話者の関係の親疎別で調査した中で最も高かった。会話の場面別では、接触場面より母語場面の出現率が高かった。

ここで観察された傾向、①学習者は「友人との会話」より「初対面会話」での出現率が低いこと、②母語話者は副詞「やはり」が「友人との会話」より「初対面会話」で多く用いられること、「接触場面」より「母語場面」での出現率が高いこと、③母語話者と学習者で、「初対面会話」と「友人との会話」の出現率が逆になっていること、の理由の考察は用例の質的分析が必要である。6節で言及したい。

## 4.2 発話<sup>71</sup>の中での出現位置ごとの出現数

森本（1994）は副詞の文（発話）中での出現位置は自由度が高いと述べ、「もちろん」を例にとって（1）と述べている。

- （1）……たとえば、「もちろん」を例にとってみると、文中、五つの位置のうちどこでも現れる可能性がある。

△わたしは △来週 △その会議に △初めから △参加します。（森本 1994：31）

副詞「やはり」は多様な意味・機能を持ち、発話開始部で応答表現の一つとして用いられている。また、発話終了部に出現し倒置として機能する場合がある。次節以降で副詞「やは

---

<sup>71</sup> 本論での、1 発話は BTSJ の「発話文認定の方法」「文字化の原則」の定義に従っている。（2）表中「ライン番号：1 会話の中での通し番号」「発話文番号：BTSJ における発話を「発話文」と言い、話者交替と間を考慮して 1 発話文が認定されている。」「発話文終了：発話文が終了したか否か。終了は「\*」、終了していないは「/」がマークされている。本論では「発話」を用いる。

り」の発話の中の出現位置ごとの出現環境を定性的に検討していくが、それに先立って副詞「やはり」の発話開始部<sup>72</sup>・発話中間部・発話終了部別の出現数を調査した。BTSJでの発話位置の凡例を（2）に示す。

（2）発話開始部，発話中間部，発話終了部凡例

ライン 番号	発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	位置
203	192	*	JFB016	うらやましい，すごい。	
204	193	*	TFSu001	いいなー。	
205	194	*	TFSu001	ねー。	
206	195	*	TFSu001	んー。	
207	196-1	/	JFB016	<u>やっぱ</u> なんか，ん，1人暮らし憧れますけどな んか，，	←開始部
208	197	*	TFSu001	んー。	
209	196-2	*	JFB016	<u>やっぱ</u> “料理作れない”とか思ったら<笑い> “ちょっとやりたくないな”とか思っ<笑い>なが ら>。	←中間部
210	198	*	TFSu001	そうですか。	
211	199	*	JFB016	え，今 <u>やっぱ</u> り，もう料理とか自分で…。	←中間部
212	200	*	TFSu001	うん。	
213	201	*	JFB016	あ，すごい<笑い>。	
214	202-1	/	TFSu001	節約，したいから，，	
215	203	*	JFB016	そっかー，< <u>やっぱ</u> り><>。	←終了部
216	202-2	*	TFSu001	<できれば><>自分で作る。	

(BTSJ：接触 初対面会話 159)

<sup>72</sup> 「機能語+やはり」は発話冒頭部とした。なお、「接続詞」は機能語との見解がいくつかあるが、三宅(2005)から、「接続詞」は内容語とした。

発話中の出現位置ごとの出現頻度を、接触場面・母語場面、対話相手の親疎別に集計し、表 8-4 にまとめた。

表 8-4 : 副詞「やはり」出現位置別の頻度

	学習者				母語話者							
	接触場面				接触場面				母語場面			
	初対面	(%)	友人	(%)	初対面	(%)	友人	(%)	初対面	(%)	友人	(%)
開始部	6	(40.0)	7	(20.6)	20	(34.5)	6	(19.4)	44	(27.7)	23	(31.5)
中間部	8	(53.3)	27	(79.4)	35	(60.3)	20	(64.5)	107	(67.3)	47	(64.4)
終了部	1	(6.7)	0	(0.0)	3	(5.2)	5	(16.1)	8	(5.0)	3	(4.1)
総計	15		34		58		31		159		73	

結果から次の点が観察できた。接触場面の学習者は初対面の相手との会話では発話開始部 40.0%，発話中間部 53.3%，発話終了部 6.7%の割合であったのに対し、友人との会話では発話開始部 20.6%，発話中間部 79.4%，発話終了部での出現はなかった。接触場面の母語話者は初対面の相手との会話では発話開始部 34.5%，発話中間部 60.3%，発話終了部 5.2%の割合であり、友人との会話では発話開始部 19.4%，発話中間部 64.5%，発話終了部 16.1%の割合だった。母語場面の初対面の相手との会話では発話開始部 27.7%，発話中間部 67.3%，発話終了部 5.0%の割合であり、友人との会話では発話開始部 31.5%，発話中間部 64.4%，発話終了部 4.1%の割合だった。また、会話の属性別の副詞「やはり」の出現数に関して、発話中間部と発話開始部・終了部間<sup>73</sup>の関連を見るために、 $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な偏りは見られなかった。(  $\chi^2(5)=4.855, ns$  )

## 5. 副詞「やはり」の出現環境

本節では発話の中で副詞「やはり」がどのような形式と出現するかを出現位置別に調査し、特徴ある用例の質的記述を行う。第 6 章、第 7 章のインタビューデータの調査では、フィラ

<sup>73</sup>副詞「やはり」の出現位置別の出現数は 5 未満のセルが複数存在するため、「発話中間部」か「発話中間部以外」かに集約し検定した。

ー<sup>74</sup>を伴って出現する副詞「やはり」、複文の中で出現する副詞「やはり」の存在が指摘されている。雑談データにおいてはどうか。まず、副詞「やはり」と共起するフィラーの概要を調査し、その後に出現位置別の出現環境を検討する。

### 5.1 フィラーに後接して出現する副詞「やはり」

まず、副詞「やはり」がフィラーに後接して出現する場合を集計し、出現する位置、対話の相手別にまとめた。結果を表 8-5 と図 8-2 に示す。

表 8-5 : 副詞「やはり」がフィラーに後接して出現する割合

	学習者		母語話者				総計
	接触場面		接触場面		母語場面		
	初対面	友人	初対面	友人	初対面	友人	
開始部	0	1	6	2	15	4	28
中間部	1	4	9	2	11	4	31
終了部	0	0	0	0	0	0	0
計	1	5	15	4	26	8	59
共起する割合	6.7	14.7	25.9	12.9	16.4	11.0	15.9
総計	15	34	58	31	159	73	370

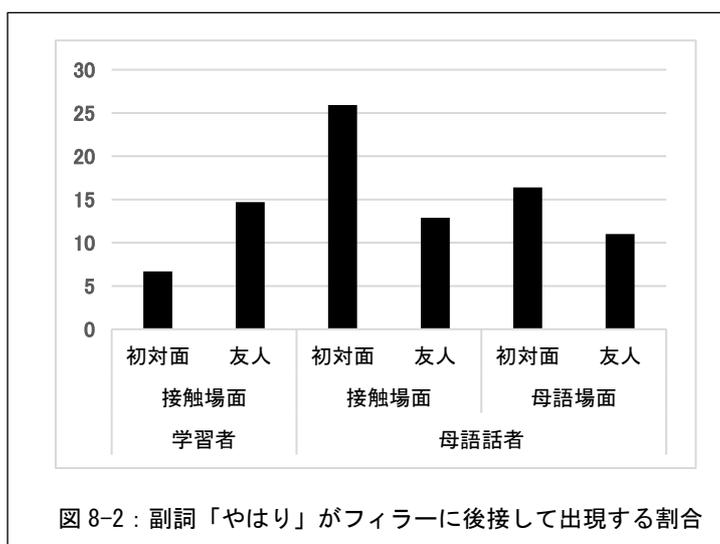


図 8-2 : 副詞「やはり」がフィラーに後接して出現する割合

<sup>74</sup> フィラー・感動詞の定義は、柏野 (2019) の「フィラー・感動詞・言いさしの区別」を参照した。

出現位置別でフィラーを伴って副詞「やはり」が出現する割合は、発話開始部 28/106 (26.4%)、発話中間部 31/244 (12.7%)、発話終了部では 0/20 (0%) であった。また、会話の属性別の割合では、学習者の対話の相手の親疎の違いでの出現率は、初対面会話 6.7%、友人との会話 14.7%となっている。次に、母語話者の出現率は、接触場面の初対面会話では 25.9%、友人との会話では 12.9%、母語場面の初対面会話では 16.4%、友人との会話では 11.0%となっていた。学習者と母語話者の別では、学習者 6/49 (12.2%)、母語話者 53/321 (16.5%) と母語話者の共起の割合がやや高く、母語話者は友人との会話より初対面会話のほうが共起する割合が高く、学習者は逆に初対面会話より友人との会話のほうが共起する割合が高くなっている。

フィラーで出現した形式はア系 (あ, あー, あの, あのー), ウン系 (うん, うーん, んー), なんか系 (なんか, なんだ, でもなんか), その他 (まあ, その, 結構) などであった。母語話者の発話になんか系で「でもなんか」「～けど, なんか」に後接して「V 形式・内容を選択途中」の意味・機能で用いられている副詞「やはり」が出現する用例<sup>75</sup>が観察された。(3) から (5) に用例を示す。

- (3) JFB016 でもなんかやっぱり, なんか最近の中学生とか高校生とかって (うんうん) 明らかになんか遊んでるだろって (そう) いう人は一, なんか見てて (うん), 気分があんまりすぐれない,,  
(BTSJ : 接触 初対面 会話 159)
- (4) JF072 私はかなり短かったから, (うん) でも, なんか, やっぱり同じようなことではずっと悩んでて, (うんうん) なんか, うん, その, 基本的に私はジェンダーでやってるわけだけど, ……  
(BTSJ : 母語 友人 会話 115)
- (5) JMB004 前, 「先生 2 フルネーム」先生がいらっして (うん), 講演なさった, それ聞いたんですけど, 《沈黙 2 秒》なんかやっぱ違いますよね。  
(BTSJ : 母語 初対面 会話 199)

<sup>75</sup>用例は BTSJ データによる。文字化記号は BTSJ 記号表記に則っている。発話者は母語により「J : 日本, C : 中国, K : 韓国, T : 台湾」と記している。

また、インタビューデータでは、質問に対して回答する学習者の発話に副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見されたが、雑談データでは連続して出現する傾向は見られなかった。(6)(7)に母語話者と学習者の用例<sup>76</sup>を引く。

- (6) <C> ……イリノイ州ではどんなものが、有名ですか食べ物とか観光地とか#  
<K> 食べ物だったら、うんとうもろこしかな、ええと なん、なんか やっぱ  
り ええと、まあ ええと もっとえーと、あーアメリカ中部の方はええと  
やっぱり地面がこう、ええと、いや何てゆうか、あー、平たい……  
(I-JAS : EUS14)

- (7) <C> うんー、じゃ時間もお金で買える#  
<K> 買えると言うわけじゃないんですけども、うんー う なんだろうな  
ーと、やいやーやー やっぱ そうかな、どっちだろうな 〈うん〉時間かなお  
金か、いやお金かなーと 〈笑〉……  
(I-JAS : JJJ35)

## 5.2 発話開始部で応答詞・フィラーを伴って出現する副詞「やはり」

発話開始部では、応答詞・フィラーを伴って出現する副詞「やはり」に注目した。応答詞・フィラーの詳細を集計し表 8-6 示した。

発話開始部において、16/106 (15.1%) の副詞「やはり」が応答詞と共起していることが観察できた。接触場面学習者では、初対面 1/6 (16.7%)、友人 0/7 (0.0%)、接触場面母語話者では、初対面 2/20 (10.0%)、友人 1/6 (16.7%)、母語場面母語話者では、初対面 8/44 (20.5%)、友人 3/23 (13.0%) となっている。対話相手の親疎の違いによる出現の割合は、接触場面の学習者と母語場面の母語話者では初対面会話に出現する割合が友人との会話に出現する割合より高かった。初対面の相手との会話では、友人との会話より、より対話の相手に配慮して会話を進めるため、「独断の緩和」「判断の責任回避」「他者との調和的態度」を含意する副詞「やはり」を使用することが多くなるのではないか。

また、形式や内容を検索する際に出現するフィラーとの共起は、29/106 (27.4%) である

<sup>76</sup> (6)(7)は I-JAS から引用である。文字化の法則・記号は I-JAS における記号表記に則っている。<K>: 日本語学習者 <C>: 調査担当者 #: 話者交替

ことが観察できた。接触場面学習者では、初対面 0/6 (0.0%)、友人 1/7 (14.3%)、接触場面母語話者では、初対面 6/20 (30.0%)、友人 2/6 (33.3%)、母語場面母語話者では、初対面 16/44 (36.4%)、友人 4/23 (17.4%) となっている。母語話者の共起する割合は 28/93 (30.1%) であり、学習者の共起する割合 1/13 (7.7%) であった。

表 8-6：発話開始部で応答詞・フィラーを伴って発話される副詞「やはり」詳細

出現環境		学習者				母語話者						総計		
		接触場面				接触場面			母語場面					
		初対面		友人		初対面		友人	初対面		友人			
一語文		0	0 (0)	1	1 (14.3)	1	1 (5.0)	0	0 (0)	0	0 (0)	0	0 (0)	2
応答詞	うん/うん/そう	1	1	0	0	1	2	0	1	8	9	2	3	12
	え/へー/ほー	0	(16.7)	0	(0)	0	(10.0)	1	(16.7)	1	(20.5)	1	(13.0)	3
	あっ	0		0		1		0		0		0		1
フィラー	あ/あー/あの	0	0	1	1	4	6	1	2	10	16	4	4	20
	うん/うーん/んー	0	(0)	0	(14.3)	1	(30.0)	1	(33.3)	3	(36.4)	0	(17.4)	5
	なんか/なんだ	0		0		1		0		3		0		4
応答詞・フィラーを伴わない		5	5 (83.3)	5	5 (71.4)	11	11 (55.0)	3	3 (50.0)	19	19 (43.2)	16	16 (69.6)	59
発話開始部 計		6		7		20		6		44		23		106

(8) に応答詞「ほー」と共起する用例を示した。外大に在籍する友人情報を語り合う会話の中で「大学の友人は塾にも行っている」という発話を受けて、「ほー」と驚きを表す応答詞に続けて、「やっぱ外大って勉強する人が多い」と発話している。「Ⅱ 予期した通り」の意味・機能を持つ副詞「やはり」があることにより、話者 JF182 は「外大には勉強する人が多い」という認識を以前から持っていたことを対話の相手に伝達している。対話を円滑に進めていくための方策として、談話展開の中で相手の発話内容を確かに受け、新情報を自己の既有的の情報と照合し、照合が終了したことを述べる標識として副詞「やはり」が機能している可能性がある。

(8) 副詞「やはり」が応答詞「ほー」と共起する用例

- 1 JF181 塾行ってるって言ったもん<笑い>。
- 2 JF182 塾?。
- 3 JF181 塾。
- 4 JF182 あ、なんとか塾みたいな、ダブル<スクール用の>{<}。
- 5 JF181 <ダブルスクール>{>}で。
- 6 JF182 ほー、やっぱ外大って勉強する人が多いね。
- 7 JF181 多いね。
- 8 JF182 進学する人というか勉強する人<というか>{<}。
- 9 JF181 <私今>{>}、中間っていうか、休んでる時期だけどね、勉強<笑いなが  
ら>。
- 10 JF182 そうだよね。
- 11 JF181 うん。
- 12 JF182 でも、でも休んでるだけじゃなくて、別のね、代わりのことをしてる  
からさ。
- 13 JF181 あー就活ね。 (BTSJ : 母語 友人 会話 329)

### 5.3 発話中間部で逆接・順接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」

発話中間部で逆接・順接の接続表現に後接して副詞「やはり」が出現する場合を調査した。曹(2001)を援用し、「逆接の接続表現に後接して出現する場合」、「順接の接続表現に後接して出現する場合」、「その他の接続詞に後接する場合」について集計した。集計結果を表 8-7 に示す。

結果から、発話中間部に出現する副詞「やはり」で、逆接の環境での出現は学習者 8/35 (22.9%)、母語話者は 55/209 (24.4%) と同程度の出現だった。接続詞では「でも」、接続助詞では「～ても」に後続する文脈で多く出現していた。一方、順接の環境で出現する副詞「やはり」では、学習者は 2/35 (5.7%)、母語話者は 34/209 (16.3%) であり、学習者のほうが出現する割合が少なかった。接続詞では「だから」「で」、接続助詞では「～ので」に後続する文脈で多く出現していた。

表 8-7：逆接・順接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」

出現環境		学習者				母語話者						総計		
		接触場面				接触場面			母語場面					
		初対面		友人		初対面		友人	初対面		友人			
接続表現	逆:でも, だけど	0	1	3	7	7	12	3	6	11	21	7	12	33
	逆:~けど, ても	1	(12.5)	4	(25.9)	5	(34.3)	3	(30.0)	9	(19.6)	5	(25.5)	25
	順:だから, それで	0	0	0	2	0	6	3	3	6	18	3	7	12
	順:~から, ので	0		1		1		0		4		2		9
	順:~と, ば, たら	0	(0)	1	(7.4)	5	(17.1)	0	(15.0)	8	(16.8)	2	(14.9)	16
	転換・補足: じゃあ・ただ	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2	1	2	5
		0	(0)	0	(0)	1	(2.9)	0	(0)	2	(1.9)	1	(4.3)	5
接続表現を伴わない		6	6	15	18	12	16	9	11	62	67	26	26	144
			(75.0)		(66.7)		(45.7)		(55.0)		(62.6)		(55.3)	
発話中間部 計		8		27		35		20		107		47		244

(9) に逆接の接続詞, (10) に逆接の接続助詞に後接して副詞「やはり」が出現する用例を示す。

(9) 逆接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」

- 1 JF086 そう, 結構いい結婚式だったけどね。
- 2 TFA008 へー[↑]。
- 3 JF086 私も 【。
- 4 TFA008 **】**「JF086 名」ちゃんもドレスアップして<笑い>[手をたたく]。  
.....
- 14 JF086 **】** 友達の時はドレスの人が多いんだけど, (うん) 楽だし。
- 15 JF086 でもなんか, やっぱり, 姉だと近いじゃない?, なんか親類, (へー) あたし=。
- 16 JF086 =だからさ, やっぱりちゃんと??, ちゃんとした格好して行ったほ

ほうが、(うん) こう、いいっていうか、ちょっと馬鹿騒ぎにならない  
い<笑いながら>っていうか。

17 TFA008 あー。 (BTSJ : 接触 友人 会話 149)

(10) 逆接の接続助詞に後接して出現する副詞「やはり」

1 JF184 《沈黙 3 秒》 あーバイトめんどくさいな。

2 JF185 今日、バイト?。

3 JF184 うん。

4 JF185 え、何の<バイト?>{<}。

5 JF184 <整骨院の>{>}バイトを<始めたんだけどー>{<}。

6 JF185 <整骨院?>{>}。

7 JF184 のー、受付。

8 JF185 えーいいね (え)、受付とか。

→9 JF184 楽なんだけどー、やっぱりめんどくさいし、なんか先生がちょっとい  
かつくてやだしみたいな。

10 JF185 へー、人いなさそう。

11 JF184 んーちっちゃいこじんまりとしてるから、受付一人先生一人で今<や  
ってて>{<}。

12 JF185 <まーじでー>{>}。

13 JF184 ほんとはもう一人いたらしいけど、かくかくしかじかな事情でやめ  
て、うんなんか一人で回せるように<したらしいよ>{<}。

14 JF185 <へー>{>}。

15 JF185 《沈黙 3 秒》 どこでやってんの?。 (BTSJ : 母語 友人 会話 331)

石黒 (1999) は、「逆接は、前提という一般性の高い関係を否定することから生じる抵抗感を和らげる表現である」「逆接は前提の間接的否定であり、その意味で、否定表現と同様それ自体では表現価値は低い」が「前提から乖離し前件からの推論が予想と外れる意外性と対比性、前件が情報として高い価値を持つ前件提示性、逆接の持つ理由要求性を利用した理由導入性から表現価値が生まれる」と述べている。逆接の接続表現の存在は、ここまでの対話の情報を受容したこと、そしてそれを踏まえてここまでの流れとは別の方向で発話する

この前触れである。姉の結婚式に参列する際の服装について話している(6)の会話は、「友達の時はおドレスが多いし楽」と述べた後「でも、なんかやっぱ……」と続く流れから、聞き手は「ドレスか振袖か迷っているが、ドレスを選ばないだろう」「姉は花嫁に近い存在だから、社会通念と同様に判断するだろう」と発話の方向を予測して、構えて聞くことができる。(7)の逆接の接続助詞も同様で、「～けど、」に後接して副詞「やはり」が出現する。アルバイトについての会話で「接骨院の受付を始めた」という情報に対し「いいね」という対話相手の感想を受容し、「(いい部分) 楽である」ことを述べ、「～けど、やっぱり……」と続く流れから、対話の相手は「自分の発話内容を認めるが、発話者には別の見解があること」「(10) -1「バイトめんどくさい」は依然として変わらないこと」が語られることが予測できる。以上のように、逆接の接続表現は確認の方向性を表わし、副詞「やはり」は複数の選択肢があって迷ったことや、その後の発話が話し手の信念や社会通念に照らした発話であることを含意している。

なお、(10)は逆接の接続助詞は逆接の意味が機能している用例だが、逆接の接続助詞が前置きとして用いられている用例「わたしもでも友達で栃木の人がいるんだけど、やっぱり割と、特急とか使っちゃえばねー、近く、すぐに出て来れるみたいだから」「<あのー>{>}僕も、何年も勉強してる台湾人と友達になったりするけど、やっぱり彼らも、あんなか、その発音は出来ないみたいで、,」なども観察された。

次に、学習者の発話での出現が少なかった順接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」の用例を(11)に示す。

(11) 順接の接続表現に後接して出現する副詞「やはり」

- 1 JMSa004 じゃ、どういふような用例、どういふふうで用例を集めてらっしゃるんですか?[→]。
- 2 JMB004 いやもう (はい) 地味に<小説とかもう>{<}、  
.....
- 13 JMSa004 まそういやしょうせ、僕もあのポライトネスをその、そうですね、あの小説とかの中からこういふ、拾っていききたいなと思ってるんですよ、用例を、はい。
- 14 JMB004 はい[囁くように]。

- 15 JMSa004 もうこう，まあ，でもこう，結構自分の先生が認知言語学の先生なので，（ええ）やはりこう，理論にこう，理論的な整理にしたいんですね（んー），ええ。
- 16 JMB004 はい。
- 17 JMB004 んー。
- 18 JMB004 《沈黙 10 秒》いや，なんかあまりちょっとよく分からなかったんですけど（あー），え談話…分析とかはやらないんですか？[だんだん小さい声で]=。
- 19 JMSa004 =あの一，実際こう録音したりして，（ええ）やるってことはしないつもりなんですよ。 (BTSJ：母語初対面 会話 199)

自分の研究について語る母語場面の初対面会話で，「自分の先生が認知言語学の先生である」という新情報を会話に登場させることによって，共通の基盤を作り，その後述べること「認知言語学の先生なので，理論的に整理したい」の妥当性を担保する機能を果たしていると考える。順接の接続表現に後接して出現する (11) の副詞「やはり」は，対話の相手との共通基盤を確認することにより，「独断の緩和」を含意している。

#### 5.4 発話終了部に出現する副詞「やはり」

本データでは発話終了部で副詞「やはり」は 20 例出現している。発話終了部の副詞「やはり」の出現環境の特徴として①副詞「やはり」は言い切りの直後か，別の後続発話に吸収される環境で出現すること，②学習者の使用数は 1 例であるが，学習者の後続発話に吸収される環境での用例は母語話者の用例とは質が異なること，③副詞「やはり」が言い切りの直後に出現する中に，「相手への問い掛け＋「やはり」」である用例が 5 例見られたこと，④後続発話に吸収される環境で出現する副詞「やはり」には言い淀みと会話挿入の 2 種類があること，の 4 点が観察できた。

はじめに，出現した副詞「やはり」を出現環境別に出現数を表 8-8 にまとめ，用例を (12) に示した。

表 8-8 : 発話終了部に出現する副詞「やはり」

	学習者		母語話者				総計
	接触場面		接触場面		母語場面		
	初対面	友人	初対面	友人	初対面	友人	
言い切りの直後に出現	0	0	2	3	7	3	15
後続発話に吸収(言い淀み)	1	0	1	1	0	0	3
後続発話に吸収(会話挿入)	0	0	0	1	1	0	2
総計	1	0	3	5	8	3	20

(12) 副詞「やはり」が、言い切りの直後 [3], 別の後続発話に吸収される環境 [10] で出現する場合

- 1 JM025 「市名」というところで。
- 2 KMI005 交通費高くないですか?。
- 3 JM025 そうですね、やっぱり。
- 4 KMI005 2万円くらい<ですか?><>。
- 5 JM025 <うん->>, あのー, 半年の(はい)定期を買ってるんですけど,,
- 6 KMI005 あ,<そうですか><>。
- 7 JM025 <半年の>>定期ー, でも<学割しても><>,,
- 8 KMI005 <あ, そっかそっか>>。
- 9 JM025 それも4ヶ月分くらい…。
- 10 JM025 結構やっぱり…。
- 11 KMI005 高いですね。
- 12 JM025 お金を貯めてないと(はい), 学校に来るのに。

(BTSJ : 接触 初対面 会話 125)

発話終了部の副詞「やはり」は、言い切りの直後か別の後続発話に吸収される環境で出現していた。(12) -3の発話終了部で言い切りの直後に出現する副詞「やはり」は、「交通費高くないですか」という質問に対して、「そうだ(その通りだ)」という認識文の内容の確認が完了したこと、その認識し確認した内容は熟考の結果であることを表している。次に、(12)

-10の発話終了部で別の後続発話に吸収される環境で出現する副詞「やはり」は、森山(1989)の「展開制御系—関係を設定・確認—言い淀み」である。交通費が高いことについて会話を展開する中で「学割を使っても、半年の定期代は4か月分ぐらいかかる」ことを述べ「結構やっぱり……」と言いだむ発話を引き取る形で、対話の相手が、「高いですね」と述べている。グラウンディング(基盤化)<sup>77</sup>が対話にどう関連しているか分析した、吉田・Lickley(2009)の中で「言い淀みは対話者間の相互理解をモニターする役割がある」と述べている。お互いの共有できる背景知識をもとにして共通基盤を築きながら対話を進める中で、副詞「やはり」の使用は、話し手側は聞き手に自分の意向を推測する手掛かりを布石として提示している。

前頁の表 8-9 に示した通り学習者の発話終了部での使用は 1 例であった。学習者の用例は、母語話者の用例(12)-3 の話し手の判断・評価の中で熟考した結果を述べる際の副詞「やはり」とは質が異なっていることが観察できた。用例を(13)に示す。

(13) 学習者が用いた後続発話に吸収される環境での副詞「やはり」

- 1 JFSa014 あー、知ってます。
- 2 TFBA003 あ、知ってますか？
- 3 JFSa014 いっぱいいます、(あつ)「TFBA003 姓」という人。
- 4 TFBA003 はい、はいはいはい。
- 5 TFBA003 名前は？
- 6 JFSa014 名前は「JFSa014 フルネーム名前」。
- 7 TFBA003 「JFSa014 姓」、やっぱり (<笑い>) …。
- 8 JFSa014 紙ない、紙ありますか?<2 人笑い>。
- 9 TFBA003 はい。
- 10 JFSa014 うん[↑], 英語?, 書いていい?<笑い>[JFSa014 は字を書いている]。
- 11 TFBA003 うん。
- 12 JFSa014 「JFSa014 フルネーム名前」[読みながら書く]。
- 13 JFSa014 「TFBA003 姓」ってこんな字?。(BTSJ: 接触 初対面 会話 135)

<sup>77</sup> 吉田・Lickley(2009)では、「対話の関与者同士で共通の基盤を形成すること」と定義している。

接触場面の初対面の相手との会話で、JFSa014 と TFBA003 は自己紹介の後、雑談の話題を探って「JFSa014」に言及している場面で、直前の発話で聞いた「JFSa014」のフルネームが分からず「「JFSa014 姓」, やっぱり (<笑い>) …。」と言いついでいる。JFSa014 は対話の相手の逡巡を見て取って、筆談を考え「紙ない, 紙ありますか?<2 人笑い>。」と発話している。日本語上級レベルである TFBA003 は副詞「やはり」と「言い淀み」と「笑い」を用いて沈黙を避ける方策をとっている。野田 (2015) は、非母語話者の感動詞の不自然な運用の特徴の一つとして「どう返答するかを考えているときに「そうですね」などを使わずに沈黙が続く場合がある」と述べ、その原因として、「考えているときに沈黙を避ける表現を習得していないこと」、「答えを考えながら自動的にその表現を使えるまでに至っていないこと」の 2 点を挙げている。この用例の副詞「やはり」は「V 形式・内容を選択途中」の意味・機能を持っており、「考えているから少し待ってほしい」という発話者の心的状況を対話相手に伝える機能を果たしている。

表 8-9 に示した副詞「やはり」が言い切りの直後に出現する 15 例の中に、相手への問い掛けの直後に副詞「やはり」が出現する用例が 5 例見られた。(14) から (18) に用例を示す。

(14) 話題：袱紗に付いた抹茶の汚れを取る方法

JF079 だってさー, でも, すごい, まったく付いて取れないじゃない?, やはり。

TFA001 =取れるよ。 (BTSJ : 接触 友人 会話 142)

(15) 話題：「ミスセメント」というネーミング

JF093 塗り壁みたい。

JF092 そう, なんか, 嫌じゃない?, やはり。

JF092 「ミスみかん」とかはいるんだ。

JF093 うん。 (BTSJ : 母語 初対面 会話 207)

(16) 話題：大学の教員をしている JMB001 の見た目

JMB001 見えませんか, やはり?<{}><笑いながら>。

JMSa003 <いいえ><{}><笑いながら>。

JMB001 みんなからそう言われて<ますので><{}><笑いながら>。

(BTSJ : 母語 初対面 会話 176)

(17) 話題：残業の多さ

JF081 残業多いもんね (ね) 日本絶対。

TFA003 あ、なんでこんな、人とか多いの (<笑い>) っていう…  
(<笑い>)。

JF081 何だろうねー (うん), まじめなのかな?, やっぱり。

TFA003 まじめ<だね>{<}。 (BTSJ: 接触 友人 会話 144)

(18) 話題：軍隊での体験

JM025 つらかったですか?, やっぱり。

KMI005 うん。 (BTSJ: 接触 初対面 会話 125)

問い掛けには「判断の問い掛け」と「情意・意向の問い掛け」がある。(仁田 1989) が、「……付いて取れないじゃない?, やっぱり」「見えませんか, やっぱり」「まじめなのかな, やっぱり」は判断の問い掛けであり、「嫌じゃない?, やっぱり」「つらかったですか?, やっぱり」は情意・意向の問い掛けとなっている。判断の問い掛けは対話相手を会話に引き込み、副詞「やはり」を後置することにより、「……付いて取れないじゃない?, やっぱり」は汚れが依然として取れないことを強調する効果、「見えませんか」「まじめなのかな」に後接する副詞「やはり」は「見えない」という判断、「まじめであるという判断が予期された通りの結果であることを含意する効果がある。次に、情意・意向の問い掛けは、対話の相手が「ミスセメントは嫌であると思っていること」「軍隊での生活はつらいと思っていたであろうこと」に寄り添い、それは対話の相手の発話者も予測でき、理解できることを含意し、対話の相手を慮っていることを相手に伝達する働きをしていると考える。

次に、後続発話に吸収される環境で出現する副詞「やはり」には「言い淀み」と「会話挿入」があることが観察された。会話挿入の用例を (19) (20) に示す。

(19) 副詞「やはり」の直後に会話挿入

1 TFA007 私あんまりマヨネーズ食べ【。

2 JF085 】あたしもね, あんまりマヨネーズね, 食べる人じゃなかったんだけど, ルーマニアのマヨネーズすごーいまずくて, なんか油っぽい, すごい。

3 JF085 油が悪いとさ, だめじゃない?, ああいうドレッシング<とか>{<}。

- 4 TFA007 <あー>{>}。
- 5 JF085 そっ、あの、マヨネーズも、油そのまま食べるような物だから、
- 6 TFA007 うーん。
- 7 JF085 油がやっぱり【】。
- 8 TFA007 **】**えっ、マヨネーズは油なの？。
- 9 JF085 油だよ、あんなの。
- 10 JF085 えっ、作ったことない？、マヨ<ネーズ>{<}。

(BTSJ : 接触 友人 会話 148)

(20) 言い淀みと会話挿入

- 1 JFSa016 なんか英語はやっぱ今どこへ行っても (うん) 英語があるとひとまず  
って感じのどこありますよね。
- 2 JFB022 そうですね。
- 3 JFSa016 へえー。
- 4 JFB022 うん、でもなんか、うん英語もすごい大事だとは思うんですけど。
- 5 JFSa016 うん。
- 6 JFB022 両方留学した理由は、(うんうん) うん、言語、言語的に語学的に (う  
ん) 英語の重要さを感じつつ、(うん) 英語の限界を感じたからかな  
な (あー) っていうのもあって、やっぱり 【】。
- 7 JFSa016 **】** あ、それは自分の中でじゃなくて、世界的に見てって<ことで  
>{<}。
- 8 JFB022 <世界>{>}的に見て。 (BTSJ : 母語 初対面 会話 193)

(19) (20) で示した副詞「やはり」の直後で対話の相手がオーバーラップして発話を始める用例は、対話の相手の発話の意図を受け、先取りして発話している。(19)の「油がやっぱり【【-】】えっ、マヨネーズは油なの?。」はマヨネーズが油であることを知らなかったTFA007は、JF085の発話から未知だった情報を知り、JF085の発話意図とは関係なく、自分の発話を始めている。(20)の「英語の限界を感じたからかなってっていうのもあって、やっぱり【【-】】あ、それは自分の中でじゃなくて、世界的に見てって<ことで>{<}。」はJFB022が「やっぱり」に続くであろう内容を先取りして発話している。後続発話に吸収される環境

で出現する副詞「やはり」で、「やっぱり……」と言い淀みで推測するのとは違うタイプの予測ではあるが、同じ気持ちで、同じ方向で会話を構築しているという気持ち、協働で会話を構築しているという気持ちを持つことに繋がるのではないか。対話の意義の1つは他者とのコミュニケーションを通して知識を伝え合い、未知の情報を獲得し合うことであるが、対話の相手との人間関係を構築することもあり、それに副詞「やはり」の意味・機能の一部が関わっているのではないか。

最後に、(21)に発話終了部で別の後続発話に吸収される環境で出現する形式が「全然」の場合の用例を示した。「英語音声学」についての会話で、JFB016の「英語の音声学は日本語とは、全然……」を受け、対話の相手のTFSu001はJFB016のその後の発話を予測し引き取る形で「違います」と述べている。「全然」は発話者の一発話内で呼応することが一般的だが、(21)の用例ではTFSu001とJFB016が協働して「全然」の呼応を成立させている。

(12)-10で示した「結構やっぱり……」と「高いですね」には、呼応がある陳述副詞「全然……」と「違います」の呼応とは異なるタイプの「予測を可能にする機能」があり、協働して会話を作るさいの相互理解の手立てとして機能しているのではないかと思われる。

#### (21) 言い淀みが「全然」の場合

- 1 JFB016 うん、その人がその音声学の先生だったんです。
- 2 TFSu001 英語音声学？。
- 3 JFB016 そう、<英語の音声学>{<}。
- 4 TFSu001 <あそうですか>{>}。
- 5 JFB016 あ（へー）やっぱ日本語とは、全然……。
- 6 TFSu001 うん、違います。
- 7 JFB016 あ、そうなん<だ>{<}。 (BTSJ：接触 初対面 会話 159)

## 6. 結論

BTSJの雑談データを用い、学習者と母語話者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎で出現率に違いはあるか、発話中の出現位置ごとの出現環境に、どのような特徴があるかを調査した。その結果、次の点が観察された。

課題1: 雑談における学習者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎で出現率に違いはあるか。

課題2: 母語話者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎、接触場面・母語場面の別、出現率に違いはあるか。

対象のデータにおける副詞「やはり」の出現率の比較から、次の点が観察された。接触場面における学習者は、初対面会話 0.48、友人との会話 1.13 となっており、友人との会話は初対面会話より多く出現していた。接触場面における母語話者の出現率は、初対面会話では 1.84、友人との会話では 0.98 であり、母語話者と学習者は副詞「やはり」の出現率が逆になっていた。次に、母語場面では、初対面会話では 2.70、友人との会話では 1.28 となっていた。また、母語話者の接触場面と母語場面では、いずれも初対面会話のほうが友人との会話より出現率が高いこと、接触場面より母語場面のほうが出現率が高いことが観察された。

ここで観察された出現率の傾向、「接触場面で、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが副詞「やはり」の出現率は高く、母語話者は逆に「初対面会話」のほうが「友人との会話」より副詞「やはり」の出現率が高いこと」は雑談の話題の選び方と対話の相手への配慮(学習者に配慮して話題を調整していること。初対面の相手との会話ではより相手に配慮していること)に関係があり、「母語話者は「接触場面」より「母語場面」のほうが副詞「やはり」の出現率が高いこと」は、雑談の話題の選び方(初対面の相手との話題は表面的なものになりやすい)に関係があるのではないか。

課題3: 雑談において副詞「やはり」の発話の中での出現位置ごとの出現環境に、どのような特徴があるか。

発話の中で副詞「やはり」がどのような形式と出現するかを出現位置別に調査し、特徴ある用例の質的記述を行った。まず、発話開始部で、応答詞とフィラーに後接して副詞「やはり」が出現する割合は、学習者は母語話者より低い。また、フィラーとの共起では、インタビューデータとの違いが見られた。第6章・第7章で検討したインタビューデータでは、質問に回答する学習者の発話で副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見されたが、雑談データでは連続して出現する傾向は見られなかった。次に、発話中間部に出現する副詞「やはり」で、逆接の環境での出現は学習者 8/35 (22.9%)、母語話者は 55/209

(24.4%)と同程度の出現だったが、順接の環境で出現する副詞「やはり」では、学習者は2/35 (5.7%)、母語話者は34/209 (16.3%)であり、学習者のほうが出現する割合が少なかった。発話終了部の副詞「やはり」は言い切りの直後(倒置)か、別の後続発話に吸収される環境(言い淀み・会話挿入)で出現する。言い切りの直後に出現する副詞「やはり」は、「そう、なんか、嫌じゃない?, やっぱり」(BTSJ:母語 初対面 会話 207)のように言い切ったことへの和らげ・相手への配慮を表している。母語話者の別の後続発話に吸収される環境での副詞「やはり」は、相手の会話を予測して先取りして発話するタイプであり、「やっぱり……」と言い淀みで推測するのとは違うタイプの予測がある。言い淀みと会話挿入は「会話の盛り上がり」と関係がある可能性があり、同じ気持ちで・方向で会話を構築していると考えられることと関係があるのではないか。副詞「やはり」は呼応のない陳述の副詞の一群に属しているが「JM025:結構やっぱり…。」「KMI005:高いですね。」(BTSJ:接触 初対面 会話 125)は対話の相手との発話の中で呼応が成立している用例である。これらは対話の相手とのやり取りで呼応が完成するタイプで、宮島(1983)の消極的な呼応の一種であるということとはできないか。

本章では副詞「やはり」の出現率や出現環境を定量的側面から調査したが、本調査で観察された副詞「やはり」の傾向の裏付けとなる用例の質的分析、語用論の立場からの分析が不足している。

## 7. 第8章のまとめ

本章は、「研究課題3)-3 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は、会話の属性別(接触場面か母語場面か)、対話相手との関係別(親疎)でどのような異なりがあるか」に対応している。BTSJ日本語自然会話コーパスの雑談、53会話を対象に、学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現率と出現環境の調査を行った。その結果、以下の5点が観察できた。

- ① 対話相手との関係別(親疎)による副詞「やはり」の出現率の傾向は、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが高いのに対し、母語話者は「初対面会話」のほうが「友人との会話」より高くなっており、母語話者と学習者で出現率が逆になっている。

- ② 会話の属性による副詞「やはり」の出現率の傾向は、「接触場面」より「母語場面」のほうが高くなっている。
- ③ 発話開始部で応答詞とフィラーに後接して副詞「やはり」が出現する割合は、学習者は母語話者より低い。フィラーとの共起では、インタビューデータとの違いが見られた。インタビューデータでは、副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見されたが、雑談データでは連続して出現する傾向は見られなかった。
- ④ 発話中間部では、逆接の環境で出現する割合は学習者 22.9%、母語話者は 24.4%と同程度の出現だが、順接の環境での出現は学習者は 5.7%、母語話者は 16.3%であり、学習者のほうが出現する割合が少なかった。
- ⑤ 発話終了部の副詞「やはり」は言い切りの直後（倒置）か、別の後続発話に吸収される環境（言い淀み・会話挿入）で出現する。言い切りの直後に出現する副詞「やはり」は、言い切ったことへの和らげ・相手への配慮を表している。言い淀みと会話挿入は、同じ気持ち・方向で会話を構築していると考えられることと関係がある可能性がある。

次の第9章では、ここまでの第6章、第7章、第8章で調査・検討した学習者データの使用実態と第3章・第4章での考察を踏まえて、本研究の一つの目的である副詞「やはり」に関する日本語教育への提言を試みる。

## 第9章 日本語教育への提言

### 1. 第9章の目的

第9章では、第3章と第4章の考察、第5章・第6章・第7章で検討してきた3種類のコーパスにおける学習者の副詞「やはり」の使用傾向をまとめ、その問題点の所在から日本語教育への提言を行う。そのために、本節では以下の研究課題を設定した。

課題1：学習者コーパスの検討から得られた学習者の副詞「やはり」の使用傾向はどのようなものがあるか。

課題2：学習者が用いている教材で、副詞「やはり」はどのように扱われているか。

課題3：日本語教育へどのようなことが提案できるか。

以下、2節では、学習者横断コーパス・学習者縦断コーパスのインタビューデータと学習者の雑談データにおける学習者の副詞「やはり」の使用傾向をまとめ、使用実態と使用の問題点を明らかにする。3節では、日本語教材の中の副詞「やはり」の扱われ方とI-JASのJFL環境の学習者とB-JASの学習者が使用した教材を調査する。4節では、ここまでの調査・検討の結果を踏まえ、日本語教育の中での副詞「やはり」指導について言及し、5節で論をまとめる。

### 2. 学習者の副詞「やはり」の使用傾向

#### 2.1 I-JAS インタビューデータにおける学習者の使用傾向

I-JASのデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形態、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査した。その結果、次の点が観察された。

- 1) 副詞「やはり」の使用数、形態から見た使用実態はどのようなものか。
  - ① 母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では母語話者の使用に特徴がある。

副詞「やはり」を使用した学習者は全体の4分の1であるのに対し、母語話者は対象の全員が副詞「やはり」を使用していた。また、使用した個人の平均も学習者の2倍強使用しており、本データの調査では母語話者の副詞「やはり」の多用が観察できた。

- ② 副詞「やはり」の形態では、学習者は「やっぱり (79.9%)」「やはり (16.1%)」「やっぱ (4.0%)」の順に、母語話者は「やっぱり (75.5%)」「やっぱ (20.1%)」「やはり (4.3%)」の順に使用している<sup>78</sup>。

2) 副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態はどのようなものか。

- ③ 学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現位置と意味・機能の調査から、学習者は発話開始部での出現が有意に多く、インタビュアーの質問に対する回答する際に「III 熟考した結果」として用いられていることが観察できた。母語話者は発話中間部での出現が有意に多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いていた。意味・機能では「1-2 同様に」での使用が多かった。

- ④ 「V 形式・内容を選択途中」での使用は、フィラーと共起することが多いことは共通しているが、学習者は内容と表現の選択であるのに対し、母語話者は「迷っている、考えている」ことを対話相手に伝え、沈黙が生じる緊張を緩和している用例が観察できた。

## 2.2 B-JAS インタビューデータにおける学習者の使用傾向

B-JAS のデータを用い、日本語の習熟度が上がる過程で副詞「やはり」の使用がどのように変化するかについて、使用率と形態、意味・機能の変化から見た使用実態を調査した。その結果、次の点が観察された。

1) 学習者の習熟度による副詞「やはり」の出現数、形態はどのように変化するか。

- ① 日本語の習熟度が上がるとともに副詞「やはり」の出現数が増加することが観察された。  
② 副詞「やはり」の使用した形態の変化では、「やはり」と「やっぱり」は「やはり」の出現がやや多い傾向で拮抗して用いられていたが、「やはり」は第5回の調査がピークでその後は使用が漸減しており、第6回と第7回で「やはり」と「やっぱり」の出現は逆転

---

<sup>78</sup> I-JAS のインタビューデータでは、学習者も母語話者も「やっぱし」の使用はなかった。

していた。「やっぱ」は日本留学から帰国後の第7回、第8回の調査で出現していた。

- 2) 学習者は複数ある副詞「やはり」の意味・機能どの順番で使用するようになるか。
- ③ 学習者が、複数存在する副詞「やはり」の意味・機能を使用するようになった順は、「Ⅲ 熟考した結果」, 「Ⅴ 形式・内容を選択途中」→「Ⅰ-2 同様に」, 「Ⅱ 予期した通り」→「Ⅰ-3 同じ結果に帰結」→「Ⅰ-1 依然として」であった。B-JAS のインタビューデータでは「Ⅳ 他の選択肢を排除」を使用していないことを確認した。
- ④ 用例の質的分析から、日本語のレベルが上がること、日本への留学という状況や、副詞「やはり」を使わざるを得ない話題や文脈があることにより、副詞「やはり」の意味・機能の使用の幅が広がっていくことが観察された。

### 2.3 BTSJ 雑談における学習者の使用傾向

BTSJ の雑談データを用い、学習者と母語話者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎で出現率<sup>79</sup>に違いはあるか、発話中の出現位置ごとの出現環境に、どのような特徴があるかを調査した。その結果、次の点が観察された。

- 1) 雑談における学習者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎で出現率に違いはあるか。
- 2) 母語話者の副詞「やはり」の使用で、話者の関係の親疎、接触場面・母語場面の別、出現率に違いはあるか。
  - ① 対話相手との関係別（親疎）による副詞「やはり」の出現率の傾向は、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが高いのに対し、母語話者は「初対面会話」のほうが「友人との会話」より高くなっており、母語話者と学習者で出現率が逆になっている。
  - ② 会話の属性による副詞「やはり」の出現率の傾向は、「接触場面」より「母語場面」のほうが高くなっている。

---

<sup>79</sup> 出現率は次の式で求めた。副詞「やはり」の出現率＝出現数/発話数

- 3) 雑談において副詞「やはり」の発話の中での出現位置ごとの出現環境に、どのような特徴があるか。
- ③ 発話開始部で応答詞とフィラーに後接して副詞「やはり」が出現する割合は、学習者は母語話者より低い。フィラーとの共起では、インタビューデータとの違いが見られた。インタビューデータでは、副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見されたが、雑談データでは連続して出現する傾向は見られなかった。
- ④ 発話中間部では、逆接の環境で出現する割合は学習者 22.9%、母語話者は 24.4%と同程度の出現だが、順接の環境での出現は学習者は 5.7%、母語話者は 16.3%であり、学習者のほうが出現する割合が少なかった。
- ⑤ 発話終了部の副詞「やはり」は言い切りの直後（倒置）か、別の後続発話に吸収される環境（言い淀み・会話挿入）で出現する。言い切りの直後に出現する副詞「やはり」は、言い切ったことへの和らげ・相手への配慮を表している。

## 2.4 学習者の副詞「やはり」の使用傾向

2.1 節から 2.3 節をまとめ、学習者の副詞「やはり」の使用傾向を表 9-1 示す。本研究では、母語話者の使用が学習者の使用のゴールではない、という立場をとっているが、母語話者と比較すると学習者の使用傾向として次の点が挙げられる。

表 9 - 1 : 学習者の副詞「やはり」の使用傾向

観点	使用傾向
使用数	1 ・学習者は多用していない。
形態	2 ・学習者は「やっぱり」「やはり」を多く使用している。 ・「やっぱ」の使用は母語話者との接触が関連している。
出現位置	3-1 ・学習者は発話開始部で応答する際に用いている。 ・インタビューデータでは、副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見される。 ・雑談データでは、発話開始部でフィラーと共起して出現する割合が、発話中間部、発話終了部より高い。

出現位置	3-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習者が、発話中間部で複文で使用する際、逆接の接続表現に後接することは多いが、順接の接続表現に後接することは少ない。</li> <li>逆接の接続助詞が前置きとして用いられている使用は少ない。</li> </ul>
	3-3	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習者は、雑談データで発話終了部で後続の会話に吸収される副詞「やはり」の使用が少ない。</li> <li>接触場面の発話終了部での学習者の言い淀みは、コミュニケーションの挫折を防ぐため母語話者の発話に引き取られる。調査したデータでは、対話の相手と共話する用例は少なかった。</li> </ul>
意味・機能	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習者は副詞「やはり」に存在する多様な意味・機能では、限られた範囲での使用に留まっている。</li> </ul>
	4-1	「I-1 依然として」での使用は少ない。
	4-2	「I-2 同様に」での使用は少ない。母語話者は多く用いている。
	4-3	「I-3 同じ結果に帰結」での使用は少ない。
	4-4	「II 予期した通り」は日本語教育では「III 熟考した結果」とならんで初期の段階で導入されているが、インタビューデータでは出現しにくい。
	4-5	「III 熟考した結果」はインタビューデータでは発話開始部での使用が多い。方略的な使用はない。
	4-6	「IV 他の選択肢を排除」での使用はない。
	4-7	「V 内容や表現を選択途中」はフィラーと共に初級段階から用いられている。 (内容や表現を選択途中は自然発生的) 方略的な使用はない。
その他	5-1	<ul style="list-style-type: none"> <li>接触場面で、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが副詞「やはり」の出現率は高く、母語話者は逆に「初対面会話」のほうが「友人との会話」より副詞「やはり」の出現率が高い。</li> <li>母語話者は「接触場面」より「母語場面」のほうが副詞「やはり」の出現率が高い。</li> </ul>
	5-2	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査したデータでは、副詞「やはり」の違和感のある産出やカチンとくる産出は少ない。</li> </ul>

表 9-1 の「使用数」「形態」「出現位置」「意味・機能」の傾向については 4 節で検討する。ここでは「その他」で挙げた 2 点の傾向について検討したい。

まず、5-1 の 1 点目「接触場面で、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが副詞「やはり」の出現率は高く、母語話者は逆に「初対面会話」のほうが「友人との会話」より副詞「やはり」の出現率が高い」ことについてだが、学習者の副詞「やはり」の出現率が「初対面会話」<「友人との会話」となる理由は、母語話者が雑談の話題の選び方を学習者に配慮して調整しているからと考えられる。母語話者の副詞「やはり」の出現率が「初対面会話」>「友人との会話」となる理由は、初対面の相手との会話では、友人との会話より、より対話の相手に配慮して会話を進めるため、「独断の緩和」「判断の責任回避」「他者との調和的態度」を含意する副詞「やはり」を使用することが多くなるからなのではないか。5-1 の 2 点目「母語話者は「接触場面」より「母語場面」のほうが副詞「やはり」の出現率が高い」ことについては、接触場面では学習者に配慮して話題を調整していること、対話の相手との共通の話題を探るの会話になり、遠い過去の記憶を辿ったり、心情や判断が揺れるような話題は少なく、表面的な話題になりやすいことが関係していると考えられる。

次に 5-2 「調査したデータでは、副詞「やはり」の違和感のある産出やカチンとくる産出は少ない」点を検討する。まず、「カチンとくる産出がない」点については、コーパスの設定が、調査者の先生による質問と学習者の回答で構成されているインタビューデータと初対面の人と友人との会話が展開される雑談データであるため、対話の相手の質問に適切に答えようとする意図、対話の相手を協働して雑談を続けようという意図で対話に参加しているため、「カチンとくる産出」からは遠い位置にある。また、このことは日常のコミュニケーションにおいても同様である。しかし、これは学習者が副詞「やはり」の意味・機能の一部のみを使用していることにより、「カチンとくる産出」を回避している可能性がある。回避すべき「意図しないで相手をカチンとさせてしまう産出」については、4 節で触れたい。

副詞「やはり」に違和感のある産出が少ない点についてだが、次の(1)(2)の用例を見てほしい。

(1) <C> 昨日はどんな一日でしたか?#

? <K> えっと、(うん) 昨日はやっぱり、え、え今日は土曜日ですね#

<C> そうですねー#

<K> 昨日は金曜日で〈うん〉あの実は金曜日〈うん〉私達の授業はな  
いんです# (I-JAS : CCT15)

(2) <C> それからどうしました？じゃあお昼に、お昼前に出したんです  
ね？#

? <K> うーん、あの一帰った時はんー、やっぱり四時だった#

<C> あ、四時でした？#

<K> だからあ一朝ご飯は、ん、もう冷たいでした#

<C> あー、朝ご飯はね#

<K> うん#

<C> でもひ、ひ、朝ご飯、昼ご飯ね# (I-JAS : SES16)

これらは、一見発話の内容に整合性を欠く用例であるように思われるが、(1)は、昨日の出来事を語ろうとして「えっと、昨日は」と語り始めた学習者は、今日の曜日を心の中で検索しはじめ「今日は土曜日」であることに思い至り、「やっぱり、え、え今日は土曜日ですわ」と言語化している。この副詞「やはり」は、学習者の思考過程の一端を言語化した「IV 他の選択肢を排除」であると考えることができる。(2)は、「昼前にレポートを提出したから美味しい昼ご飯が食べられる」という流れの発話の中で、「(寮に) 帰った時は」と語り始めて、寮に帰った時間を心の中で検索しはじめ「四時だった」ことに思い至り「やっぱり四時だった」と言語化している。調査者は帰った時間が昼ごはんとしては遅い時間であることに疑問を持ち「あ、四時でした？」と確認している。この場合も(1)と同様に、学習者の思考過程の一端を言語化した「IV 他の選択肢を排除」であると考え、違和感がある産出とは言えなくなる。「IV 他の選択肢を排除」学習者コーパスではほとんど見られない。日本語レベルが中級前半である学習者がどのようにして「IV 他の選択肢を排除」を習得するのか、副詞「やはり」のスキーマ的意味、「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す。概念内の何と照合するかによって副詞「やはり」に異なった意味・機能が生じる」とどのように関係しているのか、「IV 他の選択肢を排除」の使用は自然発生的なものなのか、本調査では判明しないが、現象は興味深い。

### 3. 学習者の使用教材

本節では、日本語教材の中の副詞「やはり」の扱われ方と、I-JAS の JFL 環境の学習者、B-JAS の学習者が使用した教材を調査する。

#### 3.1 日本語教材の中の副詞「やはり」

日本語教育の中で副詞「やはり」は『日本語能力試験 出題基準改訂版』（国際交流基金編 2006）では 3 級語とされており、現行の日本語教材の中では、表 9-2<sup>80</sup>に示したように、中級前期段階の会話・読解の教材の中で導入されている<sup>81</sup>。

「Ⅲ 熟考した結果」と「Ⅱ 予期した通り」での提出が多く、初出の副詞「やはり」であることから、教材の作成者が重要と考える副詞「やはり」の意味・機能で最も基本的なものが提示されていると考えられる<sup>82</sup>。形態は提出の設定が会話である場合は「やっぱり」、読解である場合は「やはり」で提示されている。いずれの教材も、語彙知識としての副詞「やはり」の指導を目的としたものであり、談話での運用を考慮した指導法の提示は確認できない。

表 9 - 2 : 日本語教材の中の副詞「やはり」

日本語教材名	提出課	提出の設定	形態	意味・機能
①『J- Bridge Vol.1』	L19/全 21	会話:先生と	やっぱり	熟考した結果
②『みんなの日本語中級I』	L11/全 11	会話:先輩と	やっぱり	熟考した結果
③『新日本語の中級』	L19/全 20	会話:同僚と	やっぱり	熟考した結果
④『新日本語の中級』	L19/全 20	読解:意見述べ	やはり	熟考した結果
⑤『日本語の中級 J301』	L3/全 10	読解:相談・回答	やはり	熟考した結果
⑥『日本語の中級 J501』	L6/全 10	文法:「～なんて」	やっぱり	予期した通り 同じ結果に帰結
⑦『文化中級日本語I』	L1/全 8	読解:体験談	やはり	依然として
⑧『中級から上級への日本語』	L2/全 10	読解:意見文	やはり	予期した通り
⑨『ニューアプローチ中級日本語基礎編 改定版』	L8/全 20	読解:エッセイ	やはり	予期した通り
⑩『日本語能力試験出題基準』	3 級語	リスト	やはり	—

### 3.2 I-JAS の JFL 環境の学習者と B-JAS の学習者が使用した教材

本節では、I-JAS の JFL 環境の学習者と B-JAS の学習者がこれまでにどのような教材で学習してきたかを検討するために、それぞれのコーパスに収録されているフェイスシートを調査した。

I-JAS のデータで対象とした JFL 環境の学習者のフェイスシートで、学習者は「これまでに勉強した日本語の教科書を分かる範囲で」回答しており、その複数回答した教材の延べ 1756 件を集計した。全体では、『みんなの日本語』(195)、『新文化初級日本語』(90)、各種 JLPT 対策教材 (80)、『げんき』(71)、『文化中級日本語』(46)、『総合日本語』(45)、『どんな時どう使う日本語文型 200・500』(42)、『Basic kanji book』(39) が集計の上位になっている。次に、母語別に上位 5 位までをまとめた<sup>83</sup>。さらに、上位 5 位の教材の内実によって、13 の地域の 12 の言語を「A：自国で作成した教材を使用している言語」、「A+B：自国で作成した教材と日本作成の教材の各国語版を使用している言語」、「B：日本作成の教材の各国語版を使用している言語」、「C：傾向がつかめない言語」の 4 つのグループ分類した。表 9-3 に詳細を示す。

表 9 - 3 : I-JAS の JFL 環境の学習者が使用した教材

	母語	1 位から 5 位の教材名
A	中国語	①『総合日本語』 ②— ③『高級日語』 ④『新編日本語』シリーズ ⑤『新日本語』シリーズ／『標準日本語』
A +	フランス語	①『Parlons Japonais』シリーズ ②『Basic kanji book』 ③『みんなの日本語』 ④— ⑤『まねきねこ』
	ロシア語	①『新文化初級日本語』 ②『для начинающих』シリーズ ③『文化中級日本語』 ④『みんなの日本語』 ⑤—
B	トルコ語	①— ②『JP101・102・201・202』シリーズ ③『みんなの日本語』 ④『中級の日本語改訂版』 ⑤JLPT 対策
B	スペイン語	①『みんなの日本語』 ②『Basic kanji book』 ③『Japanese for Busy People』 ④漫画 ⑤『げんき』

<sup>83</sup> なお、1756 件の回答の中には無回答の 316 件が含まれている。表 8-2 は無回答を除いた数値である。

B	ドイツ語	①『新文化初級日本語』 ②『文化中級日本語』 ③『場面による実際の日本語』 ④ JLPT 対策 ⑤『みんなの日本語』
	英語	①『ようこそ』 ②『げんき』 ③『日本語 90 日』 ④『中級を学ぼう』 ⑤『なかま』
	タイ語	①『みんなの日本語』 ②『あきこと友だち』 ③— ④『初級日本語』 ⑤JLPT 対策
	ベトナム語	①『みんなの日本語』 ②『初級日本語』 ③『どんな時どう使う日本語文型 200・500』 シリーズ ④— ⑤JLPT 対策
	ハンガリー語	①『げんき』 ②『みんなの日本語』 ③日本事情 ④『どんな時どう使う日本語文型 200・500』 シリーズ⑤『中級の日本語 改訂版』
	中国語(台湾)	①『新文化初級日本語』 ②— ③『みんなの日本語』 ④JLPT 対策 ⑤『ビジネス日本語』
C	インドネシア語	①— ②『みんなの日本語』 ③JLPT 対策 ③会話:他の教材 ③『さくら』
	韓国語	①— ②JLPT 対策 ③初級:他 ④『初級日本語』 ⑤会話:他

・表中「—」は回答が空欄だった学習者の集計

中国語を母語とする学習者は、「A：自国で作成した教材を使用」しており、表中の教材で回答の 77.1%を占めていた<sup>84</sup>。フランス語・ロシア語・トルコ語を母語とする学習者は「A+B：自国で作成した教材と日本作成の教材の各国語版を使用」しており、フランス語を母語とする学習者は『Parlons Japonais』を、ロシア語を母語とする学習者は『для начинающих』 『Японский язык для продолжающих』を、トルコ語を母語とする学習者は大学で作成した教材『JP101, JP 102, JP 201, JP 202』のシリーズの使用が中心で、それを補う形で『みんなの日本語』や『新文化初級日本語』などの教材が用いられていた。スペイン語・ドイツ語・英語・タイ語・ベトナム語・ハンガリー語・中国語(台湾)の7言語を母語とする学習者は、「B：日本作成の教材の各国語版を使用」しており、『みんなの日本語』、『新文化初級日本語』、『げんき』、『ようこそ』、『なかま』、『あき子と友だち』などの初級教材と JLPT 対策の教材が回答されていた。インドネシア語と韓国語を母語とする学習者は、いずれの言語も対象者の約 80%が空欄であることから使用教材の傾向をつかむことができない。

<sup>84</sup> フェイスシートの回答で『標準日本語』を挙げた回答は 1 件のみであった。中国では選択されている教材は地域や大学によって異なると考えられる。母国では『標準日本語』で勉強したと述べる中国からの留学生が 10 名以上は存在している。

I-JAS の JFL 環境の学習者は「教育機関において、体系的に日本語を学んでいること・日本語を第二言語とすること・日本語母語話者との 30 分の対話に対応できること・ある程度読み書きが可能なこと」の条件のもとに募集されており、日本語レベルとしては中級学習者を想定して募集されていた。従って、学習者が使用したと回答した教材も初級の教材が主であることから、副詞「やはり」の導入を確認できなかった。表 8-2 に挙げられている初級以外の教材で副詞「やはり」が提出されているものは前節で記述した『文化中級日本語 I』のみであった。

次に、B-JAS の学習者がこれまでにどのような教材で学習してきたかを検討するためにフェイスシートに記載した使用教材の回答をまとめ、表 9-4 に示した。延べ 27 件の回答の中で 88.9%が自国で作成された教材であった。

表 9 - 4 : B-JAS の学習者が使用した教材

教材名	出版社	N=27
『基礎日語総合教程』	高等教育出版社	11
『中日交流標準日本語』	中国人民教育出版社	5
『基礎日語聴力教程 1』	人民教育出版社	4
『総合日語教程』	北师大出版社	2
『標準日本語中級』	人民教育出版社	1
『新標準日本語初級』	人民教育出版社	1
『大衆的日本語中級』	スリーエーネットワーク	2
『大衆的日本語』	スリーエーネットワーク	1

初級後半レベルで副詞「やはり」を学習したあとの、I-JAS の JFL 環境で日本語を学ぶ学習者の使用実態は第 6 章、本章の 2.1 節に示した。横断コーパスで調査した JFL 環境の学習者は、母語話者と比べて副詞「やはり」を多くは用いておらず、複数ある意味・機能の一部を産出している。縦断コーパスでの副詞「やはり」の使用の変化は、第 7 章、本章の 2.2 節に示した。4 年間の調査から、学習者は日本語のレベルが上がるに従い副詞「やはり」の使用数が増えること、産出できる意味・機能のバリエーションも増えることが観察できた。また、日本留学での母語話者との接触によって、異形態を持つ副詞「やはり」の使用に何らかの影響を及ぼすことは確認できた。

では、既存の日本語教材で副詞「やはり」を導入したあと、日本語教育で何をどう指導したらいいかについて、次節で検討したい。

#### 4. 日本語教育への提言

以上の調査・検討を踏まえ、副詞「やはり」を発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の一群の一つとして談話教育の中で指導することを提案したい。これらの一群は渡辺（1971）が「注釈の副詞」と呼び、宮島（1983）が「消極的な呼応をする陳述の副詞」と記述した副詞、森山（1989）が「認識文（先行文が認識的な伝達）に対する応答で用いられる」と挙げた副詞、森本（1994）が SSA 副詞とした副詞の一部である。具体的には「やはり」「確かに」「なるほど」「もちろん」などで、談話で多く用いられ、基本的意味の他に派生したいくつかの意味・機能を持ち、複数の層に働くという共通点を持っている。

これらの副詞は、『日本語能力試験出題基準』の語彙のレベルでは、「やはり（3級語）」「確かに（3級語）<sup>85</sup>」「なるほど（3級語）」「もちろん（4級語）」とされ、「もちろん」は初級前半、「やはり」「確かに」「なるほど」は初級の後半で語彙指導の中で別々に指導されている。以降は「日本語能力試験（Japanese-Language Proficiency Test）： JLPT」の読解・聴解対策、「日本留学試験（Examination for Japanese University Admission for International Students）： EJU」の読解・記述対策、大学・大学院入試の小論文対策の一環で「譲歩構文」などが指導されることはあっても、それぞれの副詞の多義性や意味・機能の全体像や談話での働きについて指導されることはなかったのではないか。「確かに」「なるほど」「もちろん」については調査・検討が進んでいないため、論じることはできないが、本研究で調査・検討の対象としてきた副詞「やはり」について言及する。

##### 4.1 副詞「やはり」の指導の方向性

本研究は、学習者コーパスを用いて学習者と母語話者の副詞「やはり」の使用実態を調査し、比較を通して検討してきたが、母語話者の使用が学習者の使用のゴールではないということ念頭に置いている。異なる点を明らかにすることは、学習者にとっては学習の方向性が示唆されることになり、母語話者にとっては、ほぼ無意識に使用してきた副詞「やはり」

---

<sup>85</sup> 「確かに」は『日本語能力試験出題基準』にはなく、「確か」で提示されている。

の一側面を炙り出す事ができると考えたからである。その比較は本章 3.2 節で述べ、表 9-1 にまとめた。その比較から次の 5 点が明らかになった。

- ① 学習者は副詞「やはり」を多用していない。
- ② 学習者は副詞「やはり」の形態では「やっぱり」「やはり」を多く使用している。
- ③ 発話中間部と発話終了部で学習者が用いていない用法がある。
- ④ 副詞「やはり」の意味・機能の中で、学習者が産出しにくい意味・機能がある。
- ⑤ 副詞「やはり」では違和感のある産出や対話の相手がカチンとくる産出は少ない。

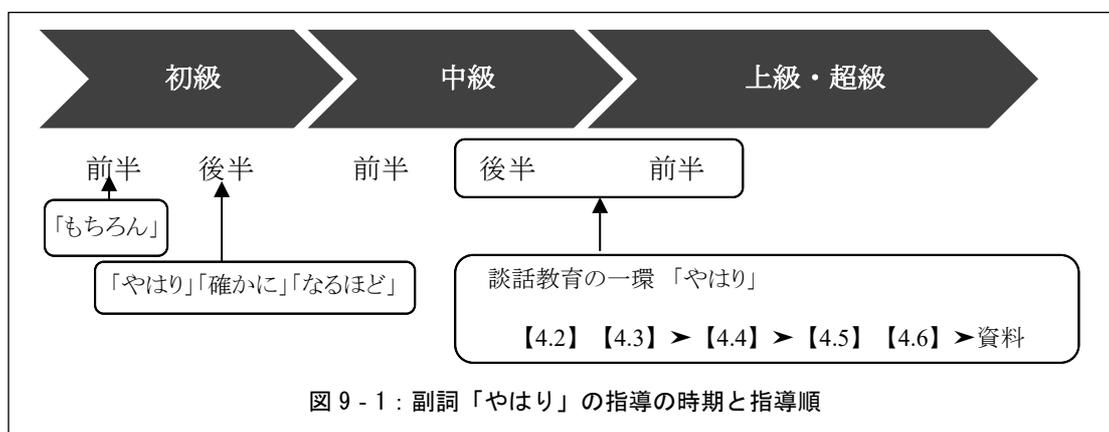
以上の 5 点の指導の方向性を検討すること、それぞれの方向性を示すことの重要度を「必須」「必要」「指導者向け情報」に分類することを行い、表 9-5 にまとめた。さらに、日本語教育での指導時期と指導順を検討し、図 9-1 に示した。

表 9 - 5 : 学習者の副詞「やはり」の使用傾向と指導の方向性

観点	学習者の使用傾向と指導の方向性
使用数	① ・学習者は多用していない。 ▶【必須】母語話者が副詞「やはり」を多用している理由を提示【4.3】
形態	② ・学習者は「やっぱり」「やはり」を多く使用している。 ▶【必要】母語話者の異形態の使用実態を情報として提示【4.4】
出現位置	③ ・発話中間部と発話終了部で学習者が用いていない用法がある。 ▶【指導者向け情報】 学習者が用いていない発話中間部と発話終了部の用法を提示【4.8 資料】
意味・機能	④ ・多様な意味・機能では、限られた範囲での使用に留まっている。 ▶【必須】副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じる理由を提示【4.2】 ▶【必要】副詞「やはり」に存在する方略的使用の用例を提示【4.5】 ▶【指導者向け情報】副詞「やはり」の意味・機能の全体像を提示【4.7 資料】
その他	⑤ ・副詞「やはり」では違和感のある産出やカチンとくる産出は少ない。 ▶【必要】対話の相手に意図せず尊大なニュアンス・ぞんざいなニュアンスを感じさせてしまう副詞「やはり」産出の存在と避け方【4.6】

表中の【 】内は、本章で言及する節番号である。

本論では、図 9-1 に示すように、副詞「やはり」を学習者のレベルが初級の後半に語彙として指導したあと、中級後半か上級前半の時期に、談話教育の一環として指導する。指導する順は、①【4.2】副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じる理由と【4.3】母語話者が副詞「やはり」を多用している理由➤②【4.4】副詞「やはり」の異形態を母語話者はどう使用しているか➤③【4.5】副詞「やはり」の談話での使用（多彩な表現効果）と【4.6】副詞「やはり」の談話での使用（注意が必要な用例）とすることを提案する。なお、【4.7】副詞「やはり」の全体像の提示と【4.8】学習者が用いていない用法の提示は、指導者向けの資料として掲載することとする。以下の節では、指導順に従って具体的な内容を示す。



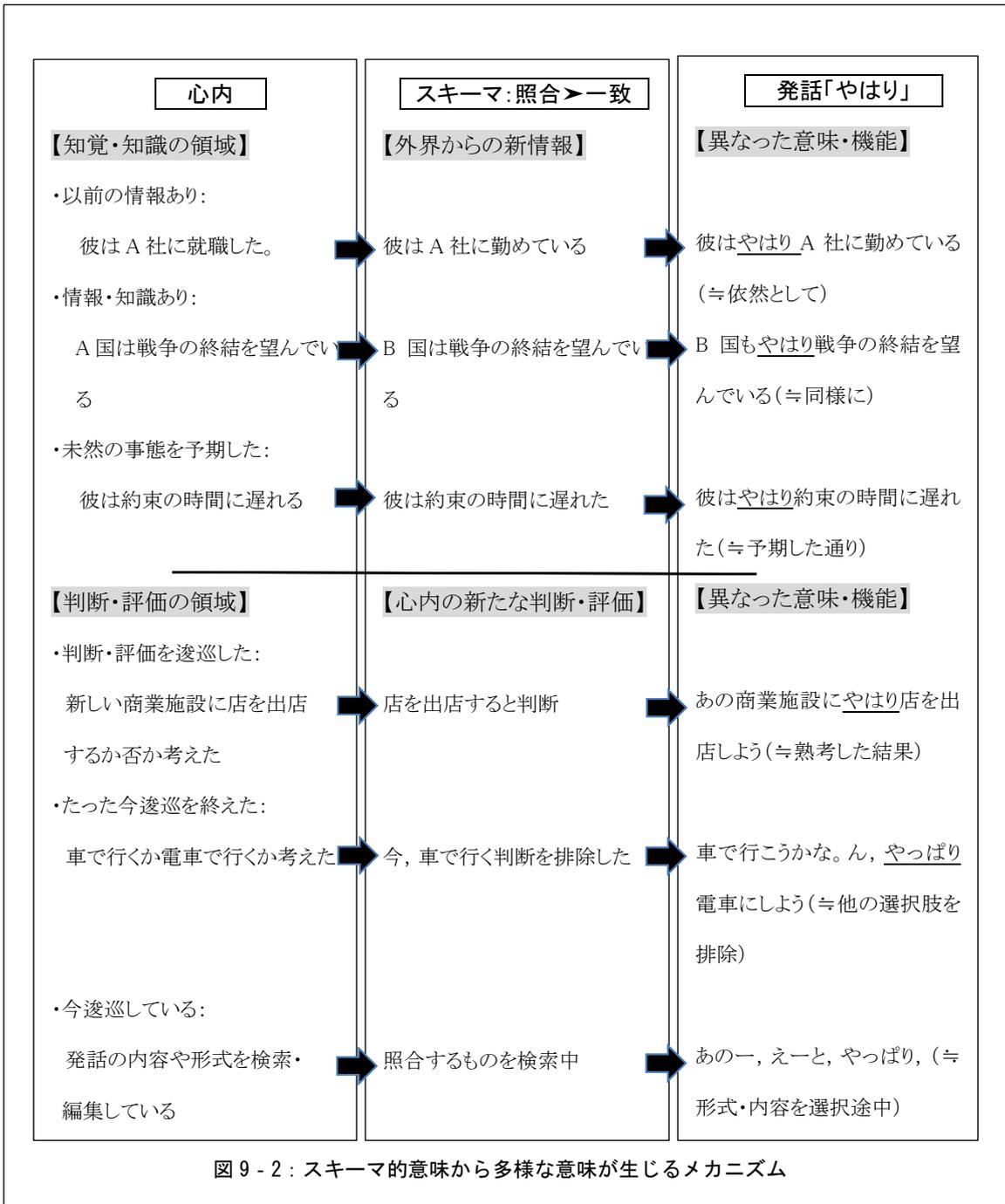
#### 4.2 副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じる理由

ここでは、副詞「やはり」がなぜ多様な意味・機能を持つのかを説明する。副詞「やはり」のスキーマ的意味と副詞「やはり」働く領域について述べる。

(3) 副詞「やはり」は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」というスキーマ的意味を持つ。「概念内の何と照合するか」によって副詞「やはり」に異なった意味・機能が生じる。

(4) 副詞「やはり」は、知覚・知識の領域と判断・評価の領域で働く。

さらに、図 9-2 を用いて「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」というスキーマ的意味から多様な意味・機能が生じるメカニズムを示す。



この、スキーマ的意味から多様な意味・機能が生じるメカニズムを提示し、学習者それぞれが母語との比較を通して理解する過程を持つ指導は、庵（2018）が述べる「産出のための文法にとっては対照研究が必要」であり、「言語教育に応用するための対照研究は意味や機能を中心にする必要がある」とすることに繋がると考える。

### 4.3 母語話者が談話で副詞「やはり」を多用する理由

ここまでの調査で、母語話者が談話で副詞「やはり」を多用することが確認されているが、その理由から、副詞「やはり」が持ついくつかの側面を伝えたい。結論から述べると、母語話者が談話で副詞「やはり」を多用する理由は、副詞「やはり」が談話成立に便利な言葉であること、他者との関わりに配慮が含意できる言葉であること、私たちが日常行っている認知的な活動を言語化する言葉であることの3点によると考える。

まず、談話成立に便利な言葉であることについてだが、私たちは社会の中で言葉を用いて他者と関わっていくことを生業としている。談話は実時間の中で進行してゆき、話し手は「ほとんど無意識に、瞬間的に言語形式や内容の選択を行い、聞き手は、話し手の意図を推測するために、相手の知識について何らかの評価を行う」（田窪・金水 1996）ことをしている。副詞「やはり」は実時間の中で進行する談話で、話し手が発話内容や表現を編集したり検索していることを言語化する意味・機能（「Ⅴ 内容や形式を選択途中」）を持っていることから、話し手にとっては考えながら談話を進めることを可能にする言葉として有効に働く。また、副詞「やはり」には熟考した結果の結論であることを含意する意味・機能（「Ⅲ 熟考した結果」）や、発話の内容や対象を知っていたことを含意する意味・機能（「Ⅰ 依然として・同様に」）や、新情報を予期していたことを含意する意味・機能（「Ⅱ 予期した通り」）があるので、聞き手にとっては話し手の意向を推測する手掛かりになる言葉である。談話の成立という点から副詞「やはり」は有効に働く言葉である。

次に、私たちが言葉を用いて他者との関わりを持つ目的の一つは他者との関わりの中で自分の中にある既存の情報を増やすことであり、またもう一つは他者との人間関係を構築・維持・発展させることにある。しかし、自分が取る言動によって相手との関係を損なう恐れが生じる場合もあり、その際は相手に対する配慮を示すことが必要になる。「申し訳ありませんが」「せつかくですが」などの言葉で相手に対する配慮を示すこともできるが、副詞「やはり」の「Ⅲ 熟考した結果」（自分の判断や評価や行動の決定は逡巡し、熟考した結果であることを含意する。本章 4.5 節で詳述する）によっても示すことができる。他者との関わりの中で配慮が示せる言葉である点からもコミュニケーションに必要な言葉であると言えよう。

さらに、私たちが日常行っている認知に関わる活動を考えてみると、新情報に接した時、私たちは心内を検索して、その情報が既知なのか未知なのか、予測していたのか否か、評

価・判断したことがあったのか否かを瞬時に見極めることをしている。副詞「やはり」のスキーマ的意味は「新情報を話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」であり、副詞「やはり」は私たちが日常的に行っている「検索する」「照合する」という認知に関わる活動を言語化している言葉でもある。

以上、分野を異にする側面から母語話者が副詞「やはり」を多用する理由に言及する。

#### 4.4 母語話者は副詞「やはり」の異形態をどう使っているか

副詞「やはり」は4つの異形態「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」があり、何れかの形態に統合されることなく並行して用いられている。母語話者の異形態の使用実態を、日本語のレベルが中・上級に達した学習者に副詞「やはり」の情報の一つとして伝えることは、多くの中・上級の学習者が漠然と持っている副詞「やはり」の異形態の使い分けについての疑問に答えることになる。第4章で述べた「副詞「やはり」の異形態についての一考察」から、母語話者の異形態の使用実態を抜粋し、日本語教育の立場から以下の(5)から(9)を示して説明する。

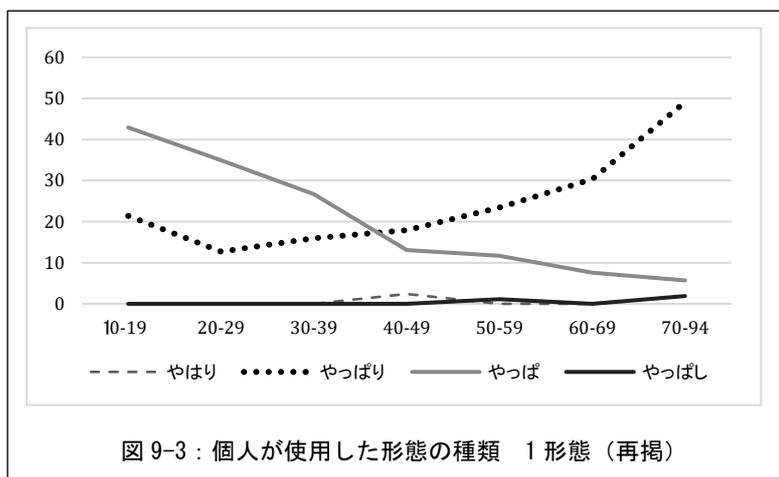
- (5) 一般的に、副詞「やはり」の異形態である、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」は文体的、位相的な差異を除けば、これらの意味・機能は変わらないものと考えられている。
- (6) 「やはり」と「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」については、「やはり」は書き言葉で用いられることが辞書<sup>86</sup>でも言及されており、日本語教育の作文・文章表現教材<sup>87</sup>の中でも書き言葉では「やはり」を用いる指導がなされている。
- (7) 話し言葉では4つの形態が並行して用いられている。母語話者の異形態の使用実態を調査した結果、それぞれの形態を使用した人の割合は、「やはり」2.9%、「やっぱり」81.9%、「やっぱ」75.1%、「やっぱし」4.3%であった。母語話者は、話し言葉では年代や性別によらず「やっぱり」と「やっぱ」を使用している。
- (8) 副詞「やはり」を使用した個人に焦点をあてた調査から、4つの形態の何れか1形

<sup>86</sup> 飛田・浅田 (1994) 『現代副詞用法辞典』では「やはり」は標準的な表現で、公式の発言中心に用いられる」とされている。

<sup>87</sup> 伊集院・高野 (2020) 『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』, 宇野・藤浦 (2016) 『大学生のための表現力トレーニング あしか』等

態を使用している人は40.9%，2形態を併用している人は54.2%，3形態を併用している人は4.5%，4形態すべてを用いている人はいないことが観察された。

- (9) 1形態だけを用いた172名の内実は、「やっぱり」を単独で用いた人が23.5%と最も多く、「やっぱ」のみを用いた人が16.6%でそれに次いでいる。年代ごとに見ていくと、「やっぱり」のみを用いた人の割合は年代が上がるに従って増えている。それに対して、「やっぱ」のみを用いた人の割合は「やっぱり」と逆で年代が上がるに従って減っており、「やっぱり」「やっぱ」の1形態だけを用いた人の割合は世代によって異なっている。参考資料として1形態を使用している人の年代別の割合、図9-3を示す。



#### 4.5 副詞「やはり」の方略的使用と様々な表現効果

「Ⅲ 熟考した結果」の意味・機能で用いられる副詞「やはり」は、使用される状況や場面によって様々な表現効果が生じるが、その理由は、選択肢が複数あって逡巡したこと、その中の一つを選択したことが「Ⅲ 熟考した結果」の意味・機能に含意されることに起因している。仁田（1991）の発話・伝達のモダリティの区分を援用し、「Ⅲ 熟考した結果」の意味・機能で用いる副詞「やはり」が含意する表現効果を提示する。(10) 働きかけ、(11) 働きかけに対する応答、(12) 表出、(13) 述べ立ての順に用例を示す。

- (10) 働きかけ—発話までにいろいろ考えたというニュアンスが含意される。

①相手に行動を勧める

a: 早く病院に行ったほうがいいよ。

b: やっぱり, 早く病院に行ったほうがいいよ。

②相手に何かを依頼する

a: 議長をお願いします。

b: やっぱり, 議長をお願いします。

③相手を誘う

a: 一緒に花火大会に行きましょう

b: やっぱり, 一緒に花火大会に行きましょう

④話し手がある言動をすることを申し出る

a: 私からみんなに話しましょうか

b: やっぱり, 私からみんなに話しましょうか

⑤相手に権限があることの許可願いをする

a: 早退したいんですが……

b: やっぱり, 早退したいんですが……

(11) 働きかけに応えるー同意する場合は副詞「やはり」は用いない。相手の意向に沿えない回答をする場合に用いられ、他者への配慮が含意される。

①相手の勧めを断る

a: 「早く病院に行ったほうがいいよ」ー「 行きたくないよ」  
「やっぱり, 行きたくないよ」

②依頼を断る

a: 「議長をお願いします」ー「 無理です」  
「やっぱり, 無理です」

③誘いを断る

a: 「一緒に花火大会に行きましょう」ー「 やめときます」  
「やっぱり, やめときます」

④申し出を断る

a: 「私からみんなに話しましょうか」ー「 やめておいた方がいいよ」  
「やっぱり, やめておいた方がいいよ」



#### 4.6 意図せず対話の相手を不快にしてしまう副詞「やはり」の使用

山内（2004・2009）で、「副詞「やはり」は上級日本語話者の談話標識」であると言われている。日本語のレベルが上級・超級の学習者は、意図せず対話の相手を不快にしてしまう産出があることを理解する必要がある。本研究の学習者コーパスの用例からは観察されなかったが、対話の相手を不快にしてしまったり、対話の相手に尊大なニュアンスやぞんざいなニュアンスを感じさせてしまう副詞「やはり」の使用に言及する。副詞「やはり」を「II 予期した通り」、「III 熟考した結果」で用いる場合、「やっぱ」を用いる場合に留意したい点を提示する。

まず、副詞「やはり」の「II 予期した通り」での使用で注意したい点は、副詞「やはり」の使用から話し手の予測や先読みの内容が聞き手に分かってしまい、聞き手に不快感や自分の縄張りに踏み入られた感じを与えてしまうことである。用例を（14）（15）に示す。

##### （14）成人した子供を持つ母親たちの会話

母親 A：……〇〇君、どうしてるの？

母親 B：〇〇ね、また会社辞めたのよ。

母親 A：やっぱり。

母親 B：ん？

##### （15）会社の近くの喫茶店から出てきた部長に対しての部下の発話

部下：部長、探しました。やはりこちらにいらっしやんですね。

部長：……

次に、本章 4.5 節では「III 熟考した結果」での表現効果が多彩であることを述べたが、本節では逆に「III 熟考した結果」での使用で注意したい点を述べる。これは、多胡（1997）で指摘され、加藤（1999）でも述べられている「自説の固執」や「押し付け」に繋がる使用である。副詞「やはり」を含む話し手の判断や評価は「様々に考えた結果」であることが含意されてしまうことに起因する弊害である。（10）働きかけ①相手に行動を勧める場合では、聞き手に押し付けを感じさせてしまう恐れが、（13）述べ立て①判断の述べ立てをする場合では、自説への固執を感じさせてしまう恐れがある。用例を（16）（17）に示す。

(16) 話し手以外の人への判断や行動に言及する場合

a: 君はこのプロジェクトに参加すべきだよ。

b: やっぱり君はこのプロジェクトに参加すべきだよ。

(17) 会話の参加者と主張する意見が異なる場合

a: うーん, 地球はまわっているよ。

b: うーん, やっぱり地球はまわっているよ。

最後に、副詞「やはり」の異形態の一つである「やっぱ」を使用する際に注意したい点に言及する。母語話者の「やっぱ」の使用実態は本論の第4章、本章4.2節で述べた通り、「やっぱり」を使用する人に次いで「やっぱ」を使用する人が多い（副詞「やはり」を用いた人の約75%が用いている）が、『現代副詞用語辞典』（飛田・浅田1994）の記述では「やはり」は標準的な表現で、公式の発言中心に用いられる。「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の順にくだけた表現になる。特に「やっぱし」「やっぱ」は若い人中心に用いられる」と記されている。母語話者が用いる「やっぱ」については更なる調査と検討が必要だが、改まった場面や仕事の上司との会話では用いない方が無難であろう。(18)に用例を示す。

(18) (ニュースのインタビューで)「どうしてあんなことなされたんですか」

a: 「やはり, ああするしかなかったんです」

b: 「やっぱり, ああするしかなかったんです」

c: 「やっぱ, ああするしかなかったんです」

## 5. 第9章のまとめ

本章では、第6章・第7章・第8章で検討してきた学習者横断コーパス・学習者縦断コーパスのインタビューデータと学習者の雑談データにおける学習者の副詞「やはり」の使用傾向をまとめ、使用実態と使用の問題点を明らかにした。学習者の使用した教材を検討した後に、第3章・第4章の考察も加味し、意味論、社会言語学、語用論の立場から副詞「やはり」の日本語教育への提言を行った。

次の第10章は、本研究のまとめとして、研究課題に則して研究の結果を記述し、残された課題を述べる。

## 第 10 章 本研究の結論と今後の課題

### 1. 第 10 章の目的

第 9 章では、第 3 章と第 4 章の考察、第 6 章から第 8 章の学習者コーパスの調査、学習者の使用教材の調査を踏まえ、日本語教育への提言を行った。第 10 章では、本研究の結論として、研究の概要と本研究で得られた結論を研究課題に従って述べる。次に、本研究の意義を述べ、本研究では扱えなかった点、本研究を通じて顕在化した更なる問題意識を、今後の課題として記述し研究をまとめる。

以下、2 節では本研究の概要を、3 節では結論を述べる。4 節では本研究の意義と今後の課題を述べ、5 節で本章をまとめる。

### 2. 本研究の概要

本研究は、話し言葉における副詞「やはり」の多義性と、学習者と母語話者の使用実態を論じ、得られた知見を日本語教育へ応用することを目的としたものである。

副詞「やはり」は、「確かに」「もちろん」「なるほど」などとならんで、副詞分類上「陳述副詞」(山田 1936)、「誘導副詞」(渡辺 1971)であり、呼応がなく(工藤 1982)、「発話時に話し手の主観を表す」(森本 1994)副詞の一群に属している。これらの副詞はある程度近接したカテゴリーに属していると考えられるが、使用条件の関わりや、相互の関係の考察は十分になされていない。また、これらの副詞は、いずれも発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つことから、発話の意図を推測する手がかりとなり得る。これらの副詞の話し言葉における使用実態を解明することは、円滑なコミュニケーションの仕組みの説明の一助に繋がると考える。本研究では、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の中から会話において極めて使用頻度の高い副詞「やはり」を対象とした。

副詞「やはり」の特徴は、母語話者の会話で多く用いられることに加え、談話の中で複数の層で働く副詞(西原 1988, 森本 1994, 蓮沼 1998)であること、「やはり」「やっぱり」「や

っぱし」「やっぱ」の4種類の異形態が一つの形態に統合されることなく並行して用いられていることが挙げられる。また、談話における副詞「やはり」は、話し手が聞き手に自分の心情を推測させる手掛かりを布石として提示できる一方、聞き手が話し手の意向を推測する手掛かりとして活用できる言葉である。さらに、副詞「やはり」は辞書的な意味の理解が産出に直接結び付く語と異なり、多義的であり、用いる場面や状況により異なった表現効果を生む、発話時に発話者の認識の在り方を反映する副詞の一つである。日本語学の歴史の中にはその複雑さを解明しようとする多くの研究の蓄積がある。本研究も、その末席に連なる研究である。

従来の副詞「やはり」の研究の多くの考察は、母語話者研究者の内省・新聞・雑誌・小説・シナリオの用例によるものであり、書き言葉に近い用例からの調査・検討であった。本研究は、副詞「やはり」の意味・機能の複雑さの解明を学習者の産出から探るアプローチを取った。その理由は次の3点による。まず、副詞「やはり」は話し言葉で多く用いられる言葉であることから、話し言葉における使用実態の調査が必須である。次に、学習者にとって副詞「やはり」の理解と産出には難しさ（辞書的意味の理解だけでは十分ではない。母語話者との接触による習得もしにくい）が内在してしており、その難しさの内実を探ることから副詞「やはり」の一側面に迫れると考える。3点目として、日本社会の中で自然習得し使用している母語話者が意識していない副詞「やはり」の一側面を、学習者の産出という視点から見ることにより炙り出せると考えるからである。

現在、副詞「やはり」の研究は、形態的バリエーションや多様な意味・機能を中心に、母語話者の使用をめぐって議論が進む一方、日本語教育のための学習者の使用実態の調査は不足している。そこで、本研究では、複数の学習者コーパスを調査することによって、副詞「やはり」の学習者の使用実態を分析し、この調査結果を踏まえて、日本語教育への応用を検討した。なお、本研究では母語話者の使用が学習者の使用のゴールではないということを念頭に置いて、学習者と母語話者の使用実態を調査し、比較を通して検討した。

本論文は10章から成っている。

第1章では、研究背景と問題意識、研究目的と研究課題を述べたうえで、本論文の構成を述べた。第2章では、蓄積された副詞「やはり」の先行研究を概観し、成果と残された課題を明らかにした。

第3章と第4章は、本研究の前提として副詞「やはり」の多義性と母語話者の異形態の使

用実態を論じた。第3章では、副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みを検討した。次に第4章では、『日本語日常会話コーパス：CEJC』を用いて母語話者の「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の使用実態を調査した。さらに、第3章、第4章をまとめ本研究の位置付けを明らかにした。

第5章から第8章は、学習者コーパスの調査・検討を行った。第5章では、調査に先立って本研究の方法、コーパスを用いた研究の意義と限界について言及し、調査対象とする3種類の学習者コーパスを概観した。第6章では、学習者と母語話者の使用実態の比較ができる『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』のインタビューデータを用い、副詞「やはり」の使用数、形態、出現位置、意味・機能から見た使用実態を調査した。第7章では、『北京日本語学習者縦断コーパス：B-JAS』のインタビューデータを用い、副詞「やはり」の学習者の使用の変化を調査した。第8章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2020年版）：BTSJ』の雑談データを用いて、副詞「やはり」の学習者と母語話者の使用実態を会話の属性と関係の親疎から調査した。

第9章では、第3章と第4章の考察、第6章から第8章の学習者コーパスの調査、学習者の使用教材の調査を踏まえ、副詞「やはり」の指導に関して日本語教育へ提言を行った。第10章で本研究の結論と残された課題を述べた。

### 3. 本研究の結論

本研究の目的は、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞「やはり」を話し言葉のコーパスを用いて多角的に研究し、談話教育・日本語教育に資する知見を得ることにある。そのため、以下の研究課題を設定した。

研究課題 1) 副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので、かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか。

研究課題 2) 副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているか。

研究課題 3) 学習者と母語話者の、副詞「やはり」の使用実態はどのようになっているか。

1. インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は、使用数、形態と出現位置、意味・機能の面からどのようになっているか。

2. インタビューデータにおける学習者の使用の変化は、出現数、形態、意味・機能の面からどのようになっているか。
3. 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は、会話の属性別（接触場面か母語場面か）、対話相手との関係別（親疎）でどのような異なりがあるか。

研究課題は、第3章：研究課題 1)、第4章：研究課題 2)、第6章：研究課題 3) - 1、第7章：研究課題 3) - 2、第8章：研究課題 3) - 3に、それぞれ対応している。次節からは、研究課題に則して研究結果を述べる。

### 3.1 研究課題 1) の結果—第3章

研究課題 1) 副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組みとはどのようなもので、かつそうした枠組みから多様な意味・機能がどのように派生するか。

副詞「やはり」の多義性を検討し、副詞「やはり」のスキーマ的意味と、抽出した多様な意味・機能を(1)、(2)として記述し、表 10-1 を多様な意味・機能を包括的に記述できる枠組として提示した。

- (1) 副詞「やはり」は「話し手の概念内の何らかのものと照合し、一致したことを表す」というスキーマ的意味を持つ。「概念内の何と照合するか」によって副詞「やはり」に異なった意味・機能が生じる。
- (2) 副詞「やはり」は、知覚・知識の領域と判断・領域の領域で働く。知覚・知識の領域で働く副詞「やはり」からは「I-1 依然として・I-2 同様に・I-3 同じ結果に帰結」「II 予期した通り」が、判断・領域の領域で働く副詞「やはり」からは「III 熟考した結果」「IV 他の選択肢を排除」「V 形式・内容を選択途中」が生じる。

表 10-1 : 発話に至る過程から考えた副詞「やはり」の意味・機能 (再掲)

領域	意味・機能	肯定されていた命題	照合する命題	発話「やはり」	逡巡	配慮
知覚 ・ 知識	I-1:依然として	単数の情報を想起(時)	新情報を認識	照合→一致	—	—
	I-2:同様に	単数の情報を想起(他)	新情報を認識	照合→一致	—	—
	I-3:同じ結果に帰結	複数の情報を想起	新情報を認識	照合→一致	—	—
	II:予期した通り	複数の判断・評価を想定 →1つを選択	新情報を認識	照合→一致	—	—
判断 ・ 評価	III:熟考した結果	複数の判断・評価を想定 →1つを選択	選択した判断 ・評価を想起	照合→一致	した	有
	IV:他の選択肢を排除	複数の判断・評価を想定 →1つを選択	選択した判断 ・評価を想起	他の選択肢 を排除(今)	今終了	—
	V:形式・内容を選択途中	不明→検索途中	なし	選択途中	逡巡中	有

さらに、前提命題との一致では説明できない思考由来の副詞「やはり」は、発話するに至る過程が存在すること、判断の過程も含めて表現される談話において、逡巡に重きが置かれた結果、スキーマ的意味が希薄化したため生じるとし、「判断・評価＝思考由来の認識」の領域で働く副詞「やはり」を発話する過程、図 10-1 を提示した。

想起したもの	副詞「やはり」を発話する過程	結果
単数：揺るぎ無し →		「やはり」を用いない
複数：揺るぎ有り	逡巡→他の候補を削除→照合→一致しない→	「やはり」を用いない
	逡巡→他の候補を削除→照合→一致(聞き手配慮)→	III熟考した結果
	逡巡→他の候補を削除(話し手目当て)→	IV他の選択肢を排除
不明：揺るぎ有り	検索中(話し手目当て・聞き手配慮)→	V形式・内容を選択途中

図 10-1 : 思考由来認識の領域で働く副詞「やはり」を発話する過程 (再掲)

### 3.2 研究課題2)の結果－第4章

研究課題 2) 副詞「やはり」の異形態を母語話者はどのように使い分けているか。

母語話者の副詞「やはり」の異形態の使用実態を CEJC を用いて調査した。本調査では、4つの異形態を使用した個人に着目して調査・検討をした。その結果、副詞「やはり」を使用した人数から見た母語話者の使用傾向が2点明らかになった。

- ① 「やっぱり」は使用数だけでなく、使用した人数も対象者の8割で最も多い。「やっぱ」それに次いで全体では7割強の人が用いており、使用する世代も10代20代のみでなく全世代に渡っている。また、副詞「やはり」の4つの異形態のうち1形態のみを用いている人は全世代に渡り4割強存在する。
- ② 仕事関係の人との会話では、「やっぱ」より「やっぱり」を使用する割合が高いことから、仕事の場面では「やっぱ」より「やっぱり」がふさわしいと認識している人が多いと推察される。一方、「やっぱ」を使用した人の割合は、立場や状況が下の属性を持つ人との会話から上の属性を持つ人との会話になるに従って漸増している調査結果から、「やっぱ」が「やっぱり」の「ぞんざいな言い方、くだけた形態」であるという解釈だけでは説明できない要因が存在する可能性がある。

次に、使用した個人に焦点をあてた調査から観察できた「やっぱり」「やっぱ」の2形態を併用している母語話者について、副詞「やはり」の会話中での出現位置、意味・機能、アクセント型から調査・検討した。結果を以下の③④に示す。

- ③ 「出現位置」では、一語文で「やっぱり」、節頭の「やっぱ」の出現が有意に多い。「出現位置別の意味・機能」では、「節頭」と「節中」の意味・機能別の使用割合はそれぞれ拮抗している。「一語文」では、「やっぱり」の「Ⅱ 予期した通り」で、「やっぱ」の「V 形式・内容を選択途中」での使用の割合が高い。
- ④ 「やっぱ」には頭高型と無核型のアクセント型があり、全体としては頭高型の出現が多い。「Ⅱ 予期した通り」では無核型が有意に多く、「V 形式・内容を選択途中」では頭高型の「やっぱ」の出現が多い傾向がある。

### 3.3 研究課題3) -1の結果-第6章

研究課題 3) -1. インタビューデータにおける学習者と母語話者の使用実態は、使用数と出現数、形態、意味・機能の面からどのようなようになっているか。

学習者横断コーパスにおける副詞「やはり」の使用数、形態から見た使用実態を調査した。結果を以下の①②に示す。また、副詞「やはり」の出現位置と意味・機能から見た使用実態を③に示す。

- ① 母語別の使用数から見た副詞「やはり」の使用傾向では母語話者の使用に特徴がある。副詞「やはり」を使用した学習者は全体の4分の1であるのに対し、母語話者は対象の全員が副詞「やはり」を使用している。また、使用した個人の平均も学習者の2倍強使用しており、本データの調査では母語話者の副詞「やはり」の多用が観察できた。
- ② 副詞「やはり」の3形態では、学習者は「やっぱり (79.9%)」「やはり (16.1%)」「やっぱ (4.0%)」の順に、母語話者は「やっぱり (75.5%)」「やっぱ (20.1%)」「やはり (4.3%)」の順に使用している。学習者の「やはり」「やっぱり」の使用は学習者が使用した教材に関係がある。母語話者は、初対面のインタビュアーとの会話で、「やっぱ」は年代に関わらず50%以上の人を用いている。
- ③ 学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現位置と意味・機能の調査から、学習者は発話開始部での出現が有意に多く、インタビュアーの質問に対して回答する際に「III 熟考した結果」として用いられている。母語話者は発話中間部での出現が有意に多く、複文の中で逆接・順接の接続表現に後接する環境で、会話の前提や共通基盤を述べる際に用いていた。意味・機能では「1-2 同様に」での使用が多い。また、「V 形式・内容を選択途中」での使用は、フィラーと共起することが多いことは共通しているが、学習者は内容と表現の選択であるのに対し、母語話者は「迷っている、考えている」ことを対話相手に伝え、沈黙が生じる緊張を緩和している用例が観察できた。

### 3.4 研究課題3)-2の結果-第7章

研究課題 3)-2. インタビューデータにおける学習者の使用の変化は、出現数、形態、意味・機能の面からどのようなようになっているか。

学習者縦断コーパスにおける使用実態（使用の変容）を、出現数、形態、意味・機能から調査した。結果を以下の①から④に示す。

- ① 日本語の習熟度が上がるとともに副詞「やはり」の出現数は増加している。
- ② 8回の調査における副詞「やはり」の使用した形態の変化では、次の3点が観察された。
  - i) 「やはり」と「やっぱり」は「やはり」の出現がやや多い傾向で拮抗して用いられていたが、「やはり」は第5回の調査がピークでその後は使用が漸減している。ii) 第6回と第7回で「やはり」と「やっぱり」の出現が逆転している。iii) 「やっぱ」は日本留学から帰国後の第7回、第8回の調査で出現していた。
- ③ 学習者が、副詞「やはり」の意味・機能を使用した順番としては、i) 「III 熟考した結果」と「V 形式・内容を選択途中」、ii) 「I-2 同様に」、iii) 「II 予期した通り」、iv) 「I-3 同じ結果に帰結」、v) 「I-1 依然として」であった。また、B-JASのインタビューデータでは「IV 他の選択肢を排除」を使用していないことを確認した。
- ④ 用例の質的分析から、日本語のレベルが上がることと、日本への留学という状況や、副詞「やはり」を使わざるを得ない話題や文脈があることにより、副詞「やはり」の意味・機能の使用の幅が広がっていくことが観察された。

### 3.5 研究課題3)-3の結果-第8章

研究課題 3)-3. 雑談データにおける学習者と母語話者の使用実態は、会話の属性別（接触場面か母語場面か）、対話相手との関係別（親疎）でどのような異なりがあるか。

BTSJ 日本語自然会話コーパスの雑談データを用い、会話の属性別、対話相手との関係別に、学習者と母語話者の副詞「やはり」の出現率と出現環境の調査を行った。結果を以下の①から⑤に示す。

- ① 対話相手との関係別（親疎）による副詞「やはり」の出現率の傾向は、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが高いのに対し、母語話者は「初対面会話」のほうが「友人との会話」より高くなっており、母語話者と学習者で出現率が逆になっている。
- ② 会話の属性による副詞「やはり」の出現率の傾向は、「接触場面」より「母語場面」のほうが高くなっている。
- ③ 発話開始部で応答詞とフィラーに後接して副詞「やはり」が出現する割合は、学習者は母語話者より低い。フィラーとの共起では、インタビューデータとの違いが見られた。インタビューデータでは、副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見されたが、雑談データでは連続して出現することは少ない。
- ④ 発話中間部では、逆接の環境で出現する割合は学習者 22.9%、母語話者は 24.4%と同程度の出現だが、順接の環境での出現は学習者は 5.7%、母語話者は 16.3%であり、学習者のほうが出現する割合は少ない。
- ⑤ 発話終了部の副詞「やはり」は言い切りの直後（倒置）か、別の後続発話に吸収される環境（言い淀み・会話挿入）で出現する。言い切りの直後に出現する副詞「やはり」は、言い切ったことへの和らげ・相手への配慮を表している。

### 3.6 学習者の副詞「やはり」の使用傾向

本研究では、研究課題 3) に関して I-JAS, B-JAS, BTSJ を用いた調査を行った。学習者コーパスの調査から得られた副詞「やはり」の使用傾向と調査に用いたコーパスを表 10-2 に示す。

表 10-2 : 学習者の副詞「やはり」の使用傾向と調査に用いたコーパス

観点	コーパス	使用傾向
使用数	I-JAS	・学習者は多用していない。
形態	I-JAS・B-JAS I-JAS	・学習者は「やっぱり」「やはり」を多く使用している。 ・「やっぱ」の使用は母語話者との接触が関連している。
出現位置	I-JAS・BTSJ I-JAS・B-JAS BTSJ I-JAS・BTSJ BTSJ	・学習者は発話開始部で応答する際に用いている。 ・インタビューデータでは、副詞「やはり」に前後してフィラーが連続して出現することが散見される。 ・雑談データでは、発話開始部でフィラーと共に共起して出現する割合が、発話中間部、発話終了部より高い。 ・学習者が、発話中間部で複文で使用する場合、逆接の接続表現に後接することは多いが、順接の接続表現に後接することは少ない。／・逆接の接続助詞が前置きとして用いられている使用は少ない。 ・学習者は、雑談データで発話終了部で後続の会話に吸収される副詞「やはり」の使用が少ない。／・接触場面の発話終了部での学習者の言い淀みは、コミュニケーションの挫折を防ぐため母語話者の発話に引き取られる
意味・機能	I-JAS・B-JAS ・BTSJ	・学習者は副詞「やはり」の多様な意味・機能では、限られた範囲での使用に留まっている。 「I-1 依然として」「I-2 同様に」「I-3 同じ結果に帰結」での使用は少ない。／「II 予期した通り」はインタビューデータでは出現しにくい。／「III 熟考した結果」はインタビューデータでは発話開始部での使用が多い。／「IV 他の選択肢を排除」での使用は極めて少ない。／「V 内容や表現を選択途中」は初級段階から用いられている。
その他	BTSJ	・接触場面で、学習者は「初対面会話」より「友人との会話」のほうが副詞「やはり」の出現率は高く、母語話者は逆に「初対面会話」のほうが「友人との会話」より副詞「やはり」の出現率が高い。
	I-JAS・B-JAS ・BTSJ	・調査したデータでは、副詞「やはり」の違和感のある産出やカチンとくる産出は少ない。

### 3.7 研究課題の結果を踏まえた日本語教育への提言

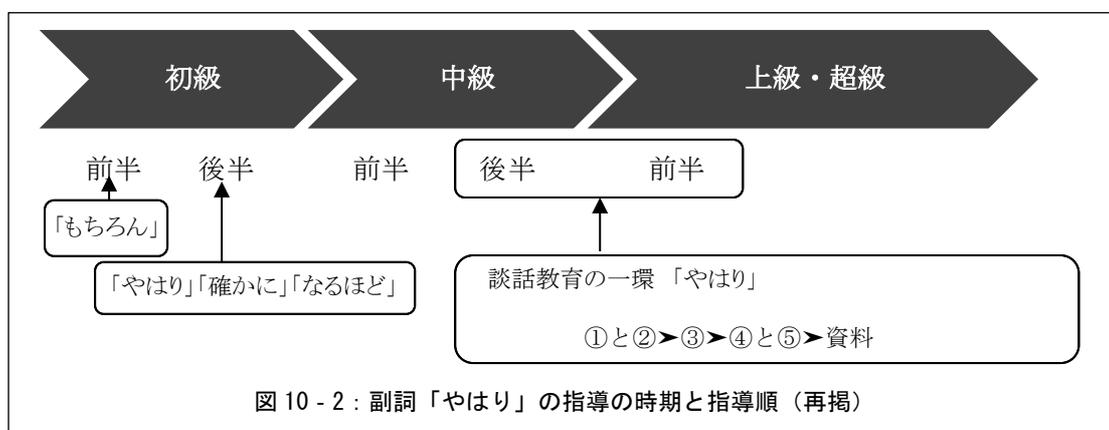
本研究では、母語話者の使用が学習者の使用のゴールではないということを念頭に置いて、学習者コーパスを用いて学習者と母語話者の副詞「やはり」の使用実態を調査し、比較を通して検討してきた。異なる点を明らかにすることは、学習者にとっては学習の方向性が示唆されることになり、母語話者にとっては、ほぼ無意識に使用してきた副詞「やはり」の一側面を炙り出す事ができると考えたからである。

研究課題 1)、研究課題 2)、研究課題 3) -1、研究課題 3) -2、研究課題 3) -3 の調査結果をまとめ、学習者の使用傾向と学習者の使用教材の調査を踏まえ、日本語教育における副詞「やはり」の指導を以下のように提案した。

(3) 副詞「やはり」を発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ副詞の一群の一つとして、学習者のレベルが中級後半から上級前半の段階で、談話教育の中で指導することを提案する。

(4) 指導する順は、まず①副詞「やはり」に多様な意味・機能が生じるメカニズムと②母語話者が副詞「やはり」を多用している理由、次に③副詞「やはり」の異形態を母語話者はどう使用しているか、そして④副詞「やはり」の談話での使用（多彩な表現効果）と⑤副詞「やはり」の談話での使用（注意が必要な用例）の順に指導することを提案する。

提案を図 10-2 に示した。



## 4. 本研究の意義と今後の課題

### 4.1 本研究の意義

「話し言葉における副詞「やはり」の多角的研究」の論を閉じるにあたり、本研究の意義として、以下の3点を挙げたい。

1点目は、I-JAS, B-JAS, BTSJの3種類の学習者コーパスを用いて、副詞「やはり」を横断的・縦断的に、インタビューデータと雑談データから調査・検討したことにより、学習者の副詞「やはり」の産出を定量的に把握することができた。学習者の使用実態から、日本語教育への知見を得ることは意味ある方法論である。また、学習者との比較から、母語話者は副詞「やはり」を多用しているという実態を明らかにすることができた。本研究の意義からは外れるが、7年という短時間で多くの話し言葉のデータを得ることができたのは、近年構築され、公開されている学習者・母語話者の話し言葉のコーパスの存在があったからに他ならない。

2点目として、CEJCを用いて行った母語話者の副詞「やはり」の異形態の使い分けの調査から新しい知見を得ることができた。使用した個人に焦点をあてた調査から、「やっぱり」を用いている人は使用した人数の8割、「やっぱ」を用いている人は7割強存在し、10代、20代だけでなく全世代で用いていること、「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」の異形態のうち1形態だけを用いている人が副詞「やはり」を用いた人の4割いることが明らかになった。

3点目は、多くの先行研究で論じられてきた副詞「やはり」の多義性のメカニズムを模索し、副詞「やはり」の多様な意味・機能を包括的に記述できるスキーマ的意味とはどのようなもので、かつどのように意味・機能が派生するかを記述した。

### 4.2 今後の課題

以上、ここまで学習者と母語話者のコーパスを用いて副詞「やはり」の使用実態を調査・検討してきたが、本研究では扱えなかった点、さらなる疑問や問題意識が顕在化した。以下に今後の課題を記す。

まず、本研究は前川(2007)、山崎(2016, 2019b)が述べる「corpus-driven」な調査によって得られた評価値の高低が何に起因するかを説明するための理論を検討し、全体の中

にうまく位置付ける解釈」ができる考察を加え、「定性的研究と定量的研究の関係の再構築（相補的な関係）」が体现できる研究を目指したが、コーパスの定量的調査から導かれる実態の記述に留まっている。本研究の調査で抽出された個々現象について、それが「何に起因するかを説明するための理論」を検討するための定性的調査が必要である。

調査に用いたコーパスそれぞれの具体的な課題を述べる。一般的にコーパス相互の比較は軽々にはできないが、I-JAS と B-JAS は比較可能なコーパスの設計になっている。横断コーパスと縦断コーパスの中国語を母語とする学習者のデータを用いての調査・検討の余地は多く存在するが、本研究ではそれぞれのコーパスでの記述に留まっている。次に、本研究は話し言葉における副詞「やはり」の調査・検討であったが、談話において副詞「やはり」がどう働くかについては調査も検討も不足している。BTSJ の調査で明らかになった興味深い学習者と母語話者の接触場面・母語場面、関係の親疎による使用傾向の差異の理由を究明するために、語用論の知見を学ぶこと、コーパスの用例を定性的に調査していくことが必要である。母語話者の異形態の使用実態を把握するために用いた CEJC の調査では、「やっぱ」と「やっぱ」を使用する話者と対話の相手の属性の関係を用例を用いて詳細に見ていくことが必要である。また、「やっぱ」についてはアクセント型と「やっぱ」に前接する語のアクセント型の関係を調査すること、「やっぱ」のアクセント型と副詞「やはり」の意味・機能の関係を検討することが課題として残っている。

次に、研究課題 1) で記述した副詞「やはり」のスキーマ的意味と、多様な意味・機能が生じるメカニズムや、副詞「やはり」の全体像については、用例を用いて検証することが必要である。特に「判断・評価＝思考由来の認識」の領域で働く副詞「やはり」の検証と分析をし、談話の中で働く副詞「やはり」の知見を得たい。

最後に、本研究は、発話時に発話者の認識の在り方を反映する意味・機能を持つ一群の副詞の一つとして副詞「やはり」を調査・検討した。今後において、他の一群の副詞、「なるほど」「確かに」「もちろん」にも射程を広げ、談話教育、日本語教育に資する副詞の研究としていきたい。

## 5. 第 10 章のまとめ

以上、本章は、本研究で得られた結果を研究課題に則してまとめ、本研究の中では行えなかった点を今後の課題として述べた。

本研究を閉じるにあたり、さらなる課題が残ることはさらなる研究への糸口と考え、途中経過ではあるが、話し言葉における副詞「やはり」を多角的な面から究明した研究とみなし、本章のまとめとしたい。

## 【参考文献】

- 石黒圭（1999）「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198, 114-129.
- 石黒圭（2018）「日本語学習者の言語運用の不思議－学習者コーパスから見えるもの－」NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」（講演）
- 石黒圭（2023）『コミュ力は「副詞」で決まる』光文社新書.
- 庵功雄（2018）『一步進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版.
- 居關友里子・第十早織・伝康晴・小磯花絵（2017）「日常会話コーパスのための談話行為タグの設計」『言語処理学会 第23回年次大会 発表論文集』104-107.
- 板坂元（1971）『日本人の論理構造』講談社現代新書.
- 宇佐美まゆみ（1999）「談話の定量的分析－言語社会心理学的アプローチ－」『日本語学 特集：これからの談話研究』18（11），明治書院，40-56.
- 宇佐美まゆみ（2015）「「総合的会話分析」の趣旨と方法－量的分析と質的分析の必然的融合－」『日本語教育』162, 34-49.
- 宇佐美まゆみ・張未未（2020）「日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者による「バランスをとるための笑い」の分析－『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2020年版）』を用いて－」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』5, 301-314.
- 宇佐美まゆみ・中俣尚己（2013）「『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』の設計と特性について」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』217-228.
- 宇佐美まゆみ・山崎誠（2018）「『BTSJ 日本語自然会話コーパス（2018年版）』構築の趣旨と特徴」『言語処理学会 第24回年次大会 発表論文集』420-423.
- 大関浩美（2012）「第2言語習得論を活用した日本語教育」静岡大学国際交流センター 第2回シンポジウム, 1-11.
- 大関浩美（2017）「学習者コーパスと 第二言語習得研究 コーパスを使ってできないこと」第二回学習者コーパスワークショップ,（2017年3月17日）
- 大関真理（1993）「日本語教育の視点からみた副詞」『早稲田大学大学院教育学研究科 紀要』別冊創刊号, 1-14.

- 柏野和佳子 (2019) 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる応答表現」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4, 368-380.
- 加藤薫 (1999) 「『やはり』論の問題点—その対立する論点の整理と展望—」森田良行教授古希記念論文集刊行会 (編) 『日本語研究と日本語教育』明治書院, 165-183.
- 金谷由美子 (2017) 「『やっぱり』についての一考察—『一致説』への反論」『日本語・日本文化研究』27, 183-193.
- 川口良 (1993) 「日本人および日本語学習者による副詞『やっぱり』の語用論的前提の習得について」『日本語教育』81, 106-127.
- 川端善明 (1983) 「副詞の条件—叙法の副詞組織から」渡辺実 (編) 『副用語の研究』明治書院, 1-34.
- 金水敏 (1992) 「副詞『なほ』について」筑波言語文化フォーラム (編) 『対照研究 第2号 発話マーカーについて』48-54.
- 金水敏・今仁生美 (2000) 「意味から談話の構造へ」『現代言語学入門4 意味と文脈』岩波書店, 195-234.
- 金田一春彦 (1962) 『日本語の生態と心理』至文堂.
- 工藤浩 (1980・2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓朗・仁田義雄・工藤浩 (編) 『日本語の文法3 モダリティ』ひつじ書房, 164-234.
- 工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所 研究報告集』3, 45-92.
- 工藤浩 (2016) 『副詞と文』ひつじ書房.
- 小磯花絵 (2019) 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版—話し言葉研究の展開—」2019 日常会話コーパス sympo4-1.
- 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2022) 「『日本語日常会話コーパス』—設計・構築・特徴」『国立国語研究所「日常会話コーパス」プロジェクト報告書』6.
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (編) (2007) 『日本語能力試験 出題基準 改定版』凡人社.
- 小林雄一郎 (2014) 「コーパス言語学研究における頻度差の検定と効果量」『外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部 メソドロジー研究部会 2014 年度 第6号報告論集』85-95.

- 西條美紀 (2005) 「接触場面の非対称性を克服する会話管理的方略」『社会言語科学』8 (1), 166-180.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編) (2020) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門 研究・教育にどう使うか』くろしお出版.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6, 93-100.
- 鈴木英子 (2020) 「接触場面に出現する「やはり」の一考察—『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の調査から」『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, 69-80.
- 鈴木英子 (2023a) 「副詞「やはり」の多義性考」『日本語文法』23 (2), 53-69.
- 鈴木英子 (2023b) 「副詞「やはり」の形式についての一考察: 「やっぱ」はやはり「やっぱり」とは違うか」『日本語の研究』19 (3), (2023年12月発行予定).
- 鈴木英子 (2024) 「I-JAS インタビューデータにおける日本語学習者の副詞「やはり」の使用実態—日本語母語話者との比較を通して—」『国立国語研究所論集』26, (2024年1月発行予定).
- 曹再京 (2001) 「順接と逆接の論理からみた「やっぱり」の機能について」『言語科学論集』5, 37-48.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』くろしお出版, 211-233.
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学』編集委員会 (編) 『文化言語学—その提言と建設』三省堂, 96-106.
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3 (3), 59-74.
- 武田らら (2016) 「重複発話から創出される協調性—親疎が異なった日本語相互行為の異ジャンル間比較からの一考察—」『社会言語科学』19 (1), 87-102.
- 多田道太郎 (1979) 『日本語の作法』潮出版.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版.
- 土井みつる (1994) 「日本語学習者の会話に現れるブレイクダウン修復の特徴の記述」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 1 (2), 36-37.

- 中右実（1980）「文副詞の比較」国広哲也（編）『日英語比較講座第2巻文法』大修館，159-219.
- 中右実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店.
- 中田智子（1991）「談話における副詞の働き」『副詞の意味と用法』国立国語研究所，81-107.
- 西原鈴子（1988）「話者の前提—『やはり（やっぱり）』の場合」『日本語学』7（3），89-99.
- 西原鈴子（1991）「副詞の意味機能」『副詞の意味と用法』国立国語研究所，47-80.
- 仁田義雄（1989）「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』くろしお出版，1-56.
- 仁田義雄（2002）『新日本語文法選書 副詞的表現の諸相』くろしお出版.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会（編纂）（2001）『日本国語大辞典 第2版』小学館.
- 野田尚史（2015）「日本語非母語話者の感動詞の不自然な使用」友定賢治（編）『感動詞の言語学』ひつじ書房，149-165.
- 野山広（2018）「B-JAS の特徴」シンポジウム『日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—』国立国語研究所，（4月30日）.
- 橋本進吉（1948）『国語法研究』岩波書店.
- 蓮沼昭子（1998）「副詞『やはり・やっぱり』をめぐって」吉田金彦（編）『ことばから人間を』昭和堂，133-148.
- 林淳子（2016）「言語的反応の観点による疑問文の分類」『日本語学論集』12，6-31.
- 林淳子（2017）「疑問文・疑問詞研究史」『日本語学論集』13，3-34.
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版.
- 深尾まどか（1995）「副詞「やはり」「やっぱり」について」『南山日本語教育』2，25-49.
- 前川喜久雄（2007）「コーパス日本語学の可能性：大規模均衡コーパスがもたらすもの」『日本語科学』22，13-28.
- 松本曜（2010）「多義性とカテゴリー構造」澤田治美（編）『ひつじ意味論講座1 語・文と文法カテゴリーの意味』ひつじ書房，23-43.

- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」 『日本語の研究』 1 (3) , 61-76.
- 宮島達夫 (1983) 「情態副詞と陳述」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 明治書院, 89-116.
- 榎山洋介・深田智 (2003a) 「意味の拡張」 松本曜 (編) 『認知意味論』 大修館書店, 73-134.
- 榎山洋介・深田智 (2003b) 「多義性」 松本曜 (編) 『認知意味論』 大修館書店, 135-186.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』 くろしお出版.
- 森山卓郎 (1988) 「認識のモードとその周辺—認識的モードの形式をめぐって, 内容判断の一貫性の原則, コミュニケーションにおける聞き手情報—」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 くろしお出版, 57-120.
- 森山卓郎 (1989) 「応答と談話管理システム」 『阪大日本語研究』 1, 63-88.
- 柳田直美 (2013) 「接触場面における母語話者のコミュニケーション方略研究: 情報やりとり方略の学習に着目して」 筑波大学博士論文.
- 山内博之 (2004) 「語彙習得研究の方法—茶釜と N グラム統計—」 『第二言語としての日本語の習得研究』 7, 141-161.
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』 ひつじ書房, 1-58.
- 山崎誠 (2016) 「コーパスが変える日本語の科学—日本語研究はどのように変わるか—」 『日本語学』 35 (13) , 12-17.
- 山崎誠 (2019a) 「日本語コーパスの紹介とその利用」 『ヨーロッパ日本語教育』 23, 222-232.
- 山崎誠 (2019b) 「国立国語研究所コーパスの統計情報 —BCCWJ 語数表・語彙表ほか—」 『計量国語学』 32(1), 33-40.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館.
- 吉田悦子・Robin Lickley (2009) 「対話におけるグラウンディング過程とは何か: 談話指示と言い淀みの分析」 『言語処理学会第 15 回年次大会発表論文集』 426-429.

李在鎬・小林典子・今井新悟・酒井たか子・迫田久美子 (2015) 「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究』18, 53-69.

渡邊淳也 (2012) 「Toujours と「やはり」ステレオタイプ再確認型の副詞」喜田浩平 (編) 『川口順二教授退任記念論集』173-185.

渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房.

渡辺実 (1974) 『国語文法論』笠間書院.

Gilles Fauconnier, (1994). *Mental Spaces. Cambridge: Cambridge University Press.*

John Heritage (1998) *Conversation Analysis and Institutional Talk :Analyzing Distinctive Turn-Taking Systems.* S. Cmejrková, J. Hoffmannová, O. Müllerová and J. Svetlá (eds.).  
*Proceedings of the 6th International Congress of LADA , Tübingen: Niemeyer.* 3-17.

Lindner, Susan (1982) What goes up doesn't necessarily come down: The ins and outs of opposites. *Papers from the Eighteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society.* 305-323.

#### 【関連 Web サイト】

国立国語研究所『昭和話し言葉コーパス』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/ssc/search> (2022年8月24日確認)

国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> (2020年3月21日確認)

国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/search> (2022年6月11日確認)

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search> (2022年8月24日確認)

国立国語研究所『名大会話コーパス』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/nuc/search> (2018年5月13日確認)

『北京日本語学習者縦断コーパス』<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/bjas/bjasindex>. (2020年12月26日確認)

『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2020 年版』 <https://ninjal-usamilab.info/corpus2020/>

(2020 年 5 月 15 日確認)

【調査した日本語教材】

『J- Bridge Vol. 1 』 第 2 版 (2009) 凡人社

『Japanese for Busy People』 (2003) AJALT

『げんき I 』 第 2 版 (2016) The Japan Times

『にほんごだいじょうぶ Book 2』 (2015) The Japan Times

『みんなの日本語 I・II 』 第 2 版 (2013) スリーエー・ネットワーク

『みんなの日本語中級 I 』 (2008) スリーエー・ネットワーク

『新日本語の中級』 (2003) スリーエー・ネットワーク

『新文化初級日本語 II』 (2000) 文化外国語専門学校

『大学生のための表現力トレーニング あしか』 (2016) , ココ出版

『大地 I・II 』 (2014) スリーエー・ネットワーク

『中級の日本語 改訂版』, 『Japanese for Busy People I II』, 『ビジネス日本語』

『中級の日本語改訂版』 (2008) The Japan Times

『中級へ行こう』 (2016) スリーエー・ネットワーク

『中級を学ぼう』 (2009) スリーエー・ネットワーク

『日本語の中級 J301 改訂版』 (2016) スリーエー・ネットワーク

『日本語の中級 J501 改訂版』 (2001) スリーエー・ネットワーク

『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』 (2020) , アスク出版.

『文化中級日本語 I 』 (2012) 文化外国語専門学校

【資料編】

【第4章】

- 1) 『昭和話し言葉コーパス』における副詞「やはり」の出現頻度と使用人数 ▶p.76
- 2) 『日本語歴史コーパス』における副詞「やはり」の出現頻度 ▶p.77
- 3) 「やっぱり」の韻律情報 ▶p.80
- 4) 「やっぱり」韻律年代別の使用人数 ▶p.80
- 5) 「やっぱ」の韻律情報 ▶p.80
- 6) 「やっぱ」韻律年代別の使用人数 ▶p.80

- 1) 『昭和話し方コーパス』における副詞「やはり」の出現頻度と使用人数▶第4章 p.76

【参考】 『昭和話し言葉コーパス』における副詞「やはり」の出現頻度と使用人数

	ヤハリ			ヤッパリ			ヤッパシ			ヤッパ			総計	
	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数
10-19	0	0	(0.0)	60	14	(82.4)	5	5	(29.4)	4	3	(17.6)	69	17
20-29	14	11	(26.8)	309	35	(85.4)	25	13	(31.7)	31	14	(34.1)	379	41
30-39	6	2	(11.8)	47	16	(94.1)	1	1	(5.9)	8	6	(35.3)	62	17
40-49	17	7	(36.8)	109	18	(94.7)	4	4	(21.1)	10	7	(36.8)	140	19
50-59	7	2	(22.2)	42	8	(88.9)	2	2	(22.2)	4	2	(22.2)	55	9
60-69	0	0	(0.0)	12	4	(80.0)	12	1	(20.0)	3	2	(40.0)	27	5
70-	34	6	(66.7)	37	9	(100)	2	2	(22.2)	3	3	(33.3)	76	9
NA	11	8	(33.3)	65	17	(70.8)	0	0	(0.0)	5	4	(16.7)	81	24
総計	89	36	(25.5)	681	121	(85.8)	51	28	(19.9)	68	41	(29.1)	889	141

総計人数は対象者全数。複数の形態を使用する人がいる。／NA「ヤバリ」1は除いて集計した。

2) 『日本語歴史コーパス』における副詞「やはり」の出現頻度▶第4章 p. 77

【参考】 『日本語歴史コーパス』における副詞「やはり」の出現頻度

		ヤハリ(%)	ヤッパリ(%)	ヤッパシ(%)	ヤッパ(%)	総計
5 江 戸	江戸-近松	3 (37.5)	5 (62.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	8
	江戸-人情本	5 (5.1)	93 (94.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	98
	江戸-洒落本	9 (14.8)	50 (82.0)	0 (0.0)	<b>2 (3.3)</b>	61
	小計	17 (10.2)	148 (88.6)	0 (0.0)	<b>2 (1.2)</b>	167
6 明 治	教科書	9 (40.9)	13 (59.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	22
	雑誌	866 (93.3)	61 (6.6)	1 (0.1)	0 (0.0)	928
	明治-初期口語	71 (60.7)	45 (38.5)	1 (0.9)	0 (0.0)	117
	小説	73 (68.9)	31 (29.2)	2 (1.9)	0 (0.0)	106
	新聞	13 (81.3)	3 (18.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	16
	落語 SP 盤	3 (21.4)	11 (78.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	14
	小計	1035 (86.0)	164 (13.6)	4 (0.3)	0 (0.0)	1203
7 大 正	教科書	14 (87.5)	2 (12.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	16
	雑誌	796 (85.0)	138 (14.7)	3 (0.3)	0 (0.0)	937
	小説	80 (57.6)	59 (42.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	139
	新聞	11 (91.7)	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	12
	落語 SP 盤	0 (0.0)	7 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	7
小計	901 (81.1)	207 (18.6)	3 (0.3)	0 (0.0)	1111	
昭 和	教科書	46 (56.1)	36 (43.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	82
	小計	46 (56.1)	36 (43.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	82
総計		1999 (78.0)	555 (21.7)	7 (0.3)	2 (0.1)	2563

3) 「やっぱり」の韻律情報 ▶第4章 p.80

【参考】「やっぱり」韻律情報

	韻律情報	頻度	計 (%)
頭高 型	ya'Qpari	12	12 (5.7)
	yaQpa'ri	152	176 (84.2)
中高 型	yaQpa'ri:	23	
	Qpa'ri	1	
無核	yaQpari	19	21
	yaQpari:	2	(10.0)

4) 「やっぱり」韻律年代別の使用人数 ▶第4章 p.80

【参考】「やっぱり」韻律年代別の使用人数

年代	頭高			中高			無核			総計	
	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数
0-19	0	0	(0.0)	1	1	100	0	0	(0.0)	1	1
20-29	2	1	(25.0)	10	4	100	1	1	(25.0)	13	4
30-39	3	3	(30.0)	32	10	100	4	3	(30.0)	39	10
40-49	2	2	(11.8)	60	17	100	5	4	(23.5)	67	17
50-59	1	1	(6.3)	40	16	100	8	6	(37.5)	49	16
60-69	4	1	(16.7)	25	6	100	2	2	(33.3)	31	6
70-	0	0	(0.0)	8	4	80	1	1	(20.0)	9	5

5) 「やっぱ」の韻律情報 ▶ 第4章 p.80

【参考】 「やっぱ」韻律情報

	韻律情報	頻度	計(%)
頭高型	ya'Qpa	133	140 (70.4)
	yaQ'pa	1	
	ya'Qpa:	6	
無核	yaQpa	52	59 (29.6)
	yaQpa:	1	
	yaQpa'	1	
	yaQpa':	1	
	Qpa	3	
	pa	1	
計		199	

6) 「やっぱ」韻律年代別の使用人数 ▶ 第4章 p.80

【参考】 「やっぱ」韻律年代別の使用人数

年代	頭高			無核			総計	
	頻度	人数	(%)	頻度	人数	(%)	頻度	人数
0-19	0	0	(0.0)	0	0	(0.0)	0	1
20-29	46	10	(90.9)	9	4	(36.4)	55	11
30-39	29	9	(81.8)	14	7	(63.6)	43	11
40-49	36	12	(85.7)	13	6	(42.9)	49	14
50-59	12	8	(57.1)	14	10	(71.4)	26	14
60-69	17	5	(62.5)	5	4	(50.0)	22	8
70-	0	0	(0.0)	4	3	(100)	4	3
計	140	44	(71.0)	59	34	(54.8)	199	62

【第7章】

1) B-JAS に出現した副詞「やはり」の調整頻度 ▶p.144

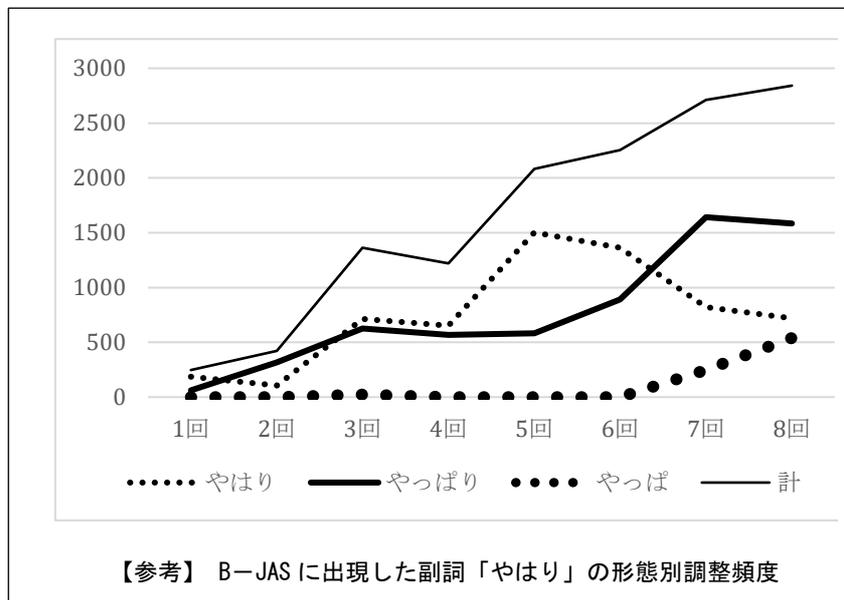
2) 個人別副詞「やはり」出現数 ▶p.151

3) 個人別の使用した形態 ▶p.151

1) B-JAS に出現した副詞「やはり」の形態別調整頻度 ▶第7章 p.144

【参考】 B-JAS に出現した副詞「やはり」の形態別調整頻度

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回
やはり	185.3	105.8	713.4	651.3	1501.7	1362.7	820.6	719.4
やっぱり	61.8	317.4	627	567.8	580.7	890.3	1641.2	1582.7
やっぱ	0.0	0.0	21.6	0.0	0.0	0.0	248.1	539.6
計	247.0	423.2	1362.0	1219.0	2082.4	2253.0	2709.8	2841.7



2) 個人別の副詞「やはり」出現数 ➤第7章 p.151

【参考】個人別の「やはり」出現数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	総計
CCB01	1	7	6	6	11	1	8	6	46
CCB02	0	1	1	0	4	1	8	7	22
CCB03	0	2	8	8	7	3	15	18	61
CCB04	1	1	26	16	15	22	22	20	123
CCB05	0	0	0	0	16	4	5	16	41
CCB06	0	0	0	0	0	0	0	0	0
CCB07	0	1	5	25	13	4	7	4	59
CCB08	0	0	0	0	0	0	0	0	0
CCB10	0	3	1	2	3	17	23	11	60
CCB11	1	0	1	1	2	7	17	16	45
CCB12	0	0	0	0	11	3	18	9	41
CCB13	5	0	13	2	6	20	1	7	54
CCB14	0	0	0	6	5	22	7	9	49
CCB15	0	1	1	0	2	2	0	6	12
CCB16	0	0	1	1	0	2	0	0	4
CCB17	0	0	0	1	0	1	0	1	3
CCB18	0	0	0	3	9	10	8	16	46

3) 個人別の使用した形態 > 第7章 p.151

【個人別】個人別の使用した形態

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
CCB01	①	①②	①	②	①	①	①②	①
CCB02		①	①		①	①	①	①
CCB03		②	①③	②	②	②	②	②③
CCB04	②		①②	①②	①	①②	①②	②③
CCB05					①②	①②	①②	②
CCB06								
CCB07		①	①	①②	①②	①	①	①
CCB08								
CCB10		②	②	①②	①②	②	②③	②③
CCB11	①			①	①	①②	②	①②
CCB12					①	①	①②	②
CCB13	①②		①②	①	①	①	①②	①
CCB14				①②	②	①②	②③	①②
CCB15		②	①		②	①		①
CCB16			②	①		①		
CCB17				②		①		①
CCB18				①	①	①	②	②
人数	4	6	9	11	13	15	12	14

「やはり」:① 「やっぱり」:② 「やっぱ」:③

## 【第9章】

- 1) 日本語教材の中の副詞「やはり」 ➤第9章 p.204
- 2) 日本語教材の中の副詞「やはり」の提出 ➤第9章 p.204

### 1) 日本語教材の中の副詞「やはり」 ➤第9章 p.204

- ① 『J- Bridge Vol. 1 』
- ② 『みんなの日本語 中級I』
- ③ 『新日本語の中級』 -1
- ④ 『新日本語の中級』 -2
- ⑤ 『新日本語の中級 J301』
- ⑥ 『新日本語の中級 J501』
- ⑦ 『文化中級日本語 I』
- ⑧ 『中級から上級への日本語』
- ⑨ 『ニューアプローチ中級日本語 基礎編 改定版』

2) 日本語教材の中の副詞「やはり」の提出 ▶ 第9章 p.204

① 『J- Bridge Vol. 1』

L19 会話-先生との会話 話題：京都旅行

先生：京都ではどこに行ったの？

リー：ええと、清水寺と南禅寺と金閣寺です。

先生：銀閣寺は？

リー：行きませんでした。

先生：どこが一番良かった？

リー：うーん、清水寺もよかったけど、やっぱり金閣寺ですね。

とにかくきれいでした。

(凡人社)

② 『みんなの日本語 中級I』

L11 会話-土曜日 山田さん宅で 話題：夏休みの旅行

カリナ：……どこかお勧めのところ、ありませんか。

山田：そうだなあ。ちょっと遠いけど、沖縄っていうのはどう？

カリナ：沖縄ですか。

山田：沖縄の海は青くて素晴らしいよ。

世界遺産の首里城なんかも見る価値があるし

カリナ：それも悪くないですね。

あのう、北海道なんかどうかなと思ってたんですが。

山田：ああ、北海道もいいね。涼しくて。でも、北海道へ行くなら、やっぱり

冬のほうがいいな。雪祭りとか流氷とか、北海道らしい景色も見られる

し……

(スリーエー・ネットワーク)

③ 『新日本語の中級』

L19 会話-事務所で同僚との 話題：転勤・都会と田舎について話し合う

小川：……佐々木さん、実は僕、今度転勤なんだよ。

佐々木：えっ、転勤！

小川：うん、それがすごい田舎なんだよ。

佐々木：へえ、そう。でもいいよ、田舎は水もおいしいし、空気もきれいだし、

小川：でもやっぱり僕は都会のほうがいいな。

佐々木：そう？でも田舎の方が住みやすいよ。物価も安いし、家も広いし……

小川：ううん……だけど子供の教育のこともあるしね。

佐々木：でも、田舎の方が子供の健康のためにはいいよ。

小川：うん、確かにそうかもしれないけれど、受験のことを考えると、やっぱり都会の方が有利だと思うんだよね。

佐々木：まあそれはそうかもしれないけれど、僕なんか田舎生まれだから、やっぱり田舎の方が好きだな。

小川：ううん……そうだね。 (スリーエー・ネットワーク)

#### ④『新日本語の中級』

L19 読解-読もう「投書」 話題：「身の回りの日本製品」についての投書

Aの投書： 略

Bの投書： 略

Cの投書： 日本の製品と言えば、やはり電化製品だ。いろいろ買ったが、いくら小さいものを買っても、その製品に詳しい説明書や保証書が付いていたのには感心した。使う時も楽だし、なんとなく安心感が持てる。

アリ・モハメド (スリーエー・ネットワーク)

#### ⑤『新日本語の中級 J301』

L3 読解-相談コーナーの回答 話題：デスクトップ型？「ブック型」？

Q.：「デスクトップ型」と「ブック型」の違いを教えてください。

A.：第一段落 「デスクトップ型」「ブック型」の説明

第二段落 小型化の歴史（「ブック型」「ノート型」登場）

第三段落 デスクトップ型の利点

ブック型パソコンはあくまで持ち運びの便を図っているのだから、長い文章や複雑な図面とか、たくさんのデータを処理する仕事にはやはり画面の大

きいデスクトップ型のほうが使いやすいことはまちがいありません。

第四段落　ブック型の利点（省スペース）（スリーエー・ネットワーク）

⑥『新日本語の中級 J501』

L6　文法－「～なんて」例文

例文：実物を前に）モナリザの絵がこんなに美しいなんて、やっぱりすごいなあ。

語の確認：どんなに強くてもアマチュアはアマチュアだ。やっぱりプロにはかなわない。  
（スリーエー・ネットワーク）

⑦『文化中級日本語 Ⅰ』

L1　読解－体験談　話題：英語との出会い

第一段落：現在の仕事

第二段落：英語との出会い・きっかけ・歴史

第三段落：……高校卒業後は迷わず英語の専門学校に進みました。学校の勉強だけでは面白くないので、旅行のツアーガイドのアルバイトをしたり、英語の検定試験を受けたりして、自分で目標を作って勉強してきました。専門学校を卒業してからは、旅行会社に就職したのですが、やはり語学をもっと生かす仕事がしたくて会社を辞め、今の仕事を始めました。

第四段落：人生の「出会い」というものは面白い（文化外国語専門学校）

⑧『中級から上級への日本語』

L2　読解－エッセイ　話題：不思議の国ニッポン・部屋を借りる

第一段落：日本の家主は外国人に部屋を貸すのを嫌がる・筆者も経験者の一人

第二段落：大阪市当局の最近の調査によると、「日本人ではないために家を貸すことを拒否された外国人に対してどういう考えを持っているか」という質問に対し、家主には誰に部屋を貸すか決める権利があるという意見は、住民の40%を占めている。30%は外国人を拒否することによって『不要な迷惑』

が避けられるというのだ。やはり日本人にとって外国人に家を貸すことは避けたいほうがよいらしい。

第三段落：部屋を借りるとき日本語・いい服・名刺の準備が必要。

(The Japan Times)

⑨ 『ニューアプローチ中級日本語 基礎編 改定版』

L8 読解－エッセイ 話題：100%の占い師

第一段落：テストの点数。期待していたよりいい点は嬉しい・悪い点はがっかり

第二段落：勉強しないのにいい点を取る友人・予想して勉強する・私とは反対

第三段落：私は野球が好きなので、よく友達と一緒にどっちのチームが勝つか予想するのだが、今までに当たったことがない。私が応援するチームは必ず負ける。先日も外れた方が当たった人にごちそうするという約束をしたのだが、やはり私にごちそうすることになった。

第四段落：友人から「占い師」になったらと言われた。100%外れる人は100%当たる人と同じ

第五段落：宝くじを当たりそうもない店で買った・結果が楽しみ（語文研究社）

## 【本稿の各章と既発表論文・口頭発表との関係】

### 第1章 問題意識と研究課題

新規執筆

### 第2章 本論文の前提となる先行研究

新規執筆

### 第3章 副詞「やはり」の多義性考

鈴木英子 (2023a) 「副詞「やはり」の多義性考」『日本語文法』23 (2) , 53-69.

### 第4章 副詞「やはり」の形式についての一考察

鈴木英子 (2023b) 「副詞「やはり」の形式についての一考察：「やっぱ」はやはり「やっぱり」とは違うか」『日本語の研究』19 (3) , (2023年12月発行予定) .

### 第5章 研究方法と対象とするコーパス

新規執筆

### 第6章 学習者横断コーパスから見た「やはり」

鈴木英子 (2019) 「I-JAS インタビューデータにおける日本語学習者の副詞「やはり」の使用実態－日本語母語話者との比較を通して－」学習者コーパス研究会, (2019年7月6日) .

鈴木英子 (2024) 「対話における前提を持つ副詞「やはり」の使用実態：『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の調査から」『国立国語研究所論集』26, (2024年1月発行予定) .

### 第7章 学習者縦断コーパスから見た副詞「やはり」

鈴木英子 (2021) 「中国語を母語とする学習者の副詞「やはり」の使用変化－B-JAS 発話データの調査から－」日本語学会 2021年秋季大会, 学会学生セッション, ポスター発表, (2021年11月31日).

### 第8章 自然会話コーパスから見た副詞「やはり」の使用実態

鈴木英子 (2020) 「接触場面に出現する「やはり」の一考察－『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の調査から－」『一橋大学国際教育交流センター紀要』2, 69-80.

鈴木英子・石黒圭 (2020) 「雑談に出現する「やはり」の使用実態－「BTSJ 日本語自然会話コーパス」の調査から－」(オンライン) シンポジウム「日本語教育は、自然会

話コーパスで変わる！－『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の日本語教育への生かし方－」予稿集, (2020年11月21日)

## 第9章 日本語教育への提言

新規執筆

## 第10章 本研究の結論と今後の課題

新規執筆

## 【謝辞】

本博士論文は、稿者が一橋大学大学院言語社会研究科第二部門、石黒ゼミにおいて行った研究をまとめたものです。研究を遂行し、博士論文としてまとめるにあたり、多くの方からご指導とご支援を賜りました。

まず、論文のテーマ設定からその方向付け、執筆に至るまでご指導いただきました石黒圭先生に心から感謝いたします。研究や現象について俯瞰した視点からいただくご助言や、深く本質を見抜いてのご指導から、多くの目が覚めるような示唆をいただきました。中でも、副詞「やはり」の多義性を論ずる論文の執筆では、論の展開の仕方、論としての筋の通し方をご指導いただき、「論ずる」ことの意味を学ばせていただきました。先生がいらっしやらなかったら本論文は書きあげることができませんでした。

次に、ゼミでお世話になりました庵功雄先生には、分析の整合性についてのご指摘や論を深めていく上で必須である先行研究や文献について貴重なご指摘とご指導をいただきました。先生の研究のお話や恩師の先生のお話から、研究者として進みたい方向を示唆していただきました。深く感謝いたします。

同じく、ゼミでお世話になりました国立国語研究所の小磯花絵先生には、データ処理に関して様々なご指導をいただくとともに、CEJCをはじめコーパスを用いて研究を進める際の留意点や研究手法についてご助言をいただきました。ゼミ生の論文に対する先生のご指摘から、論文を読む際の視点と姿勢を学ばせていただきました。深く感謝いたします。

そして、言語社会研究科の博士課程、修士課程の諸先輩方、所属する学生の方々には、稿者の視野を広げる数々のご意見とご助言をいただきました。深くお礼申し上げます。特に、修士課程からご一緒した井伊菜穂子さんからは多くのことを学びました。ともに自分の研究を語る友人の存在は、一人で行う研究にとってなくてはならないものでした。

本研究で使わせていただいた I-JAS, B-JAS, BTSJ, CEJC の構築に携わった皆様に感謝しております。7年という短時間で多くの話し言葉のデータを得ることができたのは、公開されている学習者・母語話者の話し言葉のコーパスの存在があったからに他なりません。

最後になりましたが、励ましと協力をいただいた友人、暖かく見守ってくれた家族にこの場を借りまして感謝いたします。本博士論文の執筆にあたり、研究の難しさとともに研究の面白さの一端を実感しながら過ごすことができたことは幸甚なことと思っております。

2023 年 神無月